

俺としおりんちゃんと
時々おっぱい。

Shalck

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

拝啓お母様。ナニのし過ぎで死後の世界へ旅立つ俺をお許し下さい。

ほんの出来心だったんです。

あれ？ どれだけナニが出来るか挑戦したかったんです。

取り敢えず、DTのまま死ぬるかあ！

って話。

基本ギャグでシリアス混ぜ混ぜ。

タイトル自重しました。

注意

下ネタ多め。

展開はタイトルからお察しの通り。

ネタ成分多め。

他作品のネタ使用。

以上の点が気に入らない人はバック推奨です。

みゆきちちゃんマジ天使。可愛すぎてダメですわー！。

目次

第1章 《名も無き序章》The

re word which is al

so nameless》

001 《DT》 1

002 《Girls Band》

16

003 《Pajamas Part

y》 29

004 《Set Abroach》

43

005 《First Produc

e》 55

006 《Tornado》 68

007 《Benignity》

82

008 《Boys Pajamas

Party》 97

第2章 《恋に焦がれて》Please

love love》

009 《Runaway Boys

And Girls》 110

010 《Three Regret》

011 《Let's Play

asketball》 123

136 B

to rise》	017	016	190	015	176	014	163	013	150	012
thought that I begin	《Guardian》	《Eater》		《Life Game》		《Your Name》		《Admission》		《Live Song》
	218	204								
er》	024	023	022	278	021	020	n	019	234	018
《On Air Section	《Moving Monster	《Guild》	《Crossing Cer	《King Game》	《On Air》			《First Mission		《Departure》
320	306	294			264	248				

第3章 《蠢き出す思い》The

ople	030	029	374	028	361	027	026	nted	of	第4章	d
—	《Important	《Virgin	—	《All	—	《I	《Cure	to	the	《貴方に贈る恋の歌》	—
—	Pe	Night	—	Night	—	Like	—	you	love	Song	—
401	388	—	—	—	—	Song	—	—	pre	—	333
									se		

d	036	035	n	第5章	034	033	032	413	031
—	《Search	《Search	《	《たった一つの思い》	《On	《Engage	《My	—	《Defensive
—	Seco	First	》	Only	Air	—	Song	—	》
475	461	—	o	—	Third	—	—	—	—
			n	—	d	—	—	—	—
			e	449	—	439	425		
			of						
			expectatio						

第6章 《記憶の行き先》 The
 e c o n d 551
 0 4 2 《C o m m e n t a r y》 S
 i r s t 537
 0 4 1 《C o m m e n t a r y》 F
 525
 0 4 0 《I n j e r H e a r t》
 514
 0 3 9 《C o l d G a m e》
 l l 502
 0 3 8 《S t a r t B a s e b a
 489
 0 3 7 《B r e a k T i m e》

637
 0 4 9 《N a o i S h o u t》
 0 4 8 《R e a d y》 626
 0 4 7 《R e m e m b e r》 614
 s 603
 n g s
 W i t h K n e e s o c k
 0 4 6 《P a n t y & S t o c k i
 0 4 5 《B e n t》 591
 577
 0 4 4 《U n d e r G r o u n d》
 0 4 3 《T a o D e a d》 564
 o r y 5
 s t i n a t i o n o f a m e m

724	056	《Encounter》	711
	055	《Breast》	699
	054	《Faust》	685
	053	《Sunset》	672
	052	《Fear》	
660	051	《I Love You》	
		to protect》	
		son who would like	
		第7章 《守りたい人》The per	
		hird》	650
		《Commentary	T

	057	《Reversible》	736
	058	《On Air	748
		h》	
		第8章 《晴れ時々豪雨》Clear	
		sometimes heavy ra	
		in》	
	059	《I want to he	
		lp you》	759
	060	《Start Line》	
		772	
		番外編 001	784

第1章 《名も無き序章》The foreword

which is also nameless》

0 0 1 《DT》

目が覚めると、青い空が広がっていた。

それを眺めつつも、俺は何故こんな所にいるのだろうかと思う。

寝ぼけていた思考回路がハッキリしていき、ああ俺は死んだらうなと確信した。
何かナニしてたら、だんだん意識が薄くなっていってそのままパツタリか。

「報われねえ!？」

何だよナニして人生終了って!?

まさかネットで見ていたナニし過ぎて死亡ははっワロスとか思ってたなら、自分がその
ははっワロスの一員になっていたことに驚愕で言葉が出ませぬ。

さつき報われねえって言ってたって? そうですね。はいそうです。

「はあ……。てか尚更死んだなら(こ)ど(こ)?」

ベンチの上に寝っ転がっていることに気がついた俺は周りを見渡す。

どう見ても学校ですね、わかります。

「はっ。もしかしてこれが神様転生によるオリ主化と言う奴か……!？」

「いや、何を言ってるの?」

声が聞こえたからそちらを見たら、金髪美少女とその後ろに隠れている紫髪美少女がいた。

「へいお嬢さん達。ここはどこかい?」

軽く声をかけたら引かれた。解せぬ。

「えっと、その……もしかしてNPCじゃない?」

NPCじゃないと聞かれたと言うことは、ここはゲームの世界でオーケー?

もしかして俺はいつの間にかデス・ゲームの中に囚われたキリト君的なポジションなのかな?

「こんな個性的なNPCがいたら驚きだぜ☆ と言いつつも本当に何が起きてるかわからないんで、説明してくれる人なら説明求む」

一応色々とテンションをあげて誤魔化そうとしたけれど無理だった。

考えれば考えるほどどうして俺がこうなっているのか一切理解できなくなる。

もしかして俺は異世界に迷い込んだんでせうか?

「あー、こー言う時ってどうすればいいのみゆきちー!」

「わ、私に聞かれてもわからないよ」

いや、俺がわからん。

取り敢えずこの人達何か知ってそうだし、もしここが本当にゲームの世界とか異世界だったら敵とエンカウントする可能性もあるのでじつと見続ける。

……美少女最高。

「おーっし！ 取り敢えずお前は誰だ！」

「ふっ。俺か？ 俺の名前はダークフレイムマス——すみません。ふざけるのはやめるので立ち去らないでください」

本日最初のDO☆GE☆Z Aを披露した。

ふっ。一日数十回は土下座をこなしていた俺からすれば、一回の土下座くらいどうってことはない！

立ち去ろうとしていた二人が止まってくれたので、俺は笑みを浮かべた。

「初めまして。雨野あまの多々たおです。たー君って呼んでもらえれば幸いです」

「なるほどたー君かあ……。面倒だからタツちゃんで」

「私を甲子園に連れてってって言うんですね。わかります」

タツチは名作。異論は求めぬ。

「取り敢えずあたしは関根しおり。こつちの子が入江みゆきことみゆきちであたしの嫁

だ！」

「何おう！ マジで可愛いぐうかわ。結婚して欲しい」

正直に言ったらみゆきちゃんにマジで引かれた。

その光景に俺の瞳から涙が流れると、ワタワタしたみゆきちゃんマジ天使。

「ははは。みゆきちゃんの心は既にあたしのものなのだよ」

「恥ずかしいよお」

スレ立てたい。目の前で百合カップルがイチャイチャしている件について。

とりま襲えって言われそう。

「つてわけで詳しい説明を要求する」

「あいさ！ ここに来たってことは——お前は既に死んでいる」

「ほげばあ!? じゃなくて、それは何となくわかるんだけど……」

い、言えない！ 女の子の前で実はナニをし過ぎて死にましたなんて言えない！

「ふっふっふっ。ならば教えてしんぜよう。ここは未練を残した者達が集う場所なのだ

！」

「な、何だつてー!?」

「しかもここで満足してしまうと、消えてしまうのだ！」

「な、何だつてー!?」

「更にあたし達はそれに反抗する為に、死んだ世界戦線を立ち上げたのだあ！」

「な、何だつてー!？」

と言うかこのネタ永遠に続くから困る。

とりまこの子が飽きるまでしてあげようかなあと思ったけど、すぐに飽きてしまったらしい。

「と言う訳で、あたし達の仲間にならない？」

「おけ」

取り敢えず軽く返事を返すと驚かれた。

「あたしのスピードに付いてこられるだど……!？」

「はっ。お前には情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！そしてエなによりもオ——速さが足りない」

兄貴最高。俺はそう信じている。

「取り敢えずあたしのボケについてこられる逸材は中々いないからきつと採用されるよ！」

「そ、それはしおりんの勝手な考えじゃ……」

みゆきちちゃんがそんなことを言っていたけれど、ふふふ。世の中勝手な考えで溢れるのさ。

あー、鬱になりかけた。

「取り敢えずしおりんちゃん。俺どすればいいの？　ここでダイビング土下座とかジャンピング土下座とかすればいいの？　むしろ空中一回転土下座とか？」

「何でそんなに土下座のバリエーションがあるの!？」

的確な突っ込みがみゆきちゃんからきました。

顔を真っ赤にしながらツツコミを入れるみゆきちゃんマジ天使。

「お主、やりおるな」

「いえいえ。お代官様程では無いですよ」

「ぐへへへへ」

取り敢えずしおりんちゃんと握手をしようとして——俺は止まった。

俺はナニをしたまま死んだはずだ。

いつの間にか着替えていたこともあるし、俺の体は清潔なのだろうか？

もしも清潔でなければ、俺はしおりんちゃんに自分のナニを触って汚れた手を差し出そうとしてるんじゃない——。

「しおりんちゃん。トイレどこ？」

「あそこだよー」

指さされた方向に全力でダッシュして手を洗いに行く。

全身全霊を込めて洗い上げろ俺！そこにはきつと光り輝く光雷が見えるはずだ！
「俺は遙か遠き理想郷を目指すんだ！」

20回程手を洗ったところで漸く洗い終えた俺はふうとスッキリしていい笑顔で外に出た。

そして目の前にいる女子。

ふと俺は自分が手を洗っていた場所を見る。

——女子トイレでした。

「きゃあああああああ!?!」

「ちよつと待ってえ!?!」

俺の最初の運動は教師との追いかけてここになりそうです。

「……死ぬかと思った」

教師から逃走することに成功した俺は、しおりんちゃんとみゆきちちゃんと一緒に廊下を歩いてます。

え？窓から見える教師が股間を抑えて蹲っているって？

それはきつと見間違えです。俺の黄金の右足と黄金の玉が激突しただけです。

「せんせー。ここに女子トイレに入った変態がいまーす」

「あらあらしようがないわねえ。私が保健室でみっちり指導をしてあげるわ。的な展開なら最高」

下ネタぶつ込んだらしおりんちゃんに思い切り肝臓リバーフロー打ちをされました。

きつと彼女はボクシングをしていた。

「今ならガゼルパンチも出せる気がする……!」

「なら俺はそれをデンプシーロールで躲して、ハートブレイクショットで俺を好きにさせちやる」

まさにハートブレイク!

「あたしはみゆきち一筋だから揺るがない!」

その後光に俺に影が差し込むぜ……!

「そう言えば玉つて蹴ったらどれくらい痛いのか?」

「知らね。処女喪失くらいじゃね?」

ガゼルパンチが直撃した。

乙女の前でそんなこと言うなつて? そんなの無理。ごめん。

だって俺の体の半分以上が下ネタで出来てるもん。

「体は下ネタで出来ていた……!」

「タツ君そのネタはマズイ。その後によく言葉がわからないから」

ふふん。そんなの……18禁になりそうなことだった。
やばいやばい。

「流石はしおりんちゃん。まさか俺がその後に18禁的な言葉を言うと思って即座に切り返してくるとか中々だわ」

「一緒にするな！」

怒られてしまった。

でも美少女に怒られて感じちゃう！ ビクンビクン！

的な感じになる程DMじゃないし、どちらかといえば辱めたいタイプなので要らん。

「取り敢えずあたし達のリーダーに会って、色々聞かないといけないし」

だから俺達は歩いてるんですねわかります。

だって今俺達の向こう側では授業が行われているらしく、俺の方を見た教師が睨みつけてきたので俺は大きく手を振ってあげた。

すると教師が出てきた。

「逃げろ！」

「タツ君少し暴れすぎじゃないかなあ!？」

俺は走り出すしおりんちゃんとみゆきちちゃんに背を向けると、両手を広げて立つた。

「何してるのタツ君！」

「——先に行け」

女の子を守るのは俺達男子の勤めだ。

「タツ君……必ず戻ってきてね」

「ああ。それとしおりんちゃん。別に倒してしまっても構わんのだろう？」

その言葉に満面の笑みをして頷いたしおりんちゃんとみゆきちちゃんは去っていく。それを見届けてから、目の前にいるゴリラ教師を見た。

「——それが最後の言葉か？」

「——アンタは知っているかい？ 玉の痛みを」

俺は思い切り右足を振り上げた。

しかしその一撃は教師が股を閉じたことにより防がれる。

「ふっ。先ほどお前が金的で倒していたのは見ていた。万事休すだな」

俺はその考えを嘲笑う。

アンタは選択を間違えた。

「必殺——ワイルドクロー——」

放たれた右腕が教師の玉袋を掴み——握り締めた。

「ほぐあああああああ!!」

「あんたの敗因はたった一つだ……」

倒れこむ教師を見下しながら、俺は呟く。

「てめえは俺を、怒らせた……」

「オマエモナ」

現れた俺が金的で倒した金的教師。

それを見た瞬間俺は——コマンド逃げるを選択した。

「助けてください！ 変態教師が俺を犯そうとしますよ！」

「何を言いながら走ってるんだ貴様ア！」

「さつき俺に俺の……金玉を蹴ってくれないかって言ってた人が何を言いますか！」

「誤解を招くなあ！」

取り敢えず俺の持久力と速度を舐めるなよ？

俺はすぐに急いで校長室に向かうと、思い切り扉を蹴り飛ばした。

「捕まえたぞ多々！」

マズイと思った瞬間——目の前に唾然としている表情が見えた。

何かと思ったけれど、次の瞬間金的教師の金玉に——巨大な金槌が激突していた。

俺は一瞬の出来事であるそれを見て、そのまま向かってくるであろう金槌をギリギリの所でぐり抜けて避けるとセーフ判定をした。

「セーフ！」

「いやアウトだろ!？」

金玉を抑えながら窓から吹き飛ばされた教師を見つつ、俺は敬礼して見守る。

「アンタの犠牲は忘れない……！」

「やつほー、しおりんちゃんのみゆきちちゃん。取り敢えず手を洗える場所はない？」

「何したの？」

「ちよつと教師のアレを思い切りこう……！」

ぐしやつとと手でやると俺の周りにいた男子達が痛そうに股間を押さえ始めた。

あれ目の前でやられるときゅんつとするよね。

「と言う訳でトイレか何か手を洗う場所は無い？」

「そこに熱湯があるわ」

殺す気だった。

俺の手が火傷なんてしたら、それこそ世界中の女性が悲しむぜ？

「じゃあそこにある水道で洗いますわ」

校長室に水道まであるなんてマジ便利。

水と石鹸で念入りに手を洗ってから、俺は立った。

「初めまして！俺が絶世のイケメンこと雨野多々です！」

「無いわ」

うう……。初対面の人に否定された。

これは泣ける。

「取り敢えず、貴方は我が死んだ世界戦線にはいると言う考えでいいのかしら？」

「マジおけつすわ。ちょー大好き。死んだ世界戦線とかネーミングセンス最高。愛してるわー」

思い切りぶん殴られた。解せぬ。

「なら自己紹介するわ。私が戦線のリーダーであるゆりよ」

「おけゆりちゃん。まあ簡単な説明ならしおりんちゃんのみゆきちちゃんにしてもらったから大丈夫っぽい」

「なら説明してみなさい」

「南ちゃんを甲子園に連れて行かなければおけ」

「その通りよ」

まさか通用するとは思わなかった。

「それと、貴方は何か出来ることがあるの？ 部活とかしてた？」

「女の子にモテたくて軽音してたお。とりま楽譜読めるようになった（笑）」

「そう。運動の方は……。さつき見てたから出来るのよね？」

あー、そう言えばさっき俺色々してたかも。

「出来ないっす。俺あんまり運動得意じゃないし。あれは死ぬ気になれば人間なんでも出来る的な？　きつとそろそろ俺の額から炎出てきますよ。俺的には霧の炎がいいっす」

「貴方から出るのはバカの炎だけよ」

ひどい仕打ちを見た。

「これは警察に通報するしかありません。正当な権利です。」

「なら貴方にはガルデモのマネージャーをしてもらうわ」

「カルガモ？」

「ガルデモ。Girls Dead Monstersで通称ガルデモ。私達の陽動部隊をしているバンドよ」

唐突にバンドのマネージャーやれとか給料良すぎるわ。

「給料はドンくらいですかね？」

「給料なんて上げるわけ無いでしょう？　そうね、一年間働いたら一円あげるわ」

酷すぎる。こんなのブラック企業やない。ブラック過ぎてむしろ真っ白に見えるホワイト企業や。

「むう困った。しおりんちゃん助けてー」

「みゆきちトース」

「ふえ？ え、えーつとスパイク？」

まさかの打ち返されたでござるの巻。

意味が分かっていなかったのか項垂れている俺を見てオロオロしているみゆきちちゃんぐうかわ。

写メとつて後でブログに載せたい気分。

「まあそれじゃあ多々君」

「しゃかしゃかへい！ 何でございましょうか？ 主人様！ オススメはみゆきちちゃんのファンクラブに入ることです。ございます」

「貴方を死んだ世界戦線へ歓迎するわ」

無視ですかそうですか。

ふ、ふんだ！ べ、別に寂しいなんか思っていないんだからね？

……ごめん無理。俺が言っても気持ち悪いだけだったわ。

「よろしくつすリーダー」

でも俺が生きていた頃よりは、マシな生活が出来そうだ。

——どうせ俺がこの世界から消えることは出来ないだろうし。

002 《Girls Band》

俺はしおりんちゃんのみゆきちゃんと一緒にガルデモのメンバーがいる場所へとてくてく歩いていった。

「いやあ、戦線のリーダーって言うからにはもつと厳つい人かと思った」

「実際はどうだった？」

「普通の胸の大ききで何も言えねえ。ちなみに俺は巨乳好きだけど、しおりんちゃんのみゆきちゃんみたいになっちゃうくないけど大きくもなくて、やや小さいタイプの胸も——」

俺の言葉はそこまでだった。

高速の拳が俺の心臓の辺りに直撃し、俺は一瞬動きを止める。

「ハートブレイクショット。完成したね」

「お主……やりおるな……」

倒れた俺を見てドヤ顔しているしおりんちゃんぐうかわ。

ちなみに。パンツは黄色でした。ははっ。俺を倒した方が悪い。

「しおりん、パンツ見られてるよ？」

「はわっ!？」

顔を真っ赤にして俺を睨みつけてきたので、俺は何のことかなと話題を逸らした。ついでに顔も逸らした。

だって多分俺の顔も赤いもん。

「……二人共下ネタ言うのにそう言うのに関して初心だよね」

みゆきちちゃん心が胸に突き刺さる。

お、俺は別に初心なんかじゃねーし？

経験豊富なチエリー様だし？

あ、チエリーの時点でアウトだわ。

「うー!」

「やーいやーい。この処女ビッチ!」

「黙れ経験豊富に見せかけてるヘタレ童貞」

互いに心にグサリと刺さったのでこの話はやめることにした。

この世界には……知らなくていいことと知ったほうがいいことがある。これは前者。

「と言う訳でガルデモのマネージャーになった超絶イケメンの多々君です」

「ガルデモのメンバーのしおりんです」

「岩沢まさみだ。よろしく」

「えつと……みゆきちです？」

全員で巨乳ちゃんを見た。

FカップですよFカップ。夢以外に何が詰まってるんすかね？

「な、何で全員であたしの方を見るんだよ……」

「いや別に。きつと名前はムネ・デケーナさんかと思つて」

コークスクリューブローですわわかります。

でもそんな攻撃を俺の腹に真正面から堂々とぶち込まないで欲しかったなあ……！

「この世界は歪んでいる……！」

「見つけたぞ！ 世界の歪みを！」

「俺が——」

「俺達が——」

「ガンダムだア！」

しおりんちゃんと一緒に叫んだら思い切りムネ・デケーナさんに殴り飛ばされました。

相変わらずこの世界の女の子の格闘技の技術は常識を逸脱しておりますのです。

「と言うか世界の歪みを見つけたのに何でお前達がガンダム名乗ってるんだよ」

「つい乗りでやっちゃった。しおりんちゃんが悪い」

「MSに乗ってた記憶があるタツ君が悪い」

いつの間に俺の記憶を覗き込んだんだろうか？

ふっ。よくぞ気づいたな。俺こそがあのMSのパイロット——。

「戦場の絆でもしてたんじゃねえの？」

「あっはい」

簡単にネタバレされちゃってつまんねーの。

でも戦場の絆は面白いと思う。異論は認める。

「と言うかどうして知ってるの？ 俺が戦場の絆知ってるって」

「いやだつてタツ君でしょ？」

なる程。それで判断できるレベルに俺としおりんちゃんの仲は良くなっていると。

「取り敢えず、アンタは何が出来るんだ？」

「料理、掃除、洗濯かな」

「女子力高いな」

結局名前を聞き忘れたので本当にムネ・デケーナさんでいい気がしてきた。

「それほどでも。趣味は裁縫」

「タツ君本当に男の子？」

はははっ。何を言ってるんだ今更。

俺は男に決まってるだろう？

「ち〇こ付いてるけど見る？」

ハートブレイクショットで動きを止めた隙に肝臓打ち、更にそこからのガゼルパンチでフィニッシュだと？

思い切り吹き飛んだ俺は壁にぶつかって倒れた。

へへへっ……いい人生だったぜ……。

「まあ死なないけど？」

「知ってるけど？」

しおりんちゃんのアグレッシブなパンチでも俺は今日も元気です。

取り敢えず動く度に胸が揺れる、ムネ・デケーナさんの本名を知りたい今日この頃。

「ムネ・デケーナさんの本名は何？」

「ひさ子だッ！」

渾身の右ストレート！

名前と共にいい具合に体重を乗せたパンチが俺の腹に直撃し、そろそろ胃がやばく
なつて来そうな気がしてまいりました。

「我が生涯に一片の悔いなし……！」

「ラオウか。今度歌詞に取り入れてみよう」

「やめてえ！ 超やめてえ！」

「歌の途中で我が生涯に一片の悔いなしとか言われたらもうどうすればいいのかわかんなくなっちゃうから。と言うか今まで喋ってないと思つたらいきなり何言い出してるのこの人。」

「ああ。岩沢は音楽キチなんだ」

「おけ把握」

音楽の話題を振つたら帰れなくなつてしまふと。

ならば俺は絶対にその地雷を踏まないようにしなければならぬ。

取り敢えず、みゆきちゃんに話しかけよう。

「みゆきちゃんはドラム何だよね？」

「そっだよ？」

「疲れない？」

「ただみゆきちゃんにはかんで大丈夫だよと答えてくれた。」

「今日も今日とてみゆきちゃんは天使なようです。良かった良かった。」

「まあ出会って一日目ですけどね。」

「出会って3秒で合体なんてあるくらいだし、出会って一日目で仲良しだってあり得るでしょ。」

「取り敢えず今日はもう遅いし、夜飯行こうぜ」

「おっと金がない。仕方ない。そこら辺を歩いている教師の金玉蹴ってお金貰うか」

「何それ怖い」

ひさ子ちゃんに怖がられてしまった。

と言うか君はその威力を知らないはずなのに何で怖がるの？

男なの？ 実は男だったりするの？

「その胸は飾りかぁ！」

「フンツッ！」

再びの右ストレート。

だが案ずるな俺。その攻撃は既に見切ったはずだ！

「ゴフツ」

見きれなかったよ……。まあ実際どうしよう？

「この飯って食堂で食券買わないといけないんでしょ？ 俺お金無いし、強奪するか土下座するしかないなぁ……」

「何でそんなに極端な選択肢しか無いんだよ」

「と言いつつも持っている食券を探してくれているひさ子ちゃんぐうかわ。結婚した

し」

「するか馬鹿」

冷たくフラれて悲しい俺の肩に、しおりんちゃんがそつと右手を置いてきてくれた。俺はその暖かさに涙を拭いながら顔を上げる。

「ざまあwwwwww」

「今の俺は聖戦も辞さない」

ウラーぶつ殺してやろうかコラー！

とか何とか叫んだらもう食券やるから黙れと言われて醤油ラーメンの食券を渡された。

なる程。この短時間で俺の好みを知り尽くすとは、流石はFカップと言っておこう。

「醤油ラーメンで良かったか？」

「俺の好物の一つです。ちなみに次点で塩ラーメン」

ラーメンなら全部好物だから味はどーでもいいんだけどねと思いつつも、音楽キチもといまさみちゃんの方を見る。

「まさみちゃん」

「ん？ 私か？」

どうやらまさみちゃんと呼ばれたことは殆どないらしい。

もしかして俺が初めての男!?

「ひさ子ちゃんがまさみちゃんに次の曲について話があるんだって」

「ちよっ——」

取り敢えず生贄に放置してみると、まさみちゃんがズンズンとひさ子ちゃんに近づいていった。

近いからか顔を真っ赤にしているひさ子ちゃんと、音楽の話で興奮しているまさみちゃんの絡みはどう考えてもまさみちゃんが発情してひさ子ちゃんに襲いかかっている様子しか見えません。本当にありがとうございます。

「タツ君って割と策士？」

「馬鹿な。俺にそんな才能が眠っていただなんて……」

俺は戦慄しながら自分の両手を見て、それはねーわと確信してやめた。

人類は皆平等なのである。

「神は世界を平等に定めたのに、あの迫っているまさみちゃんとひさ子ちゃんの間には差が空いてしまっている……」

「胸の差だよー！」

とんでもない補足説明を入れてくれたせいで、まさみちゃんが俺の肩をグーで殴ってきた。

痛いよ。肩パンしてくる人初めて見たよ。しかも無言で。

「なんかごめんタツ君」

「気にしなくていいよ。それよりみゆきちちゃんは何を食べるの?」

「えっと……余ってるのが醬油ラーメンしか無くて……。食べれるかなあ?」

「大丈夫。残したら俺が食べてあげる」

「ありがとう……?」

これで合法的に美少女と間接キスが出来るぜと思ったのだが、その思想はすぐにしおりんちゃんの食券トレードによって無くなった。

ちつ余計なことしやがって。

「いつからあたしがタツ君に優しくしていると錯覚していた……?」

「な、何だと……?」

衝撃的カミングアウト!

ってわけでも無いしそりやねーわの一言で終了。案外つまらないことでした。

そうやって話している間にたどり着いた食堂で食券を渡すと、叔母ちゃんが俺のラーメンを出してくれた。

ありがたやありがたやとお祈りをしながらその食器を持ってガルデモメンバーと一緒に座る。

「ははは。俺のハーレム! —— すいませんもう言わないんで無言で席変えるのやめて

ください」

俺のハートがブレイクされてしまったので、俺は静かにラーメンを啜ることにした。ラーメンか……。昔あいつと一緒に食べに行つたっけ？

あいつと食べたラーメンは美味しかったなあ。

なのに何であんなことに……。

ドンドン心が鬱になっていくのを見かねたのか、しおりんちゃんが話しかけてきた。

「そう言えばタツ君の部屋つてどこ？」

「ん？ 何か書いてあるのは女子寮の近くの部屋だから遊びに行くわ」

「——ちよつと待て雨野」

ひさ子ちゃんに止められたので、俺は不思議でキョトンと首を傾げてみる。

「雨野お前普通に女子寮に行くとか言ってるけれど、女子寮は男子禁制で立ち入り禁止だぞ？」

「うん知ってる」

だから破るんじゃないか。やだなあひさ子ちゃん。

だってこの世界では普通に規則守ってたら消えちゃうんでしよう？

「だから規則を破るんだよ！ 俺は消えたくないからね」

「言い訳乙。正直に言いなさい」

「女の子の部屋に行きたい」

純粋な好奇心とかそういう言うのじゃなくて、男子でむさくるしい部屋にいるよりも女の子のいる部屋の方が清潔感あっていいじゃないですか。

「ドーセタツ君は手を出したり出来ないもんねー」

「多分……出来ないと思う」

ぐっさー！ 何気に一番俺の心を破壊しているのはみゆきちちゃんだと思う今日この頃。

何故彼女は的確に俺の心を破壊しにかかるのか問い詰めた所ですが、そんなことしたら小動物を愛でるこの感覚が無くなってしまおうので却下。

みゆきちちゃんは今のまま天使でいてください。

「じゃあ今日俺しおりんちゃんの部屋行くから」

「え、ええ!? ほ、本気で来るつもりなの?」

「別にいいでしょ? 減るもんじゃないし」

で、でもとぐずり始めるしおりんちゃんぐうかわ。

顔を少し赤くしながら俯く姿は女の子の中でもトップ3に入る可愛さだと思います。

ちなみに1位は涙目。異論は認めぬ。

「し、しおりんと私は同じ部屋なんだけど……」

003 《Pajamas Party》

皆さんこんにちは。

美少女の後ろに這い寄る変態こと多々君です。

「何というか……普通に入ってきたね」

俺は今しおりんちゃんとみゆきちちゃんの部屋におります。

男子禁制？ はっ。知ったことか。

死んだ世界戦線のメンバーはルールを守らないのがモットー！ 俺の行いは一見ア

ウトだけれど、死んだ世界戦線的には素晴らしい行動なのだ！

「それでタツ君は何をしてるの？」

「んー？ 目の手入れかな？ こうやって水を含ませて電子レンジに入れたタオルを目

の上に置くと、その水蒸気で目の疲れが取れてすごいスッキリするんだよ。取り敢えず

俺が持ってたコスメ全部無くなったからこれくらいしかできない。解せぬ」

いつもならお肌の手入れをする時間だと言うのに、それを出来ないとは。

お肌が荒れたらどうするつもりだ。

「何ていうかタツ君……女子より女子っぽいところあるよね」

「紫外線嫌いです。お肌が荒れちゃう」

「あ、もしかしてだからガルデモのマネージャーを——」

俺はみゆきちちゃんの言葉にきつと目を逸らした。

だって死後の世界って聞いたから、俺の持っていた紫外線予防のUVカット帽子とか無くなっているって勘付いたんだもの。

「乙女か！」

「それは乙女の君がセリフじゃないと思った俺はおかしいのだろうか？」

新しいラノベのタイトルっぽい。

今度執筆してみようかなあ？ 昔色々書いてた時もあったし。

「それよりもタツ君は何しに来たの？」

「パジャマパーティ。あ、お菓子も持ってきたし大丈夫。ひさ子ちゃんとかまさみちゃんとか呼んでくる？」

俺が席を立とうとすると、真っ先にしおりんちゃんに止められた。

何でも俺が出て行った所を見られると勘違いされる可能性があるから嫌らしい。

「俺にずっとこの部屋にいてほしいなんて、可愛いなあ」

「今すぐこいつを殴り殺したい」

そしたら叫ばせてもらおう。

ふっ。俺が何て呼ばれようと構わんさ。既成事実さえ作ればな。

「実はみゆきちちゃんに殴られたと叫んだら面白そう」

「そ、そんなことしないもん」

もんと来ましたかもんと。

この子は俺を萌え死にさせるつもりなのでしょうか？ きつとそう。

「じゃああたしが——行くとみゆきちとタツ君が二人きりになつて非常に危険な気がする。みゆきち、岩沢さんとひさ子さんの部屋へゴー！」

「うん」

全く違和感なく出て行かれた件について。

そんなに俺と二人きりになるのは嫌ですか。さいですか。

「でもタツ君の部屋の人は帰つてこないことに疑問を抱くんじやないかなあ？」

「彼は朝まで目覚めないから大丈夫」

知っているかい？ 薬の成分の中には砕くと睡眠薬になるものがあるんだよ？

君達も覚えておこう。

「何をしたの？ あたし、気になります！」

「お答えしよう！ 取り敢えず眠たくなる成分が入つてる薬を細かく砕いて飲み物に入れて飲ませた」

別に手を出してゐるわけでも無いし、いいと思う。

「なる程……。今度作り方教えて？」

「勿論！ 取り敢えずひさ子ちゃんに飲ませてあのFカップを揉みたい」
そんなことが可能なのはしおりんちゃんだけだよ！

だからお願い！

「ほう……」

気がついたら拳を構えたひさ子ちゃんがいました。

これはハートブレイクショットの構え……！

「甘いよひさ子ちゃん！ 幻の左腕！」

ひさ子ちゃんのハートブレイクショットは俺の心臓ではなく顔面を捉えて殴り飛ばした。

これはフェイスブレイクショットって奴か……。

「へえ。本当に来てたんだ」

「やつ。まさみちゃん」

声をかけると普通に返してきてくれた音楽キチもいまさみちゃん。
きつと心はいい子なんだろう。

「じゃあガールズトークしようよガールズトーク。皆好きな人いる？」

「お前ガールじゃないだろ」

ひさ子ちゃんからのツツコミ。これはお厳しい。

「でも俺今日戦線に来たばっかりだから気になるんだよねー」

「あー、そう言えばお前今日来たんだっけ？ 何かスゲー馴れ馴れしいから忘れてたわ
ふふん。このコミュ力こそ俺の力。

あ？ 童貞黙れだつて？ すみませんでした。

「戦線の恋愛事情かあ……。あ、野田つちがゆりつぺのこと好きだった！」

流石しおりんちゃん。恋愛事情も熟知していると見た。

「まああいつは昔から好きだったからな」

「そなの？」

ひさ子ちゃんは俺の問いかけに頷いた。

野田君はゆりちゃんのことを好きなんですか。さいですか。

「まあガルデモのメンバーは皆俺に好意を覚えているとして、椎名ちゃんとかは？」

「「それはない」」

「酷いイジメを見た。これは青少年支援センターに連絡を入れるしかない」

きつとイジメを何とかしてくれる。

でも何でだろう？ その前に警察に通報されて終わる気がする。

「あたし達は別に誰が好きとかそう言うのはねーよ」

「私はギターが好きだ」

「ひさ子ちゃん。まさみちゃんに日本語が伝わらない」

「知ってる」

どうやらまさみちゃんは将来ギターと結婚するらしい。

ギターの名前はギー太ですか？ 放課後ティータイムですか？

「あたしはみゆきちが好きだー！」

「わ、私もしおりんは……好きだよ？」

みゆきちちゃんのこうげき！

しおりんちゃんとおれにはこうかがばつぐんだ！

「ぐはあ……」

二人して鼻血を出しながら倒れていた。

顔を赤らめてそんなことを言うみゆきちちゃんが可愛すぎて、世界の悪意が見えるよハレルヤ。

これぞ炙り出し戦法！

「でも椎名が誰か好きとかは聞かないな」

「可愛いものとか好きそうな顔してるよね」

「まあわからなくはない」

何か物陰に隠れて小猫にミルクを与えて微笑んでいる椎名ちゃんを妄想して、ありだなと考えた。

きつとその場に出くわしたら俺は問答無用で告白する。異論は無い。自己完結だ。

「遊佐ちゃんは？」

「あいつは絶対じゃない」

断言をしたひさ子ちゃんを見て、俺は何かを感じ取った。

多分だけれどひさ子ちゃんは遊佐ちゃんの過去を知っているんだろう。

何となくだけれど、察した。

「でも野田君とゆりちゃん以外に仲がいい男女がいないって、中々この戦線の恋愛事情って荒んでるんだね。カップル一つも無いとか、正直言つて普通じゃないね」

俺の言葉にうっと呻き声を漏らしたのはひさ子ちゃんだった。

「まあ、それで報われたら消えちまうからな」

「あー、満足したら消えちゃうんだっけ？ でもこの世界にしがみつきたい程世界を憎んでるなら、その程度で消えないと思うんだけど……」

「それもそうなんだけどな」

まあ大体察した。多分だけれど、自分が幸せになれるということに酷い抵抗感を持つて

いるんだろう。

俺もそうだし人のこと言えないかな。

「俺は美少女大好きだし、この戦線にいる人達皆美少女だから大好きだけどね。取り敢えずガルデモのメンバーは皆大好き。超好き。マジで愛してるわ」

普通にそう告げたら、驚いた様な顔の後に少し赤くなっていた。

皆超可愛い。目指せハーレム的な感じでお願ひします。

「お前そう言う言葉平気で言うんだな」

「ははっ。平気ならこんなに顔赤くなってるやないって」

多分だけれど俺の顔は真っ赤っか。

俺の右手は真っ赤に燃えていないけれど、俺の顔面は真っ赤に燃えている。

爆熱ゴッドフィンガー放てるぐらいの火力はあると思うわ。

「お前って初心なのか経験豊富なのかわからない奴だな」

「経験豊富系チエリー」

「黙れ処女ビッチ」

しおりんちゃんと再び二人して傷つけあった後、二人で互いの心の傷を埋めることにした。

世界は残酷だ。この残酷な世界の中心でも俺はきつと愛を叫ぶ。

「と言う訳で、まあ俺はこんなな沢山の女の人に愛を囁いても消えませぬ。まだ満足できない。もつともつと……い！　こんなんじや全然満足出来ないぜ……い！」

「満足さんつてこの世界に来たらすぐに消えそうだよね」

満足したぜと言いながら消えていく満足さんを想像していそうだなあと考えた。

だつて満足さんつて満足する為にいるのであつて、決して満足しないなんて考えを持っていければ満足できな——。

「俺の中で満足と言う言葉がゲシユタルト崩壊している件について」

「満足できたかい？」

しおりんちゃん俺に追い打ちを掛けるのはやめてほしいつす。

ゲシユタルト崩壊どころか俺の頭がゲシユタルト崩壊を引き起こしかけております。

「——まあお前の抱えているもんが大きいのはわかつたよ」

「あ、わかつてくれますか？　じゃあ俺と一緒に夕日を追いかけましょう！」

「修造乙」

しおりんちゃんに振られてしまった。あれ？　俺ひさ子ちゃんに告白していた気がすんだけれど。

あれえ？

「そう言えば今日この後どうするつもりだ？　10時を過ぎたら教師が見回り始めるぞ

「？」

捕まっても大丈夫だとは思いうけれど、大丈夫かなあ？

「困った。誰か泊めてくれないかなあ……」

チラリとみんなを見る。

「あたしの部屋はNPCがいるから無理」

「私の部屋も」

「変態を置くスペースは無い」

「えっと……ごめんね？」

色々と酷いのはしょうがないから諦めている。

と言うよりも今回はちゃんと見てこなかった俺の責任だから、仕方ないといえれば仕方ないか。

「まあ何とかしますよ。これでも逃げるのと金玉潰すのは得意なんで」

「天使も見回るぞ？」

どうやら俺の命はここまでのようだ。

天使が来たらどう考えても殺されるらしいです。

つまり俺の命はジ・エンド。しおりんちゃんに教えてもらった通りならば死んでも蘇るらしいけれど、それでも痛いのは嫌なので死にたくないです。

「そう言えばお前の死因って覚えてるか？」

俺はひさ子ちゃんへの驚愕の質問に答えられなかった。

俺が口をパクパクしているのを見て、トラウマに触れたと思ったのか悪いと言って顔を逸らしたひさ子ちゃんに謝りたい。

すいません。下ネタ過ぎて言えないだけです。

「多分だけど、タツ君の死因って実は大したことないんじゃないかな？」

ギクリとしてしておりんちゃんの方を見た。

「だって今の反応って、トラウマって言うよりもバレちゃまずいことがバレた時の反応だよな？」

「い、いつの間にそんな観察眼を——」

「——天帝の眼。全てに勝つあたしは全て正しい」

まさかの赤司様でした。

と言うよりもマジでこれがバレると本格的にマズイから気を逸らさないよ。

「おい関根。幾ら何でもそれは言い過ぎだろ」

ひさ子ちゃんが俺の為に少し怒っている……？

嬉しいんだけど違うので俺は空中で一回転しながら土下座した。

「——大したことない理由で死にました」

俺は他の人に聞こえない様に小さくしおりんちゃんに死因を説明した。

みるみる赤くなつていくしおりんちゃんを見て、ひさ子ちゃんは疑問に思っていた。

「それ、本当？」

「本当なんですよこれが」

割とガチで聞いてきたしおりんちゃんにそう答えると、しおりんちゃんはどう反応すればいいのかわからなそうに真つ赤になつたままだった。

「——セクハラで訴えます」

「ちよつと待て関根。その言葉で何か理解できたわ」

ひさ子ちゃんの視線が鋭くなつて俺は突き刺された。

生憎他の二人はわからなかつたようだ。

きつとこの二人は告げるつもりも無いと思うけれど。

「その死に方はねえわ」

「俺もそう思う。と言うよりもこれが自殺じゃなくて事故つてなつたことが凄いなと思
う」

自分で起こした事故により死亡。自業自得と言う奴ですな。

「取り敢えずお前近寄るな」

「酷いつすよひさ子ちゃん。俺は、女の子に手を出せなかつたから、死んだんですよ？」

女の子に手を出せなかったからを強調しながら言うと、ひさ子ちゃんにため息を吐かれた。

「――歩幅」

「ほえ？」

「お前関根と入江と来た時、無意識かもしれないねえけど二人に歩幅合わせてただろ。それに何も無い廊下側に二人を歩かせて、自分は人とぶつかる可能性がある廊下側を無意識に歩いてた。そんなことを普通にしたりってことは、お前彼女とか居たんだろ？」

げつ。女の子ってそんなところまでしっかり見てるんだ。

というよりもここまでしつかり見られていたことに俺は驚きです。

「女の子に手を出せなくなかったんじゃねえか？」

「うぐつ。たまに正論っぽいもの言ってくるから困る」

そりゃ確かに彼女はいたけど、俺童貞だし？

卒業なんてしてないし？

「じゃあ――はつきり言います。ここにいる人だけに」

俺は四人に向かい合って口を開いた。

「俺は多分この世界から出られません。皆が満足してこの世界を旅立つたとしても、恐らく俺はただ一人この世界に残されます。何故なら俺の願いは、この世界では絶対に叶

えられないからです」

超弩級とも言える俺が抱えている爆弾を、思いつきりぶん投げながら。

004 《Set Abroach》

「出られないってなんだよ……」

多分だけどひさ子ちゃんって頭いいよね？

というか頭の回転早いよね？

他の3人は可愛く首をかしげてるよ？

「その何が悪いんだ？」

「聞いた感じだと確かにこの世界にとどまれるってことはいいことかもしれないけど、あたし達は何でここにいる？」

その言葉によく気が付いたしおりんちゃんとみゆきちちゃんが、驚いてから悲しそうな瞳を向けてきた。

うん。シリアスだ。シリアルじゃない。

「こいつは要するに、自分の未練が絶対にこの世界で無くならないってことなんだよ。つまりだ。もしあたし達が何かの拍子に次々と満足して消えていったとしても、こいつだけはずっと残り続けなきゃならないんだよ」

そこで気がついたまさみちゃんが俺の方を見てきたので、軽く手を振る。

しかしシリアスにそんなものは通用せず、普通に悲しそうな目で見られた。やばいな。俺が順応出来てない。

「まあいいじゃないっすか。どーせ皆居てくれるんだし、遊んでたってわけねーですよ」
明るく振る舞うもこの空気は変わらない。

何この空気？ お通夜？ お通夜なの？

「お前なんでそんなに普通で入れるんだよ。それだけ深い過去があるなら、何でなんとも思わないで普通に過ごしてんだよ。おかしいだろ！」

俺の為に怒ってくれているひさ子ちゃんマジカワユス。
テラカワユスでもいい気がしてきた。

でもおかしい……か。

さんざん言われてきたセリフだよなあ。

お前は どうしてそんなに笑顔でいられるんだと。

お前は どうしていつも笑っていられるんだと。

おかしいって言うのは、ある意味俺を構成している重要なパーツなのかもしれない。
だから——俺は昔から言っているみんなに返す言葉を告げる。

「俺はおかしいよ」

自分でもわかっているから。

「俺に悲しいなんて感情はないんだ」

自分が一番憎いから。

「自分なんてどうでもいい存在に思っている」

自分が一番嫌いだから。

「だから俺はおかしい」

だって——俺は結局誰一人として救えなかった愚か者だから。

「タツ君……」

だからそんな悲しそうな声を出さないで欲しいな、しおりんちゃん。

俺は君の明るい表情が大好きなんだよ？

「だったらあたしがタツ君が未練叶えて消えるまで一緒にいるよ！」

告白ですかと勘違いしそうになる程の言葉だった。

でも俺はその言葉を茶化すことが出来ず、素直に聞いてしまっている。

「一人だったら、悲しいけど。二人いればダイジョーブ！」

それはきつと、しおりんちゃんが実体験したことなんだろう。

ひとりだダメでも二人いれば大丈夫。

凄くしおりんちゃんらしくて、あったかい言葉だと思った。

「あたし達ガルデモは、マネージャーにも優しいスーパーバンドですから！」

その言葉に賛同するように肯定の意を示してくれる、まさみちゃん、ひさ子ちゃん、みゆきちゃんを見て俺は泣きそうになった。

いつもならここが俺のハーレムとか叫ぶんだろうなあ……。

でもちよつとだけ、今だけは鑑賞に浸らせて欲しい。

それが終わったらまた、いつものセクハラ大好きなスーパードイケメンに戻れると思うから。

結局の所12時くらいまで、一緒にだべりつつもお菓子を食べてパジャマパーティーをしていた。

勿論のこの時間になれば天使とか言うやばい奴が俺達を狙って野獣のように待機しているらしいが、そこはどうにかするしかないと思う。

取り敢えず窓から飛び降りた俺はジーンとする足をそのままに、男子寮へと走り出す。

教師達も結局はライトを使ってるから丸わかりだぜ。

問題は天使だけど、それも問題なくクリアして俺は寮に戻ってきた。

窓あけといて良かったと思いつつ、中に入ると同部屋の子が起きていた。

「……………どこに行ってたの？」

「いやー。女子寮で一緒にパジャマパーティーしてましたわー」

「この時間に出歩くのは校則違反だし、そもそも女子寮は男子禁止だよ?」

「女子寮の中では俺女の子だったから」

意味がわからないとつぶやいた同部屋の子ーNPCの本郷君はそのまま寝た。

ふむ。NPCに睡眠薬はあまり聞かないと。

多々覚えた。

取り敢えず当面は女子寮に行くのが日課になりそうだなーと思いつつ、俺はゆつくりと部屋にあつたPSPでモンスターをハントするあれを始める。

このハントする相手が *girls dead monster* だったら最高なのにかと思いつつ、だったらハントじゃなくてゲツチュだわと思う。

そんな無駄なことを考えながら、ふとどうしてガルデモの皆に出れないなんて話したのかなと思う。

別に出れないことを話す必要は無いはずだ。

報われたい……つてどこかで思っている自分がいるのかもしれない。

確かに俺は俺のことが嫌いだし、だからこそ自分を客観的に見て、自分の被害を度外視で行動することが出来る。

そんなことしてたら、生きてた頃は不気味って言われて近寄ってこられなかったけど

ない。

でも今でもそれは変わらないのに、ガルデモの皆は優しい。

それがすごく嬉しくて、苦しいんだと思うんすよ。

でも最後のしおりんちゃん言葉は嬉しかったなあ。

本当に、好きになっちゃったよ。

別に本当は嫌いとかじゃなくてみんな好きなんだけど、loveじゃなくてlikeの方。

でも今回のこれは、loveだ。

はつきりと分かる。

昔みたいに、はつきりとこの子のことが好きだとわかったのだなら間違いない。

どーしようもなく好きだから恋なのだ。

「明日から頑張りますか！」

割とガチで頑張り始める件について。

SIDE：関根

タツ君が帰った後、あたし達はまだ話していた。

「雨野のことだけど……さ。あいつ多分かなり重症だと思う」

ひさ子さんの言葉に私は頷くしかない。

みゆきちもそうだ。

「あいつは多分本当に、自分のことをどうでもいい存在だと思ってる。心の中ではどうにかしたいって思ってるんだろうけど、自分ではどうでもいいとおもってるから、あいつはあたし達に話した」

タツ君は本当に単純な連絡として、あたし達に自分の未練はかなわないと告げた。

まるで自分のことじゃないみたいなのに、あまりに客観的な言葉。

どうしても、譲れないことがそこにあるんだと思う。

「あたしはタツ君を見捨てない」

堂々とそう言う。

みゆきちと出会って変わったみたいに、タツ君立って変わることが出来るはずだ。

一度みゆきちに救われたあたしだからこそ、タツ君を救うことが出来るはずだ。

「私も……です。しおりんとあたしは元々、自分のことが嫌いって思ってたから」

あたし達は似ている。

だからこそ、タツ君はあたしが救いたい。

その為ならみゆきちとタツ君と三人だけで永遠と残り続けたって構わない。

「関根って雨野のことすきなのか？」

「何ですと!?!」

よくよく考えたらタツ君って男の子だった。

ってことはあたし、男の子に対してずっと一緒にいたいって言ったってこと!?!

告白じゃん!

もう告白じゃん!

何で言ってくれなかったのさタツ君! とタツ君に対しての恨みを覚えながらも考
える。

みゆきちが好きだ。大好きだ。結婚したい。

ならタツ君は?

わからない。男子とここまで一緒にいたのも初めてだし、今の今まで男子と
思ってな
かった位だし、そもそも異性との話し方がわからない。

まあ普通に話してれば伝わるからその分タツ君は楽でいいけど。

今はまだ、話せる友達って感覚だと思う。

「あたしはみゆきち一筋ですから!」

なんかモヤモヤする。

この気持ちが無かかわからないけど、取り敢えずタツ君のせいってわかったから明日
殴
ろう。

でもなんか殴ろうと思うとまたもやもやする。

うー。なんか変な感じだよ！

「にしても、そろそろトルネードがあるんじゃないのか？」

「確かに食券も減ってきましたね」

そろそろあるとすれば、それがタツ君の初仕事になる。

タツ君はこの試練を乗り越えることが出来るかな？

「まあだとしたらお守り役は関根で」

「それは賛成だ」

「私もしおりんがいいと思う」

何ですと!?

まさか、あたしにタツ君のことをすべて押し付けるつもりか!?

「ま、いつか。タツ君話しやすいし」

他の戦線メンバーの男衆と比べても、話しやすさがダンチなんだよね。

やっぱりネタを知っている人はやりやすくていいなあ。

正直胸のない女子扱いだよねタツ君って。

男子として見てる人っているのかな？

「取り敢えず次のトルネードに向けて練習するか」

「みゆきちちゃんはおりんちゃんに合わせようとして、でも楽譜を忘れられなくてズレちゃってるね」

可哀想に。真面目な子なのにしおりんちゃんに引つ張り回されちゃってる。

「しおりんは言わずもがな。暴れすぎ。ライブの時は自重するんだろうけど、それでも暴れすぎじゃね？」

エヴァアじゃねーんだから」

「エントリープラグが外れちゃった」

「後で自分でつけなさい」

てか女子のエントリープラグとかどこに差し込むんだよ。

そんな事言ったら男子もだけど。

「ひさ子ちゃんは……お疲れ様です。楽譜通りのまさみちゃんに合わせつつもしおりんちゃんの暴走に付き合わされて、乙であります！」

敬礼したところ、思い切りグーで殴られた。

グーっておま、グーって。

女子のすることじゃないことだろ？

「取り敢えず、曲として完成してるのにバラバラって言う珍しい状況だと思う」

「多々って何か音楽の仕事関係してたの？」

「軽音部に入ってたって言わなかったっけ？」

そう言えばそれを伝えたのはゆりちゃん紹介された時にいた人だけでした。驚かれたけど、しおりんちゃんはいたよね？

みゆきちちゃんからも呆れた目で見られています。それはいいのですか？

「なら楽器出来る？」

「一応ギターでできるけど、ボーカルだったしなあ」

歌歌うのは得意です。

偉い人にはそれがわかからんです。

「なら歌ってみる？」

「ご勘弁を。お願いしますからそんなイキイキした顔で俺を見ないでください」

俺は歌いたくない！

絶対に歌いたくないでござる！

005 《First Produce》

流石に絶対に歌いたくはないし、まさみちゃんみたいに音楽が大好物というわけではないのでパス。

歌は自分の気分が乗ったときだけで良いのです。

そんな言い争いから数日後、俺は校長室に呼び出されていた。

「——オペレーショントルネード？」

「そうよ。それが今回ガルデモに行ってもらおうオペレーション。内容は簡単よ。ライブをして見に来たNPCから食券を巻き上げる。勿論暴力ではないわ」

要は路上ライブをしているバンドに対してお金を払う様なものなんだろう。

それが食券だと言うことなのかな？

「おけおけ。で、俺何すればいいの？」

「貴方には——プロデューサーになってもらうわ！」

崖の上で雷が落ちた光景がゆりちゃんの後に見えた。

あまりの衝撃に世界が揺れ動く！ ザー・ワールド！ 時は止まる！

的なことが起きたらセクハラし放題なのに。

「てかプロデューサーとは？ 俺アイドルマスターやってないです」

「そのプロデューサーに近いわね。貴方にはマネージャー兼プロデューサーになってもらうわ」

なんというかその仕事の多そうな名前は拒否したいです。

ドラツカアの【マネジメント】も読んでないです。

アイマスもやってないです。

デレマスもやってないです。

「トーシローに何を求めてるんですかねえ」

「貴方なら出来ると私が判断したわ。貴方の音楽性はかなりのものだど岩沢さんから聞いたから」

おのれ音楽キチめ。

ここに来て俺を苦しめるのか奴は。

「今度ヴォルザックの中に睡眠薬入れてやる」

「言いつけるわよ」

取り敢えず土下座をしてから、俺は正座をしてゆりちゃんを下から見る。

パンツ見えます。役得です。

そんなことを思っていたら俺の真横に銃弾が放たれたので、目を下に向けて黙ること

にしました。

「今回のミツシヨンは失敗できないわ。したら殺すわ」

「すみません。下ろさせてください」

失敗したら死亡とか罰が重すぎるんですがそれは。

「ただし成功したら、これから先ずっと貴方にガルデモのマネージャー兼プロデューサーになってもらうわ」

「おっと。まさか成功しても失敗しても結局のところは俺にダメージが入る素敵仕様ですか。さいですか」

そして拒否権は無いと。

こんなブラック企業辞めてやる！

「ちなみにやめるならそこに両腕と両足を切り落として置いていきなさい」
「やらせていただきます」

拒否権どころか発言権すらなかったの巻。

こんなの人間扱いじゃねえ！ 家畜だ！

「駆逐してやる……！ 一匹残らず駆逐してやる！ 待ってるNPC！」

こうなったら一人残らず食券巻き上げて全部食い尽くしてやる！

「取り敢えず最近クラスで付き合い始めたNPCがいるから金玉潰すか」

「NPCに手を出すのは禁止よ」

畜生！俺は奴らに敵対することすら許されないうって言うのか……。

わかつてたんだ。こんなデカイ……でかくねえや。

「普通のおっぱいだっただわ」

俺の顔面にゆりちゃんのあんよが直撃した。

あんよって言うのと幼女っぽいけど、実際ガチの足だし靴も履いてるからモロ痛い。

「取り敢えず、どういうことすればいいのか教えてもらえるかな？」

「貴方はセクハラを入れないと会話が出来ないのね。することは主に二つ。ライブの流れの作成。ライブの場所の決定よ」

つまり食堂で食券を買ってくる様な場所かつ、食券を持ってでも来ようとする場所。

難しいなあ。

でもこの辺りの地形は漸く確認できたから、大体ならそれで行けるかな。

「おっけー。頑張ってみるわ」

「あら。意外ね。そんなにすんなりやってくれるとは思わなかったわ」

「まあ女の子からの頼みだしね。それにやるなら中途半端じゃなくて、完璧にこなした方がカッコイイでしょ？」

「……そこがウチの男子とは違うところよね」

「あははは。女の子との会話はガルデモと一緒にいるおかげで慣れてるからね」

昨日もパジャマパーティーしてきました。

お菓子を食べながら皆で恋バナとか色々して楽しかったです。

また行きたいと思います。

「そうじゃないんだけど、まあいいわ。こちらでも協力出来ることは協力するつもり」

「おけ把握。じゃ、俺はちよつとガルデモのここ行ってくるね」

愛しのしおりんちゃんの元へ！

とは言うけれど別にみゆきちちゃんから寝取るつもりは無いし、今の状況でも割と満足っぽい。

俺なんかと付き合わせちゃっても可哀想だしなあ。

「うっし。やってみるか」

取り敢えず必要なのは色々あるけれど、俺が初めてプロデュースする。

そんなことはどうでもよくて、しおりんちゃん達が楽しいと思えるステージを作ってあげたい。

気分はPだ。

俺は軽快なステップでガルデモの待つ部屋へと向かった。

「どうも。多々Pです」

「はっ。」

まさみちゃんに素で返されて軽く泣きたい気分になりました。

多々です。まさみちゃんに嫌われたとです。

「アイマス？　もしかしてあたし達アイドルデビュー!？」

「そんなもん。俺がこの次のトルネードのライブをプロデュースすることになります」

驚きの表情をしているみんなを見て俺は嬉しいです。

取り敢えずだけれど、まさみちゃんは現在楽譜通りではない曲作りに勤しんでおります。

しおりんちゃんが得意そうだと思うかもしれないけれど、彼女は暴走しているだけなのです。

だからきちんと楽譜通りだけじゃなくて、色々とアクションを入れつつ練習をします。

「ここで観客に言葉を求めるのはどうだろうか？」

「それいいんじゃない？　こう、食券を上に向ける感じにすれば巻き取りやすいだろ」

色々と頑張っているらしい。気分は売れっ子アイドルのプロデューサーです。

ちなみにやってはいけないけど凜ちゃん派。

「掛け声はこう——」

俺としおりんちゃんは目を合わせると二人で野球のナイバツティみたいな感じで指を突き出した。

「Fカッブ！」

「お前から殺すわ」

拳を構えたひさ子ちゃんからしおりんちゃんと一緒に逃走する。

と言うかひさ子ちゃん速すぎやしませんかね!?

「逃げろッ！」

俺はしおりんちゃんを逃すと、ひさ子ちゃんと対峙する——つもりだったけれど走りながら放たれたアイアンクローに掴まれて、そのまま教室の壁に叩きつけられました。

ひさ子ちゃん超怖い。

「タツ君！」

戻ってきたしおりんちゃんはアイアンクローに掴まれてミシミシと音を立てていた。

「何で、戻ってきた……」

「タツ君一人置いていけないよ……」

そして俺達はひさ子ちゃんの拳骨を喰らい頭にたんこぶを作り涙目になった。

ひさ子ちゃん超怖い。マジホラー。

「と言う訳で俺がマネージャー兼プロデューサー。今度ドラッカーの『マネジメント』読んどく」

「もしもガールズバンドの男子マネージャー兼プロデューサーがドラッカーの『マネジメント』を読んだらが発売されるね」

「きつと大好評」

しかし！ だがしかし！

俺の作品を売ったところでゆりちゃんに全て吸収されるだけなので発売はしない。

非売品としてプレミア価格をつけてやろう。

「んなわけねーだろ。誰も買わねえよ」

「ひさ子ちゃん酷ーい」

「ひさ子さん酷ーい」

また殴られた。最近ひさ子ちゃんの手を出すタイミングが非常に早い気がする。

これもまた諸行無常と言うものか。

「最近お前ら二人の息が合ってきて非常に面倒になってきた」

ふっふっふっ。俺としおりんちゃんの息はピッタリ！ まさに相思相愛！

だけれども俺は普通にスルーされているので、恐らく恋愛に発展することはないで

しよう。

「じゃあ簡単に説明。今回ライブを行うのは食堂の中！」

ういと普通の返しが帰ってきた。

ふむ。俺の大袈裟な言葉には既に発言しなくなってきたか。

「ライブは水着……って言いたかったけど、俺以外の男子にガルデモの柔肌を見せるのは嫌だから却下」

「いや、あたし達お前のもんじゃないから？」

「え？俺のハーレムのメンバーでしょ？」

まさかのみゆきちちゃんを含めた全員に殴られた。

俺としてはみゆきちちゃんの拳が意外にも強くてちよつと泣きそうです。

「はあ。まあ水着にしなかった点は認めてやる」

「ありがとひさ子ちゃん。デレ可愛い」

再び腹にパンチが直撃する。

腹が、腹があ……！

俺はどこぞのゲームに出てくる妖怪猫吊るしじゃねえんだぞ……！

「と、とりま曲の順番は出てる曲を聞きながら決めようと思うから安心して。それと今日もパジャマパーティしようぜえー！」

「どうせ言うと思ったよ。昨日の続きか？」

「YES！」

ひさ子ちゃんは何だかんだ言ってノってくれる。

だから俺はそのまま話を進めつつも、今日は早く上がって一応曲の順番を考えようと思う。

まさみちゃんに楽譜を見せてもらって曲を聞きながら、アレンジを加えた方がいいと思う部分に修正を入れていく。

今までのガルデモのバンドは、模範的なバンドだった。

でも——ガルデモは世界に抗う死んだ世界戦線のバンドだ。

そのバンドが模範的では、死んだ世界戦線と言う俺達の名前がもたない。

だからこそそれを変えるように、ゆりちゃんに言われたのだ。

陽動の為の、民衆を惹きつけるバンドへと変える。

それが俺への指令。

「じゃあ……までにするか」

曲を一通り聴き終えた俺はそれをすぐに持ってきたルーズリーフに書きなぐると、それから少しして再び思い出してまた書く。

俺に才能なんてない。

マナージャーなんてしたことないし、勿論プロデュースだつてしたことはない。

「もう飯行くけどどうすんだ？」

「ん？ もうちよつとしてから行くよ」

カリカリと文字を書きつなれていく。

これじゃあダメだ。

確かに熱い曲と冷たい曲を交互にすれば観客に熱い曲の時の盛り上がりを出すことは出来るけれど、それじゃあイマイチノリに欠ける。

もつと自分を客観的に考えろ。

自分の思いを度外視しろ。

必要なのは最大級の盛り上がりを見せる、その瞬間だ。

それが出せる実力が、彼女達にはある。

それを引き出せる思いが、彼女達にはある。

今日もライブ大変だったけど、凄く盛り上がったねと言える構成に変えなければなら
ない。

最も人気のある曲を、最も観客が盛り上がる時に入れるのが必要だ。

「難しいなあ……」

人に隠れてコソコソするのは慣れている。

ただ一点——誰かの為にと言うだけに動く。

「こんなところで何をしているのかしら？」

唐突に声をかけられて振り向くと、そこには銀髪の美少女が立っていた。

でもその制服は普通の学生のもので、NPCだと思う。

「ちよつとね。勉強みたいなものだよ」

「そう。でももう下校時間はとつくに過ぎていているわ」

チラリと時計を見ると、食事の時間も過ぎてしまっている。

今日はお菓子で済ませようかなと思いつつ、俺は書き終えた30枚以上のルーズリーフを持って歩き始める。

「貴方も彼女達と一緒に抗うのね」

その一言で止まった。

俺の頭の中には一人の言っていた言葉が蘇る。

「——天使」

彼女がそうなのだろうと言うのは、大体わかっていた。

個性豊かな髪の色をしている戦線のメンバーと比べ、NPCの髪の色はそこまで目立たない。

なのに彼女の髪の色は銀色だ。

「違うわ。皆そう言うけれど」

俺に美少女の言葉を否定する思いはない。

彼女が天使じゃないというのなら、彼女は天使ではないのだろう。

でも――。

「悪いな、俺には関係無いんだわ。俺の好きな人が君を天使と呼んでいた。それだけで、俺は君を天使だと決め付けることができる」

俺と言う存在は酷く歪んでいる。

だからこそ君が何と思おうとも、何を告げようとも俺の意思は変わらない。

彼女達の思いに答え続ける。

「好きな人……貴方はそこに居ながら消えることを選ぶの？」

「生憎だけど、俺はそんなことで消えられる程やわな奴じゃないんだ。俺の心にコベリついているのはどす黒い感情」

目を細める。

怒りが、憎しみが、恨みが、俺の瞳を支配する。

「ただ奴らを殺す。その為だけの為に生きている」

復讐の相手がいないこの世界で――復讐を遂げることができなければ完全に満足できない俺は永遠に囚われ続けるしかないのだから。

006 《Tornado》

トルネード当日、俺は目の隈を温水タオルでとってから、舞台へと向かっていた。熱した水を含んだタオルは、目の上に乗せることで隈をとることが出来るんだ！
良いこのみんなは覚えておこう！

「よし」

「何がよしなんだよ」

よしと言っただけで怒られた件について。

「ヤローぶつ殺してやらー！」

「いや、だから何がだよ」

「いやあ。なかなか眠くてねー。深夜テンションって奴？」

「お前いつもそんなんだから」

あれー？ そだっけ？

まあいつも気にしていないことを気にしてもしようがないから、今日は正直にライブに向けて頑張るのです。

まあ体調が心配ではありますが。

「そのFカップを見るだけで満足です」

俺の腹にパンチが入る。

よろつとよろけると、ひさ子ちゃんのFカップにダイブするハメになった。

「おいお前本当に大丈夫か？　いつもならあれくらいじゃ倒れないだろ」

実は三徹目だったりするけど、それを聞いたらきつとひさ子ちゃんが悲しむから言わない。

取り敢えずご飯くらいは食べといた方が良かったかな？

「ははは。ダイジョーブ」

そう笑いかけると、納得はしてなそうだけどひさ子ちゃんが俺に何か言うのはやめた。

諦めたんだと思う。

「なら頑張れよ」

「あいあいさー」

かるーく話してからひさ子ちゃんが去っていったと思ったら、しおりんちゃんとみゆきちゃんもやって来た。

「おはー」

「タツ君大丈夫？　凄い顔してるよ？」

「え？」

みゆきちゃんがりんちゃんの言葉に驚いていた。という俺も驚いているのだけど。

「そ、そんな変な顔してないと思うよ？」

「ごめん。そこでもどられると、どう考えても俺が変な顔してるみたいに見える」

やっぱりみゆきちゃんはマジ天使だけど、どう考えても俺の心をえぐりに来ていると思うんだ。

「ううん。タツ君寝てないでしょ？」

あれー？

ひさ子ちゃんもみゆきちゃんも気が付かなかったのに、どーしてしおりんちゃんは気がつくの？

愛の力って奴？

もしかして相思相愛だったりしちやったりラジバンダリ？

「寝てるよー」

「嘘つき」

ぐさーつと俺の心に言葉が突き刺さった。

いやマジで。どうして俺のことがわかるんですかねー？

「タツ君、あたし達のために頑張ってくれたのはすごく嬉しいけど、そのせいでタツ君が倒れたら悲しいよ?」

しおりんちゃんの珍しく真面目な話に、俺はちよつとからかう事が出来なくなつた。「多々君。しおりんが言ってることは本当なんだよね?」

今空気には耐えられないので、両手を上げてお手上げを示した。全く。ガルデモ中でこの2人には敵わないぜ。

「多々君休んで」

「これ終わったら休みますってことで」

真つ直ぐに見られると照れる。

まあそんな事言つても怒られるだけなんだけどなー。

「……しおりんちゃんはこんな頑張つた俺に見ないでつていうの?」

これは反則だ。

しおりんちゃんの優しさにつけ込む、非情な行為だ。

だけどそれで俺が嫌われるだけなら、別に問題は無い。

元々俺なんて、最悪なやつなんだから。

「……それは酷いよ。断れないじゃん」

一番俺のことを思つてくれている人を、自ら引き離す行為だ。

これは精神的にきついなあ。

「ごめんねしおりんちゃん。今度埋め合わせするよ」

そう言つて俺はしおりんちゃんとみゆきちちゃんに手を振りながら歩き出す。

はあ。辛い仕事だ。

でも、ここまでしたのは俺なんだから、弱音を吐くわけには行かない。

「照明おっけー、マイクおっけー、スピーカーおっけー」

完璧にチェックし終えた俺は、準備の完了を確認した。

舞台は整った。

後はライブを成功させるだけだ。

「サー頑張つてもらおうかな」

俺はそう言つて、食堂の電気を落とさせた。

辺りが暗くなったことを確認したNPC達がざわめき始める。

元々舞台の設置を見せていたから、ライブをするのかも知れないという思いを持たせていた。

天使が来る前には終わることができるよう調整しつつ、実は何もアクションを起こさない天使に疑問を抱いていた。

何故動かない？

何を考えている？

あまりに静かで不気味すぎる。

「まあいいか。何も起き無ければそれでいい」

急いで準備を完了した準備舞台の声を聞き、照明をつけた。

明かりで照らされる彼女達。

Girls Dead Monsterと言うこの世界で唯一にしてトップのバン

ドが現れたことに観客が湧く。

その歓声を聞いた奴らがそのままこつちにやってくる。

時間は食堂が動き出す一分前。

既に食券を買っていた者達がみんな集まってくる。

——Alchemy。

一発目で人気の曲を持っていくことによって、観客のテンションを高めた。

今回のサビはCrow Songだ。

それまでどこまでテンションを上げられるかが鍵となる。

天使はまだ来ない。

何故だ？

準備もワザと噂を出した。

食堂なんていう目立つ場所で行うことにした。

それなのに何故、天使は何もアクションを起こさない？

「Crow Song」

サビであるCrow Songが流れ始めた時、それは来た。

「天使が現れました」

インカムから聞こえてきた遊佐ちゃんの声聞いて、俺は驚愕した。

——ずらされたんだ。

彼女は俺がライブの為に尽くしているのを知っていた。

この世界では満足すれば消える。

俺がこれを成功させて満足して消えると、天使は思ったんだ。

なるほどなるほど。流星は天使ちゃん。

扇風機で巻き上げられた食券の中から一つ取ると、そこには豚骨ラーメンの文字があった。

当たりを引いたと思いつつも、俺は初めてのライブが成功したと確信した。

嬉しいもんだ。

「準備部隊に伝達。機材を回収し、撤退せよ」

「ありがとう。お休みタツ君」

「おや、すみー」

そこから先は一切切覚えていない。

だけど柔らかいおっぱいの感触と、女の子特有の香りがしたのはわかった。

S I D E : しおり

唐突に倒れかけたタツ君を見て、あたしは岩沢さんの持つていたマイクを取っていった。

そして、走りながら止まると叫んだ。

嫌だ。

こんなに頑張つてライブを成功させてくれた、こんなに沢山の観客の前で歌わせてくれたタツ君を。見捨てることなんて出来ない。

あたしの声に驚いて止まってくれたNPCを無視しつつ、本格的に倒れようとしているタツ君を抱きしめた。

「ありがとう。お休みタツ君」

「おや、すみー」

寝息を立てて寝始めたタツ君を見て、あたしは笑顔になった。

「総隊長！」

タツ君の事をそう呼んだ準備係の人達がタツ君を連れていく。

「今の人——彼がタツ君。Girls Dead Monsterのマネージャーです

！」

軽くそう告げてからタツ君と一緒に舞台を去る。

「おい、あいつ大丈夫か？」

「あたしの感覚だと三撤位してますね」

全く。久しぶりに真面目にベースした気がする。

何もふざけないで真剣にやったの、久しぶりじゃないかなあ？

てかタツ君無理しすぎ。

「こいつそんなにやってたのかよ」

呆れたように言いつつと、ひさ子さんの顔にはにやけがあった。

正直に思う。

あたし達はタツ君の事が好きだ。

loveでは無くlikeの方でだから勘違いしないで欲しいけれど、それでも好き

だ。

あたしは多分、loveの方でも好きになりかけている。

勿論みゆきちがいるから付き合いたいって思ってるわけじゃないけど、それでも異性として好きだ。

いつも泣きたくなる程頑張っているのにそれを隠すタツ君が。

馬鹿なふりをしていつもあたと一緒にふざけてくれるタツ君が。

妙に女子力が高くて、あかし達の部屋に良く来るタツ君が。

全てのタツ君が大好きだ。

「本当にしようがないなあ、もう」

でもありがと。その声は出さなくても伝わる。

大爆睡をしているタツ君だけど、いつもみたいに笑って返してくれるってわかってる。

「あら？ 正式にマネージャー兼プロデューサーに任命しようと思ったのに」

問題なくオペレーションコントロールが終了して外に出たらゆりっぺさんがいた。

「疲れて寝てしまったみたいですよ」

苦笑してみゆきちが言うのと、そうと軽く返していた。

「天使は彼のことを見ていたみたいね。ここまで頑張ったのだから、満足するんじゃないかって」

だから邪魔しなかったのよという言葉を聞いて、ますますタツ君の頑張りがわかつ

た。

タツ君は自分の意思を見せて、天使すら足止めさせたのだ。でも——タツ君は満足出来ていなかった。

初めてのライブがここまで大成功したら、作り上げた人がもしあつただったら消える。

だけどきつと、この程度じゃ満足出来ない。

全然満足出来ないぜ……！

「こいつ三撤してみたみたいだぞ。関根が気付いた」

「そんなにしたの!? 全く手加減ができない人なのね」

寝ているタツ君を見て、ゆりっぺさんは呆れていた。

「それで、マネージャーにととしてはどうだったかしら?」

「プロデューサーとしては聞かないんですか?」

「今回沢山の食券が手に入ったわ。いつも以上にね」

それが結果として残ってるんだから、優秀という以外の何者でもないらしい。

過程や工程を一切無視して結果を叩き出すとか、タツ君はイリヤスフィール・フォン・

アインツベルンなんだろうか?

「優秀だよ。まあ最後にやらかしたみたいだけどなあ」

ひさ子さんがニヤニヤとしてあたしを見てきた。

何だよこのFカッププめ。

「あたし達に説明しなかつたんですもん。徹夜した理由とか、その隈を強制的に消してる顔とかッ」

思い出したら腹が立ってきた。

もう！ この変態君が！

「それは男の意地つてもものよ」

「それでもあたし達のマネージャーならきちんと説明するべきなんです！」

男の維持で仕事がやれるかー！

そんな仕事はこんな世界にあると思うなよ！

「彼は好かれてるのね」

「あたしはみゆきちの方が好き」

でも本当に静かに寝てる。

……ん？

「ゆ、ゆりっぺさん」

「何かしら」

恐る恐るタツ君を指を差す。

「死んでます」

タツ君は息をしていなかった。

え、ええ……。

最初の死に方は餓死ですか……。

「水すら飲んでいなかったようね」

あたし達の為に死んでくれたんだね……。

でも、最初の死に方にしては凄い……アホだよね。

「死に方と言いなんで言うかアホだなあ」

確かナニのし過ぎで死んだらしいし。

うう。セクハラ野郎め。

でも——ありがとう。

かなり嬉しいよ。

でも、取り敢えず体調管理の仕方から教わろうか？

007 《Benignity》

HEY! みんな!

最近餓死した多々だよ!

現在俺は、しおりんちゃんの部屋で正座をさせられているんだ!

「話聞いてんのか?」

「はい聞いております」

「聞いてないな」

「何故バレたし」

ひさ子ちゃんのアイアンクローによって俺の頭がギチギチとなり始めている。

出来れば俺の亀の方の頭をニギニギとして欲しいけど、その瞬間俺は男としての尊厳を失う気がするので言わない。

「お前があたし達に内緒で水も飲まずにライブについて頑張ってたことだよ! それで

あんないいライブさせやがって!」

「怒られてるのか褒められてるのかよくわからない件について」

まさかの怒りながら褒められたパターン?

もしかしてひさ子ちゃんデレ期に入ったの？

「お前が勝手にそんなことして死んだから悪いんだよ」

「僕は死にましえん！」

「ぶっ殺す」

すみませんギブアップです。

俺の頭がミシミシ言い始めています。

あ、パキって言った。

「いや、すみませんねえ。俺割りと頑張り始めると周りが見えないタイプで」

「それだけで3日間飲まず食わずでいる奴がいてたまるか。あたし達もいきなり死んで

心配したんだぞ」

む、心配をかけてたのか。

「そりゃごめんささい。まさか心配しているとは思わなくて」

と言うか心配されたのってかなり久しぶりな気がする。

最終的にはアレに何を言ってもダメだみたいな感じで諦められてたし。

「心配するに決まってんだろ。お前はあたし達のマネージャーなんだぞ」

「だからまだドラッカーのマネジメント読んでないんだって。もしドラ？」

意識が途絶えた。

そして目を開くと、血を拭いているひさ子ちゃんの姿があった。握力だけで殺されたらしい。

ちよつと涙目になりながらひさ子ちゃんを怒っているみゆきちちゃんカワユス。

「まあひさ子も怒ってるんだよ。私達に内緒にしてたことを」

「そう言うまさみちゃんは？」

「ん。怒ってる」

ですよねー。

さつきからグリグリ足で俺の右膝を踏んでますもんね。

それをもうちよつと左側にして俺の息子を踏んでくれると感謝感激なんです。

あれ？ もしかして俺Mに開発されてる？

「でも私も何も食わずにいて倒れたことあるから、人のことを言えないんだ」

あらま。まさみちゃんも同じことをしたのか。

でも死んでいなかったらいいので、俺よりはマシらしい。

きつと音楽のことなんだろう。この音楽キチめ。

「久しぶりに夢中になれたんで良かったですよ。満足満足」

とは言うけれど、消えはしない。

「お前、本当に何があったんだ？ 普通なら消えてるレベルだぞ？」

「まあそうだよ。でも、幸せになることと満足することは違うと思うんだ」
ある意味これも真理だと思う。

満足することが未練をなくすこととは限らない。

満足することが幸せに繋がるとはわからない。

「だから俺は消えられない」

結論を言ったらそうかな？

「もしかすると皆のおっぱい揉んだら消えられるかもしれない」

「一生ここにいろ（てください）」

息の合った言葉だった。

「まあそんなことはないから安心して。それと俺は和姦派だから無理矢理は嫌なので
す」

そんなこと知らないし聞いていないとばかりに蹴られた俺は、寮の壁に激突した。

現在夜中の10時。どう考えても壁ドンである。

壁殴り代行とかで稼げないかな？

て、男子寮と女子寮で分かれてるんだからアーツ！ なんかゆるゆりの人しかいない

じゃん。

不純異性交遊は禁止です。

不純同性交遊は禁止ではないのです。

偉い人にはそれがわからんのです。

でもまあそろそろお遊びもやめようかな。

「まずは最初にごめんさい。皆に心配をかけてしまいました」

真面目になつてそう謝罪した。

取り敢えず俺が土下座をするとふざけているように見えるので、土下座はしない。

「俺他人から心配されたこと殆ど無いんで、心配されるつてところまで考えが至らなかつた。そのせいでみんなに迷惑をかけたことも分かつてる。だからごめん」

真面目に謝ると、皆は笑つていてくれた。

「わかればいいさ。明日からもまた頼むよマネージャー」

まさみちゃんが。

「まあな。お前が頑張り屋だつてことはわかつた」

ひさ子ちゃんが。

「私達の為にありがとうございます」

みゆきちゃんが。

「もう二度とこんなことしないでね！ ホントにホントだよ？」

しおりんちゃんが。

みんながそう言つて俺を置いてくれる。

みんながそう思つて俺を助けてくれる。

それが嬉しくて嬉しくてたまらない。

だけどその嬉しさがあるのに——俺の心はぴよんぴよんしない。

影っている。

曇っている。

俺の心の中に輝くはずの太陽は、いつも曇りの空の向こう側。

永遠にも近い時間があるというのに、その曇り空は晴れたことがない。

「皆ありがとう。やっぱり皆俺のハ——」

最後まで言わせてもらえなかつた。

「おーい多々」

たまたま一人出歩いていたら、日向秀樹君ひなたひできに声をかけられた。

「お前いつもガルデモのメンバーと一緒にいるよな？」

「うん。まあそうだね」

だつて俺マネージャーだし。

「ならちよつと付き合つてもらえねえか？」

「えっ？ ホモはちよつと……」

「ちげえよ！」

いきなり叫びだした日向君に俺はドン引きです。

ドン引きですと言えぱやっぱりゴッドイーターだよね。あれ好きだった。

「ま、ならいつか。何に付き合つて欲しいの？」

「ちよつとな。付いて来てくれ」

日向君の後を一緒に歩き始める。

はっ。これはもしかして誘拐!?

お嬢ちゃん飽あげるからこっちおいで的なあれではないのだろうか？

だったらこのゆりちゃんから貰った護身用のFive—Sevenで金玉ぶち抜いてやる。

一緒に歩いて行つた場所は運動部の部室。

中に入るとそこには、むさ苦しい男軍団がいた。

「——帰つていい？」

「待つてくれ多々。これはお前の為に集まつたメンバーでもあるんだ」

「俺の為？」

俺の為とはどういうことだろうか？

はっ。まさか俺を同性愛の道に落とそうと画策して彼がホモ仲間を呼んだとか……？

一応拳銃を抜いて日向君の股間にセッティングした。

「——待つんだ多々。俺の話聞いてくださいお願いします」

「狙いは外さない」

両手を挙げて降参をする日向君の股間から拳銃の狙いを外さない。

何度股間を蹴り、握り潰してきたと思っっているんだ。

金的の技術ならば誰にも負けぬ。

「お前がガルデモのメンバーとぼつかりいて男子と関わらないから、一緒に遊んで親睦深めようぜって分けてだな。お前の部屋に行ってもいつもいないから」

そう言えば俺他の男子メンバーと関わってない。

しかもいつも夜はしおりんちゃんの部屋にいるし、男子と関わってない。

もしかして俺男子でぼつち？

「あー。そう言えば夜はいつも女子寮にいるからね」

ガタンと椅子から全員が立ち上がって唾然とした顔で見ていた。

「お、お前いつも女子寮にいいのか？」

「確か藤巻君だよな？ そだよ。だってNPCと同じ部屋にいるのも何か嫌だし、しお

りんちゃん達と一緒にいた方が楽しいし」

「で、ですが女子寮は男子禁制では？」

「俺達戦線って、ルールを破る為にいるんじゃないの？」

あとと言う風に納得した顔をしたのは高松君。

「でも確かゆりつべに止められるはずだろ？ 何でお前は普通に入入りしてるんだ？」

「え？ 止められるの？」

俺が首を傾げると、日向君は不思議そうな顔をしていた。

と言うかゆりちゃん俺が女子寮にいつもいることを知っているのかな？

「取り敢えずだ。ここに居るのは俺、藤巻、高松、松下五段の四人だけだ。で、いつも女子寮で何してるんだ!？」

「それは勿論ナニを——嘘ごめん。嘘だからそんな血の涙を流さないで」

本物の血の涙って言うのは初めて見た。

と言うか四人全員が同時に血の涙を流し始めた瞬間引いた。

きっとD×Dの松田と元浜はこんな感じなんだろう。

「普通にパジャマパーティしてるよ？ お菓子食べて、美容の話をして、恋バナしたりとか？」

「悪いがお前は本当に男子なのか？」

松下五段に失礼なことを言われた。

と言うよりも高校生で柔道の五段って取れたっけ？

「失礼な。これでも立派な男子だよ！」

「バッグの中には？」

「シーブリーズと日焼け止め。あとは汗をすぐ拭けるようにタオルと飲料水のお茶かな？ あ、この刺繍可愛くない？ みゆきちちゃんに入れてもらったんだ」

みゆきちちゃん可愛いウサギの刺繍してくれた。
あの子やっぱり大天使だわ。

「——判決を決めたいと思います」

「「「ギルティ」」」

全員に有罪判決を受けた。

ひええ……。

「お前本当に男子なのかよくわかんねえ」

「藤巻君は酷いなあ。でもしおりんちゃんにも言われたんだよね。だからナニあるけど触ってみるって聞いたら殺されかけた」

「俺としてはそんなさりとセクハラをするお前が何故嫌われていないのか激しく疑問だ」

日向君。それは人の差と言うものなのだよ。

俺は絶世のイケメンだからネ!

「お前好きなきなスポーツとかあるか?」

「あるよ。バスケットか大好物です。小学校はクラブチームでバスケットしてました。中学校で野球しました。で、高校で女の子にモテたくて軽音部に入りました」

「わかるわ。軽音部ってモテそうでもないなあ……」

あの頃を想像して——モテるとかそれ以前の問題だったことを思い出して軽く鬱になった。

地雷多くて困る。

「野球やってたのか。俺も野球やってたんだぜ?」

「俺レギュラーじゃなかったれす」

補欠も補欠。二軍の補欠でした。

残念無念また来週! その頃には忘れておる。

「そつか。でもお前運動神経良さそうだけどな」

「金的の為に鍛えた。取り敢えず今なら男子軽く殺せる」

ふっと右足を振り上げると、日向君達は内股になった。

面白すぎワロス。

「女の子になりたかったらいつでも言つてね。ウィッグとか化粧品とか貰つてきたから」

「貴方は本当に男なんですか!?!」

さつきから高松君喋つてなかつたと思つたらそれが言葉かい。

そうかいそうかい。そんなに死んでみたいのかい。

俺はその場から走り出すと、飛び蹴りで股間を打ち抜いた。

あまりの激痛に立つたまま気絶した高松君を眺めながら、ふうと息を吐く。

「俺は男の子☆」

「「イエス」」

カタコトだけれど理解してくれて嬉しいよ。

俺としてもみんなと仲良くしたいからね。嫌なことは言わないで欲しいんだ。

「なら今度野球でもするか。野球部辺りに練習相手になるとか伝えればやってくれるだろう。こんな郊外の学校と戦えない所なんだから」

「そだね。面白そうだね」

野球部の股間にボールを当てたいです。

え? どうしてそこまで股間にこだわるのかつて?

男を完全に尊厳も防御も無く一方的に倒せる所だからに決まつてるからじゃないで

すかヤダー。

「んー、今日は男子寮にいよつかな？ 日向君の部屋でパジャマパーティーしよ？」

「男の場合はパジャマパーティーじゃなくて宴会に近いと思うぜ？」

女の子より怖いです。

宴会って言い方は好きじゃないかも。

「それでもパジャマパーティー。俺の夢は夜中に皆で集まっつてずっと遊ぶことです」

「夜中に遊ぶのは楽しいもんな」

ふと思いついたのだが、この世界に家は作れないのだろうか？

開拓すると言うのも案なのかもしれない。

ガルデモのメンバーもあんな狭い場所で時間も限られてるんじゃ、不完全燃焼だろうし。

今度やりちゃんと話してみようかな。

「じゃあ今日は日向君の部屋に集合だね。NPCが相方かな？」

「いや。俺の相方は大山だ」

「じゃあNPCと大差ないね」

ひでえと言う声が聞こえたけれど、だつてよく大山君ってNPCじゃないってわかったと思うよ？

どう考えても大山君って見た目も中身もNPCじゃん。

「夜行くから準備よろしく。お菓子と飲み物は各自で持って来るってことで」

「他の奴らも誘つとくわ」

「うい」

俺は日向君達にバイバイすると、ガルデモの練習へと向かった。

あれ？ 結局どうしてあの部屋に呼ばれたんだろう？

ま、いつか。

SIDE：日向

「作戦は成功したって伝えといてくれ」

「まあそうだろうな」

藤巻の話に俺は頷いた。

ゆりつぺも無茶なこと言ってくれなせ。

——多々が自分のことをどうでもいい存在だと思っている可能性があるから、調査して欲しい。

今回わかったが、あいつは相手の股間に執着し過ぎている。

あいつが女っぽいって言うのもあるけれど、何か別の意味で男子に対して嫌悪感を抱

いていた。

それが何かはわからねえけど、ロクでもない未練だったのはわかった。

「今日の夜に集まるメンバーは慎重に決めるとすつか」

今回選ばれたのは、相手の意見を堂々と聞ける奴らだ。

夜に集まるのは、相手を落ち着かせることが出来て話をする事ができるメンバーだ。

「はあ。男子の纏め役ってわけじゃないんだけどな」

戦線のメンバーを見捨てることは出来ねえし、俺としても多々のことは気になる。

……別にホモじゃねえし。ホモじゃねえし！

008 《Boys Pajamas Party》

こちら多々。目標に到達した。

俺は部屋の中に突撃すると、そこには驚いた様に俺を見ている日向君がいた。

「お前——多々か？」

「Yes!」

ふむ。彼には俺が俺だと理解できないらしい。

取り敢えず右足を半歩下げて視線を日向君の股間に向けると、日向君は俺だと理解し
たらしく両手を挙げた。

彼は両手を上げるのが癖になっているのだろうか？

「いや。そのパジャマ女のもんじゃねえの？」

「しおりんちゃんに渡された。新品だつて」

某ゲームのピカ○ユウのパーカーを着ている俺を見て、日向君は驚いていた。

ふつつつつつ。昔はお姉ちゃんのお下がりがりしか着てなかつたからね。

女物の方が着慣れているのです。

「なんつーかお前それ着てると本当に女みたいだな」

「よく言われます」

していることを女つて言われるのは嫌だけれど、顔が女顔なのは自覚しているし服も女物だから女に間違えられても仕方ない。

昔いた彼女にも、どちらかという友達の家遊びに来ていと錯覚したと言われた。

……卒業、出来なかつたなあ……。

「初めまして。多々君だよね？」

「初めまして多々です。大山君であつてゐるかな？」

NPCよりNPCっぽい大山君に驚きの連続です。

「取り敢えず座れつて。一応何人か呼んであるし、来る奴は来るだろう程。自由参加つて奴ですか。」

「しおりんちゃんに今日は日向君の部屋で遊んでくるつて言つたら驚かれた。日向君は背中を気をつけてね。きつとしおりんちゃんが後ろからグサツと」

ひつと声を出した日向君を見て面白いと思つた。

ははは。そんなこと言つてくれたらどんなに嬉しかったことか。

普通に行つてらつしやいつて言われて終わった。普通だけど。

「もつと構つて欲しかった！」

「お前って関根のこと好きなのか?」

「え? 逆に嫌いだと思うの?」

あんな美少女を嫌いになるわけじゃない。

と言うよりもこの世界の美少女率の高さにマジで驚いてる。

美少女率100%だよ100%。俺もう天国って言おうかな。

「この世界って隕石放てば美少女に当たるとレベルで美少女多いじゃん?」

「おう。俺はどうやって隕石を放つのか聞きたいわ」

ツッコまれた。

今までツッコミ役と言えばしおりんちゃんだけだったし、みゆきちちゃんのツッコミは可愛くて和むけど可愛いだけでハスハスしちゃうだけなんだよなあ。

ひさ子ちゃん? あれは暴力。

「貴重なツッコミ役を発見しました。恐らくこれで勝つる」

「いや、俺別にツッコミ役じゃねえし。つか、ガルデモの奴らの苦労がわかったわ」

「ちなみにしおりんちゃんがいると悪ノリするので苦労が二倍になります。倍ドン!」

「今度ひさ子に何か奢ってやる」

どうやら一番苦労しているのがひさ子ちゃんだとすぐに見破ったらしい。

彼女こそが暴力魔にして怪物にして天使以上のモンスターなのだ。

本日も二回程殺されかけました。最近一度死んだからって殺そうとすることが多くて怖すぎる。

「おっぱいが大きいから悪い」

「あいつFカップだからなあ……」

否定はしているけれどあれはFカップ。異論は上方修正だけ認めてやろう。

「え、えつちなことは話しちゃダメだよ！」

「大山君は初心だなあ。下ネタは男子高校生なら当然の話題だよ？」

俺はそう言って、持ってきたポツキーを食べる。

日向君もそれを見て俺の持っていたポツキーが食べたくなつたのか見てきたので、一本あげた。

「男の子とあんまり話したことが無い。取り敢えず恋バナとかするの？」

「まあ恋バナはするぜ？　どの部位が好きとか、どんな体位とか、どんな服装とか？」

それはヤリバナと言う奴では無いだろうかと思いつつ考える。

どんな部位……、どんな体位……、どんな服装……。

ボンツと顔が赤くなってきた。

考えてないよ!?　しおりんちゃんのことなんて考えてないんだからね!?

《タツ君……》

沈まれ煩惱！ 俺の脳内に語りかけてくるんじゃない。

「うおおおおおおお！」

「ど、どうした多々!? 色々と真っ赤になってるけれどどうした!?」

「た、大変だよ日向君！ 彼実は初心って奴だよ！ いつも下ネタとか言ってるけれど大好きな人のことを考えてエロい想像をしたらすぐに真っ赤になっちゃう初心な人だよ！」

「めんどくせえな!?!」

しんどい。

やめてしおりんちゃん。俺妄想力高すぎるから。

私の妄想力は53万ですとか言っちゃう奴だから。

「はあ、はあ、はあ。何とか収まった……」

「おい大丈夫——」

ガチャリと扉を開いて藤巻君と高松君と松下君が入ってきた。

妄想を振り払ったことで肩で息をしている俺。

その俺の両肩に両手を置く日向君。

そしてフードで半分位隠れているけれど女顔な俺。

「「ひ、日向が女連れ込んでる!?!」」

「勘違いだ！ 多々だ！」

俺も変な勘違いをされると迷惑なので、そちらを向いてやつほーと手を振った。

「やつぱりホモだったか」

「いきなり襲いかかってくたんですね」

「多々はこつちに避難しているといい」

入ってきた三人は俺を大山君の方のベッドの上に座らせてもらって、その梯子の前に藤巻君と高松君と松下君が立ち塞がってくれた。

ふはははは。これが我が家来なり！

「おいあいつ上で立ってドヤ顔してるんだが」

「日向君怖い」

「やつぱりお前が手を出したんじゃねえか」

「女子にモテないからとは言え、男子に手を出すとはもつてのほかです」

「しかも女子と呼ばれることを嫌っているやつに對してな」

彼らは俺の味方だ！ どうだ日向君！ ざまあみろ！

まあそんなことをしていてもつまらないので、事情を説明すると俺と藤巻君が上。

高松君と松下君が下のベッドに座って、日向君と大山君は自分達の椅子に座る形になった。

「じゃあパジャマパーティー……って言っても俺だけしかパジャマ着てないだけどね」

「普通パジャマなんて着ねえよ。どうやって手に入れたんだそれ」

「しおりんちゃんから貰った。しおりんちゃんは手芸部から貰ったんだって」

手芸部はこんなに手触りのいい製品を作ることができるのか。

と言うか中々この学園の部活ってハイスペックな気がする。

まあ色々あるんだろうね。色々。

「パジャマと言うよりもコスプレだな」

「ピツピカチュウ！ ってみゆきちちゃんにやらせたら超可愛いと思う。和む」

「まあわからなくもねえ」

藤巻君は案外話がわかる人だった。

やっぱりみゆきちちゃんは大天使だよね。

「はいはいはい！ 皆好きな人っている!?!」

「うわつ。流石は多々クオリティ」

どうやら日向君は俺が女子っぽいと言われると怒るので、男子なのに女子っぽい多々クオリティと言う風にしたらしい。

それいいとか言ってるから藤巻君もそう言い始めるんだろう。

「藤巻はよくひさ子さんと一緒にいますか？その所はどうなんですか？」

「うおっ！ いきなり俺かよ」

話を振られた藤巻君がどもった。

「これはもしかしてもしかするののか!？」

「別にあいつのことは好きとか嫌いとかはねえよ。胸はでけーけど」

「麻雀しながらそこばっかり見てるから負けるんだ」

「うるせえ松下五段!」

どうやら藤巻君はいつもひさ子ちゃんの胸ばかり見ているらしい。

まあ……揺れるんだろうな。

「日向君は誰？ ゆりちゃん?」

「んなわけねーよ。あいつは腐れ縁だつての」

「かーらーのー?」

「なんもねえつて!」

強く否定するところがまた怪しいけれど、それを言ったら次は何か飛んできそうな気がするからやめた。

危機察知能力はずば抜けているのです。

「へー。他に好きな人は?」

「いねえよ!？ てか他になってまるで俺がゆりつぺのこと好きみたいじゃねえか!」

「え？ 違うの!？」

「いま否定したばかりですよねえ!？」

アハハハハ。日向君は面白いなあ。

「じゃあ大山君は？」

「僕は好きな人はいないかな」

「そうだね。NPCだね」

「どこが!？ 僕NPCじゃないよ!？」

「そうだね。NPCだね」

「だから僕はNPCじゃないって!？」

「そうだね。NPCだね」

諦めたのか一人でグスグス泣き始めたのを見て、ポツキ―を食べ始める。

いやあ大山君は面白いなあ。

「じゃあ高松君は？」

「私は基本的に誰かを好きになることはありません」

「あ、ホモなの？」

「ホモじゃないです!」

素晴らしい返しだった。

と云うか知的キャラに見えるけど絶対にアホだよね。

「でも基本的になんでしょ？ 衝撃的に好きになった人はいないの？」

「まあ……気になる人はいませんが」

ガタンと言う音と共に俺以外の全員が立ち上がった。

「お前……好きないたのかよ!？」

「誰だ!? 誰なんだよオイ!？」

「と云うか僕は高松君が女子に興味を持っていたことに驚きだよ!」

「高松お前……」

色々と酷いことになったなあ。

でも高松君って誰が好きなんだろう？

「で、誰が好きなの？」

上から覗き込むと、目を逸らした。

「……遊佐さんです」

遊佐ちゃん……?!

確かインカムくれた可愛い女の子だよな？

「お前遊佐が好きなのかよ!」

「予想外だったな……ん?」

気がついてみたら日向君と大山君が震えていた。

と言うよりも大山君は凄く怯えてるなあ。

「い、いやあ……。遊佐さんはやめておいた方がいいよ。と言うか絶対に敵わないからやめといた方がいい」

「あ、ああ。あいつは……。な」

どうやら過去に何かあったらしい。

だからこれ以上は聞かないけれど、誰も話せなくなってしまったから止まってしまった。

と言うかこのままだとマズイ。

「じゃあ次は松下君！」

「俺か……。俺は別にいないな。強いて言うならば生前にいたな」

「あ、いまそう言うしんみりする空気いいです。と言うかここでそのネタはダメだろう!?」

何でこの空気どうにかしようとしたのに普通に過去のこと言い始めたの!?

てかどうしてこんなにしんみりとした空気続いちゃってるの!?

俺がツツコミしてんじゃん!

いつもボケている俺がツツコミしてんじゃん!」

全てを言い終えた俺ははあはあと息を荒らげながら、ため息を吐いた。

「なら多々は誰かいんのか？」

「ふえ？」

唐突に日向君に聞かれて止まる。

好きな人……エロいこと……。

「しおりんちゃんかな」

俺は普通に答えた。

だって別に隠すことじゃないし、本気で好きな人だから。

「——普通に答えられて何も反応できなかつたじゃねえか！」

「お、おう」

日向君のツツコミに何も言えなかつた。

「と言うかお前関根の事好きだったんだな。ガルデモ全員つて答えると思つたぜ」

「酷いなあ藤巻君。確かに俺はガルデモの皆がlikeで大好きだけど、loveで大好きなのはしおりんちゃんだけなんだよ？」

そうだ。俺が好きな人はしおりんちゃんだけだ。

他の人も好きだけれど、しおりんちゃん以上にはなれない。

「一人の人を好きでい続けると言うのはいいですね」

「えへへ。やっぱりしおりんちゃんは可愛いからね」

と云うかこの流れは俺が質問攻めされる流れじゃないのかな？
何で誰もツッコまないんだろう？

まあわかってたけどね。

皆が俺の何かを探っていることぐらい。

「もっと別の話もしようぜ他の話！」

夜は更けていく。

楽しい夜って言うのは早く時間が過ぎていくものだと思う。

第2章 《恋に焦がれて》 Please love l

ove》

009 《Runaway Boys And Gir

ls》

「——遂にこの時が来たわ」

マジで何のことかわからないけれど、ガルデモのメンバーを含んだ全員が集まっていた。

「何が来るってんだゆりっぺ」

「学園祭よ」

その言葉に俺達に激震が走る。

『な、何だってー!?!』

「多々君。広めたの貴方でしょ?」

「あ、バレた?」

反応に困ったらこれすればいいよとか言つて広めました。

反省も後悔も一切しておりませんのです。

「でもゆりっぺ。まだ一ヶ月以上あるぜ?」

「準備に必要なのよ。今回の学園祭も勿論暴れるわ。でも一般生徒に迷惑をかけることは出来ない。ならどうするべきか?」

「出店するとか?」

「そうね。いいかもしれないわね。今回のお題は——これよ!」

バンとモニターに出てきたのは、各自に任せると言う文字。

それを見た俺達は全員息を大きく吸い込んだ。

『な、何だつてー!?!』

「それ楽でいいなオイ!」

ゆりちゃんからのツツコミが入ったのでよしとしよう。

でも実は二回目は打ち合わせしてなかったりする。まさに神がかつたハモリ。

何故か野田君と大山君と日向君ならすぐにでもハモれる気がするのは気のせいだろうか?

「書いてある通りよ。各自自分たちがしたいと思うことをしなさい。ただし——勿論ルールはあるわ」

画面が移り変わり、そこにルールが現れる。

1. ・何らかの形で学園祭に参加すること。
2. ・天使と少なくとも一度は会合すること。
3. ・何人かで組んで何かをすること。
4. ・一般生徒に迷惑はかけないこと。

「この上記四つを守って行動すること。あと、出来れば新しい戦線メンバーとかも連れてきてね」

これを見た俺は、アイコンタクトでしおりんちゃんと会話を成立させた。俺達の意思は一つ。

——暴れるならば全力で。

「しおりんちゃん！」

「タツ君！」

「「暴れよう！」」

「ああその二人には監視役を付けるからがつくりと項垂れてしまった。」

「メニュー全てを食べ尽くす計画が……」

「いたずらする計画が……」

俺達の行動は全て読まれていたらしい。

俺の監視役として日向君。

しおりんちゃんの監視役としてみゆきちちゃんが付くことになった。

この四人で行動するのも珍しいなあと思いつつも、何をするかを決めなければならぬので全員で俺の部屋に集まっていた。

ちなみに俺の相手は現在授業中です。

「——野球をしよう。チーム名はリトル——」

「言わせねえよ!？」

「バスターズ!」

「畜生こつちが言いやがった!」

「俺はここに来て、何がしたいか考えた」

「ああもうこいつら誰か止めてくれよ!」

「あたしはあたしである為に野球をする」

「し、しおりん落ち着いて……」

今日も今日とてハイテンションだった。

ふはははは。俺達のテンションを止めることなど出来ぬ!

否! 俺達は揃っているからこそ無敵なのだ!

「日向君は何か良いと思う?」

「俺か? 俺は——」

「まあ意見期待してないから大丈夫。みゆきちちゃんは?」

「俺の意見を無視するなよ!」

相変わらず日向君は面白い。

「……までツツコミを入れてくれる相手は中々いないからね。」

「取り敢えずひさ子ちゃんのFカップを揉むところまでは良しとしよう」

「よくねえよどつから出てきたんだよその意見が」

「しおりんちゃん」

「アイコンタクトって奴です!」

「こいつら止まらねえ……」

俺達を止める? それは君には無理だよ。

「日向君。君には情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ! そしてエなによりもオ——」

「ウルトラソウル!」

「ヘイ!」

「せめてネタを一つに絞ってくれよ!? どうして途中で変えるんだよ!」

そもそもしおりんちゃんの行動を狭めるという点ではみゆきちちゃん以上の監視役

「ん？ 炊事洗濯家事完璧」

「……勉強は？」

「学年一番」

「運動は？」

「バスケット部エース」

「お前は天才か!？」

いやだってやってあげたい状況だったし。

俺の過去については今触れて欲しい話じゃないし。

「因みにだが、彼女はいたのか？」

「いたよ？ 童貞だけどネー！」

しおりんちゃんのハートブレイクショットが入ったと思ったら、みゆきちちゃんがオドオドしている姿からは想像できない程の肝臓打ちを決めてきた。

一体俺が何をしたと言うのだね。

「彼女の話禁止！」

「しおりんが可愛そうだよ」

ん？ 何で彼女の話をしたらしおりんちゃんが可哀想なの？

と言うかその二人。オイ日向君とみゆきちちゃん。お前達だお前達。

何でコソコソと話し合ってるんだ。

そしてしおりんちゃんやんが少し赤くなつてて可愛いなオイ。

しおりんちゃんテラカワユス。みゆきちちゃんマジ俺の心を抉る天使。

「——乱入してやろうぜ」

「は？」

俺の聞き違いだろうか？

今日向君は乱入と言った気がする。

「乱入だ乱入。クラスの奴らの手伝いをして話を付けておけば、誰でもわかつてくれる。そしてそれ以外にもスポーツ、バンド、料理、クイズ全てに乱入する。お前がいるから出来るんだ」

あーなる程。

つまり全部遊んじまえてことね。

「スポーツは……後一人連れてきてバスケットに参加すればいいか。バンドはこつちに二人もガルデモのメンバーがいるんだ。練習次第で何とかなるだろ。料理は多々どつちか出来るか？」

「あたし出来る！」

「——迷惑コンビがやれる」

「おい」

迷惑コンビって何だ迷惑コンビって。

金銀とかき、ゴールドとシルバーとか……ナツシユとかの方じゃないよ？

どちらかといえば俺はホウオウとルギアを思い出すかな。

「そしてクイズは、多々と——」

「一応その位なら……」

「入江ちゃんがやると」

中々乱入っていうのも色々と出来て楽しそうじゃん。

「じゃあバンドの練習からかな？　と言ってもギターはどうしよっか？　軽音部からパ

クってくる？」

「どうやってだよ」

「男の弱点を狙って……ね」

右足をチラリと見ると、日向君は内股になった。

ははっ。今は狙わないよ。——今はね。

「だ、だがNPCに迷惑をかけるのは禁止だ。多々、教師に手は出せないぜ？」

「困った」

だとするとどうやって楽器を手に入れようか？

当然だけれどひさ子ちゃんとまさみちゃんに借りるのは却下。

「一つなら心当たりがあるよ?」

しおりんちゃんが言うには、もう一つギターがあるらしい。

だとするとそれを使えばなんとかなるかも知れない。

「ジャンケンで負けたほうがボーカルで」

「おいおい待ってくれよ多々。俺は歌なんて歌えないぜ?」

む。よくよく考えてみると、歌うとしてもC r o w S o n gとかガルデモの曲だ。

だとするとその音程を掴めているのってガルデモのメンバーとマネージャーの俺だけじゃね?」

つまり俺氏歌手デビュー?」

「仕方ないね。俺がボーカルをするよ。なら日向君はリードギターで」

「出来るのかなあ?」

みゆきちちゃん是不安そうだけれど、安心していいよ。

だって日向君だもん。ツツコミの様に何とかしてくれるに決まってるさ!」

「成せば成る成さねば成らぬと言う言葉がある。つまり日向君は出来るってことさ!」

「その理論はオカシイだろ色々!」

「え? でもそんなもんじゃね?」

「そんなもんじゃないですから！」

取り敢えず日向君が何とかすると言う方向で決まったけれど、実はもう一人位欲しい。

だつてバスケットて5人だよ？

バンドは4人でもいいかもしれないけれど、バスケットて5人だよ？

大事なことだから二回言いました。

「ふっふっふっ。お困りのようですね先輩方」

「きつ貴様は——!?!」

「ゆいじゃんです！」

ピンク色の髪にパンクファッションというピンク髪はビッチという異名の通りにも見えて実は初心そうな子がいたので、俺は反応してみる。

何とこの子も俺達の話についていけるようだ。

「ガルデモの皆さんと行動できるなら例え火の中水の中！」

「草の中と森の中。そしてあの子のスカートの中にも入り込むんですねわかります」

ゆいじゃんはガルデモの大ファンらしい。

これは心強い味方ができた。

「この子ギターが——出来る！」

「後ギター弾きながら歌ってた所も見たことがあるよ?」

「どうやらツインボーカルという夢が叶うらしい。」

「そこまで合うかわからないけれど。」

「バスケは?」

「運動そんなに出来ません!」

「まあ大丈夫だね。日向君は?」

「俺も別にいいと思うぜ」

「けつ。上から目線ですか先輩」

「思いつきりゆいじゃんが舌打ちしていた。」

「何でだよ先輩なんだからいいだろ!」

「多々先輩! ひなっち先輩が虐めてきます!」

「ダメだよ日向君! こんな小さい子を虐めるなんてロリコンだと思われちゃう!」

「誰がロリだこのヤロー!」

「お前がロリだこのヤロー!」

「どうやら波長が合うらしい。」

「通りの流れをしてから、ぐつと握手をした。」

「この子とも良き関係になれそう。しおりんちゃん以上にはなれないけれど。」

「むー」

そして膨れているしおりんちゃんカワユス。

あれ？ 何で膨れてるの？

「じゃあ学園祭に向けて——頑張るぞ！」

「「「「おー！」「」」」」

死んだ世界戦線の中でも最もふざけているメンツが揃った。

010 《Three Regret》

「——まあ普通だな」

練習を初めて一週間。

日向君が案外普通にギターを弾くことができたことにより、俺達は順調に準備を進めていた。

「普通だね。それ以上でもそれ以下でも無い」

でも何だかしつくりこないんだよね。

普通って言うか、ノーマル？

アブノーマルが足りない気がする。別に異常が欲しいわけじゃないよ？

「バンド……敵しいかもしれないね」

正直に言つて、この学校でバンドを披露してもあまり上手くない気がする。

この学園にはガルデモというあまりにも大きすぎる存在があるから、それ以上の演奏をしなければ意味が無い。

「まあやれるところまではやってみようよ」

しおりんちゃんの言葉に頷くと、俺達は練習を始める。

しおりんちゃんとみゆきちちゃんの演奏は最早凄まじいというレベルだ。

なのに普通よりも上がらないのは——俺と日向君が足を引っ張っているからにほかならない。

演奏を続けて歌い終えた瞬間、やはり思う。

二人についていけない。

ゆいにもやんも頑張っていて、普通に俺達よりも上手いししおりんちゃんとみゆきちちゃんのレベルにも到達しそうなほどだ。

「——足りないのは俺達かな」

「だよなあ……」

バンドっていうのは精密だ。

例え凄い人が三人いたとしても、二人下手がいればたちまち崩れ始める。

俺は歌うだけだけれど、それでも音程を完全に切り切れているとは言えない。

ゆいにもやんと合わせるのが精一杯な状態だ。

曲を完全に理解して歌えていない。

「多々先輩！ 全部合わせなきゃいいんじゃないでしょうか!?!」

いきなりそう叫んだゆいにもやんの言葉に、なる程と頷いた。

まあ日向君は意味がわかっていなかったらしいけれど。

「サビの部分以外はAパートとBパートで声を分けて、サビになったら二人が合わせるってわけか」

「おお！ それなら出来るんじゃない?」

だがそれだと問題が日向君に移るだけだ。

正直に言えば後数週間でどうにかなるレベルの話じゃない。

それこそあの二人は、恐らく生前から今まで練習し続けてきてあのレベルに到達したんだ。

なら俺達が数週間で出来る話じゃない。

「ひなつちにはあたしが教えるー!」

しおりんちゃんがそう真面目な顔で言った。

やっぱり音楽には真つ直ぐな子だ。

俺はその姿を見つめてから、心の中に強い思いを感じた。

——しおりんちゃんが好きだ。

心の底から愛していると確信しているし、彼女になら俺の全てを話してしまってもいいと思っっている。

だけどそれをしてしまえば、俺は自分が許せなくなってしまう。

でも俺は大切な人に——最後の約束に答えてあげたい。

二人の未練と俺の未練。

その全てを叶えたいからこそ、俺はここにいるんだから。

しおりんちゃんの部屋に俺は来ていた。

今回は特別許可を得て日向君も来てるし、ゆりちゃんもいる。

全員の名前を挙げてみれば、俺、しおりんちゃん、みゆきちちゃん、日向君、ゆりちゃん、ひさ子ちゃん、まさみちゃんの七人だ。

「貴方が定期的に女子寮に入っていたことはわかったわ」

遂に俺がいることがバレたのだ。

まあ手を出していないことで堪忍されたし、マナージャーという立場上話すこともあるからこれからも入っていいと言われたけど。

ちなみにここでNOと言われても俺は入っていたけどね。

「それで——日向君と私をここに呼んだ理由は何かしら？」

そう。本来ならば女子寮に侵入したという話をするのは今日じゃなくても良かった。

それに日向君に来てもらう必要も無かった。

なのにここにいるのは、俺が呼んだからだ。

「知ってもらいたい事があつたんだ」

「知っててもらいたいこと?」

怪訝な顔をするゆりちゃんに、珍しく真剣な表情で頷いた。

「俺の——あの世界に残している未練の話」

「……過去を話すというわけね。岩沢さん、部屋の鍵を閉めてもらえるかしら?」

カチャリと閉められた扉を一瞥してから、俺は口を開いた。

「俺の未練はこの世界では叶えられない。だから俺はこの世界で完全に満足することは出来ないし、だからこそこの世界から出ることは永遠に叶わない」

それは既にガルデモのメンバーには伝えてあること。

だからこそそれを聞いた人の反応はわかっているし、案の定ゆりちゃんと日向君は絶句していた。

「そしてここからが俺の過去の話。俺が抱えているのは三つの未練」

三つのことを全て思い出す。

大切な人と、俺の望んでいる未練を。

「二つ目。俺には姉さんがいた。その人の名前は悠はるか。そして姉さんは生まれつき病弱で、俺の為に死んだ。その人の願いである——俺の結婚式を見せること」

笑いかけてくれた姉さんの、暖かい笑顔を思い浮かべて俺は唇を噛み締めた。

「二つ目。俺には彼女がいた。その人の名前は蓮花れんか。そして彼女は俺のことを思っ

れていて、俺のせいで死んだ。その人の願いである——子供を育てること」

一緒にいてくれた優しいその心を思い出し、俺は両手を握り締める。

「そして三つ目。俺の願い。姉さんを傷つけた奴らを、蓮花を殺した奴らを一人残らず殺すこと。それが俺の最後の願いにして、絶対に叶わない思い」

いつだか教えてくれた。

この世界に命ある者は生まれぬ。

だから蓮花の思いに叶えることができない。

この世界に結婚はない。

だから俺は姉さんの思いに叶えることが出来ない。

この世界に奴らはいない。

だから俺は俺の願いを叶えることが出来ない。

「……その二人に何があつたのかは、今は聞かないでおくわ」

「そっか」

言葉を失つた人達がいる。ガルデモのメンバーだ。

俺の中に眠る悪の心を、俺の中にある大切な二人を知っていて欲しかった。

特に俺の好きな人であるしおりんちゃんには、やっぱり隠し事をすることはできな

かった。

例え自分が許せなくなってしまうとしても、俺は自分の心を吐露したくなってしまうほどしおりんちゃんのことを愛してしまっていた。

もしもこの真実で嫌われるとしても、彼女に隠しているのだけは嫌だと思ってしまうた。

「じゃあ死因は何だったんだ？」

瞬間空気が凍りつく。

しおりんちゃんが俺に視線を向けてきてから一瞬で逸らし、少し顔を赤くしていた。

ひさ子ちゃんも俺と目を合わせないようにしている。

その空気が気がついた日向君が言葉を下げようとしたけれど、結局のところいつもシリアスにネタを突っ込まれても困るので言う事にした。

「——テクノにブレイクした」

「殺すわ」

ゆりちやんが拳銃を俺の頭に押し付けてきた。

ステイ、ステイ。聞いたのは日向君だ。俺は悪くない。

「貴方酷い生涯で可哀想って思った瞬間にこれ!? 貴方のあのしんみりとした表情は何処に行ったの!?! 何故そこでコメディをぶち込んだの!?! シリアスがシリアルに早変わりじゃない!」

だつてしようがないじゃない。

あの頃は性欲盛んな高校生だつたし、色々あつたんだよ。

「マジごめん。でも、俺は普通の人よりも多分消えにくいと思うよ」

どれだけ自分が幸せになろうとも、絶対に復讐というこの思いは無くならない。

殺すと決めたあの日から、俺は止まらずに生きてきたから。

「はあ。それでも貴方のことは理解できたわ。そして貴方が男子を避けている理由も、常に金的を狙い続けている理由も大体は予測がついたわ」

あははは。やっぱりゆりちゃんは頭がいいなあ。

やっぱり俺の心にそういう事があつたつていうのが根強く残っているからね。

無意識の内に男性を避けちゃうし、取り敢えず金玉を潰すという考えが出てきちゃうんだよね。

「貴方がここに居続けるならやはり戦線にいなさい。私達がそれを守るわ」

「流石ゆりちゃん。マジリスペクトつすわ」

日向君を見ると、少し笑っていた。

「お前が普通に居てくれれば、俺は安心だよ」

「ねえ助けて！ ホモに狙われてる！ 俺に安心できる日はないんだ！」

「ホモじゃねえよ！ と言うか普通にお前のことを褒めたんだからそんな反応するなよ」

！ 悲しいだろ!？」

悲しいとか言われるとちよつと心に響いて弄りにくくなるからやめていただきたい。

「タツ君」

しおりんちゃんの声で止まった。

え？ 何で日向君もゆりちゃんも静まり返るの？

取り敢えずシリアスは過ぎたんじゃなかったの？

「それでもあたしはタツ君が消えられるまで待つよ」

——何も言葉が出なかった。

真つ直ぐと俺を見て放たれた言葉が、俺の心にひしひしと染み込んでいく。

俺が未練を叶えるまで待つていてくれる。

正直に言えば拒絶されると思つていた。

常に復讐を考え、殆ど女性としか話せないこの欠陥品のことを嫌いになると思つていた。

「だつて約束したじゃん。だたらあたしがタツ君が未練叶えて消えるまで一緒にいるよつて」

そんなこと忘れていると思つていた。

「二人だったら悲しいけれど。二人いればダイジョーブ！」

こんな俺のことなんて、忘れてくれると思っていた。

「あたし達ガルデモは、マネージャーにも優しいスーパーバンドですから！」

だというのに、彼女は忘れていなかった。

俺なんかとの約束を忘れていなかった。

「——マジな奴だな」

「——ええこれは反則ね」

日向君とゆりちゃんのひそひそ話が少し聞こえたけれど、それすら耳に入らない。

頭の中で永遠と流れ続けているしおりんちゃんの言葉。

待っていてくれるという安心感。

一緒にいてくれるという安心感。

そのどれもが姉さんと蓮花に与えられた幸福感で、それを一気にしおりんちゃんは

俺に与えてくれた。

参ったなあ……。我慢できないよ。

こんなに大好きな人がこんなに俺のことを考えてくれていたなんて、俺は夢の一つを

叶えなくなっちゃうじゃん。

一緒に居ようって、答えなくなっちゃうじゃん。

「ありが、とう」

漸く絞り出した言葉を言つて、俺は俯く。

この心の奥に眠る復讐心と同じくらいに大きな存在に、出会ってしまったのかもしれない。

もしかすると俺は、この子によつて変えられてしまうのかもしれない。

「どういたしまして！」

その笑顔を、俺は大好きだと確信した。

迷わない。逃げ出さない。

本気で俺は、彼女を愛したい。

「頑張ろうね、学園祭」

多分そう告げた俺の顔は、非常に赤かつたと思う。

SIDE: ゆり

関根さんと多々君以外が集まった校長室にて、私は新たなオペレーションを提示した。

「オペレーション、ラブシンドローム……？」

「おいゆりっぺ。そりゃ一体どんなオペレーション何だ？」

「Please tell me」

高松君、藤巻君、TKの反応に私は口を開く。

「皆知っているかもしれないけれど、多々君は確実に関根さんのことが好きよ」

何人かはざわめいたが、それ以外は黙って頷いていた。

やっぱり皆気がついていたのね。

と言うよりも気がつかない方がおかしいというレベルだった気もするけれど。

「そして先日聞いた話だと、多々君は自分が幸せになっても叶えられない程の未練を持っていてるわ。そして入江さんからの情報によると関根さんの未練は今や多々君が未練を叶えることになりかけているらしいわ」

関根さんも実際多々君のことが好きなのね。

そして関根さんは恐らく、多々君が消える瞬間を見るまで消えられないと思っ
てい
る。

私とあまり変わらな——いえ違うわね。

「正直に言っつていつもいつもはしやぎながらも一緒にいて笑い、一緒にいて初心な反応しているあのリア充——もとい多々君と関根さんがうるさいので付き合わせちゃえばいいじゃない！」

「でもゆりっぺ。それで多々君が消えたらどうするつもりだ？」

「消えないわ。そんなヤワな思いじゃないもの」

あの時の多々君からは本気で殺気を感じたわ。

そしてあの時のあの瞳は、本当に殺すという覚悟を決めた者の目。

私以上の怒りと憎悪を持っているのはすぐにわかったもの。

「今回のオペレーションラブシンドロームの内容は、多々君が告白することを止めずに眺めながらそれを邪魔する全てを排除することよ！」

「俺達が何かするわけじゃないのか？」

「そんなことしなくても告白するわよ」

「だけど確か多々君ってヘタレじゃなかったっけ？」

大山君の言葉を聞いて、そう言えばそうねと思い出した。

彼はヘタレ……いえ。それでもやる時はやる男よ。

と言うよりも今回告白しなかったら学校の屋上で放送しながら告白させてやるわ。

「安心しなさい。彼ならやるわ」

それでも信頼できるのは、恐らく彼が女性に対して真摯な態度を持っているからなのかしら？

そう思いながらこのオペレーションラブシンドロームを——開始した。

O l l 《 L e t , s P l a y B a s k e t b a l l 》

——学園祭当日。

「遂に学園祭……か」

俺の心はウキウキしていた。

やっぱり死んでからでも、こう言うイベントってというのは楽しみになってしまいうものだ。

「日向君準備はおつけー?」

「勿論だ!」

俺達はユニフォームの様なものを着てから、バスケット部の所へ入っていった。

——死んだ世界戦線V S バスケット部。

出店をどうしようか迷っていたバスケット部に客を集める為に声をかけたところ、二つ返事で了承された。

と言うかこれを乱入というのかどうか分からないけれど、女子三人が美少女ということもありかなりの人達が見に来ていた。

「今日はよろしくな」

「こちらこそ」

握手をしてからバスケット部はハンデとして俺達からのスタートにしてくれた。

久しぶりのボールの感覚を指に馴染める為にも、俺は日向君からのスタートにしてすぐにボールをパスして貰った。

ボールを手を取った瞬間にわかる試合という雰囲気。

傍から見ても強いとわかる相手に向かっていく快感。

「——久しぶり」

目の前にいたシューティングガードの股を通して右手から左手にボールを移すと、そのままドリブルで抜けていく。

「速い!?!」

目の前に現れたセンターを一瞥してから、ジャンプしてゴールに手を伸ばそうとする。

勿論それに気がついたセンターもジャンプして手を伸ばしてくる瞬間、俺はボールを引き戻すそのままセンターの横を抜けてボールを放る。

ゴール真横からのシュートを見たセンターが驚愕の視線で俺を見てくる。

俺が着地すると同時にゴールをくぐり抜けたボールを見て、俺は笑みを浮かべた。

「スーパーイケメンバスケットプレイヤー多々君只今復活！」

同時に速攻を危惧して自軍ゴールに向けて走り出す。

それを見ていたしおりんちゃん、みゆきちちゃん、ゆいにゃん、日向君もゴールに戻り、五人全員で守る体制に入る。

「くっ。完全に防がれてる！」

「こちとらディフェンスだけは練習してきたんだよね」

一瞬の隙をついてボールを奪うと、そのままダッシュで走り始める。

スマールフォワードよりも速く守備を貫いた俺は、3Pライン手前で止まった。

息を大きく吐いてから、気持ちいを落ち着けて放つ。

綺麗な弧を描いたボールは、そのままゴールへと入る。

——勘は取り戻してきている。

「さっすがタツ君！」

「オーイエス！」

ハイタッチをしてから下がるが、流石はバスケット部。

俺達なんか比べ物にならないそのセンスで、ゆいにゃん、日向君を抜いてそのままレイアップを決めてしまった。

「多々！」

パスを受けた俺はそのまま前を向くと、ポイントガードをレッグスルーからのドライブで抜き去る。

だがパワーフォワードとセンターの二人が俺の前に立ち、シュートすら打てない状況を作られた。

だけれど別にこれは俺一人で戦ってるわけじゃない。

「——しおりんちゃん！」

俺は何も見ずにボールをセンターの股下からバウンドさせると、そこに移動していたしおりんちゃんが取ってシュートを決めた。

「いつの間に!?!」と言うか見えなかったはずだろ!?!」

「俺としおりんちゃんは強い絆で結ばれてるのさ!」

俺はまたディフェンスに戻り始めた。

今回はスタンスとして、「前半に大量に得点を取って後半は耐え凌ぐ」と言う戦法を取っている。

流石に全てを走り続ける程体力が無いしおりんちゃん、みゆきちちゃん、ゆいちゃん、の三人はディフェンスを頑張り、出来れば攻撃に参加する。

そして俺と日向君で攻撃をすうと言うスタンスだ。

まあ飛び出してきたしおりんちゃんが決めてくれちゃったけど。

そしてそのままドリブルで上がって行き、レイアップをしようとすると三人がジャンプして立ちほだかった。

なので俺はシュートを打たずそのまま通り過ぎて行き、ゴールの裏に来た瞬間ふつとボールを投げた。

アピールする分に、これ以上無いプレーだ。

ボールはゴールの裏からゆつくりと上がって落ちていき、ゴールを通り抜けた。

それはつまり入ったと言ふことにほかならない。

同時に気づいた観客から凄い歓声が飛んできた。

「すげえ!? 何だ今の!?!」

「ゴールの裏からシュート決めたぜ!?! 一体何すればあんなシュート打てるんだよ!?!」

俺はチームメイトに親指を立てると、同じく親指を立てて返された。

「ちっ!?! 反撃だ!?!」

ならもう一つ魅せるプレーをしてやろうかな。

俺はボールを持ってドリブルしているスマールフォワードに向けて走り出すと、レイアップをしようとしていたスマールフォワードの横からボールを弾き飛ばした。

「ゴールの端から端まで一気に走って間に合った!?!」

「一体あいつ何者何だ!?!」

……ふう。疲れた。

正直こんなプレー何度もしてたら体がもたない。

そろそろ影になるとしますかね。

「日向君」

ボールを持った日向君が上がって行き、それを俺は視線で確認すると別の方向へと走り出す。

「——多々ー」

日向君が出したパスは俺の所に向かってくる。

そしてそれを止めようとポイントガードの人が近づいてくるのを見て、にやりと笑った。

右掌で触れたそのボールをポイントガードの人の真横でバウンドさせて、そのボールを走ってきた日向君が取ってレイアップで決める。

これが影。パスに特化した幻のシックスマン。

「ドヤア」

「うわ超うぜえ」

日向君にうぜえとか言われたので、次はイグナイトパス廻を思い切り日向君の腹にぶつけようと思います。

「こいつら強いぞー！」

「だがディフェンスは女子だけだ！」

あつという間にディフェンスの隙をついてシュートを決めるバスケット部。

だが観客からはブーイングが起こっていた。

「もつと凄い事してくれよ！」

「死んだ世界戦線チームみたいにもつとカッコいいものみたい！」

ふつつつつ。これが俺の必殺技、観客を味方につけるだ。

そしてそれを更にも上げる方法をする為に、俺がパス出しをする。

そのボールを掴んだまま一回転する。

「——サイクロンパス」

コートの手端から端までを横切るかのように放った。パスを体で止めた日向君は、よろけな

がらもレイアップを決めた。

「お前わざと当てただろー！」

「え？」

いやいやそんなつもりないって。

さつき超うぜえとか言われたからちよつと強くして思い切りぶち当ててやろうかなとか思っていないから。

「そういう言い方がかり良くないヨ」
だけれど観客には好印象の様だ。

やっぱり目立つことをする方が観客は楽しめるようだ。

「てかあの子達ガルデモのメンバーじゃね？」

「とさあのかあのかあのかからカツコイイ人って、ガルデモのマネージャーさん!?」

「いいなあ。あんなカツコイイ人がマネージャーしてくれるなんて」

どうやらガルデモのメンバーと言うことに気がつき、更には俺がそのマネージャーだと言うことにも気がついたらしい。

それを聞きつけた観客も入り始めたようだ。

「くっ。圧倒的アウエーだと!」

「これが俺達の強さだ!」

俺は向かってきているパワーフォワードの前に立つと、プレッシャーをかける。

俺からだけではない。

観客からのプレッシャーも凄まじい。

「これが、君の強さだと言うのか……」

プレッシャーによってボールを落としたバスケット部を見て、やっぱりと思った。

こいつらは要するにこの学校だけしか戦っていない。

部活の中でしたか戦っていない。

つまりアウエーの状況でやったことは一度としてないんだ。
精神的に弱い。

「行くぜ」

予定変更。

この第一クォーターで全てを決める。

日向君にパスを出して再び別の方向に走り出すと、日向君から俺にパスが来る。

それを弾くようにして日向君がシュートを打ちやすい方向に向けると、日向君がボールを左手で取る。

しかし予想されていた為に前に現れたセンターがそれを止めようとする。

「だけど、俺がそれを予想していないと思っただのかい？」

左手で取ったままゴールの反対側へと放ったボールを俺が取ってシュートフォームに入る。

それに気がついたセンターが俺の方に向かってきたが、構わず俺はジャンプする。

空中でセンターと接触し押し飛ばされた俺を見て、観客は危ないと叫んだ。

倒れた状態で落ちていく俺を見てそう思ったんだろうけど、まだ甘い。

俺はその状態でボールを放つと、センターは驚愕した表情で見ていた。

「——言っただろ？ 俺に勝てるのは俺だけだ」

だって俺、中学の頃クラブチームで全国大会優勝して最優秀選手に選ばれたし。

この世界にそのレベルの奴がいなかったら負けねえし。

ゴールをくぐり抜けたその瞬間、大歓声が訪れた。

倒れながらもシュートを決めるのは青峰のプレーだけれど、俺はそれでも充分に楽しんでる。

そしてそれを見た観客も充分に楽しんでる。

「さあ、ゲームを続けよう」

某ゲームマーの様に俺はそう宣言した。

SIDE：ゆり

「……なんなのあれ」

「以前聞いたのですが、多々さんは中学校の頃クラブチームのバスケットボールをしていたそうです。そしてレギュラーかつエースで、全国大会の優勝経験と共に最優秀選手になったと語っていました」

インカムから聞こえた遊佐さんの声に、私はそんなアホなと呟いた。

本当に多々君は性格以外は完璧超人ね。性格以外は。

「大事なことだから二回——」

「それ以上は言わなくていいわ。と言うか貴方も中々多々君に汚染されているわね」

「そんなことはありません。一億と二千年前からありません」

「どうやら私の知っている遊佐さんは世界の果てに消えていってしまったらしい。

残念なことだ。

取り敢えず試合を確認するけれど、あれはもうダメね。完全に心を折りに行つて
わ。

「それにしてもよくあんな動きできるわね。今度実戦部隊に入れてみようかしら？」

「彼自身では、お肌が荒れるからお外は嫌いと言っていました」

「——ギルドにでも落とそうかしら？」

「トラップを解いてなくても彼なら生き残れる気がしてきた。

と言うかお肌が荒れるからって何よ！ 女子か！

「ともかくここで邪魔する人達はいなそうね」

「ですがNPCからの人気は凄まじいようです。傍から見ればイケメン、天才、運動神
経抜群と三拍子揃ってますので」

「そこに性格が加わると壊滅的に悪くなって地に落ちるのよね」

「その通りです。わかります」

どうしてあんなに残念な子なのかしら？

……残念じゃなかったらここにいないのかもしいわね。

「ですが多々さんは、高校に入った時にはバスケットは出来なくなっていたと言っていました」

「そこは触れないであげて」

恐らく何かが起きたのだろう。

だとすれば彼は彼女も姉も、大好きだったバスケットも全て奪われたってことなのだろうか？

本当にそうなら、どうしてあんなに笑っていられるんだろう？

「今度ひさ子さんのFカップを揉みに行かないかと誘われたのですが」

「却下よ。……面白そうだからありか？」

恐らくボコボコに殴られるであろう多々君を想像して、日頃の罰にはちようどいいかと思つた。

戦線のメンバーを次々と汚染していく塊の様な人物ですし。おすし。

「はっ！」

今私は何で最後におすしをつけたのかしら？

もしかしてあたしも既に多々君に汚染されていると言うの!?

だとしたらすぐに脱出しないとツ。

「つて私はエヴァか！」

「唐突なノリツツコミお疲れ様です」

どうやらこの戦線にまともな奴はドンドン消えていくらしい。

多々君には徹底したお仕置きをしてやらねば。生レバ。

012 《Live Song》

結論から言おう。

勝ちますた。

そりやあんだだけ凄いプレーを求められて、普通のプレーしかなかったら観客もブーイングばかりになります。

と言うかバスケット部の人達は、俺達が魅せるバスケットをしようと言っていたことを忘れていたようです。

堅実に勝利を望んだ結果、堅実じゃない方が勝つというなんとも言えない結果に終わりますた。

いやあこれもありだよね。と言うよりも世界の真理の一つだよね。

「と言う訳で俺達が勝ったからお店は俺達が運営するぜ」

「くっ。仕方ない……」

俺達はこの試合に出店の権利をかけていた。

つまり勝った俺達の権利なのです！

「じゃあ貰ってくね」

俺達は出店権利書を持って悠々と歩き出した。

「いやあタツ君スーパープレーの連続だったね！」

「かつこよかつたよ」

「ねえねえ日向君。俺こんな褒められてるんだけどどう？　ねえどんな気持ち？」

「うるせえ！　俺だって野球だったらあのくらいやってやんよ！」

「ひなつち先輩には無理ですね」

騒ぎながら歩いている俺達は、妙に視線を集めてる。

俺が手を振ってみたら、何人か黄色い子を出していたけれど何かあったんだろうか？

「まああれだけすげープレーをしたから当然か」

「何が？」

「ん？　お前にはわからないことだよ」

ドヤ顔で言ってきた日向君が非常に苛立たしかったので脛を何度も蹴った。

「いてえよ！　何でそんなに脛ばっかり蹴るんだよ！」

「そこに脛があるからだよ」

折れるまでやろうと思つたけれど、回復には時間がかかるらしいのでやめておいた。

「——じゃあ始めようか」

鉄板に置いてあるのは肉だ。

俺達が出すのは焼肉。

バーベキューみたいなもんだ。

「でも本当に客なんて来るのか？　ただ肉と野菜焼いてるだけだろ？」

「甘いよ日向君。こっちはさつきスーパーパープレーを連発して有名になっているこの俺と——」

「あたし達ガルデモのメンバーがいるんだから！」

「取り敢えず自分でスーパーパープレーを連発したとか言うのやめような？」

失敬な。別に自分でスーパーパープレー連発するとかネタ以外で言う訳無いじゃん。

むしろネタだからこそ言ってるんだよ？

「ともかくだよ。人气的にはかなりあるんだ」

そしてと屋台の後ろに用意しているものを見る。

バンドセット準備完了！

「みなさん！　バーベキューを始めましたー！」

俺はそう叫ぶと、スピーカーの電源を入れて音楽を再生させ始めた。

勿論——ガルデモの曲だ。

「おいあそこにいるのってガルデモのメンバーじゃないか？」

「それにさっきのバスケのすげー奴もいるじゃん！」

「もしかして後でライブとかするのかな!？」

わいわいと集まってきたので、俺はその人達に告げる。

「皆の者! ライブをして欲しいか!」

『はい!』

「だったら買うがいい! 売り切れたらガルデモじゃない——もう一つのガルデモを見せてやろう!」

売れる売れる。

俺が用意してもらった大量の肉が、野菜が飛ぶように売れていく。

勿論金と交換ではなくて、食券との交換だ。

食券によってどの野菜が、肉が貰えるのかを決めてある。

「俺にはカルビをくれ! ここにラーメンの食券がある!」

「ここには肉うどんがあるわ! 早く塩タンを!」

ふはははは。これが俺の商法!

一回だけならば通用する素晴らしいこの作戦を見て——しおりんちゃん以外はドン引きしていた。

「なんつーかあいつ、イキイキしてないか?」

「しかも別のガルデモって、本物のガルデモのライブするなんて一言も言っていないです。」

多々先輩はやつぱり非道です。外道です」

「よつしやー！ あたしも売りつけてやる！」

「しかもライブ聞きたかつたら買えって……」

何とでも言うがいい。

俺は売りつけて必ず大量の食券を手に入れるんだ。

非合法的に大量の食券を手に入れることに意味があるんだ！

「貴方達が学園祭で食券を集めているお店？」

そんなことをしたら生徒会長殿がいらつしやいました。

「へいらつしやい！ 何を頼む？」

「店の売り買いはお金でするように決められているはずよ？ 物の交換は認められてい

ないわ」

後ろで日向君達がマズイ天使だと言って慌てていたけれど、君達はまだまだだね。

敵とは情報を手に入れた上で行うものだよ。

「ここに麻婆豆腐の食券が沢山あるんだ。困ったなあ。俺達は誰も食べないんだけど。

だれか譲り受けてくれる人はいないかなあ？ 本当に、コマツタナー」

ふっふっふっ。幾ら平常を装っていても君の視線が麻婆豆腐の山に向けられている

ことなんてお見通しさ！

何度も何度も食堂に通って君の好物を調べていた俺に資格は無い。

「あーあ。しかもこのまま続けてたら更に増えるのか」

ピクンと反応した天使ちゃんを見て、俺はにやりと笑みを深めた。

「これって、賄賂って奴じゃないですかね？」

「違うぞ関根。これは脅迫だ」

そこ煩い。

「食券って言うのは通貨みたいなものじゃないですかね？ 例えば素うどん1000円な

ら1000円玉と同じです」

「貴様それ以上にしておけ」

生徒会副会長が出てきた。

「ああそう言えば俺の部屋に誰が書いたか知らないけれど、凄いかッコイイ主人公の小説が置いてあったな。確か闇の王者——ダークネス・ファ」

「仕方ないですね生徒会長。ここは許してあげられませんか？」

君の弱点を知らないと思っていたのかこの厨二病。

お前の机の中から奪ってきた——もとい拾った厨二病の塊の小説等手に入れておるわ。

「……仕方ないわね。後で余った食券は生徒会で回収するわ」

「毎度ありー！ あ、副会長には後で別の紙媒体のものをあげるね」

帰っていく生徒会に手を振っていると、後ろからヒソヒソ話が聞こえてきた。

「おいあれって完全に脅迫だよな？」

「大丈夫ですよひなっち先輩。外道が外道らしく上げつないことをしただけです」

「あたしタツ君の裏を見た気がする」

「気にしちゃダメだよしおりん。ふぁいとっ！」

ニコニコとした笑顔で振り返ると、全員が姿勢を正していた。

ふふふ面白いなあ四人とも。後で説教してやる。特にゆいにやん。

「後でO☆H A☆N A☆S H Iしないとね」

『ひえっ……』

「大丈夫。痛くないから」

「と言うかO☆H A☆N A☆S H Iをするって言うてるのに痛いつてどういうこと!？」

「あつてるよ日向君。O☆H A☆N A☆S H Iって言うのはそういうものだから」

「そういうものなのか!？」

全く日向君は理解できていないなあ。しおりんちゃんの言うとおりのO☆H A☆N A☆S H Iって言うのはそういうものであつてるよ?。

相手を縛り付けて至近距離から全力全開で相手に対して最大の攻撃をブチ込むこと

をO☆H A☆N A☆S H Iと言う。

「じゃあ更に売って売上を伸ばそうか！ 生徒会公認だし！」

生徒会公認マークをお店につけると、再び生徒たちが集まってきた。

やっぱりバーベキューは人気だなあ。

ふふ、ふふふ。これで暫くはトルネードの必要も、俺が疲労する必要も無い。

まさにパーフェクト！

「まあこれで食券が増えてトルネードが遅れると、岩沢さんが音楽キチっぷりを発動し始めるんですよ」

みゆきちちゃんの言葉に俺は止まった。

まさか俺はトルネード以上にめんどくさいと言うまさみちゃんの相手をしなくてはならなくなるのではないか？

そしたら——ひさ子ちゃんに押し付けられればいいか。

ひさ子ちゃん優しいから、きつとまさみちゃんに音楽の話振ってくれるよ。

「安心して。犠牲者は既に決まってるから」

「ひさ子さんですわわかります」

日向君が黙祷をし始めていた。一体誰がお亡くなりになったのだろうか？

と言うかここ死んだ世界だからそんなこと意味ないし。

「馬鹿な日向君ワロタ」

「お前に馬鹿とは言われたくない」

「何だつて？ 心の奥深くまで傷つけられた。これは戦うことも辞さぬ」

抱き枕カバーを堂々とペランダに干しておいて、近隣住民からの暖かい視線を受けながらしまふ諸行をさせてやる。

以外と心に来ると思う。

「処す？ 処す？」

「おけ処そう」

しおりんちゃんの言葉に合わせて日向君に対してハートブレイクショットを放った。

いつも真正面から受けているからコピーは完璧だ。

ぐへえと言いながら倒れた日向君を無視して鉄板焼きを続ける。

え？ バーベキューじゃないのかつて？

似たようなもんでしょ。適当だけど。

売り続けているとドンドンと減っていく野菜とお肉。

そろそろ日向君でも捌いてお肉にしようかと考えている頃に、野菜が終了した。

……日向君を肥料にして野菜を作っても出来るまでに時間が———そうか。この世界

で命があるものは生まれないのか。

「野菜終了！ お肉も終了します！」

お店が終了したのを確認してから、俺達はガスを切って店先に集まっている人達をどける。

そして——それをどけた。

中に現れるのはドラムセットとギターとマイク。

スピーカーに繋がれたことを確認してから、俺はマイクに声を向けた。

「初めましての人はこんにちは。初めてじゃない人はこんにちは」

「いや、両方こんにちはじゃね？」

「ガルデモのマネージャーこと多々君です！」

どもどもと手を振ると、割と歓声が聞こえてきた。

むむむ。女子が多いと見た。

「今日は俺達のお店に来てくれてありがとう。そのお礼に——俺達がバンドをさせてもらいます！」

歓声半分どよめき半分つてところかな？

「実はボーカルとリードが別の仕事をしていたので、俺達が代わりにすることになりました。全く新しいバンドだけれど、俺達の歌で満足させてみせる」

俺はそう言うのと、しおりんちゃんとみゆきちちゃんに目を向けた。

頷いて返してくれた二人を見てから、日向君とゆいにやんに目を向ける。

「聞いてください——Crow Song！」

音が鳴り始め、俺は目を閉じる。

あの頃を思い出すんだ。

姉さんが歌ってほしいと言つて、その為だけに努力していたあの時の声を思い出せ。

誰かに伝える——俺の歌を。

「——」

口を開いて出たのは、あの頃の声だった。

「今度一緒にカラオケ行こうね姉さん」

「今ここで歌つてくれてもいいんだよ？」

「まだ歌が上手くなつてないからさ。今度でいいんだよ今度で」

まだ張り上げることが出来るはずだ。

もつと盛り上げることが出来るはずだ。

あの時感じた誰かを楽しませたいと言う思いは、今でもまだ通用するはずだ。

皆が驚いた様に見える。

こんなことも出来るのかと眩きながら俺を見ている。

まだ出したりない。

もつと出せるはずだ。

俺の声は誰かに届ける為だけにある。

俺なんかじゃなくてもつと多くの——大事な人達の為に？

大事な人達って誰だ？ NPCか？

そもそもこの世界にいる俺の大事な人は——誰なんだ？

わかつている。しおりんちゃんだ。

だけどそれ以外にいない。

大事な人は姉さんと蓮花としおりんちゃんだけのはずだ。

それなのにどうしてこんなに、大事でも無い人達に歌を聞いてもらって喜んでいるん

だ？

俺は一体——何なんだ？

歌を終えると同時に俺達へと歓声が来た。

一緒に歌っていたゆいいにやんの歌唱力の高さにも驚かされたし、日向君が予想以上に

上手に弾けていたのでかなり楽しんで歌えた。

なのになんだ？ この違和感は？

まるで強制されたかのようなこの違和感は。

「次行くぞー！」

『うおー！』

それでもその違和感を無視して、俺は歌い続けることにした。

だってそれしか俺は知らないから。

だから不審そうな顔で俺を見ている、しおりんちゃんには気がつかなかった。

013 《Admission》

ライブを終えた俺は一人学校の屋上でコーラを飲んでいた。

冷えた空気が非常に肌に刺さるけれど、今はそれすら気にならなかった。

歌っている時に感じたあの違和感。

無理矢理楽しくさせられた様なあの感覚。

——可能性はあると思っていた。

「この世界に神はいる……か」

俺でも理解できる。この世界には生前酷い思いをした人達が来ていて、その思いを精算できるような幸福感を掴むことができる様にする為の場所。

要するに未練を叶えて次の一步を踏み出す為の場所だ。

そして俺は前者——生前酷い思いをしたと言うことでここに来た。

だが俺はこの世界で未練を叶えることができない。

だったら、別のことで満足させてしまえばいい。

別のことで未練を叶えたことにしてしまえばいい。

「そういうこと、だよなあ……」

途端にこの恋心も実は植え付けられたものでないのかと思ってしまう。だけれどもそれはすぐに否定できた。

彼女がもし生前に会っていたとしても、俺は彼女のことを好きになり一緒にいたいと思っただけから。

けれどあの、ライブをする幸福感を植えつけられたのは嫌だった。

俺の声は大切な人の為だけにある。

それを利用されたと言う可能性の高さに、やはり神と言うのはウザイだけだと確信する。

この気持ちは神如きがどうにかしていいものじゃない。

この気持ちは神程度が触れていい話じゃない。

それに触れるどころか利用までしようものなら、この世界全てを破壊してでも殺してやる。

神。お前を殺すことも俺の復讐なんだ。

「タツ君」

唐突に声をかけられた俺は、屋上への扉の方を見る。

そこには真面目な顔をして立っているしおりんちゃんの姿があった。

「やあしおりんちゃん。どうかした——」

ズンズンと歩いてきたしおりんちゃんは、いきなり俺を抱きしめた。

「ど、どうしたのしおりんちゃん？　なんか怖いことでもあったの？」

「——一人で抱え込まないでよタツ君。二人じゃないとダイジョーブじゃないでしょ？」

気づかれていたんだと言う事実には驚愕せず、逆に納得してしまふ。

しおりんちゃんなら絶対に俺のことに気がつくんだろうね。

「ごめんね。ちよつと困っちゃった」

「何が、あったの？」

しおりんちゃんの言葉に俺は全てを話した。

バンドで知らない幸福感を感じたこと。

神によって植え付けられた感情を持っているかもしれないこと。

それが苦しくて堪らなくて、ライブを自分で楽しむことができなかつたこと。

「それは……」

「うん。ありえない話かもしれない。この世界で単純に俺が新たに手に入れた願いだったのかもしれない。でもそんなはずは無いんだ。俺の歌は、大事な人に聞いてもらいたい歌だから」

まあその一人が今日の前にいるんですけどね。

大好きな人が目の前にいるんですけどね？

本当の歌を聴かせたい人が目の前にいるんですけどね？

「大事な人かあ……」

そう呟き直したしおりんちゃんを一瞥して、ああやつぱり自分はこの子のことが好きだと確信する。

この気持ちだけは嘘偽りない自分の本心だと。

絶対に裏切ることのない、心から思っている本心だと。

「ねえしおりんちゃん」

「ん？ どうしたのタツ君？」

「好きだ」

いつの間にか俺の口からはその言葉が出てきていた。

しおりんちゃんも驚いた様に俺の方を見ている。

いきなり告白すれば誰でも驚く。

実際告白している俺自身だって、告白したことに驚いているんだから。

「そっか。そうだったんだね」

「俺と付き合って欲しいんだ。俺が、この世界から消えることが出来るまで」

「これはエゴとも言える。」

自分が消えるまで——死ぬまで一緒にいて欲しい。

そんなエゴをしおりんちゃんに押し付けている。

「ふふふ」

だけどしおりんちゃんは、答えてくれた。

あまりにもあつさりとオツケーされたことに驚く俺だけれど、しおりんちゃんは夕日を横に受けながらも笑っていた。

その姿はとてつもなく可愛くて——美しかった。

「あたしだってタツ君のこと好きだったからね」

「えっ。マジっすか」

全然気が付いてなかったわけじゃないけれど殆ど気がつかなかったです。

人生わからんなあ……。もう死んでるから人死？

「気がついて無かったでしょ。タツ君は自分が好意向けるのは得意だけど自分への好意はあんま気がつかないタイプだからね」

「いやどうしてそこまで俺のタイプを知っているのか激しく聞きたいです」

俺はそんなにわかりやすい性格をしてないゾ☆

嘘ですすみません。わかりやすいですね。

「そんなのあたしとタツ君だから決まってるぜい！」

「オーケー。会話をしよう。でも大体のことは察した」

話すつもりは無いことを察した。

俺の頭の片隅からラーメンライスが迸るぜい！

このネタは多分しおりんちゃんでもわからないと思うけれどね。

「じゃあ付き合うって方針でよろ」

「こつちこつちよろ」

あまりにも簡単に告白が成功してしまい、俺はどうするべきなのか迷い始めてきた。

ふむ。現実かどうか確かめる為に一回飛び降りるのもいいかもしれない。

そうだ。現実かどうか確かめるにはそれが一番いい。

「ちよつと現実かどうか確かめる為に飛び降りてみるわ」

「ちよつと待つてタツ君！ 現実だから！ 現実だからね!？」

「飛び降りればわかる」

「死ぬだけだよ！ 死んで蘇つてまた告白するだけだろ！」

「ああ聖母しおりんちゃんよ。私を救い給え」

「今から救つてあげるからちよつと待つて！」

そんなコントをしていたらふといつもの勘が冴えてきたので、俺は飛び降りるのをやめてキリツとした視線でしおりんちゃんを見た。

ああ、そう言えばこんな傍から見れば面白いイベント逃すわけないよな。

「な、何かなタツ君」

「——この中に何人か俺達のことを見張っている人達がいる！」

俺が大声で叫ぶと、ガタンと言う物音が聞こえてきた。

心を研ぎ澄ませ。

思いを馳せろ。

俺ならば出来るはずだ。

俺はFive Sevenを抜くと、物音のした所を撃ち抜いた。

パンと言う軽い音と共に飛んでいった銃弾は——何かを貫いた。

いや、何かは俺でも理解している。

ゆっくりと倒れてきた人影を見て、俺は小さく笑みを浮かべた。

倒れている日向君は——股間を押さえたまま死んでいた。

「な、なんて恐ろしい一撃だ……」

「見てないのに股間を撃ち抜くとか怖すぎるよ！」

「絶望のcarnival……」

「まさに男を奪う一撃だ」

「ふん。軟弱なっ。はう!？」

「何故ッ、私まで……」

面倒なので野田君の股間を撃ち抜いたら、その後ろにいた高松君の股間まで撃ち抜いてしまった。

「ごめん高松君。今度麻婆豆腐を無理矢理口の中に突っ込んであげるから許してね。」

「ふう。またつまらぬものを撃ってしまった」

「つまらぬって言うより粗末なモノね」

「ゆりちゃん酷い」

現れたゆりちゃんは凄まじい事を言っていた。

見たことあんのかよコラー！ 女子に粗末なモノって言われた時の苦しみ知ってる

かコラー！

ちなみに俺は言われたことは無い。

凄く……大きいです……って男子に言われた。

男子に言われたって嬉しくねえよクソが！ てめえが短小だったただけだろうがこの
包茎野郎！

……俺も半包茎だから人のこと言えないんだけどさあ……。

「えつと……ごめんねしおりん」

「全部見させてもらったぜ馬鹿二人」

「ひゆうー！ これでまたいい歌が書ける気がするぜ」

「ほ、本物の岩沢さんが前に出てくるなんて！ 後でサインくださいー！」

「ああいいぜ」

若干一名違う奴が混ざってるし別のことをしているが、そこには紛う事なきガルデモのメンバーがいた。

こりや厄介な相手に見つかっちゃったなあ。

いつも好きだつて叫んでいる相手が告白しているシーンなんて、この子達から見ればどう見えているんだろう？

「ひさ子ちゃんがさつき新しい曲を作りたんだけど、どういう風にすればいいのかわからないんだつて言つてたから後で教えてあげてねまさみちゃん」

「わかった」

「多々てめえー！」

襲いかかつてきそうになっているひさ子ちゃんを藤巻君達が抑えていた。

いいぞ！ そのまま胸を揉め！

あ、藤巻君の頭にひさ子ちゃんの指がめり込んだ。ご愁傷様です。

え？ 俺のせいじゃないかって？

違う違う。合法的にボディタッチをした藤巻君が悪い。

「それにしても、やはり消えなかったわね。キスでもすれば消えるんじゃないかしら？」

「あの一、ゆりちゃん？ 確か俺達は消えない為にここにいる気がするけれど？」

「ええ。だけどリア充は別よ。失せなさい」

「酷い!？」

「こんなのリア充差別だ！ 警察に訴えてやる！」

男と女のすることをしてないんだからカップルとは言い難いぞ！

でもそんなことできないから俺達は今のままでカップルを名乗ってやろう。

しょうがないんだ。へタレじゃない。

「でもまあおめでとう」

拍手をしないでください。

俺はシンジ君じゃない！

逃げちゃダメだとか呟き続けてる人じゃないからね!?

しおりんちゃんの隣でシコシコして僕は最低だとか言わないからね!?

別に何をシコシコするかは言っていないからダイジョーブ。

アウト判定はしおりんちゃんがするけれど聞いてないから更にダイジョーブ。

「この世界で何気に初めてのカップルじゃないかしら？」

「別に過去にいてもおかしくないと思うけれどね」

そして消えていった。俺という存在は多分非常に特別だから。

ふと思う。もしもその人が残っていたのならと。

片方だけが消えてしまったのだとしたら。

その人は消えることが出来たのだろうか。

そんなありえないことを考えながらも——しおりんちゃんと一緒にゆりちゃん達の方へと走り出した。

S I D E : ???

「愛が、生まれましたか」

だけれどこれは何なのでしょう？

愛が生まれたというのに、一方通行の愛だ。

愛してほしいと思っていない愛がある。

愛が生まれたら影を使い世界のリセットをする様にプログラムされています。

ですがこれは、愛が生まれたと言えるのでしょうか？

まだ愛は生まれておらず、愛が生まれる直前だと言うべきなのでしょうか？

愛とは互いに愛し、受け入れることだとプログラムされています。

彼女の愛を受け入れ、自分も愛を与える。

彼氏の愛を受け入れ、自分も愛を与える。
だというのに、彼女の愛を受け入れない。

自分の愛だけを無意識に一方的にぶつけている。

彼女の方は愛が生まれていると言って差し支えないでしょう。
わからない。

理解不能。

彼が何を思っているのかは知りませんが――。

そこで打つ手が止まった。

何かがここに近づいてくる？

何かが起きようとしている？

「――ストツプです」

その人物が誰かはわからなかった。

仮面で顔を隠した人物が、そこには立っていた。

「――貴方の決断は間違いではありません」

愛が生まれていると言うことを、彼女は知っている。

「――だが今はそれを起こすべき時ではありません」

「それは出来ません。私はプログラムですから」

だが自分の腕は動かなかった。

まるで汚染されていくかのように、私の思考回路は彼女に浸かって行く。

一体彼女は何者なのだろうと、聞くことは出来なかった。

その前に私のしようとしていたANGELPLAYERの使用権は封印されてしまったから。

いつまでもいつまでも落ちていく意識の中で、最後に彼女の髪が見えた。白く、銀色に光り輝いている髪が。

014 《Your Name》

……クリスマス。

それは赤い服を着たサンタクロースが、子供達に玩具を配る日。

もしくは真つ赤なお鼻のトナカイが唯一活躍できる日。

もしくは聖なる夜。

もしくは性なる夜。

恋人同士がサンタクロースに玩具を貰える子供を欲しがって夜遅くまで喘ぐ日。

「——と言うわけでクリスマス何だよしおりんちゃん」

「下ネタやめろ」

思い切りハートブレイクショットを放たれた。

くつ。この程度じゃ俺の愛は止まらない！

「子作りしようよ子作り。もしくははセ○クス」

「女の子に対して何て言葉遣いをするんだいたびた君」

「たびた君って語呂悪くない？」

「……そだね」

と言いつつも一緒に手を繋ぎながら歩いている今日この頃。

この世界の冬は雪も降るらしく、今日は珍しく雪が降っていた。

一つの長いマフラーを二人で巻いて、ヌクヌクとしながら互いに手を繋いでいない方だけ手袋をつけている。

だってそうしないと、手を繋ぐ時に相手の温もりがわからないでしょ？

「……雪だね」

「そだね」

こんな雪の日はきつとゆりちゃん辺りが遊びたいって言いそうだなあと思っていると、しおりんちゃんが俺の手を強く握り締めた。

「今他の女の子のこと考えてたでしょ」

「ごめんごめん。でも、ゆりちゃんが何かしたいって言いそうだなあって」

いつもはここまでくつついてはいないけれど、今日はみゆきちゃんに恋人の日だからゆつくり二人で過ごしてくださって言われてしまったのです。

みゆきちゃんはマジ天使。

「今度は誰のこと考えてたの？」

「みゆきちゃんはマジ天使」

「ちなみにあたしは？」

「俺の嫁」

もうと答えたしおりんちゃんの姿が超可愛い。

雪の降る道を歩きながら、俺達は学校を目指していた。

学校の中には暖房が完備されているので、少しでもあったかい所に行こうと思ったんだ。

「雪って、みゆきちの名前もみゆきでしょ？」

「そう言えばそうだね。美しい雪って書くのかな？」

「それとも魅せてくれる雪とか？」

二人でみゆきちちゃんの名前を考え合ってクスリと笑い合う。

一緒にいられるだけで、こんなにも安心できる人はそこまでいない。

幸せだなあとと思う反面、それでも満足できない俺がいた。

やりたいと言う思いだけではなく、あいつらを殺したいと言う願いも。

でも今はそれを少しの間だけでいいから忘れて、一緒にいるこの時間を楽しみたい。

「白。タツ君の髪の色と同じだね」

「そう言えばそうだったね」

俺の髪の色も白色。強いて言うならば銀だけれど、雪の振った場所を銀世界と呼ぶくらいだから強ち間違いでもない。

白と銀は多分、紙一重だから。

「タツ君は白色好き？」

「白かあ……。白は好きだよ？ 何色にも染められる色。きつと心が白色の人は、何者にもなれる人だね」

「ならタツ君は金色だね」

笑いながら言ったしおりんちゃんの言葉に、何故だか疑問に思う。

「元々は白色だったけど、あたしの金色に塗りつぶされましたってね」

「他の人を好きになんてなりませんからダイジョーブ」

他の色に塗りつぶされたりしません。

だって俺はしおりんちゃん一筋ですから。

そんな他愛ない会話をしながら校舎に着くと、空き教室を見つけて中に入る。

暖房を付けてからマフラーを取ると、あつと寂しげな顔をしおりんちゃんが浮かべていた。

——そんな切なそうな顔されたら俺だって困っちゃうよ！

マフラーを畳んで置いてから、俺は厚着を脱いで開放的になり机の上に座った。

外は更に雪が積もって白く染まっている。

「うわあ！ こんなに雪降ったの初めてだよ」

「そなの？」

「まあね。昔からいかなかったタツ君は知らないでしょう？」

ふふんと胸を張って言ったので、俺はしおりんちゃんの胸を凝視した。次の瞬間俺の目に指が突き刺さったけど。

「目がああ！ 目があああ！」

「ムスカ大佐は落ちていったよ」

「下界に？ つまりここは天上と」

「落ちたら下にはきつと地獄か現世があるね」

有り得ない話じゃないかな。

実はここは天国で、この下に地獄がある。

その中間には俺達が生きていた現世がある。

「確かキリスト教の考えだっけ？」

「そんな感じだった気がする」

まあ興味のないことなんてそうそう覚えてないよね。

俺だって最初の頃のことを殆ど忘れちゃってるけれど、しおりんちゃんとの思い出は全部事細かに覚えている。

永遠に忘れることは無いと思う。

例え俺が、消えて再び蘇ったとしても。

「ねえサンタクローズって、本当にいるのかな？」

クリスマスに欠かせない存在とも言えるサンタクローズ

イエス・キリストの誕生日に何で来るんだらう？

まあ俺の所に来たのはほんの数回で、正体も知ってるんだけどね。

「サンタクローズはトナカイじゃなくて、最近バイクに乗ってるしね」

「オーストラリアではサーフィンしてるんですよ？」

「サンタってアグレッシブだなあ」

本人が目の前にいたら絶対に違うと言いたいそうだけれど、いなければそれまでなのだよ。

つまり俺達の意見がそのまま俺達のサンタ像になるってこと。

「実はサンタクローズって女の子だったりするのかな？」

「俺はしおりんちゃんがミニスカサンタコスをしてくれると信じていた」

「だが残念。現実残酷である」

項垂れた俺を見て、しおりんちゃんがクスクスと笑っていた。

「どうやら本当は持つてるらしい。」

「——ねえタツ君。この時位はしおりんって呼んでみて？」

その上目遣いに俺の心は打ち抜かれた。

いつもハートブレイクシヨットを喰らってるけれど。

「……し、しおり」

恥ずかしかつたので顔を赤くしながらそう言うと、しおりは俺の方を見て顔を赤くしていた。

「や、やっぱり照れるね」

「お、おう」

……。

なんだこの沈黙は。

いつも煩いコンビとか、迷惑コンビとか、ネタの塊とか言われている俺達が喋れないだど!?

まあ処女ビッチと経験豊富チエリーなんてそんなもんでしょ。

いつもは話すくせに、大体二人つきりになると話せなくなっちゃうものなの!

俺達は悪くない!

「ねえタツ君。あたしいつも思うんだ」

「何を?」

「この世界の何処かに神がいて、いつもあたし達を見てる。それでこの感情も実は神に

刷り込まれてしまったものじゃないかって」

「それは——」

否定は出来なかった。

古来から神って言う存在は全知全能として崇められてきた。

その神が気まぐれで感情を動かしていたら。

気まぐれで人の行動を決めていたら。

「でもね、最近は違うの。昔は神なんか刷り込まれた感情なんてやってられるかと思つてたけれど、今は例え刷り込まれていてもそれはあたし。だつてあたしはもし別の状況でも、刷り込まれないとしても、絶対にまたタツ君のことを好きになるつて確信してるから」

俺の心臓がとくと高まった。

「タツ君のことが好きつて気持ちには、永久永遠。世界の誰がどう変わろうとも変わらな
い」

「——俺もだよしおり」

今度は普通に名前前で呼ぶことができた。

「世界がどれだけ俺に厳しくても、どんなに俺達の仲を引き裂こうとしても俺は絶対に君を愛し続ける。それが雨野多々と言う人物だからね」

雨野多々は関根しおりを愛する為にここにいる。

それを堂々と胸を張って言える。

勿論それ以外の理由もあるけれど、今の大きな理由はそれだ。

「あたしもそう。タツ君がいるからこそあたしはここにいられる」

誰が何を言おうとも、この愛の形は変わらない。

互いに大好きで、でもそれ以外の苦しい思いを抱えている。

一人じゃ怖くても、二人ならダイジョーブ。

俺もしおりもまだここから消えられる位に満足はしていないけれど、いつかそれが来る

ことを願っている。

おかしいかな？ 死んだ世界戦線のメンバーなのに消えることを望むなんて。

でも別に消えたいっていうのは、死んだ世界戦線を抜けたって思いじゃない。

俺の大切な人達がまだ残ってるし、そんな状態で消えるわけには行かない。

まだ復讐を遂げていないのに、消えるわけには行かない。

かつてしおりが俺に伝えてくれた消える理由。

——俺が消えることが出来ること。

それがしおりの未練であり、俺の未練。

俺はいつの間にか、四つの未練を背負ってしまったんだ。

「……でも悪くない」

「うん？ どうかしたの？」

しおりが首を傾げてきたので、何でもないと頭を撫でた。

猫の様に目を細めるしおりを見つつ、やっぱり悪くないと確信した。

これは俺の心にある背負うべきものだ。

人間として当然の、背負うべきもの。

大切な人を守りたいのなら、俺が守るのは当然だ。

その未練を叶えてやるのも、当然なんだ。

「しおりは可愛いなあって思ったただだよ」

「タツ君はいつも誤魔化す時にそう言うよね。まあ悪くないけど」

二人してクスクスと笑う。

やっぱりこんな関係が悪いはずがない。

だってこんなにも楽しくて、嬉しいことは今まででも珍しいくらいだから。

「サンタクローズなあたしを見てみたい？」

「それは勿論」

「じゃあ反対側向いててね」

「ここで着替えるんですか!?」 と言う言葉言うのはやめて、目を閉じて後ろを向く。

「よいしょつと」

ふわりとスカートを脱ぐ音が聞こえて、俺の心臓が高まるのを感じた。

静まれ俺の煩惱！ 今暴走すれば俺はしおりと離れなければならなくなるんだぞ！

そう思うと落ち着いてきた時に、今度はスカートを履く音が聞こえてきた。

お願いだ止まってくれ俺の煩惱！ お前は世界を救うって決めただろ!? ナンバー

ワンになるって決めたんだろ!?

だったら静かにしてくれお願いだから。いや、お願いしますから！

「で、出来たよ」

緊張した声で言ったしおりの方を振り返って——煩惱が再びやってきた。はあいつ

て。

フリルのついたミニスカート。

赤い色の少し短いブーツ。

肩を露出している半袖の赤い服。

お馴染みのサンタ帽。

そして肘近くまである白い手袋。

煩惱さん煩惱さん。俺は襲いかかっても良いのでしょうか？

ダメですね。わかります。ですが理性さんが仕事をしてくれないのですが!?

「ど、どうかな？ 手芸部の人達が作ってくれたんだけど……」

「やっぱりしおりは俺の嫁」

堂々と宣言させてもらった。

こんな耐えられる訳無いだろう!?

俺の股間の残量値がマツハだよ！ ギンギンだよ！

「真顔でそんな恥ずかしいこと言わないでよ」

「いやだつて真顔にもなるよ。こんな可愛いしおり、いつものしおりの可愛さにプラスしたらもう俺の命が吹っ飛ぶくらいだよ。やべ、消えかけてきた」

「消えるの!？ やっぱり幸せになりすぎちゃった!？」

「ごめん。消えなかったわ」

残念ながらこの状態でヤルまで多分俺の消える可能性は無いです。

まあやったりしたら童貞を卒業することになって俺の夢が叶ってしまうんですけどね。

流星にまだそれは困る。

「もう。驚かせないでよ」

「ごめんごめん。でもしおりが可愛すぎるのが悪いんだよ？ 他の皆が嫉妬する位可愛

いよ。誰にも見せないけどね」

こんな露出が多い格好、俺以外の人が見たらその人の目をくり抜くレベルだよ。
「独占欲が強いんだから」

「しおりだからだよ。手放したくない最愛の人だからね」

ミスカサンのしおりを抱きしめると、とくとくと動いている心臓の感覚がわかった。

とくとくとくん。とくとくとくんと互いに波打つ心臓の音。

死んでいるというのに、生きていと言うことを確認しあう。

「本当に死んでるのかな？　まるで生きているみたいだ」

「生きてたらタツ君の子供を産んであげられるのにな」

結婚式をあげて、新婚旅行に行つて、初夜を過ごして、子供を作つて、子供を産んで、子供を育てて、子供の成長を一緒に見届ける。

そんな世界があつたらいいのに。

「もしも俺の未練が全てなくなつたら、その時に一緒に消えてまた人間になれればいい
さ」

「じゃああたしかタツ君のどちらかが人間じゃなかつたら？」

「二人が人間になれるまでずっと繰り返し返せばいい。何度も何度も、二人で一緒に過ごせるその日まで」

ペロリと抱きしめたまましおりの首筋を舐めると、ひやうと言う声が聞こえた。
意地悪するなと言う目をしていたので、流石に軽く謝る。

でも可愛いよしおり。

「そこにもゆきちも入れてあげないとね」

「三角関係だね。俺を取り合って修羅場になるのかな?」

ふふふと二人で笑い合う。

実際は多分みゆきちゃんも相手がいて、しおりとみゆきちゃんが仲良くして、俺とみゆきちゃんとの夫が仲良くするんだろう。

そしてその子供も仲良くなってくればいいなと思う。

そんな関係。

「ねえタツ君」

「何だい? しおり」

「世界で一番大好き」

「俺もだよ。世界で一番好きだ」

俺はゆっくり体を離してから、再び近づいてしおりと唇を合わせた。

015 《Life Game》

「おいそこのバカツプル」

「酷い言われようを見た」

ゆりちゃんが来て唐突にバカツプルと呼ばれてしまった。

しかしバカツプルと言うのはバカみたいにイチャイチャしているカップルが元だった気がするから、俺達にとっては非常にあっている名前の気がする。

「俺が——」

「あやし達が——」

「バカツプルだ！」

「本当に色々な意味でバカツプルね」

酷い言われようを見た。

これは聖戦を行うことも辞さない。

「取り敢えずバカツプル二人はイチャイチャして過ごしたいだろうけれど、今回のミツシヨンについて話すから作戦本部に來なさい」

「作戦本部と呼ぶとカッコいいけれど実際は校長室な件について」

「ギルティ」

「判決早すぎわろた」

そんなことを言っているとさっさとしないと殺すぞオーラが出てきたので、アラホラサッサと動き出した。

また後ろを向いてミニスカサンタ衣装を脱ぐしおりの音を楽しみつつ、着替えたしおりと一緒に歩き始める。

勿論また一緒にのマフラーを付けるけどね。

外は寒くて辛いです。

ゆりちゃんは先に行ったらしいので、俺達は二人で再び手を繋いで歩き出す。

途中の教室で授業をしているNPCが俺達を見て恨めしそうな顔をしていたが、気にすることはないだろう。

はっはっはっ。そんなにモテたかったらそのNPCみたいな行動をやめるといいよ。

NPCには無理だろうけどなあ！

「タツ君はテンションが高そうだね」

「今日も今日とて平常運転でございまする」

最近の悩みはテンションの上げ下げが凄まじいと言うことです。

昔は上げ下げと聞けばエ○動画かと叫んだものです。

「取り敢えずエロいことを考えているのはわかった」

「セクハラですか？」

「いいえ。通報しますた」

まさかの御用だった。

まあこの世界に警察なんているはずがないので絶対にありえないと言うことはわかるけれど、それでも唐突に彼女に警察に突き出される様な彼氏にはなりたくないのです。

もう遅いって？ 知ってる。

「もう！ エロいことは考えちゃダメ！」

「しおりにえつちいことをしたくなっちゃうよ？」

「……それなら別にいいよ」

まさかのオーケーが出たのでルパンダイブをしようとしたら、ただしと言う声で止められた。

「タツ君が消えることが出来るようになったらね」

「それって永遠にこないってことじゃないですかヤダー」

つまり俺は永遠童貞らしい。

ぐすん。結局俺は夢を叶えられないのかなあ。

「でももしタツ君が凄い頑張ってくれたら、あたしも頑張る」

「よし。トルネードでも来ないかなー」

「タツ君が大量に食券を集めてくれたことで、後二三ヶ月は余裕だね」

あの時の俺エ……！

なんて余計なことをしてくれたんだ！

もしそれが無ければ俺はしおりと一緒にベッドの上にゴアウェイしてたのに。

「また餓死したら怒るよ」

「ははっ。そうしないように頑張ってください」

最近ではしおりの部屋で寝ていても何も言われません。

みゆきちちゃん俺がしおり以外に手を出すことが無いってわかっているし、しおりはしおりで告白する勇氣はあっても寝込みを襲う勇氣なんてないことをわかっている。なので何も言ってきました。

なんだろう？ 一緒に寝ることを許されたのに激しく複雑な心境なんです。それは。

「いつもずっと見張ってるよ」

「しおり……」

『先生ブラックコーヒー買ってきてもいいですか？』

「先生の方も買ってきなさい」

何故か授業中にNPCが揃いも揃ってコーヒーを買いに行くと言う奇行が発生したけれど、俺達はそれを疑問に思うだけだった。

彼らはNPCの中でも奇行種かなにかだったのだろうか？

それなら兵長でも呼んで駆逐してもらわければなるまい。

「じゃあ入ろっか」

合言葉を言つて校長室の中に入ると、うんざりとしたような顔で見られた。

なにその表情。別に興奮しないけれどちよつと心に来る。

「貴方達、その格好は何？」

「デフォルト」

そういうと飽きられてしまったので、マフラーを外して手袋も取った。

二人で一緒に壁に寄りかかりつつ、談笑しているとまさみちゃんが入ってきた。

よつとてを挙げると、よつと返ってきてくれたので俺は少し嬉しくなる。

「しおりしおり」

「どうかしたの？」

「まさみちゃんと音楽以外の意思疎通出来るかもしれない」

「それはきつと、ペンギンが逆立ちしてサーカスの玉を転がす位難しいことだよ？」

「ごめん意味わかんない」

振ったのは俺だったけれど、最近しおりのネタに癖がつきすぎてわからないです。

「あの頃のしおりは円環の理に導かれて消えてしまったのね」

「あたしはもう一人じゃない！」

「死亡フラグ乙」

まあ実際一人じゃなくて二人になったんだけどねと思うと、心がぼかぼかと熱くなる。

そんな俺達を見ながら今いる藤巻君と日向君はゲンナリとしながらブラックコーヒーを飲んでいた。

「なあ藤巻。甘いんだが」

「ああ甘いな。ブラックコーヒーじゃダメだったか」

さっきの方が甘い雰囲気だった気もするけどなあと思いつつ、イチヤイチヤをやめてゆりちゃんの方に集中することにした。

「今回のオペレーションは少数で行うわ」

「と言うと、ここにいる俺にしおりにまきみちゃんに日向君に藤巻君に遊佐ちゃん？」

「ええそうよ。遊佐さんにはオペレーターを任せるから、実質それとあたしを除いた五人ね」

何故だろう？ 嫌な予感がしてきた。

「オペレーション名、サンタクロースデッドエンドを発動するわ」

サンタクロースなのにデッドでエンドとか誰得ですか？

と言うかむしろ恐怖の匂いしか感じないんですが。

恐怖の匂いがプンプンするぜえ！

「このオペレーションを単純に説明すると——戦線のメンバーにプレゼントを配るわ」

『は？』

今ここにいる全員の思考が一つになった。

それに何の意味があるのと。

「この世界にサンタクロースと言う存在はないわ。勿論私達のいたあの世界でもサンタクロースの正体は実は両親と言う素晴らしいネタばらしがあっただけだ、この世界にはまずサンタクロースがいると言う事態が起きるはずがないの。まあサンタクロースが良い子の所にプレゼントを置いていく程度の知識はあるけど」

「そりゃまあ、この世界の生徒には親がそもそもいないからな」

「そこでこの作戦よ」

だから一体何の意味があるのかと聞きたいんだけれど。

プレゼントを配ると神様が出てくるの？

「もし本来ありえないはずのプレゼントが戦線メンバーにだけあつたらどういふ行動に

出ると思う?。」

「そりやまあ、誰かが置いたと思うわけだな」

「なら誰が置いたと思う?。」

それを考えると、確かに出てこない。

「生徒達にとつての親——そう。神よ」

いやないだろと思つたけれど、ここでそれを言つたら殺される確率120%オーバーなので言わないことにした。

触らぬ神に祟りなして奴だ。

「まさかゆりっぺ!」

「ええ。そしてNPCが何故貰えないのか文句を言う為に神の元へ向かうところをついていき、神を見つけ出すのよ!」

いやだからないつてと言おうとしたけれど、皆乗り気なので言うのをやめた。

テンションとノリで生きている俺にとつて、周りのテンションが低いのは辛いのです。

「だがゆりっぺ。プレゼントはどうするんだ?」

「そんなの決まつてるじゃない。私物から出すのよ」

え、そんなの無いんですけど。

いやあるといえればあるけれど。

「と言うのは冗談で、実は前々から色々な部活に声をかけて用意していたわ」

「流石はゆりちゃん」

「ええ。園芸部に釣り部にラジコン部に手芸部に野球部にラグビー部に水泳部。ありとあらゆる部活から色々なものを回収してきたわ」

「それはもらって喜べるのかわからない」

ちなみに水泳部から貰ったのがスク水ならばすぐにでもしおりに着せて眺めます。

異論は一切認めないし妥協もしない。

上方修正は認めよう。

「特にオススメはギルドの作った音楽プレーヤーね。中にはガルデモの曲が入ってるわ」

それを上げるのは恐らくゆいにやんでいいだろう。

いつか戦力になるかもしれないし、いいと思うのですが。

「オペレーションサンタクローズデッドエンドはもう一度夜中に集まって再び会議を開くわ。あたしの部屋に来て頂戴」

「でもゆりっぺ。天使はどうするつもりなんだ？」

「決まってるでしょ？ 天使のところにも置いて、もし生徒達が乗り込まないにしても

天使がお礼を言いに行く程度のこととするわ」

保険よ保険と言っているけれど、実際は普通に貰って普通に喜ぶと思うのは俺だけでしょっか？

とどうかギルドと言う名前を俺は初耳の気がするんですがそれは。

「まあいつか。じゃあまた遊びに行こっか」

「そうだね」

取り敢えず暇になったのでまた遊びに行こうとすると、日向君と藤巻君に止められた。

「ちよつと待ってくれ多々。たしかに何もないかもしれないが、このままだと成功する確率はかなり低い。俺達でもなにかしようぜ？」

要するに他にも遊びたいってことでおけ？

おけおけ。俺に任せんしやい。

「ならゲーム？ 人生ゲームスーパーハードバッドエンドとかあるけど？」

「何だよその激しく不安になるゲーム」

この世界にある人生ゲームがまともであるはずがないじゃないか。

「でも面白そうじゃないか」

「まさみちゃんが音楽以外のことに参加してきただと……!?!」

これは天変地異が起こる前触れかもしれない。

スレを立てるしかないだろうスレを！

ごめんなさい。スレを立てれるパソコンがなかったわ。

「じよあやろう。俺の部屋にあるから」

これから全員で俺の部屋に行くことになった。

「さあ、ゲームを始めよう」

「空白乙。ゲームそこまで強くないくせに」

「日向君嫁が俺に辛く当たってきて辛いです」

「俺は普通に嫁と読んだお前がすげーと思うよ」

しおりは俺の嫁。異論は認めないからなー。

「てかお前達また二人で協力して来るんじやねえのか？」

「悲しいけどこれ、戦争なのよね」

「殺らなきゃ殺られる。それだけだろうが！」

クロト乙。わかってくれる人はいるのだろうか？

「まあ二人が協力するつもりがないことはわかった」

日向君も納得してくれたので、全員の駒を置いてからジャンケンをした。

順番は日向君↓まさみちゃん↓しおり↓藤巻君↓俺だ。

「よーしー」

日向君が元気よくルーレットを回した。

出た数字は6。

「なにになに？ 交通事故で死亡。一回休み……」

「死んだら一回休みとか斬新すぎる」

まさにこの世界の人生ゲームだった。

「俺……交通事故で死んだんだ」

まさかの生前の死因と同じだったことに脱帽です。

もしかしてこの人生ゲーム、俺達の心を抉りに来てるんじゃないだろうか？

「どれどれ」

次はまさみちゃんがルーレットを回した。8だ。

「宝くじが当たる。しかし父親に奪われて+10000円」

なんとというか、人生そのものだな。

なんかまさみちゃんの瞳が遠い目をしている。

と言うか宝くじ取ったくせに10000円残す位の理性はあるんだな。

「よし。あたしの、力を見よー」

しおりが出したのは——1だった。

「流石はしおり！ 俺達の期待を裏切らない！」

「黙れタツ君！」

涙目のしおりカワユス。

とりあえず進んだマスを見て、止まった。

「えっと……生まれつきの事故で次から出た目半分。小数点以下切り上げ」

何と言うか、酷い扱いだった。

初めっから積みゲーだど!?

「じゃあ次は俺か！」

藤巻君が畏怖累々でルーレットを回した。

出た数字は4。

「友人からお金を借りる。前の人から10000円借りる」

しおりは何もしていないのに搾取されます。

取り敢えずこの人生ゲームえぐ過ぎやしませんかねえ？

「次は俺」

ルーレットを回して出た目は7。

進んだ俺はちよっぴり驚いた。

「ラッキーセブン。セブンイレブンでバイトをして100000円を手に入れる」
普通だった。普通のマスがあるなんて、俺には信じられなかった。

周りも唾然としている。

まさかこんなマスがあるなんてと呟いている。

「取り敢えず、次行こうか」

「まだまだ人生ゲームは終わらない」

016 《Eater》

「地獄に落ちる。全ての財産を失い、一回休み」

「もうやめにしねこのゲーム」

藤巻君の言葉に俺達は頷く。

かれこれ4時間はしているというのにゴールが見えない。

一回休みやスタートに戻るが多すぎるし、取り敢えず金が手に入らないというこれ人生ゲームじゃねえという状態だった。

日向君残金0円。

まさみちゃん借金100000円。

しおり借金6億。

藤巻君借金10000万円

俺残金3000円

まさかの3000円持って優勝と言う悲劇が起きるとは思わなかった。

「取り敢えず……さ。あたし達は選択を間違えたんだよ……」

無駄に借金ばかりあるしおりが天を仰ぎながらそう言った。

その瞳には涙すら見える。

「何がバッドエンドだよ。デッドエンド多すぎだろ」

「これは誰か別の人にプレゼントであげよう」

友達多そうな松下君でいいや。南無阿弥陀仏。

「そもそも俺がやろうとしたのは皆でゲームすることじゃなくて、他にもオペレーションの参考になるものをしてようって話だったんですけど!？」

ノリノリでしていた人が何を言う。

最後に地獄に落ちたくせに。

「うっせ。てめえもやる気満々だっただろうが」

「もう二度としたくないゲームだけどな」

まさみちゃんのいう通りです。

二度としたくないのです。なのです。

「じゃあ何して遊ぶ？」

「取り敢えず飯に行こうぜ」

よくよく考えたら既に昼飯の時間を過ぎていた。

朝早く起きて9時くらいからしてたのにご飯を食べるのも忘れるとは、案外面白がついてた証拠かもしれない。

「今私食券持つてないけど」

「ここにあるよ」

俺が天井につけた棚から食券を取り出すと、それを見せる。

「何がいい？」

「俺肉うどん」

「俺はオムライス」

「私はカレーかな」

「あたしチャーシュー丼」

オーケー。お前らがたかる気満々なのは理解した。

「男子2人には麻婆豆腐を贈呈しよう」

「調子乗りました勘弁してください」

はっはっはっ。正義は必ず勝つ！

「まあ普通にあげるよ」

「と言うよりなんでそんなに食券持つてんだ？」

日向君が純粹な疑問を俺にぶつけてきた。

「最近クラスの子からファンレターと共に届きます。バスケットかバンドとかで活躍したから俺モテモテっすわー」

「実際は生徒会に大量の麻婆豆腐の食券をあげたから貰ってるだけだよ」

しおりがネタバラシをしてくれたので、仕方なく真実を伝えることにした。

「あの後天使ちゃんが、貰ってばかりでは悪いわとか言つて沢山の食券をくれました。あの子いい子」

「それゆりっぺに怒られるんじゃないか?」

「大丈夫だよ藤巻君。そしたら口の中に麻婆豆腐ぶち込むから」

「流石外道。容赦ないぜ」

日向君を掴んで窓を開けて窓の外へシユート!

超エキサイティング!

「人のことを外道呼ばわりとはなんてことを」

「今みたいなことするからだよ」

まさみちゃんに注意されてしまった。

音楽キチな貴方はどこへ行った?

ギー太と結婚すると豪語していたあの頃の貴方はどこに行つたんだ!?

「取り敢えず昼飯行こっか」

俺達は食堂に向かうことにした。

日向君? 知らない子ですね。

「やっぱり今日は豚骨ラーメンにしよう」

食券を決めた俺はおばちゃんに告げた。

「おばちゃん——男盛りハイパーで」

「——ふっ。腹の貯蔵は充分かい？」

最近食堂のおばちゃんがNPCに見えない件について。

「何だ男盛りハイパーって……」

藤巻君が聞いてきたけど、見てればわかると告げた。

そして現れたのは巨大なラーメン。

器の大きさでも通常の2倍以上。

まさに巨大。

「こんなメニユーがあつたなんて知らなかつたぜ……。多々一体どうやってこのメ

ニユーを!？」

「天使ちゃんに教えてもらった」

俺はその巨大ラーメンを持って歩き出す。

そしてまさみちゃん達が来てから、手を合わせた。

『いただきます』

麺をすすり、やっぱり美味しいなと思いつつどんどん腹の中に納めていく。

麺2kgにチャーシュー8枚。味玉3個に野菜が塔を作り上げているこのラーメン。食べられるものは0と言うその歴史を今俺が塗り替える！

「す、すげえ！ どんどん麺が減ってやがる！」

「まるで吸引力の変わらなただ一つの掃除機みたいだ」

「岩沢さんまでネタに走ってきた!? これは負けてられないぜい！」

「関根を止めてくれ！」

藤巻君がいろいろと苦労していた。

ラーメンは既に半分程度にまで減っていた。

実はまだまだ余裕です。

食べ放題で食いつないでいた俺にとって、この程度は造作もないのです。

飯屋キラーと呼ばれた俺の実力を見るがいい！

「なんか……食欲がなくなってくる光景だよな」

「そりゃ、これだけ食べてるところを見てたら胸焼けしてきますよ」

「ふむ……いいインスピレーションが生まれそうだ」

いつの間にかまさみちゃんが音楽キチに戻っていた。

と言うよりも現実逃避しているように見れるのは俺だけだろうか？

「ふう。ご馳走様でした」

「あの量をたつた数分でクリアだろ!？」

「タツ君実は只者じゃない!？」

「凄いな多々」

みんなに褒められて嬉しいです。

スープを飲んでいると、皆も食べ終わったようなので一緒に食器を持っておばちゃんに食器を返した。

「まだまだだね」

「次こそは必ず勝つよ。あんたの名前、それを告げればその量を出してあげる」

これは宣戦布告と見た。

次に食へに来る時は容赦しない。

「タツ君よくあんなに食べれるよね」

「生前金がなかったから」

大食いチャレンジは俺にとって救世主だった。

幾つか店が潰れてたけど。

「貴方達。授業中の食堂の利用は禁止よ?」

生徒会長キターー(。▽。)! —

もとい天使ちゃんが現れて藤巻君が迎撃体制を取る。

「ごつめーん。間違えちった」

「そう。でも禁止は禁止よ。反省文を——」

その瞬間俺は食券をばら撒く！

「あー、麻婆豆腐の食券がたくさん落ちちやっただー！ 誰か拾ってくれないかなあ！」
瞬時に集め始めた麻婆豆腐教のシンパである、天使ちゃんを横目にダッシュで逃げ出す。

取り敢えずしおりをお姫様抱っこして、まさみちゃんを背負いながら。

「ひゅうー！ すごい速度だなー！」

「たたた、タツ君!? 恥ずかしいようー！」

「クソツッ！ これがりア充つてことかよー！」

藤巻君が俺に罵声を発しながら一緒に逃走する。

「囹作戦だー！」

「なんだと!?!」

「行け囹ー！」

藤巻君を天使ちゃんの方に蹴り飛ばすと、後で覚えてるよと叫びながら藤巻君は天使に捕まった。

「流石はタツ君。まさにゲスだね」

「まさみちゃん。嫁が俺に敵しい」

「そうだな。バラードはいいな」

「あれ!?! 聞いてない!?!」

聞いてないまさみちゃんはともかく、俺達は走り続けた。

結果的に山の中に来たのだけれど、なんかすごく気持ちの良い場所だった。

「こんなところに住みたいなあ……」

「そうだね」

「こんなに静かなところなら、練習にもせいが出るだろうな」

ちなみに前戯でも精は出ますよと言おうとしたけれど、察したのかしおりがシャドーボクシングをし始めたので言うのはやめた。

「家を作ろう」

「マインクラフトはないよ?」

残念でした。現実です。

「地下を掘ったりしながら色々付け加えて秘密基地を作り上げて、寮じゃなくてそこで生活し始めればよくね?」

「まあできるならいいんじゃないか?」

案外まさみちゃんが乗り気だった。

いや、音楽をする場所が欲しいという気持ちは分からなくないんですけどね？」

「ならゆりちゃんに案は出してみるわ」

採用されるかどうかはわからないけど。

自分の手で何かを作り上げるのは楽しいですから。

「じゃあ戻るか」

ゆつくりと歩き出した俺達は、量の所に血だらけで転がっている日向君を無視して俺

の部屋に入った。

はっ。まさみちゃんとしおりの2人と俺1人!?

これは3Pの予感。

「左手は添えるだけ」

「がはっ!？」

唐突の拳を俺は避けることが出来なかった。

まさみに神速!

遂に彼女はプロボクサーの領域に足を踏み入れたのである!

「次は心臓を打ち抜く」

「すいません。勘弁してください」

死にたくないでござる。絶対に死にたくないでござる！

「それで、どうやってひさ子達にプレゼントを贈るつもりなんだろう？」

「最初から部屋にいるというのもありかと」

むしろ自分がプレゼントとか言って布団の中に全裸リボンで潜り込んでおけば良いのではないでしようか？

赤いリボンがモザイクです☆

「血の海に沈む多々が見えた」

「俺も」

ひさ子ちゃんは初心だからなあ……。Fカップなのに。Fカップなのに！

「なら寝ている間に届けるとか？」

そもそもひさ子ちゃんがいっ寝るかわからないし難しいと思うけどね。

一緒にいつもいるまさみちゃんならわかるんじゃないかな？

「取り敢えずそれじゃない？ まあゆりちゃんのことだからもつとアグレッシブなことをさせてくるかも知れないけど」

と言うか暴れる未来しか見えません。

きつとそうなるのは理解してた。

「アグレッシブなことか……窓に張り付いていけとか？」

「ありそうで怖いわ」

壁に張り付く5人を想像してホラーだなと思いつつ、しおりがまさみちゃんとかかり話していたことに少し膨れていたので、頭を撫でてステイさせる。

「じゃあもしかして、プレゼントに細工するとか!？」

「俺それされたらキレル自信ある」

やらないよねしおり？

ねえ答えてくれない？ 目を逸らすな。

「殴りたいその笑顔」

「へい、ステイステイ。殴っちゃダメだよタツ君」

仕方ない。一度は許してやろう。

元々殴るつもりなんて無かったんだけどネー！

「あんだ達はやっぱり仲いいね」

「そりや嫁と夫の関係もとい、彼女彼氏の関係ですから」

でもまあ最近それ以上の男と女の間係を指摘しているんですけどね。

勿論返答はハートブレイクショットでございませう。

「仲良くしてくれて嬉しいよ。マネージャーとバンドのメンバーが不仲になるとややこしいからね」

「みゆきちちゃんレベルで最近まさみちゃんが天使な気がする」

「それは幻想だよタツ君。あの音楽キチにして音楽のことしか考えていない岩沢さんが、優しくなるわけがない」

まさみちゃんの拳がしおりの腹に直撃していた。

ああ痛そう。きつとひさ子ちゃんの一撃を見続けていたからだろう。

「ぐうっ……我が生涯に一変の悔いなし……!」

「じゃあこの世界にこないだろjk」

「まあ確かにあたしはjkだけどね」

「はっ。何年前のことだか」

2人からの拳が直撃した。

全く。女性に年の話をするところなるのかよ。

「くそっ……」

「でもまあ未練はあるだろうな」

「あたしはタツ君が未練を残していることが未練!」

「俺はまあ色々あるかな」

やっぱりしおりの言葉は胸にしみるなあ。

「さてと、ならあと数時間時間を潰すとしますかいい」

雑談をしていると生き返った日向君が戻ってきて、その後藤巻君も戻った。そして5人で色々と話ながら時間を待った。

017 《Guardian》

「じゃあ始めるわよ」

「ちよーつと待っててくれないかなあゆりちゃん」

唐突に始めようとしたゆりちゃんを止めた。

現在ここは女子寮の屋上。

「言つたでしょ？ 女子は密かに入り込む。男子は頭を撃ち抜いてからプレゼントを置
くつて」

「うん。ゆりちゃんは男子に何か恨みでもあるの？ それは流石に俺でも引くレベルな
んだけど」

流石に可哀想だよゆりちゃん！

でも俺にも銃を向けられたので両手をあげてステイした。

「リーダーの言葉は絶対よ」

「イエッサーー！」

脅されてしまったので、仕方なく俺は狙撃銃を構える。

狙っているのは男子寮。ここから狙うのが一番いいらしい。

「……照準設定完了」

「撃ちなさい」

「了解」

放たれた銃弾は真っ直ぐに飛んで行き、高松君の頭蓋骨を一発で破壊した。

「命中確認。次弾装填」

薬莖を取り出して次の銃弾を込めると、松下君に狙いをつける。

戦線のメンバーの何人かはNPCに部屋を交代してもらって、互いに住んでいるらしい。

高松君の部屋にいた松下君は驚愕して外を見たけれど、それは間違いだよ。

「照準設定完了」

「撃ちなさい」

「了解」

松下君はそのまま窓を開いた状態で銃弾を受けて仰向けに倒れた。

脳天を撃ち抜いたのを見てから、死亡したと理解した。

「た、タツ君がゴルゴ13になってる!？」

「俺の後ろに立つな」

「タツ君の後ろじゃなかったらあたし落ちますから!？」

しおりの声に和みつつも、次の相手である野田君に照準を合わせた。だけれど野田君はある意味一番危険だ。

「野田君はアホだけど反射神経はいいわ。日向君が最初に狙撃し、それを避けて調子に乗っている所を撃ち抜きなさい」

その言葉に了解と二人で答えると、俺は野田君をスコープ越しに見ている。

「……こちらを見えていますか」

「日向君ファイア」

ふっ。見えているぞと言う声が聞こえてきそうな程の自信満々な顔をしていたので、俺は日向君が撃った一秒後に撃った。

一発目をハルバートで弾き飛ばしてカツコつけていた野田君の頭をぶち抜いたのを確認すると、大山君の方は日向君に任せてTKを狙う。

「TK。君の犠牲は忘れないよ」

銃弾はTKを襲い再び頭を撃ち抜いた。

「全弾命中。凄いわね」

「射的ではいつも好きなもの取り放題ですた」

だって射撃得意なんだもん。因みにガンダムของเกมで使っていたのはカラミティです。だって射撃が沢山あるんだもん！ むしろそれ以外いらない！

「大山君も殺害完了ね。じゃあオペレーションスタート！」

ロープを使って屋上から降りると、そのままプレゼントの入った袋を持ってサンタ衣装で男子寮へと突撃する。

男子寮突撃班は俺と日向君と藤巻君だ。

「第一段階チェックオッケー」

「了解」

俺がいつも女子寮に出入りする為の道を使い、男子寮へと入り込んだ。

「部屋内チェック完了」

拳銃を構えたままそう言った俺は、プレゼントを持ってTKの部屋に入る。

そこには怯えている生徒がいたが、もうこの時点でこの作戦はハチャメチャになってると思う。

「脈が無いのを確認した」

それを伝えると、日向君がTKの墓前にプレゼントを置いた。

これはどう考えてもお供え物です。わかります。

「こ、これは君達がしたのかい？」

「安心しろ。演技だ」

俺はそう答えると再び日向君達と共に次の部屋へ向かう。

高松君と松下君が転がっている場所に入り込むと、墓前にプレゼントを二つ置く。
「っ！ 目が覚めそうだ」

高松君が呻き声をあげて目を覚まそうとしたので、眉間に拳銃を押し付けると乾いた音と共に高松君の命を奪う。

——あまりにも慣れすぎている。

俺自身でもそう思っていた。

「おいおいあいつ大丈夫なのか？」

「大丈夫だ。安心しろ」

仲間を殺したと言うのに、俺の心は依然として冷めたままだった。

——何かが欠損している。

「次は野田君か」

野田君の部屋に入ると、プレゼントを机の上に置いて次の部屋に向かう。

生き返るまでのタイムラグは誤差がある。

「最後に大山君」

大山君の部屋にプレゼントを置くと、ミッション完了を理解して俺達は部屋を出て行った。

「なんつーか、さっきのお前おかしくなかったか？」

「うん……。なんか自分の体じゃないみたいだった」

何かが起きている気がする。

その何かがわからないけれど、もしかすると俺は俺自身のことをまだ完全には理解していないのかもしれない。

もしかすると俺は——。

いややめよう。仮定の話を深く考えすぎるのは悪いことだ。

「ごめんね日向君、藤巻君。迷惑かけたね」

「いや別にいいぜ。俺達はお前のことを信頼してるからな」

藤巻君の言葉が胸に染みる。

「ありがとう。じゃあ女子寮の方に——」

パリンと言う音が聞こえた。

ここからするわけが無い。

するとしたら女子寮に決まってる。

「多々——」

「うん行こう！」

俺は窓から飛び降りると近くの木に捕まって降り立つ。

日向君達も俺の真似をしてついてくるのを一瞥しながら、しおりが無事であることを

祈りながら走る。

「しおり……！」

俺はそのまま女子寮のいつものしおりの部屋へと侵入すると、そこにはスヤスヤと眠っているみゆきちちゃんの姿があった。

プレゼントは置いてない。やっぱり何かがあったんだ。

「……ふえ……」

うつすらと目を開いたみゆきちちゃんと視線が合う。

「た、多々君？ どうしてここにいるの？ しおりんは？」

「色々あってね。少し眠ってて」

扉を薄く開くと、ドタバタと廊下を走っていく教師の姿が見えた。

男性教諭が入ってることは、恐らく何かバレたんだろう。

「遊佐さん、何かあったの？」

「関根さんがひさ子さんの部屋に入ろうとしている所を発見されました。既に一時を過ぎており点灯時間も終了なので逃げ出しています」

ちっ。よりもよってしおりが見つかったのか。

「さっきの音は？」

「ゆりっぺさんが注意を逸らすために窓ガラスを割った音です」

余程切羽詰まつてるんだらう。

俺は仕方がないと思いつつ、扉を開いた。

「ハイ教師の皆！ そんなに走つてどこ行くの？」

「タツ君!？」

俺の方を驚いてみているしおり。

もしかして今追いかけられていたところかな？

「おい男子生徒までいるぞ！」

「何人かそつちに向かえ！ 俺達はその女子生徒を——」

「聖なる夜は性なる夜つてね。俺は彼女とイチャラブしに來ただけさ。そこにいる俺の

彼女とね」

俺は堂々とそう告げると、しおりに向けて走り出した。

勿論その間には教師がいる。

俺は教師の前でジャンプして壁を蹴ると、天上を蹴つて一回転しながらしおりの前に

降り立った。

「やあお姫様。迎えに來たよ」

「たたた、タツ君!？」

お姫様を抱き抱えると、俺はしおりに微笑みかける。

スマイルスマイル。

真っ赤になっちゃって可愛いなあ。

まあ俺も真っ赤だろうけど。

「不純異性交遊は禁止だ！」

「知ってるよ。でもね、禁止されているからこそ燃えることもあるんだぜ」と

俺はしおりをお姫様だっこしたまま走り出した。

階段の所までしおりを連れて行くと、しおりを下ろしてあげる。

階段を下に降りていくしおりを一瞥してから、教師達の前に立ちふさがる。

勿論しおりが上がったか下がったかわからないようにしてだ。

「すみませんねゴ布林共。お姫様を守る騎士の役目は俺が引き受けさせてもらうぜ」

「ゴツ……！ 反省室で夜を明かす覚悟は出来ているんだろうなあ……！」

オーケー。あんた達は何も分かっていないんだ。

確かに戦線はあんた達にとって邪魔な存在で、こちらからは手を出してはいけないと言うルールをゆりちゃんが出しているのかもしれない。

今回の行動も俺達の規則違反が悪いのもわかってる。

でもなあ……。

「関係ねえんだよ」

「何?」

「あんたが俺の彼女に手を出そうとして、俺はそれに怒ってる。生徒と教師の関係以前に、男と男の問題だ。その金玉——潰される覚悟は出来てんだろうなあ!」

踏み出す。

今までの何時よりも強く、どの時よりも早く。

あの時には踏み出せなかつた一步を。

目の前で奪われ汚されていく姉さんを救えなかつたあの時にしなかつた一步を、今ここで踏み出す。

あの世界で俺は無力だった。

でもこの世界では抗うことが出来る。

「らあー!」

拳を振るつた。

右拳は教師が腕をクロスして防ごうとしている状態で、弾き飛ばす。

防げると思うなよ俺の怒りを。

見くびるなよ俺の怒りを。

「自分が悪かろうがなんだろうが、自分の女に手を出されて何も出来ない奴はそれ以前の問題だ!」

あの時俺は気が付くことができなかつた。

俺の為に自らを犠牲にしていた蓮花を。

俺は最低だ。

だけど——今は抗わせて欲しい。

この世界でたった一人の大切な人を、守らせて欲しい。

「潰す」

もう一人の教師の顎を右足で思い切り蹴り上げると、回し蹴りを腹に入れる。

その間に先ほど殴り飛ばした奴が俺を抑えにかかるけれど、それを上手投げで放り投げると右足を振り上げた。

「はあー」

振り下ろした右足の踵は教師の金玉に直撃し、ぶちゅつと言う嫌な感覚と共に教師が叫び声をあげた。

手を出してはいけないから、後でゆりちゃんに怒られるだろう。

校則違反を犯したから、後で天使に殺されるだろう。

だが知ったことか。

怒りつて言うのはそういう理性も含めて全部、吹っ飛ばすような大きなものなんだよ。

「お、お前……！ 教師に対して何を!？」

「教師じゃねえ。男と男の喧嘩だ」

俺は思い切り拳を振り上げると、倒れている教師の金玉を殴り潰した。

全てを終えて痙攣している教師達を前にして、俺は息を荒らげてその場に立ち尽くす。

「……貴方は何をしているのかしら？」

そこで現れたのは——天使ちゃん。

既に俺の体は満身創痍。こんな状況じゃあ抵抗することだって出来ない。

「はっ。天使ちゃんにはわからないかもしれないが、男には男のやるべきことがあるんだよ。どれだけ自分が理不尽なことを言っていようと、自分の女を守る為に動く。それが男のやるべきことだ」

「それは校則よりも大事なこと？」

校則よりも大事なこと……か。

「ああそうだよ。世界のルールだ。男は惚れた女を守る。それが世界のルール」
守れなければ、クソ野郎に成り下がるだけのルール。

俺はそれを理解しながらも、天使ちゃんに笑みを浮かべた。

「殺りなよ。俺はそれをされる理由がある」

「……そう」

ハンドソニックと呟いた天使ちゃんの右手に刃が現れ、俺の心臓は一突きで貫かれた。

激痛が体中を走り廻る中で、思う。

これが死ぬって苦しみなのかと。

そして——やっぱり誰かを守るって言うのは気持ちがいいなと思った。

——反省室。

そこは独房の様になっており、普通では出られない様になっていた。

俺はそこに入れられている。

理由は勿論二人の教師の金玉を潰したことだ。

「ははっ。多分この世界初だろうな。金玉潰して反省室送りか」

まあそういうことをしちゃったからしょうがないか。

ネタをしようにも相手がいなければ、俺のネタも通用しない。

ここに来る厨二病副会長——もとい直井君だけが俺の話し相手になってくれる人だ。

「そろそろ僕の小説のデータが入っているものを全て出してもらえるか？」

「ははっ。テラワロス。闇魔界の狩人様はそういうことを言うのですか？」

「……貴様は死にたいようだな」

「もう死んでるでござりますよ、ルシファー・シユヴァリエ殿」

思い切りアイアンクローをされるけれど、ひさ子ちゃんより全然痛くないです。

俺を痛がらせたければその千倍は持って来い！

「ところでだ。お前は奴らの中にいる人物と付き合っているんだらう？ 何故消えない？」

直井君は俺に自分が死んだ人間だと言うことを隠していない。

俺も他の人に言わないけれど、それは直井君がもし死んだ人間であったとしても戦線とは違う理念を持つているからだ。

変に刺激して別の方向に向かせるよりも、俺が教えてもらった作戦通りに動いてもらった方がいざという時に止めやすいしね。

「さあ何でだろうね？ しおりと付き合えたことに幸福感は感じているけれど、きつと満足には程遠いんだよ。多分俺が本当に叶えたい願いを叶えるまでね」

「復讐……か」

「気づく？」

「お前の目を見ていればな。昔の僕によく似ている」

直井君の視線は何か遠いものを見ているようだった。

それを見て、やっぱり直井君も辛い過去があったんだろうなと理解する。何処か達観しているのは、俺という人物がどこかおかしいからだろうか？

「直井君、おっぱいって良いよね」

「ああ。……って違う。貴様は僕に何を問いかけてくる!？」

「やっぱり爆乳もいいと思うんだけど、普通の美乳が一番だと思うんだ」

「何を言っているんだ貴様は」

ため息を吐かれてしまった。

「貧乳が至高に決まっているだろう」

「——ああ?」

俺と直井君の視線がぶつかりあった。

おいこいつ俺に喧嘩売ってきてるぜこんちくしょう。

「おっぱいって言ったらでっかいか普通くらいがちようどいいだろう! 因みにしおり

はどストライク!」

「甘いぞ! 確かに大きな胸には夢と希望が詰まっているかもしれないが、貧乳には夢と希望を与える力がある!」

「てか貧乳の人がこの世界に巨乳になりたかつたのと言って血の涙を流しながら来たら、この世界はどう対応するんだろうか? 説明求む」

二人して黙った。

「消えられないな」

確かに貧乳はステータスで希少価値かもしれないが、どれだけ頑張った所で貧乳は貧乳だ。

巨乳になることは出来ない。

「だからこの世界には巨乳が少ないのかッ！」

「ふん。もしくは、この世界の神が貧乳好きなのかもしれないがな」

こいつ、調子に乗りやがってこんちくしょう……！！

「お前あのFカップ考えてみるよ！ 最高だろうが！」

「なんだと貴様！」

この不毛な争いは、生徒会長が俺達を止めるまで続いた。

俺の反省室入りは延長である。

第3章 《蠢き出す思い》The thought

hat I begin to rise》

018 《Departure》

——目を開いた。

広がっているのは闇夜の空。

外に寝ていたかと考えるが、何も思い出せない。

「()は……どこだ……？」

一応言葉を発してみたが、返答はない。

一体ここはどこなのだろう？

「何も思い出せない」

周りを見回してみたが、記憶に該当するものがない。

と言うよりもそもそも、記憶自体が無い。

「目が覚めた？」

返ってくるはずがないと思っていた返事が返ってきた。

驚いて体を起こすと、そこには銃——確か狙撃銃つてもものに分類されたはず——のものを構えている少女がいた。

「あんな——」

誰だと問いかけようとした時だった。

「ようこそ。死んでたまるか戦線へ」

月が雲で隠れていく中、そう告げた少女は真っ直ぐにスコープを覗き込んでいた。

「唐突だけど、貴方入隊してくれないかしら?」

その意味を問おうとした矢先にそう言われた。

「は? 入隊?」

「ここにいてるってことは、貴方死んだのよ」

「……はあ?」

言っている意味がわからなかった。この少女は何を言っているのだろうか。

「神様転生つてわかる? と言うかそういう小説読んだことはあるかしら?」

「まあ……」

「なら話は早いわ。ここはその神様転生が行われる広い空間の所の様なものよ。貴方は死んだ。そしてここに来た」

何とも分かりやすいようなわかりにくいような例えをされてしまったが、要はこの女

は俺にここが死んだ後の世界だと告げたいのだろう。

「ここは死んだ後の世界。何もしなければ消されるわよ」

消されると言う言葉に、俺は過敏に反応した。

既に記憶が存在しない俺にとって、何もしなければ消されると言う言葉はある意味この記憶が消えている原因かもしれないと思えることだったからだ。

「消されるって、誰に……」

「そりゃ神様でしょうね。こんな死後の世界を作り上げて、勝手に消すことができるのはそのくらいしか思い浮かばないもの」

俺の記憶は神に消された……か。

と言うかそもそも俺は自分が死んでいることさえも認めてはいないんだが。

「じゃあ入隊ってのは何？」

「死んでたまるか戦線によ。まあ部隊名はよく変わるわ。最初は死んだ世界戦線。でも死んだ世界戦線って自分が死んでることを認めたことになるんじゃないかね？　と言うことにより破棄。以降変成を続けてるわ」

まあ部隊名が変わるってことはよくあることじゃないのか？

「今は死んでたまるか戦線。その前は生きた心地がしない戦線。ま完全にネタだったから一日で変わったけど。ちなみに更にその前は俺のハーレム戦線。名付けた奴は捕

まってるわ」

俺のハーレム発言するような奴がいることはわかった。

てか捕まってるってオイ……。

「えーつと……それって本物の銃？」

取り敢えず話を逸らすことにした。

決して捕まった奴の話が気になるけれど聞いたらヤバイ気がするから避けたわけじゃない。

「はあ。ここに来た奴は大抵そういう反応をするのよね。順応性を高めなさい。あるがままを受け止めるの」

「受け止めて……どうすればいいんだよ」

「戦うのよ」

「何と」

「あれよ」

結局この女に流されている気はするが、俺はゆっくりとそつちを見た。

「あれが死んでたまるか戦線の敵——天使よ」

おいおいどうみたって普通の女の子じゃないか。

「貴方今普通の女の子じゃないかって思ったでしょ？」

「あ、ああ」

まさか俺の考えていることが見抜かれているとは思わなかった。

「じゃあ聞くけれど、貴方はRPGに出てくる魔王と小説に出てくる魔王のギャップと
言うものを知っているかしら？」

「あれだろ？ あの、RPGに出てくるのはマジモンの厳つい魔王で、小説だと大体美少女
女って言う……」

「その通りよ。見た目だけで全てを判断すれば命取りになるわ」

確かにそれは言われてみればそうだった。

俺はこの女を見た感じやばそうな女だと判断し、あっちの狙われている女の子の方が
普通なんじゃないかと思った。

だけれどこの女が最初に言っていたことが本当だとすれば、全て理にかなっている。

神の使いと言われている天使が敵なことも理解できるし、別に天使が普通の女の子の
姿をしているても何もおかしくはない。

「でもどうして俺が死んだって言えるんだよ。俺はまずこの世界が死んだ世界だってこ
とが信じられない！」

その言葉に、女は溜息を吐いた。

「貴方には死んだ時の記憶が無いのかしら？」

「……死んだ時どころか何も記憶がない」

「そう。なら逆に聞いわ。ならどうして貴方は今ここに生きていると言えるのかしら？」

それは――。

言葉に詰まった。

もしもここが死後の世界だと仮定すれば、今俺が言おうとしていたここに存在しているからと言うのは死後の世界であつても変わらない。

生きている証と言つて心臓に手を置いたが――心音は聞こえなかった。

心臓が動いていない。

「ここは、死んだ世界なのか？」

自分の心臓に手を置きながらそう言っている俺を見て、女は目を背けていた。

「貴方が心臓が動いていない理由はわからないわ。私の心臓だつて動いている。でも貴方は動いていないのに生きている。それでもわかるでしょ？」

ここが死後の世界つてと言う言葉が、俺の中で重くのしかかっていた。

俺は死んだ。そしてその記憶はどこにも無い。

こんな世界、さっさと抜け出した方がマシだ。

「俺は消えたい」

「はあ？　そこに存在しているとどうなの？」

「ああ消えたいんだ。こんな、いきなり記憶も無しにこんな場所に放り出されて、どうしろって言うんだよ！」

この女に当たっても意味がないとわかつているのに、俺はぶつかってしまった。

これは完全な八つ当たりだと言うのに、女は聞きながらスコープから目を離さない。

「それは貴方が決めることよ。少なくともこの世界に来たつてことは、ロクな生き方をしていないの。ここに来ていいるのは皆そう。理不尽な死によつて青春を謳歌すること無く死んでいった、可哀想な子供達」

銃を握る手が、カタカタと震えていた。

それが怒りからくるものだと言うのは、俺でもすぐにわかった。

「今すぐに消えると言う判断はやめておきなさい。貴方に記憶が無いと言うのなら、私達戦線がそれまで貴方をフォロウするわ。ここに来た時点で貴方は同士なのだからつて、今捕まっているあの子なら言いそうね」

捕まってるって言うのと、俺のハーレムと叫んだ奴か。

だけどここの笑顔を見るからに、捕まったというのは警察じゃなくて天使につてことじゃないだろうか？

「貴方は記憶を取り戻す権利と、それを踏まえたうえで決断する権利がある。記憶を取

り戻すこともせずには逃げるのも、記憶を取り戻してから消えるか留まるかを残るのも貴方次第よ」

俺次第。

確かに、さっきの俺は記憶が無い状態で知らない場所に放り込まれたから、消えると言う一番行きやすい場所に流されていただけだった。

自分で判断するんじゃないやなくて、ただ楽な方へ逃げていただけだった。

もう一度考え直してみれば、どうだろう？

俺は戦線に入ると言うのは関係なく、記憶を取り戻したいと願っている。理不尽な死が、俺に何をもたらしたのかを全て知りたいと思っている。

だとしたらどうすれば最も記憶を取り戻せるか。

どうすれば最も安全で最速の道を通ることができるのか。

答えは既に決まっていた。

「——仮入隊だ」

「なる程。記憶を取り戻すまでは仮入隊して、そこから先はもう一度自分で決めるってことでいいのかしら？」

「それでいい。あんた達がフォローしてくれるんだろ？」

俺は女に意地悪に微笑みかけると、女はそれを一瞥してから笑みを浮かべた。

「歓迎するわ。貴方の名前は思い出せる？」

「うーん……。音、無……」

「下の名前は？」

「悪い。思い出せない」

本当に自分が誰だかわからない状況だけれど、言葉は悪くてもこちらのことを考えてくれているこの女のことには信じてもいいと思った。

「そう。なら音無君ね。私はゆり。死んでたまるか戦線——語呂悪いわね。貴方考えていてちょうだい。この戦線のリーダーよ」

差し出された右手を、俺は握り締めた。

「ちなみにだけど、貴方の死因はテクノにブレイクしたわけではないわよね？」

「ぶはっ!？」

吹き出した。一体何を言っているんだこの女は!？」

「さっき言った捕まった人よ。死因はテクノにブレイクしたの」

「そいつ絶対警察に捕まったただけだろ!？」

今までのいい人っぷりは何処に行ったんだ!？」

「いいえ。天使に捕まってるわ。NPCに手を出してはいけないって言ってたのに、NPCの金玉を潰したのよ」

NPCが何かはわからなかったが、金玉を潰したと言う言葉で内股になった。

金玉を持つているってことは男なんだろう。最悪だ。

「取り敢えず明日には出てくるはずだし、貴方の教育係を任せようかしら？」

「激しく不安な未来しか見えないから天使に消させてもらってもいいか？」

今の所入っているそのいつの情報も、自分のハーレムだと宣言する、テクノにブレイクして死んだ、発言から仲間思いっぽい、金玉を潰した、捕まっているしか無いんだが？
激しく不安な未来しか本当に見えないよ。

「安心しなさい。彼は優秀よ。彼がNPCに手を出したのも、彼女に手を出されそうになつたからよ」

なんとというか、男前な理由で捕まっていた。

だとしてもカオスな評価しかない。

「彼の優しさは戦線の中でもトップクラスよ。ちなみに鬼畜さも戦線トップクラスよ」
「俺やっぱ消えるわ」

絶対にそんな奴と関わりたくない！

だつてそんなのに関わったら完全にこの世界で安心して暮らせなくなるじゃないか
！

と言うか、戦線メンバーと言うのに男はいないのだろうか？

「戦線メンバーに男はいないのか？」

「勿論いるわ。半分以上男子よ」

「……そいつはこれなのか？」

オネエのポーズをすると、それはあつさりと否定された。

何でも女の子ならばすぐに尻を追いかけような奴らしい。

それでいて彼女が傷つくようなことは殆どせず、結局は彼女一筋だからタチが悪いそう
うだ。

「評価の意味がわからん」

「まあ後々色々知る事になるわ。じゃあ改めて、よろしく音無君」

「ああこちらこそ」

ややくそになりながらも、俺はそう答えた。

全ての説明を一通り聴き終えた俺は、一人の女の子と一緒に反省室なる場所に向かっ
ていた。

この金髪の女の子——関根がその多々つて奴の彼女らしい。

満足したら消えてしまうこの世界で、こんな可愛い子と付き合えて満足しないなんて
余程の思いがあるんだろう。

神に抗いたって思いが。

「ふー！ 長かった！ お勤めご苦労様！」

「二度と来ないでください」

「わーってるわーってる。今度また話し合おうぜい」

普通にNPCと会話をしながら現れた銀髪の——男？

いや女の顔をしているが男なのか？ 確かに着ている制服は男性用でべったんこだが、男装をしている女にも見えるぞ？

「——タツ君！」

俺が声をかける前に既に関根が走り出して、多々に抱きついていた。

「バカだよ！ 自分ばかり変なことして！」

「いやあ、ごめんごめん」

ヘラヘラとしながら返す多々と言う男に、俺は違和感を感じていた。

何かが違うと、違和感を感じていた。

「もう……心配したんだからね？」

上目遣いでそう言われている多々はビクンとしてから、下半身から順に関根を離す。

あいつ今のあの瞬間でおったちやがったな。

「でも気持ちよかったよ」

「えっ……。天使に腹を貫かれたのが？」

まさに天然の変態ってことなのか。

取り敢えず俺は日向に言われていた通り、ブラックコーヒーの蓋を開けた。

日向曰く、あいつらの近くにいる時は少なくとも10本はブラックコーヒーが必要らしい。

一応二本は買ってきてあるけど。

「違う違う。俺は——しおりを守れて死ぬことができたあの瞬間が、恋人を守れたと言
う気持ち、気持ちよかったって言ったんだよ」

「もうタツ君ってば……」

俺は一気にブラックコーヒーを一気飲みした。

なんだあれは……!?

どう考えても満足して消えるレベルじゃないのか!? 何であんなことしてるのにな
の二人は消えないんだ!?

「ところでその人は？ まさか婚約者!?! しおりは貴様にはやらんぞ!?!」

「違うよ。新しく入ったニューフェイス!」

「と言うことは新人ってこと？ 俺に新人イジメをしろと？ 仕方ないなあ。金属パツ

トでいい?」

「よくねえよー！」

ついツツコミを入れてしまった瞬間、どこからか取り出した金属バットを落とすと多々は俺に近づいてきた。

「貴方は——ツツコミ属性持ちなんだな」

初めて見せた真面目な雰囲気、ここで真面目な雰囲気を出すのかよと思いつつも頷く。

「そっか……。ならいつも日向君がツツコミのし過ぎで死にそうになってたから自重してたけど、これからは全力全開フルパワーでリリカルマジカルふざけられるね！」

「おーっとタツ君選手！ 相手を縛り付けてから至近距離で砲撃をかます20歳魔法少女の真似をしたー！ 音無選手どう出る!?!」

ああ一瞬で理解した。

019 《First Mission》

軽く拳銃を撃っていたゆりちゃんが、手に持っていたグロック17を渡した。

「はい音無君。初めてでも撃てるわ」

「ダメだよゆりちゃん。そこは初めてだけど優しくしてねッ——」

俺の腹にしおりの拳が突き刺さり、尚且つゆりちゃんがブン投げた拳銃が俺の頭に直撃した。

全く美少女は当たりが辛いぜ。

「足を狙いなさい。取り敢えず追ってこなくなるわ」

「因みにたまに地面を這いつくばりながらのっそのっそと襲いかかってくるぞ☆」

「そんなテケテケみたいなのは起きないわよ」

ちえっ。新人を少しビビらせようとしただけなのに。

「女の子相手にか？ 傷はすぐに癒えるのか？」

「そういうのは経験して覚えていきなさい。私達もそうしてきたんだから」

「なる程。ゆりちゃんは処女卒業後に再び処女膜再せ——」

しおりのハートブレイクショットが炸裂して動けなくなった俺に、ゆりちゃんが発砲

して俺のソファアの真横を撃ち抜いた。

「次言ったら殺す」

「イエスマム」

両手を挙げた俺を見て、音無君が苦笑いをしていた。

するとゆりちゃんも部屋を暗くしてスクリーンを下ろした。

「まず音無君にはいつもやっている簡単な作戦に参加してもらおうわ」

へー、オペレーションやるのって俺的にはサンタクロースデッドエンド以来な気がするなあ。

「作戦名オペレーショントルネード」

俺は飲んでいたコーラを盛大に吹き出した。

怪訝そうな顔で俺を見てくる音無君に対し、俺はそんな音無君にボケをする暇もない。

「え？」

「こいつはでかいのが来たな」

「と、トルネード……」

音無君は別の方向のトルネードを考えているみたいだ。

「生徒から食券を巻き上げる！」

「その巻き上げるかよ！　しかもでかくねえよ！　いじめかよ！　武器や頭数だけ揃えやがってよ！」

野田君が動き出していたので足をかけると、面白い様に転んでハルバートを床に突き刺してそこに刺さって死んでくれた。

あ、殺しちやつた。ごめん野田君。生き返るから許してちよんまげ。

「我ら——」

「はいはい。皆が喋ると面倒だから俺が説明するよ！　簡単さ！　音無君、トルネードと言う意味で文字通り巻き上げるんだ。それが理解できれば、君も一流の戦線メンバー」

わかるかな？　わからないかな？

因みに全ての戦線メンバーが尽く馬鹿だから期待はしていない。

「いい？　貴方は天使の侵入を阻止するバリケード班。作戦ポイントである食堂を取り囲む様に、それぞれ指定のポジションで武装待機。安心しなさい。楽な所に置いてあげるし、今回は陽動部隊所属だけれど実働部隊としても優秀な多々君を置くわ」

チラリとこちらを見てきたので、俺はニヒルに笑って返した。

しかし無視されてしまった。解せぬ。

「意外に優秀な多々君ってよく言われるクマー」

「本当にこいつは大丈夫なのか？」

「ええ。サンタクローズに見せかけてここにいる男子メンバーの殆どにヘッドショットを決める位には戦力になるわ」

ちよつ、ゆりちゃんそれをここでばらさないでくれるかなあ!?

「何!?! あの時俺達を撃っていたのは多々だったのか!?!」

「通りで綺麗にヘッドショットを決めると思いました」

「ふんつ。貴様が敵だったか! 死ねえ!」

生き返った野田君は取り敢えずハルバードを蹴り飛ばして防ぐ。

だけどそのまま突撃しようとして天上に突き刺さったままのハルバードに激突して死亡してしまった野田君を、スルーした俺は悪くない。

「野田が死んだ! この人でなし!」

「いや、俺に言われても……」

音無君に振ったけれどこれはスルーされた。

「でもゆりちゃん、今回俺は実働部隊なの? まあ夜だからいけど」

「朝だと問題あるのか?」

「ふっふっふっ。実は俺は吸血鬼——」

「多々君は昼は紫外線が浴びるからお外きらいって陽動部隊のサポートと引きこもり

をしてるのよ」

なんだよー。最後まで言わせてくれたっていいじゃんかよー。

そう思いつつも話が進まなくなつてゆりちゃんに次こそ撃ち抜かれそうだったのでステイした。

「紫外線って……」

「紫外線はお肌の天敵なんだゾ！」

「お前は女子か！」

「女子力高め系男子です！ 因みに俺のことを否定しようともそれでモテてるから否定できないゾ☆」

「音無君、彼はうざいけれど。本当にうざいけれどやる時はやるタイプよ」

「わかった。本当にうざくて正直居ても居なくても俺の精神衛生上酷く邪魔だけれど、連れて行く」

しおりに抱きついて慰めてもらった。

最近戦線の皆が俺に厳しい件について。

優しいのは藤巻君と日向君だけです。

因みに日向君はホモの疑惑がかかっているので、出来れば藤巻君だけにしてくれるとありがたいのです。

「今回は多々君が実働部隊だから通常通りの普通のライブになるけれど、岩沢さん頼めるかしらっ？」

「ああ。多々が居なくてもできる所を見せてやる」

自信満々なまさみちやんだけど、結局の所頑張るのひさ子ちゃんとしおりとみゆきちやんだから。

あんた結局音楽キチすぎていつもパフォーマンスみたいなの忘れてるだろうが！

因みにみゆきちちゃんはドラムキチである。前声かけられたら思い切り打楽器にされた。

あの時のみゆきちちゃんは阿修羅すら凌駕する存在でした。

「人呼んでみゆきちちゃんスペシャル！」

「そんなもの、あたしの無理でこじ開ける！」

「いや、こじ開けるのは俺の息子なんで」

おーつとここでしおり選手の肝臓打ち！

モロに喰らった多々選手は倒れ込んで腹を抑えた！

「と言うかガチな奴や……。これガチな奴や……」

モロ肝臓打ち完成したしヒットしたせいで、中途半端に痛い痛い言えない位痛くなってる奴や……。

てか最近しおりさんガチじゃないっすかね？

「タツ君、最近ネタと言うよりセクハラが多くなってる気がするけど」

「ははっ。そりやしおりがそれだけ可愛いってことだよ」

あ、皆ブラックコーヒー一気飲みした。

「でも残念でした。あたしはタツ君のことが確かに大好きだけど、そんなにセクハラし
たくないから！」

「女子がセクハラって何？ 詳しく求む」

「ふんっ！」

待てしおり。それはマズ——。

俺はしおりが振るった野田君のハルバードによつて意識を絶たれた。

「あー。頭いてえ」

「自業自得だろ」

第二連絡橋のバリケードをしている俺は、しおりの活躍を見たかつたなと思いつつ F
ive Seven を見る。

何となくだけど、やっぱり愛着が湧いてくるよな。

「やっぱりお前も、神に抗いたくて戦ってるのか？」

「神様なんてどーでもいいよ。俺はただ単に、殺したい奴がいるだけさ」
そう。殺したい奴がいるだけだ。

勿論それ以外にも未練はあるけれど、最もなものはそれだ。

「そう……か。俺には記憶がないからそういうのはまだよくわからない」
「気長に待てばいいさ。それこそ何年でも何十年でも考える時間はある」

本当に、永遠にこの生活が続けばいいのにと何度望んだことか。

本当に……。

「人生つてのはくだらないものだよ」

ポツリと零してしまった言葉に、俺は急いで音無君の方を見る。

驚いた様な顔をしている音無君に「ごめんごめんと」言ってから、俺は空気を感じ取って話すのをやめた。

「多々？」

「やあ天使ちゃんのご登場みたいだね」

俺がそう呟くと、音無君はゆつくりと月明かりで照らされていく連絡橋の先を見た。

天使ちゃんがいるのを見て、すぐに銃を構えた音無君に対して俺は気軽に話しかける。
「お久しぶり天使ちゃん。今日はどんなご要件かな？」

「……貴方は今日はライブに参加しないのね」

「まあそうだね。あ、もしかして俺の歌声を待っててくれたの？ 残念だけど俺の歌は大切な人の為にあるからね」

軽口を叩いているものの、天使ちゃんはゆっくりと歩いている。

「ストツプ。これ以上進むならまた戦わなきゃいけないよ」

「でも貴方達がしていることは校則違反よ。直ちにライブをやめて」

「ノーノーノー。三つのノーでお断りさせて頂きます。彼女達は俺の居場所だ。邪魔なんてさせねーぜ」

カチャリと構えたFiveSeven。だけれども俺の武器はこれだけじゃない。

「——音無撃て！」

パンと言う軽い音と共に音無君の拳銃から放たれた銃弾は天使ちゃんの腹部に命中する。

と言うかあそこは子宮じゃないでしょうか？

「女の子の子宮を狙うとか音無君マジイケメン」

「文句言うな！ 俺だって必死なんだよ！」

「わかってるわかってる」

俺はFiveSevenをしまうと、ナイフを取り出した。

ナイフよりも少し刃が長く小太刀の様なものだ。

「舞おうぜアミーゴ」

「——ガードスキル《ハンドソニック》」

次の瞬間ハンドソニックとナイフが激突する。

真正面からぶつかれば吹き飛ばされること確かな戦いも、戦い方によつては有利に進められる。

ハンドソニックの一撃を避けつつ、俺はナイフを構えて天使ちゃんの体に一太刀入れる。

それを咄嗟の判断で身を引いて最低限の切り傷に抑えた天使ちゃんを見て、俺は素直に感嘆の声を漏らしてしまった。

「すっげえ……」

「ガードスキル《ディレイ》」

瞬間移動の様に次の一太刀を躲した天使ちゃんがハンドソニックを構えて俺の後ろに現れる。

「ただ俺はそれを、転ぶようにして避けた。」

「多々！」

「大丈夫だぜ音無君」

俺はそのまま転がると、立ち上がって天使ちゃんの方を見る。

だがそこには誰も——！

「後ろか！」

ナイフを振るうとハンドソニックと激突して俺の体は弾き飛ばされた。

倒れた状態で天使ちゃんの馬鹿力に抵抗できるわけねえだろ!?

「ちい！」

立ち上がってすぐに連絡橋の端に追いやられた事実につき、俺はナイフを握ったままニヤリと笑った。

「——今だ音無君！」

俺が叫んだ瞬間驚いた様な表情をした天使ちゃんは、弾かれるようにそこから距離を取ると音無君の方を見てハンドソニックを構えた。

「へ？ お、俺？」

しかしそこにいるのは全く状況を理解していない音無君。

だがそれでいい。

俺はその間に立ち上がると、横からFiveSevenで天使ちゃんの心臓を撃ち抜こうとして——止まった。

心臓を撃ち抜こうとした瞬間非常に恐怖した天使ちゃん表情が見えたからだ。

それは大切なものを壊されそうになった女の子の表情で、俺は無意識に銃口を下に向けて両足を一気に撃ち抜いた。

「へへっ、やってやったぜ……」

どうしてと言いたげな天使ちゃんの表情を見て、俺は再びニヤリと笑った。

「俺は女の子には優しいタイプの人間なんだ」

無力化する為撃つとしても、その子が大切にしているものまで壊そうとは思わない。

だから俺は天使ちゃんの心臓を撃ち抜くのはやめた。

そう言えば、音無君って心臓が無かったんじゃないっけ？

心臓がない音無君と、心臓を大切にしようとする天使。まあもしかすると死ぬこと自体を恐れていたのかもしれないけれど。

「気になるなあ」

今度聞いてみようかなと思いつつも、俺は立ち上がって背中に痛みを覚える。

多分天使ちゃんに吹き飛ばされた時に背中を打ったんだらう。

「よし戻るぞ音無君！」

「あ、ああ。いいのか？」

「いいのいいの」

俺は無理矢理音無君の肩を掴んで食堂に向かう。

そろそろトルネードする時間だし、俺的にもこれ以上この空間に居たくはない。

だけど銃声を聞きつけた仲間達が集まってきた。

「おい。天使はどうした」

「倒しちゃったぜ☆ みんな——速さが足りない」

ドヤ顔で言うのと野田君がハルバートを投擲してきたので、俺は音無君を蹴つ飛ばすと同時に避ける。

向こう側へと飛んでいったハルバートは、野田君が走って拾いに行きました。

「多々君天使を倒したって本当？」

「いや、こいつならありえるぜ。流石は鬼畜外道だ」

俺は思い切りナイフを藤巻君に向けて投擲すると、藤巻君の脳天に直撃したナイフはそのまま藤巻君の命を奪った。

「藤巻君今日は夕飯要らないって」

「そう言うと思つたぜ。取り敢えずお疲れ様」

日向君はそう言つて労つてくれた。

ふつつつつ。俺の実力からしてみればこの程度余裕つてことですよ。

上から降ってきた食券を見つ、今日は食堂のおばちゃんに挑戦してやろうと思う。

多々専用盛りの実力、試させてもらおう！

「今日は醤油ラーメンの気分ってことで。後色々拾っておこう」

「一応早くしないとゆりっぺに怒られるぜ？」

「安全な場所って言ったのに狙われたんだから俺が文句を言いたい」

全く困ったリーダー様だぜと思いつつも、手に入れた食券を持って食堂の中に入る。

ライブも終わったから人も減るだろうと思いつつも欠伸をして席を取って待つ。

「今日はどうだったかい音無君」

「記憶に戻るまでの考える時間が、こんなにもハードだとは思わなかった」

「そりや上々。これがハードだと思わなかったらどんな世紀末を生きてたんだろうって

俺は聞きたかったよ」

軽く笑ってみると、音無君も笑って返してくれた。

音無君が笑っている所を俺は見てなかったからね。

記憶が無い状況でこんなところに放り出されたら確かに不安だし、笑うことすらでき

ないのも無理はないのかもしれない。

それでも笑っていた方が、苦しんでいるよりも心は軽くなるだろ？

「お前の彼女、頑張ってるな」

「おう！ 自慢の彼女だぜ」

ベースを弾いているしおりを眺めながら、俺は食券をクルクルと回して笑顔を浮かべる。

今弾いているのはAlchemyだ。

それを聞きつつも俺は音無君に問いかける。

「正当化出来ないかい？」

「えっ？」

納得が行かないって言う顔をしてたからね。

多分俺達が戦っていることを正当化できていないんだろう。

消えないためとは言え、女の子をよってたかって銃撃したりしていることが。

「正当化なんてしなくていいよ。消えない為に、自分が何を出来るのかを考えて行動すれば答えは見えてくるはずだ」

「自分が、何を出来るのか……」

「そう。俺達はこの銃があり、武器があり、戦う術があるから戦っている。もし君が——そうだね。あの天使ちゃんを説得できる程の力があるのなら、それを行使すればいい」

消えたくないならば何かアクションを起こさなければならぬ。

まあ未練も知らない状態ならば何がトリガーとなって消えてしまうかわからない状

況だから、実はあんまり色々なことをしない方がいいんだけどそれは置いておこう。

俺は誰かが消えることに、悪い印象を持つているわけじゃないから。

「さてと、人も少なくなってきたしそろそろ飯を頼みに行くか」

「あんたは——。多々は消えて欲しくない人はいるのか？」

その問いに俺は少し笑みを浮かべた。

消えて欲しくない人は、沢山いるさ。

でも消えて未練を無くしてほしいとも思っている。

「秘密」

だから俺は言葉を濁した。

きつとその答えは、俺と同じ場所に立てる君が気がつくはずだからね。

020 《On Air》

「——第一回死んだ世界戦線ラジオ始めるぞー」

最悪なテンションで音無君が言った。

ここは放送室。因みに外とは既に鍵を閉めて更に物を置いて封鎖しているので、簡単には入ってこれないようになってる。

何故こんなところで死んだ世界戦線ラジオを始めるよとか言ってるんだこいつらはっと思うだろ？

これは次のお話でするオペレーションが関わっているんだけど、まあ置いておこう。

今は要するに罰ゲームでこれから死んだ世界戦線ラジオなるものをやらされることになったとだけ覚えていてくれればいい。

「はあ。このラジオを聞いている人の中に生きている人がいたら、死んだ世界線のメンバーになってください」

「音無君、そんなにテンション低かったら休み時間の間出来ないゾ☆」

「お前がどうしてそんなにノリノリなのか俺にはわけがわからない！」

音無くんは怒られてしまった。

だつてテンション上げないとやっつてられないじゃん。

「一般生徒の皆はどうせ、ああまた馬鹿な連中が馬鹿なことし始めたよ。とか思うだけでしょ？ だけど安心してください！ 本日のゲストは——ガルデモの皆さんです」

この放送室にも聞こえる位の歓声が聞こえてきた。

ガルデモ効果恐ろしや。

「じゃあ一応最初だしね。このラジオの司会はガルデモのマネージャー兼プロデューサーの雨野多々と——」

「一般生徒になれなかつた音無です」

滅茶苦茶テンションが低い音無君にみゆきちゃんやんが愛想笑いを浮かべているのを見ながら、俺はガルデモメンバーにマイクを向けた。

「ガルデモのバンドリーダーで、ボーカルとリズムギターを担当している岩沢だ」

「ガルデモのサブリーダーで、リードギターを担当しているひさ子だ」

「ど、ドラム担当の入江です」

「そしてあたしが——ガンダムだ」

「ちげえだろそのネタやり飽きたわ」

「ちえー。ガルデモのベース担当かつタツ君の愛を受ける担当の関根しおりデース！」

舌打ちが聞こえてきた。おいコラ野郎ども。

「ふっふーん。いいだろ男子共。こちとら俺のハーレムだぞ」

最後まで言わせてもらえなかった。

膝の上に座っているしおりの肘打ちが決まり、俺はノックダウンする。

「と言う訳で、司会の音無君コーナー名をどうぞ！」

「あ、ああ。えっと、最初のコーナーは司会へ質問のコーナーです。……っってお便りなんて来てるのか？」

チラリと俺が見た方向には、どっさりと手紙が来ていた。

戦線メンバー全員にラジオをすることを伝えた結果、最初だから戦線メンバーだけが大量の手紙が来ているのだ。

「最初のお便り。ペンネームひなつち——面倒なんで日向でいいや」

よくねえよと言う叫びが聞こえてきた気がするが、音無君はスルーしていた。

「最近多々君が彼女とイチャイチャし過ぎて困っています。どうかして頂けませんか？」

「あー、無理無理。だって俺としおりは愛で結ばれてるもん」

「ねー」

二人で口を揃えていったら、ブラックコーヒーの売り上げが伸びたらしい。

そう言えばゆりちゃんがブラックコーヒーを売り始めようとか言っていたので、大繁盛してるんじゃないかな？

「酷くウザイので次の質問に行きます」

「ちよつと待って音無君！ それはあまりにも酷いよ！」

「二人で声を揃えて言わないでくれ。俺は日向みたいに二人にツツコミを同時に入れる技術を持ってないんだ」

まあ確かに最近日向君は俺達にとってツツコミを入れるだけの存在に成り下がってるからね。

後は純粹なホモキャラ。

「取り敢えずその質問をしてきたひなつち——面倒だから日向君と呼ぼう」

だからよくねえよと言う叫びが聞こえてきた気がするが、俺はスルーする。

「日向君は実はホモで音無君を狙ってるんだ。だから俺としおりがいい雰囲気を出すと男同士で雰囲気が出せなくなるだろ？ だから俺達にイチャイチャするなって言いたいんだよ」

「今度から日向のこと避けるわ」

無駄に日向君の好感度を避けたところで、次の質問を見る。

「ペンネーム要はアホですねさんからの質問。ガルデモのメンバーと何故そんなに仲良

くなってるんですか？ よかったらその秘訣を教えてください」

多分だけれどこれはゆいじゃんかな？ だとしたら今度からパジャマパーティに招待してあげよう。

「それは勿論ナニをして——」

「「ふん」」

四人からの拳を一齐に受けた俺は少しクールダウンすることにした。

決してマイクを掴もうとした瞬間殺気が向けられるからではない。

マイクは結局まさみちゃんの手に移った。

「多々は私達と一緒に良くパジャマパーティをしているんだ。それも毎日してるから、自然に私達と仲良くなったんだよ」

「それ言ったらアカン奴や！」

しおりが止めにかかったけれど既に遅い。

もう俺が毎日パジャマパーティとして女子寮に侵入していることも、女子寮でいつも夜遅くまで話していることもバレてしまった。

「この子天然なんです！」

「お前いつも女子寮侵入してんのか!？」

「声が出けえよバカ野郎！」

もう完全にアウトだよ。アウト判定乱れ打ちだよこの野郎！

なんでこんな大衆の面前で俺がいつも女子寮言ってることをばらされなきゃならぬんだよ！ 訳分かんねえよ！

何だつてんだよ畜生……。

「もうダメだ……。教師に見張られたら——別に問題ねえな。うん。あれ？ もしかしてバレても問題なかった？」

「タツ君を邪魔する教師つて殆どいないしね」

金玉潰されたことを覚えていないものの、本能的な直感で避けていくらしい。

なにそれこわい。

「次の質問に移ろうぜ」

「じゃあ次の質問。ペンネーム愉快痛快爽快さんからの質問。多々さんはどんなタイプ的女子が好きですか？ 隙はありますか？」

しおりの視線が俺に突き刺さった。

オイコラ。待てその質問。

どう考えても俺としおりの仲を裂きに行こうとしているだろ。

と言うかその質問ゆりちゃんだな？ 俺が苦しんでいるところが愉快痛快爽快つてことだな？

「隙はない。大好きと言うlikeの意味ではガルデモメンバーも戦線の女性陣全員も大好きだけど、愛してると言う意味ではしおり一人だけだ。まあ、昔はもう二人いたんだけどね」

そこら辺は割愛しようよと告げたら、音無君も頷いて最後の質問に移ってくれた。因みにしおりは俺の膝の上で真つ赤になっております。マジカワユス。

「最後の質問。ペンネーム春よ来いさんからの質問。貴方は人間ですか？ なんだこれ」

ドクンと、俺の心臓が飛び跳ねたと思った。

その質問を書いた人物が誰かは分からないけれど、その言葉は俺に深く突き刺さっていた。

貴方は人間ですか？

その問いに応えることが出来ない。

俺は今自分の中で最悪な結論が出ようとしていて――。

「タツ君は人間だよ。音無君は？」

「勿論人間だ。何を聞いてたんだコイツ？」

答えたしおりを見ると、ニツコリと笑っていた。

しおりは俺が何かを考えていることに気がついている。

それが何なのかまで理解しているかどうかはまだわからないが、それでも気がついて
いる状態まで来ていることはわかっていた。

「次のコーナー。シヨートコント……シヨートコント!？」

書かれていた項目を見て音無君が声を上げていた。

あー、シヨートコントかー。

「シヨートコント!？」

何やらせやうとしてんのあのゆりちゃん。ゆりちゃんマジゆりちゃんだわ。

「と、取り敢えず書いてある紙にはガルデモメンバーとコンビを組んでシヨートコント
をしろとしか……」

結局ガルデモメンバーもシヨートコントをさせられることに気がつき、俺は更にその
続きを紙を貸してもらって読む。

「お題は手紙があるからそれを見てやるらしい」

お題と書かれた手紙ケースの中をガサゴソと探ってから一枚取る。

「まずは四人用。出る人物から先に決めよう」

「なら多々、関根、入江、ひさ子でいいんじゃないのか？」

音無君がそう言つてひさ子ちゃんが嫌そうな顔をしたが、俺はそれを無視して紙を読
んだ。

「お題は——警察に捕まった時の反応。三人ボケて」

ふと目を合わせて、ボケる役は俺としおりとみゆきちちゃんになった。

勿論そうなるもツツコミ役はひさ子ちゃんになる。

「シヨートコント、警察と容疑者」

「え、マジでやんのか？ えーつと……お前達を現行犯で逮捕する！」

「「おあご、れんごはためわだんるれなくださねいえ！」」

「全員で一気に言うな！ 誰が何言ってるかわからなくなるだろ！ 取り敢えず一人ず

つ聞く。まずは多々。お前なんて言った」

「俺は悪くねえ！」

「悪いから捕まえてんだよ！ 現行犯って言ってるんだろ！ 現行犯って言うのは、警察

が見て判断して、それから現行犯として逮捕するんだよ！ なんで現行犯で逮捕されて

るのに自分が悪くねえとか言ってるんだよ！」

「お、俺は先生に言われたからやったんだ！ だから俺は悪くねえ！」

「やったのお前ならお前が悪いに決まってるんだろ！ なんでお前は自分が悪くねえとか

言ってるんだよ！ ル〇クか！ ル〇ク・フ〇ン・ファ〇レか！」

「ネタが伝わってた。よかった」

「次関根。なんて言った」

「あんた誰だ!」

「警察だよ! 最初にショートコント、警察と容疑者って言ったよなあ? 現行犯で逮捕するって言ったよなあ? どー考えてもあたしが容疑者じゃないだろ! どう考えても警察だろうが!」

「ふっ。いつからあたしが容疑者だと錯覚していた?」

「なん、だと……。じゃねえから! どう考えてもお前が容疑者だから! しかも現行犯だからな! さつきも言ったけど!」

「もーひさ子先輩、おんなじこと言わないでくださいよー」

「誰のせいと言ってると思ってるんだ! 次入江、なんて言った?」

「ご、ごめんなさい」

「なんかボケろよ! ツツコミ出来ねえよ! なんて多々と関根にこんなにツツコミしたのにその後に普通にしちゃうんだよ!」

「ご、ごめんなさい」

「だからなんかボケてくれよお! あたしがただ単に叫んでるだけみたいじゃん!」

「え、違うんですか?」

「うがあああああああ!」

何気にいい感じにみゆきちちゃんかひさ子ちゃんを壊していた。

と云うかそれで悪意がないからみゆきちちゃんのみゆきちちゃんなんですよね。

「よし、次のお題——」

引いたのは痴漢と云う言葉だった。

「「「お前痴漢役な」」」

「予想外に全員の息が揃っていて、お兄さん脱帽です」

まさに唐突な瞬間だった。

「じゃあ痴漢される役割を関根。それを止める赤司征十郎役を音無がやれば？」

「じゃあやるよ」

「ちよつとツツコミする時間をくれ！」

「ショートコント、痴漢。へいへい。いいケツしてるぜこの女の子」

「ち、痴漢……」

「男子に触られて気絶しちやつてるよこの子。これで触りたい放題だぜ——」

「待て」

「な、なんだてめえは!?!」

「僕の目が欺けるとでも思ったのか？ 君がその子の尻を撫で回していた所は既に見て

るぞ」

「な、なんだこいつは……。凄いプレッシャーだ……。逃げるしか！」

「逃げられるとも思ったのかい？」

「なっ!? 体が転んだ……!?!」

「図が高いな。全てに勝つ僕を抜いて逃げようなど、烏滸がましいにも程がある」

「何者だてめえ……」

「赤司征十郎——。全てに勝つ僕は全てに——つて違う！　なんで俺が赤司征十郎の役をしているんだ！　と云うか誰だ!?!」

「え？　黒子のバスケ知らないの？」

「男子に触れられて気絶する女の子知らないの？」

俺達二人で詰め寄ってみたが、音無君に煩いと言われてしまつてしよぼくれる。

「じゃあ二個目。ショートコント、痴漢。へいへーい。いいケツしてるぜこの女の子」

「や、やめるのじゃ！　ワシは男じゃぞ！」

「こないいいケツしてるのに男なわけあるかよ」

「くっ……。お、お主は——」

「やめるといい」

「て、てめえはティエリア・アーデ!?!」

「君のその行い、万死に値する」

「ちっ。なんでソレスタルビーイングのガンダムマイスターがここに!?!　だが俺がして

いることは男なら当然の行いだ！ 人間のお前ならわかるだろう？ 一緒にやろうぜ？」

「謹んで辞退させてもらおう。俺は、僕は、私は——人間だ」

「畜生意味がわからねえ！ 特に言ってる意味がわからねえ！」

「大丈夫でしたか？」

「あ、ありがとうなのじゃ。ところで——僕と契約して魔法少女になってよ」

「カオス過ぎんだろ！」

ひさ子ちゃんからのツツコミがはいつて止まった。

と言うか何気に音無君ノリノリだったよね。

終わった瞬間やつべ、ノリ過ぎたとか言ってたよね？

「えー。まだ風間風とか不知火風とか八九寺風とか残ってたのに」

「全部それでめえの中の人ネタだろ」

「俺も一応相馬風とか阿良々木風とかチヨロ松風とかリヴァイ風とか残ってたぜ」

「ツツコミのお前が中の人ネタとか使い始めたら收拾がつかなくなるだろうが！ と言

うかもうつかなくなってるし！」

「まあまあ落ち着けよひさ子」

まさみちゃんに諭されてひさ子ちゃんのテンションも下がってきていた。

「あたしも一応真紅風とかアルルウ風とか駿河風とか毒島風とかセルティ風とかあったのを我慢してるんだぜ？ ひさ子も我慢することを覚えろよ」

「お前もかよ！」

「ひさ子はココノエ風とか柏木晴子風とかすもも風とかが似合うんじゃないか？」

「だから中の人ネタやめろよ！ あたし達そういうの言う様にされてるわけじゃないから！ 別に声優ネタしてるわけじゃないから！」

ひさ子ちゃんを適度に疲れさせたので、俺達は少しテンションを抑えてルンルン気分での次のコーナーにすることにしようと思っただけ、昼休み終了のチャイムがなつてしまった。

「そろそろお時間の様ですので、ガルデモのA l c h e m yを聞きながらお別れです。これからも度々行うから、皆楽しみに待ってるよな！ お手紙は俺の机の上まで！」

俺はそう叫ぶと、ふうと溜息を吐いてから音無君を見た。

同時に頷くと、窓から逃げ出した。

そろそろ来るのはわかってるし、ガルデモメンバーもついてきているのを確認してから放送室に施されていたロックを解除する。

取り敢えず、このラジオはもつとやりたいと思った。

021 《King Game》

——それは突然のことだった。

俺達は忘れていたんだ。あの恐怖を。

「唐突だけど、親睦を深める為に王様ゲームを行うわ」

あの不条理を。

「勿論王様の命令には絶対服従よ」

ゆりちゃんと言う——暴君よ。

「命令に逆らったら、首掻つ切るから」

『了解しました！ 全力でやらせていただきます』

拒否権なんて、最初から無かったのだ。

「と言うわけで王様ゲームをすることになったんだ」

「……あたし達ガルデモメンバーもか？」

「勿論」

俺はガルデモのメンバーを説得し、一つの空いている教室を丸ごと使っているゆり

ちゃんの所に向かった。

「全員揃ったわね。これよりオペレーション、キングゲームを行うわ」

「そのままだな」

「いいのよ。これより王様となったものの命令は必ず一つ聞かなければならない。また王様が選択できるのは数字であり、人そのものを選択することは出来ない。命令を聞かなかった場合、地獄を見ることになるわ」

全員が箱の中に入れられた紙を取って席に着くと、瞑想した。

『王様だーれだ！』

紙を開いた瞬間目に映ったのは——5の文字だった。

「やったあ！ 僕が王様だ！」

王様になったのはNPCこと大山君だった。

と言うか個性が無いはずの大山君が最初に当たるなんてかなり珍しい。

「じゃあ命令しないとね。9番の人は——2番の人に本気で殴られて」

全員が静まり返った。

理解はしていたんだ。この状況で普通な奴が普通なことを言うことくらい。だけどだ。

「9番は……俺だ」

「2番はあたしだな」

野田君と対峙するひさ子ちゃんを見てそれはないだろうと叫びたくなつた。

死ぬ。ガチで野田君が殺されてしまう。

何故ならばいつも拳を受けている俺が言うんだから違くない。

「本気で殴ればいいのか？」

「う、うん」

「ふんっ。貴様如きの拳に——」

言葉は最後まで続かなかつた。

顔を思い切り捻りを加えたストレートで殴られた野田君はそのまま飛ばされ——

たまたま空いていた窓から落ちていった。

野田君リタイア。

「あたし如きの拳が何だつて？」

理解はしていたんだ。このゲームが普通じゃないことぐらい。

「この王様ゲームの最後のルールを説明するわ。生き残った者が勝者よ」

そりゃねえぜゆりちゃんよ。

どう考えても殺す気満々の人達がいるんですから。

「でも直接的に殺す方法は無しで、全員が殺される方法も無し。一人ずつ殺していきな

やい」

一人ずつ消えていくのに何が親睦を深めるだ。

どう考えたってただの殺し合いだろう。

「ああ音無君、彼が野田君よ。いつも大体最初に死ぬの」

「あ、ああ」

音無君がちよつと混乱してるから黙ってあげてやりちゃん！

と言うかよくここまで出来るな。逆にすごいと思うわ。

「じゃあ次に行きましょう」

「……わかったね音無君。これがゆりちゃんだよ。この王様ゲーム——当たればまず死

ぬと考えていい」

「そんな王様ゲーム嫌なんだが」

「嫌でもなんでもしょうがないよ。考えるんじゃない感じろ。そうすれば全てが見えてくる」

悟った俺に対し、音無君も悟ったような顔をした。

全員が既に覚悟を決めている。

そして——しおりは必ず俺が守る。

俺達はゆつくりと紙を戻してからシャッフルすると、紙を引いた。

『王様だーれだ!』

「——よっしゃあ! 俺が王様だぜ!」

引いたのは日向君だった。

その目は既に獲物を取る目になっているから、確実に一人を殺す方法を選ぶだろう。

「俺には見える、見えるぞ! 6番が5番の胸を揉め!」

空気が、止まった。

「最低ね」

「最低だな」

「本当の意味で最低だ」

「まさかこんな低脳なことをするとは思わなかったよ」

「最低」

「最低だ」

「なんでそんなに言われなきゃならないんだよ!」

だっていきなり6番が5番の胸を揉めなんて、ねえ。

ん? 俺の番号? 5番。

「6番は誰だい?」

「ん。私だな」

まさみちちゃんだった。

——ステイステイ。

これが反対ならば一番嬉しいんだけど、まさみちちゃんが俺の胸を揉むの？俺がまさみちちゃんの胸を揉むんじゃない？

「6番と5番を何故反対にしなかったんだ日向君！」

「え、いや。まさかこうなるとは……」

「さつさと終わらせよう多々」

いやなんでそんなにウキウキしながら近づいて来るんですかまさみちちゃん。

そしてまさみちちゃんは——普通に俺の胸を鷲掴みにした。

いやそんなに無いんだけどね。

「や、やめようよまさみちちゃん！ 不毛な争いだよ！」

「いいじゃないか。男なんだし」

「傍から見ればどう考えても女の子同士絡み合いだよ!?」

クソツッ！ どうして俺は女顔なんだ！

これじゃあどう考えたってボケのはずの俺がボケきれていない！

「……ふう。満足した」

「オイコラ満足ってなんだオイ」

幾らまさみちゃんでも許せることと許せないことがあるんだぞコラー!

「それじゃあ多々君が社会的に死んだところで次にしましょう」

「社会的に死んでないから。俺普通に生きてますから。今日は俺がアウエーなの？俺がアウエーなんですか？」

しかし俺の思いは無視されてそのまま次のゲームが始まる。

『王様だーれだ!』

「わ、私です」

手を挙げたのは、みゆきちちゃんだった。

みゆきちちゃん。君が優しい子だということは知っているけれど、毎回毎回俺の心的確に決りに来るから危険だつてことはわかってるかい？

だから俺は危険信号を受け取つて構えているんだ。

「1番の人と4番の人で服を変えてください!」

「ほらー。そうやってまた俺を狙い撃ちする」

皆俺の事大好きなの？ ほら1番。もうわかつてやってるでしょこれ。

「4番あたしー」

「——ねえみゆきちちゃん。怒っていい?」

「ふえ!」

俺としおりで服装を入れ替えるって、男装と女装が出来るだろうが！

なんでしかもよりにもよってしおりなんだよ！

「ほらさっさと着替える！」

「隣の部屋で着替えてきますねー」

しおりに連れて行かれた俺は、溜息を吐いた。

「もう俺のハートはブレイク寸前。ヤブからスティックに色々なことが起きすぎて頭がバーニングだよ」

「あはは。でもあたしは嬉しいよ？　ずっとタツ君の匂いに包まれるなんて」

「しおり……」

嬉しいことを言ってくれるなど思いつつもブレザーを脱ぐと、しおりに渡す。

そしてしおりも赤くなりながらも自分の着ていた服を差し出してきた。

……お互い下着姿なんだよなあ。

「変な過ち犯すなよー」

廊下からゆりちゃんの声が聞こえてきて、俺のバーニング寸前だった息子がフリーズしていく。

何故ルー語になりかけてるかって？　そりゃ俺の頭がバーニングだからだったよ。

「着替えちゃったね」

「そだね」

女装してしまっただけ……傍から見れば別に女の子だしいいかな。

むしろこういう趣味に目覚めてしまいそうになるけれど、俺的にはそういうのはおりがやってくれればいいから問題ない。

可愛いしおりを見ていけば、俺的には問題ない。

「なんて言うか……銀髪美女？」

「美少女では無いんだね。しおりも髪を纏めてるからイケメンに見えるよ。元々可愛いしね」

二人でほんのり顔を赤めながら、呼吸をして互いの香りを楽しむ。

まるでしおりに抱きしめられているみたいだ。

「じゃあ行こっか」

「そだね」

扉から出てくると——ゆりちゃんが驚愕の表情を浮かべていた。

「驚きだわ。驚きすぎて言葉が出ないわ。なんで貴方そんなに美人なの？」

「いいじゃないですか。私は元々女顔ですし」

「言葉遣いまで変えてキモイはずなのにキモくないわ。元々声が高いから少し声が低い美女にしか見えないわ」

「それは嬉しいことですね」

取り敢えず一発殴られることも無く、俺は席についた。

こういうのはキャラ作りが大切だからね！

「と言うことで女装した多々です。よろしくお願いいたしますね」

『言葉遣いが変わってキャラまで変わってるのに、全くキモくない』

「声援ありがとうございます」

どうやらこのキャラでは違和感が無くなるらしい。

しおりも隣で胸を張っているけど、制服伸びちやうからやめて。

「……なんか普通に女として負けた気がする」

「そう落ち込むなよひさ子。女としてのこの部分は明らかに勝ってるだろ？」

「どこ触ってんだ岩沢！」

胸を揉まれたひさ子ちゃんが真っ赤になって怒っていた。

「——でもさ。いつも美容に気を遣ってて、料理も完璧にできて、運動もできて、勉強もできるんだろ？　ここにいる誰も叶わなくなるさ。この中でもダントツに最下位だった性格も何故か女性モードだと普通になってるし」

「おい日向。それ言うとお前どう考えてもホモに思われるからな」

藤巻君の言葉にハツとした日向君からとてつもなく距離を取ると、俺は座った。

——え。

「人は対象に選べないんだろ？ 俺は別に女装していると言うことしか選択してないぞ？」

「……そうね音無君。この世界に女装している人が不特定多数いる可能性がある以上、それは個人を選択しているのではなくてグループを選択しているわ」

そして3番は——藤巻君だったらしい。

ガクガクと震えながら俺の方を見ていた。

「因みに、時間がかかるならこの中で対処できるものは対処するわ」

「ま、待つてくれゆりっぺ。考える時間を——」

「ない」

バツサリと切られた藤巻君は意を決したように俺の方を見たので、俺はにっこりと微笑みながら藤巻君に近づいた。

「なんででしょうか？」

ドドドドドと効果音が出そうな程威圧感たっぷりですう言うと、藤巻君の掻いている汗の量が尋常ではなくなっていた。

「新入り……後で絶対殺す」

「何か御用でも？」

更に威圧感を酷すると、最早汗と言うより滝になっていた。

「リア充の癖に女装してんじゃね——」

「最後の言葉はそれでいいかな？」

「——すみませんでした許してください」

「無☆理」

俺は藤巻君頭をガツシリと掴むと、そのまま窓の外へシユートした。

今日は雨じゃなくて人が降る日です。皆さん気をつけましょうってね。

「……名前は知らんがすまん」

「ええ音無君。酷いわ。恐らく今までで一番酷いお題だったわ。と言うか確実に殺させ

に行つたわよね？」

「ルールの穴をついたんだが」

取り敢えず席に戻ると、再び紙を戻してシャツフルしてからまた引く。

『王様だーれだ！』

「——あーっはっはっはっはっ！ 私が王様だ！」

全員が高笑いをするゆりちゃんを見て思った。死んだと。

哀れな子羊を決める為に俺達はゴクリと喉を鳴らし——。

「3番、4番、5番は6番の蹴りを受けなさい」

3番は——大山君。

4番は——高松君。

5番は——しおり。

そして6番は——俺だった。

「こ、これは!?!」

「彼女を彼氏に蹴らせると言う最悪の諸行!?!」

「まさかゆりつぺはこれを狙って……!?!」

全員がゆりちゃんの方を見ると、やっべと呟いているゆりちゃんがいた。

どうやら俺になることもしおりが選ばれることも考えていなかったらしい。

まあしおりの為に戦線のルールを破ってでも戦った俺だし?

「じゃあ大山君行きますよ」

「え? ちよつとま——」

「黄金の右足!」

走り出して放った蹴りは大山君の首に直撃し、ボキリと言う嫌な感触を足に残しつつもそのまま大山君の体を床へと叩きつけた。

「大山君死亡」

「い、いいでしょう。私も男。その挑戦受けます」

高松君が服を脱いで俺と対峙していた。

「Be careful!」

TKが声を発していたが、もう遅い。

確かにその鍛えられた筋肉は俺の蹴りじや突破できないかもしれない。

「だけど——！」

「はっ！ まさか——！」

「男には、守れないものがある！ その金玉——潰される覚悟は出来てんだろなあ！」

俺の蹴りは——高松君の筋肉の鎧には当たらず的確にその急所だけを撃ち抜いた。

「が、はっ」

内股になり股間を抑えつつ倒れていく高松君は、俺に手を伸ばしながらバタンと倒れた。

それを見ていた音無君とTKと松下君は股間を手で押さえる。

「最後は——しおり」

しおりを見ると、ビクンと震えてから俺と目を合わせて——少し笑みを浮かべた。

「来てよタツ君。あたしの力を見せてあげる！」

「行くぞしおり！ 武器の貯蔵は充分か！」

駆け足で走り出すと——しおりの体に足をちょこんと触れてから俺は足を離してそ

のまま後ろの柵に激突した。

しおりを全力で蹴ったようにみせる演技をしつつ、俺は笑顔でしおりを見る。

「俺には……お前を傷つけられねえよ」

「男だ！　ここに男がいるぞ！」

「愛する女の為にルールを破るとは、まさに男の中の男よ」

「師匠！」

なんかTKが師匠とか叫んでいた気がするけれど気のせいだよな？

俺は立ち上がると、紙を入れた。

「……一応命令無視よ。わかってるかしら？」

「地獄を見たって構わない。しおりが傷ついている姿は、地獄よりも辛いから」

「そう。流石は多々君ね」

そして全員で再び引く——！

『王様だーれだ！』

022 《Crossing Cerebration》

「王様は——俺だ」

引いたのは松下君だった。

「では1番は2番に膝枕をしてもらおうといい」

『松下五段!』

あんたって人は……男の中の男だよ。

「因みに私は1番。さあ2番は誰だ!？」

「……あたしだ」

言ったのはひさ子ちゃんだった。

俺がひさ子ちゃんに膝枕をしてもらえばいいのかな？

「はあ。命令なら仕方ない。おい多々、変な事するなよ」

「勿論だよ。変なことしたら——私の後ろの修羅が何かしてきそうだから」

俺の後ろで憤怒の表情で見ているしおりを一瞥しつつ、俺はひさ子ちゃんの膝に頭を乗つけた。

——前が見えない。

「感想を聞いてみよう。多々、どうだ？」

「前が見えません」

でっかい山が——あるんじゃないよ。

まるで富士山の様なでっかい山が、俺の前にそびえ立っているんじゃないよ。

「まあFカップですからね」

「Fカップだからな」

「Fカップなんですか？」

「Fカップじゃねえよ！」

ひさ子ちゃんは否定しているけれどこれはF^{ふじさん}カップだよ。

「なあ多々から聞いたんだけど、FカップのFは富士山のFらしいんだ。そうなのか？」

「多々、てめえ岩沢に何を吹き込んでやがる！」

「え？ FカップのFは富士山のFに決まっているじゃないか。それかひさ子ちゃんの

F」

「くっ。殴りたいけどここで殴ったらあたしにもダメージが来る」

ひさ子ちゃんのそんな行為を笑いつつ、そろそろ膝枕をやめようかなと思う。

だって殺気を感じるから。

「そろそろいいや」

「ん？　なんか少な——オーケー。そういうことか。ならあたしが殴るまでも無い」
俺は立ち上がると、しおりが近づいてきた。

「——タツ君絶景だった？」

「絶景かな絶景かな！」

「ならばよし！　流石はひさ子先輩だぜい！」

「畜生あいつもそつち側だった！」

甘いな。しおりが殺気を向けていたのは俺に對してだ。

つまりしおりも膝枕させてほしかったと言うだけの話！

俺が他の女の人に膝枕されるから怒るほど、しおりは器の小さい女じゃない！

「タツ君とあたしは別にそんなことしなくても愛は変わらないから問題はない。それよりもひさ子先輩の胸が下から見たらどうなのかをあたしは知りたい！」

「凄く……ユニバースでした……」

「アーツ！」

二人して燥いでいると、がっちり頭を掴まれた。

「お前ら——黙れ」

「イエスマム」

死ぬのは勘弁と俺達は両手を挙げて降伏した。

最強に立ち向かうのは最弱って決まってるから、平凡である俺達は何も致しません。
「浅はかなり」

「と言うか椎名ちゃんと遊佐ちゃん全然当たらないね。多分皆いたことすら気がつかないレベルで当たらないね」

「当たらなければどうということない精神です」

遊佐ちゃんって何気ネタ知ってるよね。

「ところで雨野さんはいつまでその格好をするのでしょうか？」

「うーん、やっぱり今日中はやらされそうだね」

「なる程。では今のうちに写真を撮っておきましょう」

唐突に滅茶苦茶写真を撮られた。

「何するのさー！」

「良いではないか。良いではないか」

「無表情で言うセリフじゃない！」

きつと遊佐ちゃんは俺の天敵である。異論は認めない。

だってネタを尽く使ってくるだけではなく、こちらのネタを封じ込めてくるなんて並大抵の相手じゃできないもん。

「ガンブラ、しませんか？」

「声優ネタ乙。君はオレンジの機体でも使っているがいい」

「貴方は何を使うのですか？」

「黒く塗装されたダブルオーライザー」

「はっ。そんなもので。そんなもので——ッ！」

「俺を舐めるなよ——」

二人で言い合ったあと、がっちり握手をした。

「貴方とは良好な関係が掴めそうです」

「こちらこそ」

この子もまた、こちら側の人間だったか。

「じゃあ次やるわよ。王様だーれだ！」

「あ」

引いたのを見て、俺は確信した。

「俺が王様」

もうキャラなんて作ってられるか。

俺は自分の頭の中の知識を総動員して考える。

あるはずだ。俺がやるべき任務が、俺がなさねばならないことが——ッ！

俺の中のラクス様が言っている。貴方は貴方のなすべきことをする為にここに

のですとッ!

残っているのは音無君、松下君、TK、椎名ちゃん、遊佐ちゃん、ゆりちゃん、しおり、ゆみきちちゃん、ひさ子ちゃん、まさみちゃん。

7/10の確率で女子に当たるとこの状況で、俺達は生き残らなければならない。

「10番が——3番へと決闘を申し込む!」

10番は——音無君。

そして3番は——ゆりちゃんだった。

「そう……。ここでリーダーを決める戦いを望むというのね……」

立ち上がったゆりちゃんはそう言うと、音無君を睨みつけた。

「いいわ。やってやろうじゃないの。この闘争心を、この思いを——ッ!」

「いや。俺はお前と戦いたくないからパス」

「なんてことしてくれんのよー! 私がバカみたいに調子乗ってたみたいじゃない!」

「いや、そんなこと言われても……」

「貴方私のやる気がわからなかったの!? 馬鹿なの死ぬの!? 窓の無いビルの中に閉じ込めてやろうかしら!?!」

「窓の無いビルってどこだよ!」

「私も知らないわ!」

電波を受信したらしいゆりちゃんの暴走を見つつ、ゆりちゃんは溜息を吐いた。

「別にルール違反でもいいから、俺は決闘なんてしたくない。それでいいだろ？」

「まあいいと思うよ。俺的には」

「ならいい」

そうするとゆりちゃんは再び大きな溜息を吐いた。

「なら今度から音無君と多々君でラジオを行いなさい。放送室の占拠は私達戦線が行うから」

「えー」

「言うこと聞く人もいなくなってきたし、そろそろやめにしましょう。ここにいる全員が勝者よ。死んだ奴らから食券を奪う権利を与えるわ。あ、音無君と多々君は食券を奪う権利も奪われる権利も無いから」

そういうことならいいか。

ラジオを行わなきゃいけないのはだるいけれど、これはこれでまたいいだろう。やっぱり楽しんでいかなきゃね。

S I D E : ???

—— 楽しそう。

私は第二コンピュータ室で笑っていた。

ANGEL PLAYERは既に掌握しているから、影が現れることは無い。

無理矢理卒業したくない人達を卒業させて、本当に全員が最高の気分になれると思っ
ていたんだろうか？

恐らくここに来た記憶を持たない開発者は、そこまで能がない人物だったんでしょ
う。

愛が芽生え、それが成就すればこの世界が永遠の楽園に変わる？

そんなはずがないでしょう？ 永遠の愛なんて存在しないのだから。

——嬉しそう。

私はモニターを眺めて笑みを浮かべる。

そこに映っているのは人間。

今日は王様ゲームをしていたらしい。

今度ラジオをするようだから、放送室の音源を拾える様に調整しておきたい。

久しぶりにここに来て面白いと言う感情を抱いた気がするわ。

ここに来たのが同じ年代の人とは限らないし、時間が同じ時間を生きているとは限ら
ない。

例えばあそこで最古参として戦線を作り上げた日向君も、もしかすると音無君の未来

から来たかもしれないし、逆に音無君が実は戦国時代に死んだ人物と言うことだってありえる。

そういう時間という概念から切り離された世界だから、当然なんだろうけれど。

——私は神になった。

理不尽な神に復讐したいと言うゆりちゃんのを、私は肯定的に捉えている。

抗えない人生。

理不尽な人生。

そこに対抗できるのは、この世界だけだものね。

現実なんて結局、苦しい思いをしていたという事実だけしか残らないもの。

有能過ぎれば叩かれ、無能過ぎれば叩かれるそんな世界。

かつて何かの漫画か小説で天才な妹と最低の兄がゲームの世界を攻略するのを見た

時に、そんなことを話していたのをよく覚えている。

——方やバスケ部のエースかつ成績学年一位かつ容姿端麗な男性。

——方や普通の部員で成績一般。容姿も普通で好きな人が別の人を好いていた男性。

下が上に理不尽な怒りを浮かべるのは当たり前前だもの。

分かり合えると信じていても、分かり合えない生物だもの。

「ふいふい。面白いよね、多々」

私は笑う。慈しむように笑う。

そこで笑っている多々が、好きな人の為に一生懸命な多々が可愛くて愛しくて。「さあいつになったら、貴方は気が付くのかしら?」

この世界の現実には。

私はそれを考えながら——再び思考の海に沈んでいった。

SIDE：多々

「はあ。色々と面倒だったなあ」

女子寮のしおりの部屋にいる俺はそう言って寝つ転がった。

——俺は何か違和感を感じている。

自分でも違和感ってわかるんだから、それはかなり大きなものなんだろう。

戦闘を行う時の、あの冷静で的確な判断を行う頭。

日常的で下ネタばかりブチ込む普通の俺の頭。

まるで別の人が俺の体を動かしている様な、そんな感覚に陥ってしまったている。

「——そもそも、俺は死んだのか?」

音無君が最初に自分が死んだことを認めなかったと聞いて、俺は一度疑問に思ったことがあった。

それは俺の持っているこの記憶が、本当に俺のものかと言う疑問だ。いつも感じている、動かされている様な違和感。

そして俺自身、本当にナニをしてテクノでブレイクな死に方をしたのかと言う疑問。もしも記憶通りだとすれば、頭がそれだけ良かったはずの俺がそんなこともわからなかったのかと言うこと自体が疑問に思っている。

こんなことを考え始めればキリがないかもしれないけれど、それでも俺は必要なことだとわかっていた。

これが俺にとっての、最善だとわかっていた。

「もし、俺が俺じゃなかったら——」

このしおりが好きと言う気持ちは、一体誰のものなんだろうか？

一体誰がしおりを好きだと思っているんだろうか？

「やめよう」

ずっと考えていたらきつと俺は行き詰ってしまふ。

思考放棄とも言えるかもしれないけれど、俺という個人で考えられるのはここまではずだ。

何よりも——心がこれ以上詮索してはいけなさと拒絶反応を示している。

この心が本当に自分のものなのかはわからないけれど、本当に自分のものなら確実に

これ以上考えれば俺という人格が崩壊するに匹敵することだと言うのは理解できた。
俺には俺自身の謎が多すぎる。

「まあ、今はしおりと一緒においてしおりと一緒で暮らすことが出来ればそれでいいか」
それが今の幸せで、俺が復讐を忘れない為に必要なことなんだから。

023 《Guild》

「高松君報告をお願い」

「はい。武器庫からの報告によると、弾薬の備蓄がそろそろ尽きるそうです。次一戦交える前には補充しておく必要があります」

「なる程。つまりオナ禁的な？」

俺の顔面にゆりっぺが投げたスリッパが直撃した。

「と言うか何故校長室にスリッパ……。」

「新入りも入ったことだし、新しい銃も要るんじゃないの？」

「そうね。わかったわ。本日の作戦はギルド降下作戦をしましょう」

降下作戦と聞いた音無君がブルリと震えていた。

「この子やっぱり反応が面白いなあ。」

「高度1万メートルからの降下だけ？ きつと落ちたらペシヤンコに——」

「空からじゃなくてここから地下に降下するのよ」

「ネタバレをされてしまった。なんでえ、つまらねえの。」

「なんだ地下か……って地下あ!？」

「ナイスノリツツコミ！ 自分で自分にツツコミするなんてやつぱり音無君はいい人材だよ！」

「お前はツツコミのことしか考えてねえのかよ！ もつと音無単体で評価してやれよ！」

「イケメン死ね！」

「世界一のイケメンとかほざいてる奴はどこのだいつだ！」

日向君が変なことを言ってくる。

全く俺の場合は自分でネタ的に使っているだけだけど、音無君はガチのイケメンじゃないですか。

まあそんなこと言ったらこの戦線にいる人達実は殆どイケメンに近い部類に入るんですけどね。アホ以外。

あ、全員いなくなつた。じゃあ日向君位でいいや。

「私達がギルドと呼んでいる、地下深くよ。そこでは仲間達が武器を作っているの」「せんせー。俺もギルドの説明を初めて聞きましたー」

ゆりちゃんはチラリとこつちを見たけれどすぐに顔を逸らした。

あれや。前にギルドの説明を求めたらスルーされたことを思い出して、ネタでもスルーするんじゃないかと思っっている顔や。

なんでこんなに細かくわかるかって？ そりゃ女の子の思考回路なんて分かるに決まってるじゃないか。

「多々君。今回は貴方の頼んでいたものもあるから、ここにいるメンバーと陽動作戦の要である貴方で行くわ。ガルデモのメンバーには伝えておいて」

「夜ならいいよ。まあ今日はパジャマパーティは中止かあ」

残念だなあ。ひさ子ちゃんのおっぱいは実はFカップじゃなくてGカップになるんじゃないかって言う話題で持ちきりだったから、その話の続きもしたかったんだけど。

でもオペレーションなら仕方ないね。

「ギルドとの連絡は取れたわ。行くわよ」

ギルドの入口である体育館の椅子をしまう場所に侵入すると、俺はそのまま階段を下がって地面に降り立った。

「ここがギルドへの道かあ。」

「おつきくて長いなあ……」

全員降りてきたのを確認すると、藤巻君が声を発した。

「おい、誰かいるぜ」

明かりを向けてみるとそこには——ッ!?

「うわー。馬鹿がいた」

野田君こと馬鹿がいた。この際アホでも可。

「音無とか言ったか。俺はお前をまだ認めていない」

取り敢えずどうにかして止めようかな？ ……ん？

「わざわざこんなところで待ち構えている意味が分かんないよな？」

「野田君はシチュエーションを重要視するみたいだね」

「意味不明ね」

日向君と大山君の話に同上して、ゆりちゃんも野田君の馬鹿さに呆れていた。

「別に認められたくもない」

「貴様。今度は千回死なせて——」

「動かない方がいいと思うよ。もう遅いけど」

俺の方を一瞥した瞬間、野田君の体は宙を舞った。

でっかいハンマーが野田君を横から叩き、壁に叩きつけるとそのまま壁を破壊して生き埋めにした。

「臨戦態勢！」

「トラップが解除されてねえのか！　つかどうやってわかったんだよ多々！」

「いやね？　どう考えても何かあるのに普通に踏んでいったからさ」

本来解除されているはずなのね。なる程なる程。

「つまり解除しておくという会話を聞いておらず、普通にあると思ったから危ないと言ったわけね？」

「その考えであつてる」

俺はそれを聞いてから、Five Sevenを構えて地面に触れる。

音は無い。

「大丈夫そうだね。でも解除されてないってことは——」

「ええ。トラップを解除できない理由があつた。そしてこのトラップは対天使用の即死トラップ。つまり——」

「天使ちゃんがこの中に現れたつて考えてオツケー？」

初めて行くギルドがこんなことになるなんて、最悪だなあ。

と言うか割と音無君つて疫病神的なポジションだったりする？

「進軍しましょう。トラップも結局は足止めにしかならない。ギルドが陥落すればその場で終わりよ」

天使を、倒すしかないのだ。

だつたらやるのは俺が一番だろう。

「大丈夫。天使ちゃんの相手は俺がするよ。実は俺しか天使ちゃんに勝ててないしね」

「……そうね。貴方なら天使を倒すことも出来るかもしれないわね」

「そゆこと」

ゆりちゃんならいの一歩に倒すって言いそうだけれど、女の子に戦わせるのはあまり好きじゃない。

それにその相手が天使ちゃんだとしたら、それこそゆりちゃんを危険な目に合わせるのは嫌だからね。

「なーに。安心してって」

俺が笑いかけると、ゆりちゃんはそうねと答えて歩き始めた。

ギルドと言う場所は結構深いらしく、現在はB3まで歩いている。

それでも全然まだだというから、結構面倒そうだ。

ふと、地面を触れた。

振動が伝わってくる。

「ねえ日向君」

「なんだ？」

「落石トラップとかがあってある？」

「勿論」

その答えが返ってきた瞬間、俺は逃げろと叫んで走り出した。

この勾配に落石トラップ！

どこぞやのインディに出てくるような、上から丸い石が落ちてくる系の奴だ！
「多々の言う通りだ！ マズイ来るぞ！」

椎名ちゃんの叫びと共に一齐に走り出すけれど、落ちてきたのは鉄球だった。

あーあ。石なら銃弾でなんとかと思つたけれどあれは無理だな。

「いっつちだー！」

いつの間にか抜かされていた俺は椎名ちゃんのいるところまで来ると、高松君と日向君と音無君が結構ギリギリだと言うことに気がついた。

俺は音無君と日向君が横に逸れたのを確認し、高松君の腕を掴むと引きずり込む。

その時にギリギリだったので鉄球に対して蹴りで僅かに軌道を逸らすと、その一瞬で抜け切った高松君があはあと大きく息を吐きながら倒れていた。

日向君と音無君も無事みたいだ。

「いっつちだー！」

立ち上がろうとした瞬間、右足に激痛が走る。

蹴りを入れた右足がどうやらポツキリと逝ってしまったらしい。

「……すみません。私のせいで」

「ごごよごごよ」

でもまいったなあ。これじゃあお荷物になっちゃう。

天使ちゃんとも戦えないかなあ。

「大丈夫かしら？」

「右足以外はオールオーケー！ 右足はデッドエンドですね」

「……なら高松君と松下君で多々君を支えてあげて。ここで多々君を見捨てていくのは得策ではないわ」

支えてもらいながら下へ下へと降りていく。

「何故、あそこで助けたのですか？ いつもの外道と呼ばれている貴方なら見捨てると思ったのですが」

何故助けたのか……か。

正直に言えば元々助けるつもりじゃなかったんだけど、それはいつもの俺の気がして嫌だった。

今の俺が俺であることを証明できるのは、しおりとの愛だけだ。

でも人を助けることができるのなら、俺が俺である気がしたんだ。

「ちよつと心境の変化があったからかな」

俺が人間だと認める為に。

自分で自分を認める為にも必要なことなんだ。

「誰も死なせたたくないんだ」

まあ野田君は尊い犠牲となったけれど、あれは自業自得だからしょうがない。

暗い近未来的な通路に入ると、閉じ込められた。

「しまった、忘れてたよ！　ここは閉じ込められるトラップだった！」

「そんな大事なことを忘れるなよ！」

音無君ナイスツツコミ。

だと思ったら唐突に電気がついた。

「ここからヤバイのが来るわよ。しゃがんで！」

と言われましてもししゃがめないのですと思っていいたら、高松君が俺の体を寝かす様にして避けさせてくれた。

「なんだ？」

そう音無君が言うのと同時に、椎名ちゃんがけむり玉を投げて煙が部屋に充満する。

そこにあつたのは、赤いレーザーだった。

「当たるとどうなるのあれ？」

「最高の切れ味で胴体を真っ二つにしてくれるぜ」

俺はそれを聞いてすぐにFiveSevenを構えると、レーザーを出している機械を撃ち抜いた。

「最強の武器には最大の弱点があるって教わらなかった？」

「流石は多々だぜ！」

藤巻君が俺を褒めながらロックを解除していく。

レーザーがでなければどうってことないらしい。

「開いたぞ！」

全員でそこから抜け出すと、俺は高松君と松下君に支えられながら外に出た。

「助かったぞ多々。俺の体では避けることは出来なかっただろうからな」

松下君にお礼を言われつつ、次に向けてひたすら歩き続ける。

くぼんでいるところに来たけれど、俺は足がかけられなくて降りれないからあとで

ジャンプする方針になった。

「トラップが発動してるわ！」

「しまった忘れてたよ！ ここは天上が落ちてくるトラップだった——ッ！」

「だからそんな大事なことを忘れるなよ！」

下がっていく天上を見て、俺はマズイと判断してどうやってくぐり抜ければいいのかを考える。

「——そらア！」

FiveSevenを天上に見えている歯車にぶつけると、巻き込まれていつて歯車

が止まった。

その間にぐぐり抜けていったメンバーを見ていつて良かったと思いつつ、ちょうど俺が通れないことに気が付く。

一体どうしよう？

「HEY! You use!」

そう言つて僅かな隙間からFNブローニング・ハイパワーを投げてきてくれたTKに感謝しながら、俺は鎖を撃ち抜いて破壊した。

すると落ちた天上を歩いてきてくれた松下君と高松君に連れられて皆のいる場所に行くことができた。

「ごめん。拳銃壊しちゃた。はいこれTK」

TKにFNブローニング・ハイパワーを返してから、俺はヘラリと笑う。

「損失を考えれば、貴方の行動は素晴らしわ。やはり貴方は只者じゃなかったのね」

「それはもう。だつて俺は——」

「しおりの彼氏だから、かしら？」

「言葉取らないでよもー」

クスクスと笑つたゆりちゃんに俺は、何か危ない物を感じた。

「次に進むわよ」

歩いていると開けたスペースに出た。

通路……だけど何か違う。

この置き方ってまさか——ッ！

「すぐに戻れッ！」

俺の声を聞いたのは高松君と松下君、そしてTKと大山君だった。

すぐに戻った俺はすかさず日向君と藤巻君に向けて手を伸ばすと、二人の腕を掴む。

「ぐ、ガア!？」

二人を支える為に踏ん張ったせいで、右足に負担が掛かって激痛が走った。

「おい多々！ 俺達のことはいいから落とせ！」

「別に死ぬわけじゃない！ だから！」

「い、やだ」

俺は激痛に耐え、松下君と高松君がそれに気がついて支えてくれても二人を離さない。
い。

「俺は俺であることを証明するんだ。だからッ！」

力を込めて二人をギリギリまで引き上げると、あとは松下君と高松君が拾い上げてくれた。

「俺は誰も、死なせないッ！」

目の前で死んで欲しくないと言う一心で引き上げると、俺は冷や汗と普通の汗が入り混じっている顔で笑いかけた。

「因みに俺以外の要因で死なすのは嫌だけれど、俺が原因で殺すのは問題ない」

『悪魔か!』

つまり死ぬなら俺に殺される理論である。

ドラクエで言う、HPが1しかないなら俺の一撃で死んで経験値くれと言う状態である。

「大丈夫かしら!?!」

「オー大丈夫。因みに音無君には後でさつきゆりちゃんのに顔を埋めていた時の感想を聞きたいな」

「非常事態だったんだ!」

とはいえ上がる為に胸に顔を埋めていたのは文句が言えないだろう。

どう考えてもギルティである。

「そこからこつちに来れるかしら?」

「まあ行けると思うけど、道的には向こう側まで行けないんですよ? 椎名ちゃんロ―

プはまだある?」

「ああ」

「ならそのロープを使って結んで、それで移動しよう」

「わかった」

ロープを道まで繋ぎつつ、俺は自分の右足の痛みが和らいできているのに気がついた。

そろそろ体も元通りつてところかな。

「じゃあ進軍しましょう。天使が来る前に、ギルドに行く必要があるわ」

「そうだね」

俺達はロープを伝いながら、道を進んでいった。

024 《Moving Monster》

暫く進んで漸く休めた俺達は、息をついた。

途中で水で溺れて死にそうになった藤巻君の意識を刈り取って連れて行ったり、椎名ちゃんが飛び込もうとしたところを俺が代わりに飛び込んでとってきたりとしたけどね。

取り敢えず椎名ちゃんからの好感度がバカみたいに上がったから良しとしよう。

「良くもまあ全員生き残ってるわね」

「殆ど多々のお陰だけだな。もし多々がいなかったらつて考えるとぞつとするぜ」

藤巻君の言葉に、賛同する様に全員が頷いた。

まあ他人に殺されるのが気に食わないだけなんだけどね。

「それにしても、そろそろギルドだと言うのに物音が聞こえてこんな」

「松下君の言う通りだよ。俺は今から先に行くから、後で来てよ」

「待てよ。一人で行くつもりか？」

日向君の言葉に、俺は笑顔で返した。

「俺はお前を一人で行かせたくない。お前は一人で何もかも背負いすぎだ。関根と二人

でもそれでも分かち合ってるのかもしれないねえけど、俺達も信じろ。俺達もお前の味方なんだ」

日向君の言葉に、俺は好感が持てた。

やっぱり日向君は優しいんだなと思うと同時に、だからこそ自分がやらなきゃいけないと言う思いに押される。

「じゃあ休み終えたらすぐに来て。俺はもう体力を回復したからさ」

元々使ってない体力だからねと言いつつ、俺は走り出した。

武器はナイフ二本。

そして頼れるのは自分の運動神経と肉体のみ。

最高にワイルドで、ハッスルできる状況じゃないかアミーゴ。

俺は走り出すとすぐにギルドの入口と思える場所を見つけたが、それよりも先に音を聞く。

下にある機械らしきものの音は聞こえるけれど、天使ちゃんが何かにかかった音は聞こえない。

——ドンと、小さな音が聞こえた。

「いつちか」

俺はそっちに向けて慎重に歩き出す。

トラップがあればそれを見抜くことも、割と難しいことじゃない。

元々対天使用とは言っても高校生が考えたトラップなんだから、大丈夫だ。

「漸く会えたね、子猫ちゃん」

「私は子猫じゃないわ」

暫く進んだ先で見つけた天使ちゃんを見て、俺はナイフを構えた。

ハンドソニックスを展開している天使ちゃんに微笑みかけながら、俺は少しずつ距離を詰める。

「貴方達がしていることは校則違反よ。この学園の地下にこんなものを作るのは許されてないわ」

「そうかもしれないね。だけど、君にとつての大切なものみたいに俺達にとつても大切な場所なんだよこは。だからそれを邪魔させるわけには行かないね」

俺は軽く地面を蹴ると加速した。

同時に加速していた天使ちゃんのせいで、俺の予想よりも二三歩早く攻撃圏内に入る。

勿論先に動き出していたとも言える俺は準備が整ってなくて、天使ちゃんは整っているからすぐ行動を開始してきた。

「ちいー」

ハンドソニックが振るわれ、俺はナイフでそれを抑えつつも後ろに跳んで衝撃を減らす。

その後すぐに体勢を立て直すとナイフを一本天使ちゃんに投げつけた。

それをハンドソニックで弾いた瞬間俺は天使ちゃんの懐へ入り込むと、ナイフを使って天使ちゃんの右手の付け根を切り裂く。

だがそれに瞬時に反応して右手を下げたことによつて、若干切り裂かれただけで全ての傷が終わる。

次の瞬間背後に移動していた天使ちゃんを、何故か理解できた。

「——貴方」

ナイフで切り裂いた右手から血を流しながら、天使ちゃんは俺の方を驚いた様に見ていた。

「へへへっ。中々いい趣味してんじゃん」

俺は切り裂かれた右脇腹を見ながら、天使ちゃんの腹にナイフを突き立てた。

「どうして後ろに移動するってわかったのかしら？」

「勘だよ勘。そろそろ皆も来そうだし、終わらせるにはここかなってね」

ナイフを抜くと、血を払ってから天使ちゃんを見た。

「第二ラウンドしますか！」

右脇腹の激痛に耐えながら、俺は右腕を振るった。

ナイフは既に右腕でしか持つていない。

それを使つて天使ちゃんを倒すには、五体満足で傷もない状態じゃないといけない。そんなのは今の俺には無理だ。

「でもさ、言つてくれたんだ。俺の味方だつて」

こんな人間かどうかすらわからない俺の、味方をしてくれるつて。

だから——答えるしかないじゃないか。

その思いに、答えるたいと思つてしまうじゃないか。

「無理矢理は嫌いだね。一緒にいくのが好きなんだぜ俺は」

自分の右脇腹の傷の中に——手榴弾を押し込むとそのまま天使ちゃんに抱きついた。

「くっ……！」

「じゃあな天使ちゃん。また今度」

超至近距離からの爆発で——天使ちゃん諸共俺の体は弾けとんだ。

「——目が覚めたら知らない天上が広がっていたでござる」

「そりゃ保健室の中だもの。空なんて広がってない天上よ」

俺は起き上がると、制服が新しくなっているのに気がついた。

誰かが着替えさせてくれたらしい。

「ギルドは守られた。天使が入ってきた道を埋めて入れないようにして、別の道を作り上げたわ。貴方のおかげよ。ありがとう」

「俺は別に褒められる様なことはしてないぜい。俺は俺に出来ることをしただけだからな」

「それでもそのおかげで私達は道を示された。貴方のおかげで、私達はギルドを放棄すると言うことをせずに済んだのよ」

俺はこの命を誰かに使えたことに、少し達成感を感じられていたんだから。

これが……消えるってことなのかもしれないな……。

だというのに、俺は消えると言うことが一切無い。

——やっぱりか。

「少し疲れちゃった。ちよつと一人にしてくれないか?」

「ええわかったわ。誰も入れないようにしておく」

ゆりちゃんはその言っつてそのまま保健室を出て行った。

一人になった保健室で俺は溜息を吐いてから、ベッドを叩きつけた。

「ちく、しょう……!」

最悪だった。

自分が人間だと証明する為に行つたことが、自分が人間では無いことを証明する為の行いになってしまった。

俺という存在が、どういう存在なのか、自分で理解してしまうことになってしまった。それがどうしようもなく最悪で、絶望的なことだと一番俺が理解していたのに。

世界つて言うのは理不尽だ。

こんなにも最悪な結果を、俺に向けてくるのだから。

「だけど——」

ここで諦める訳にはいかない。

ここで迷い始めるわけには行かない。

この世界にはまだ秘密が残つていて、俺はそれを解き明かす可能性がある存在なんだ。

こんなちつぽけな存在でも、ゆりちゃん達と一緒に抗うことが出来るかもしれないだ。

そして何よりも——ここには俺が愛した人がいる。

真実を知つたとき、拒絶されるかもしれない。

真実を知つたとき、嫌われるかもしれない。

それでも最後までそれを隠して、彼女を笑顔で送つてあげたいんだ。

俺という存在がここにいたことを、自分で証明したいんだ。

「抗い続けなければならぬ」

例え植えつけられた心だとしても、例え受け付けられた思いだとしても、しおりを愛したいと言う気持ちは本物だから。

ゆりちゃん達と楽しく過ごしたいと言う思いは本物だから。

例え——自分がNPCだとしても。

SIDE :???

「気がついちゃいましたか」

私は案外早く気がついたことに、流石は多々だと思った。

自分がNPCと自覚することが出来るNPC等存在しないと言う大前提を塗り替えて、自覚することが出来るNPCになる。

無個性な集団だけで神様が本当に青春を出来るとは思っていないでしょうしね。

きっと元々NPCには進化するプログラムか何かが入っていたのかもしれない。

「でも違いますよ多々」

貴方のその回答は正答ではない。

もしもそれで全てを納得してしまつたら、何が間違いで何が真実なのかを貴方は理解

できていないママになってしまう。

それでは許されないのが、この世界の掟なのだからもつと多くのことに気が付いても
らう必要があります。

「ANGEL PLAYER」

私はそれを起動した。

プログラムの内容は影の設定。

ただし彼と彼の愛する彼女のみを除く全ての人物を対象とした、愛が生まれた瞬間に
発生するプログラム。

もしも発動したならば、それは多々を巻き込んだ壮絶なモノへと発展する。

そして発展してしまえば、危機を乗り越えた二人は更なる高みへと上がるかも知れな
い。

私は別に多々のことが嫌いなわけではないし、むしろ好きだから本当は言いたい。

だけれどそれをしてしまえば、多々はその重さに耐えかねて自壊してしまう。

そんなことは嫌だ。

世界は残酷だけれども美しくなければならぬのだから。

多々と言うプログラムに隠された、本当の意味を理解しなければいけないのだから。

「楽しみですね、多々」

貴方がこの世界の真実に、私の真実に、己の真実にたどり着くのがいつになるのか。もしかすると永遠に来ることはないのか。

楽しみで仕方ない。

「世界はやっぱ美しい」

私は美しくないのかもかもしれませんが、私は美しい全てを見ることが好きなんです。楽しみにしてますよ、多々。

SIDE：しおり

タツ君の様子が変だ。

あたしはすぐに気がついていた。

最もかなり危険なレベルでマズイと気がついたのはラジオの時だけだね。

人間かどうか聞かれた時のタツ君は驚いてはいたものの、周りからしてみれば変な質問が来て今までと違ったから驚いている程度にしか見えなかったかもしれない。

だけれどもあたしにはちゃんと、その質問が自分の真意を撃ち抜いていたから驚いて答えられなかったと理解していた。

タツ君は自らが人間かどうかで悩んでいる。

タツ君には秘密だけれど、あたしは既に気がついていた。

と言うのもあたしはタツ君のことをなんでも知ってるからである。(・・ω・・)ド
ヤア

タツ君は最初に会った時から今まで、銃を疑ったことはない。

あたしだって最初に見た時は驚いたけれど、タツ君は銃が本物であることを自分が撃つたわけでもないのに理解していた。

まあそれだけでもいいだろう。

次に疑問に思ったのは、タツ君が悲しいと思ったところを見たことがないことだ。

確かに悲しいよおとか言っている時はあつたけれど、その瞳には悲しみなんて一つもなかった。

自分の話をするときも、怒りはあれど悲しみはなかった。

悲しみという感情が欠落しているのかもしれないから、まあそれでもいいだろう。良くないけど！

次に疑問に思ったのは、銃を撃っていた時だ。

その時のタツ君はまるで歴戦のゴルゴ13の様に獲物のことだけを考えていて、周りの言葉を一切聞いていなかった。

と言うか戦闘になった瞬間雰囲気があるで変わっていた。

まあそれも実は傭兵で戦っていたと言うことならいいだろう。良くないけど！

ともかく、不思議な部分が沢山あったことに一番近いあたしだから気がついていた。
一緒にいるからね！

最近はそれに自分でも気がついたらしく、不安げな顔を見せる時もあった。その時の顔もちよつと可愛くてドキドキしたのは内緒。

そしてあたしは何個かタツ君を出した。

一つはタツ君が実は新種のNPCで、あたし達が過ごしやすいように神様が作り出したプログラムかもしれないという仮説。

そしてもう一つが、タツ君はNPCと人間を足して二で割った存在かも知れないという仮説。

正直に言えば二つ目の仮説が一番ありえないけれど、一番正しいと思ってる。

タツ君はNPCにタツ君と言う人間が憑依して生まれた、報われても消えることができない人間じゃないかと言う話なんだよね。

最初に消えられないと言っていたのが、どうも気になる。

この世界の消え方なんて、満足するくらいしか言っただけは絶対譲れ

「タツ君。貴方は誰？ 一体何を考えて、何をしようとしているの？」

わからない。

わからないけれど——タツ君があたしのことを好きだと言うことだけは絶対に譲れ

ないし、それはタツ君の本心だと言うことは理解していた。

025 《On Air Second》

——孤独。それはたった一人と言う言葉をかっこよく言い表しただけの、通称ぼっちである。

友はおらず、仲間もおらず、ただのうのうと一日一日を過ごしていく日々には何かがあるのだろうか。

世界は——仲間を求めているのだ。

「と言うわけで第二回死んだ世界戦線ラジオ始めるよー!」

「だからなんで毎回テンション高いんだお前は!」

音無君のツツコミが入りつつも、俺は死んだ世界戦線ラジオを開始した。

ん? 前回色々迷ってたじゃないかって?

そんなことはどうでもいいんだよ! ありがままを受け入れなさい! 順応性を高めるのだよ!

「今回のゲストは、誰も知らないかもしれない遊佐ちゃんと日向君でお送りします!」

「どうも。誰も知らない名前だけの存在、遊佐です」

「俺が日向だぜ☆」

「日向さんがウザイのでボツシユート」

遊佐ちゃんはその言って日向君を放り投げた。

そのまま机の角に頭をぶつけて叫んでいる日向君は置いておいて、遊佐ちゃんとのトークを始める。

「いやあ。遊佐ちゃんってキャラ濃いのにキャラが立たないから不思議でしょうがないよ」

「いえ。私は通信担当なので、表にはあまりでないのです」

「裏の仕事って奴ですか。依頼料はおいくら？」

「——金さえくれればなんでもやりますよ。ニヤリ」

「その表情を口で言うの、割と好きだよ。ドヤリ」

どうやらやつぱり遊佐ちゃんは俺と相性がいいらしい。流石遊佐ちゃん。

「じゃあ最初はこのコーナー。質問トーク。これは死んだ世界線に向けられてNPCから疑問に思ったことをお便りいただき、そのお便りに対してを俺達四人で話し合うコーナーだ」

なる程。前回の失敗を繰り返さない為に内容は変えていくと言うことか。

「では最初の質問。ガルデモメンバーがライブを行う日にちはわかりますか？」

「これは多々に聞けばいいんじゃないか？」

日向君が俺に振ってきた。

「いやあいつかつて言われても困るね。ゆりちゃん——リーダーの言うことですぐ決まるし、結構前から決まってる時もあるからちぐはぐかな？　取り敢えずイベントごとがあつたらライブするかもしれないね」

「そーいえばそうだったな。お前達が自分達でやつたりすることはしないのか？」

「ゆりっぺさんの指示無しではライブは行わないようにする方針ですので、それを知らないアホな日向三程度ならばまだしも多々さんは知っているので行わないかと」

「遊佐つて俺に厳しいよな。最初のことまだ怒ってるのか？」

「さあ？　なんのことでしょうか？」

どうやら日向君は遊佐ちゃんに何かしたことがあるらしい。

「まさかヤリ逃げ!?　日向君がそんな事する人だとは思わなかったよ。ちゃんと女に興味あつたんだね」

「しねえよ！　てか男に興味ねえから！　なんで何かと俺をホモ扱いしてるくんだよ！」

「それは日向さんがホモな様な発言をしているからに決まっています。そうですよね音無さん」

「ここで俺に振ってくるのか!?　まあ、ホモっぽいことばかり言ってくるのは認めるけ

ど」

お前のこと結構気に入ってるんだとか言ってたしね。

取り敢えず俺達の中で日向君の印象はホモだから。

「続いての質問。ガルデモメンバーと付き合いたいです。紹介してください」

「これまたガルデモの質問だね。と言うか戦線のイメージってガルデモ位しか無いのかな？」

「前回ガルデモが出てきたから、今日もまたガルデモが出てくると思って言ったんじゃないの？」

「なる程。因みにガルデモメンバーは全員俺のことが好きだから隙は——」

言う前に突如として飛来したピックが俺の体に激突して俺は戦闘不能になった。

どうやら向かいの校舎から投げってきたらしい。どんな命中率だ。

「と言う建前はさておき」

「建前って言ったぞ」

「どうせ後で半殺しにされるのは理解しているので、もうやけになったと見ていいでしょう」

「煩い！ 取り敢えずガルデモメンバーは大体百合だから無理だと思うよ。しおりはみゆきちちゃんとイチヤイチヤしてて俺に構ってくれない時が多いし、ひさ子ちゃんはま

さみちゃんと一緒にいて胸揉まれたり揉んだりしてる関係だからね」

「おつ。ピックが飛んでこなかったぞ？」

「否定できないから」

真実が入っていれば必ず文句は言えない！

これが俺のたどり着いた真実！ イッツトウルー！

「ひさ子さんからの連絡です。後で覚えておけだそうです」

「オツケーわかった。ちよつと待ってお願い死にたくない」

「慈悲は無いそうです。プギャーワロスワロス」

「遊佐ちゃん。幾ら俺でも激怒ブンブン丸だからね！」

これだけはしやいだところで、次の質問に映ることになった。

音無君割とちやつかりラジオしてるよね。お前——立派にラジオしてんよ。

「次の質問。多々さんは何故モテるんですか？ 理由を教えてください。あと死んでく

ださい」

「おーつと。その質問をしたのは戦線メンバーだな？ そんな個性豊かなNPCは存在

しないぞ☆」

でも実はここにいます☆

「多々がモテる理由かあ……。俺が言うとホモ発言されるからやめとく」

「では私が説明しましょう。まず戦線メンバー全体に言えることですが、運動が出来ません」

「そりやまあ。いつもあれだけ戦ってるからな」

「次に頭も良いです」

「うっ……。そこを突かれると確かに音無と多々位しか、頭がいい奴っていない気がする……」

「次に女性の扱いに慣れていて、女子は必ず廊下の外側。歩く時は歩幅を合わせ、話をする時は相手の話に合わせてながら否定はせずやんわりと違う方向へ仄めかすことすらします」

「女性の扱いに慣れてないよな戦線って。ガルデモメンバーとかと話さないのか?」

「あんま話さないな。別に話さなくても済むし」

ちつちつちつ。これだからダメなんだよ戦線メンバーは。

いつもリア充死ねとか良く言ってくるくせに。

「女性って言うのはいつも自分を見てもらいたいものなんだよ? そして彼氏たる者彼女の事を一番に考え、どうすれば彼女が笑ってくれるかを常に思い続けなければならぬ。愛していれば、その大切さがよくわかるようになるよ。ここテストに出るからメモ取っておこう」

「割とタメになるぜ」

「と言うか、恋愛経験豊富なんだなお前」

「多々さんは経験豊富なチエリーボーイですから」

「遊佐ちゃん？　こーんなどころでチエリーボーイとか呼ぶのやめてくれませんか
ねえ？」

俺社会的に死ぬんですけど？　抹消されてしまうんですけど？

「最後の質問。以前戦線メンバーの制服を着た銀髪の美女を見ました。あれは誰なんですか？　教えてください。そして出来れば告白させてください。好きだー！」

音無君が読んだ文を聞いて、俺達は何も言葉を発することが出来なくなってしまう
た。

ええそうですとも。思い当たる人は一人しかいませんとも。

チラリと気まずそうにこちらを見てきた日向君が正解ですとも。

「それは多々さんの女装です。貴方は女性ではなく男性に恋をしているので、諦めてホ
モになってください」

「遊佐ちゃん!?!　何を公共の電波で発言しちゃっていているのかなー!?!」

「ですが現実にはどうでしょう？　言ってみたらどうですか？　俺の趣味ですって」

「違うからね!?!　俺が罰ゲームで着せられてただけだからね!?!　と言うか遊佐ちゃんは

俺の事嫌いなのだ!? いじめたいのだ!」

「いえ。ただここに写真があるので校内全域に貼ろうかと」

「おつとストップ。やめてください遊佐様」

「表をあげい」

「ははっ!」

「テラワロス。もう一枚写真いいですか?」

「——音無君。俺帰る」

「待て待て待て待て! 俺一人でこいつを抑えられる気がしない! お前も残ってくれ

多々!」

音無君に頼られたので渋々戻るけれど、俺のHPはマツハで削られていた。

やっぱりこの子俺の天敵だったわ。勝てる気がしない。

「次は前回好評だったショートコントのコーナー。因みに今回はツツコミ役は日向君にパスします」

「俺かよ! てか音無もボケるのか……。よし。お題はなんだ?」

ツツコミ役どころか司会役までパスしてしまった為、日向君がお題を引いた。

「お題は——生徒と教師」

「じゃあ俺が生徒役で」

「私も生徒役をします」

「俺も生徒役か。なら先生役は日向だな」

「すぐに決まって良かったのか良くなかったのかわからねえけど、これでやってみるか

！ ショートコント、生徒と教師」

「先生。実は私——腐女子なんです」

「おう知ってる。つて音無と多々が入れるところがねえよ！　なんで唐突に腐女子の告

白してんだよ！」

「でも知っていたんですよね？　私が日向さんと音無さんで同人誌を書いていたこと

を」

「なんだよそれ！　知らねえよ！」

「二人はハモる程仲が良いと。因みに多々さんを元にしようとするので関根さんに追いか

けられるのでしていません。二人はフリーなので使いやすいです」

「しおり、やっぱり俺お前のこと愛してるわ」

「うおおおおおおお!!　いつの間にか俺と音無の同人誌が書かれているだとおお

おおおおお!!」

「なあ、それもしかして配ってるのか？」

「関根さんと入江さんが買って来てます」

「しおり。お前は本当に俺のことを愛してくれているのかわからないよ」

「愛してくれていますよ。そして音無さんや日向さんと絡んでくれると私も愛し始めます」

「俺の愛はしおりの愛で一杯一杯なのでそれはいらないます」

「——集収がつかねえ！ もう一回行くぞ！ ショートコント、生徒と教師！」

「先生実は——好きな人がいるんです」

「そうなのか……一体誰なんだ？」

「実は——リヴァイ兵長です」

「——待て待て待て待て！ いい加減音無達に回す前に終わらせるのをやめろ！ なんだよりヴァイ兵長つて！ 音無も顔作らなくていいから！ 声優ネタをブチ込むのがラジオとか考えなくていいから！」

「いや。これが普通なんだが」

「ふーっうーじゃーなーいー！」

「うわー。日向君のツツコミしか聞けてない。と言うか俺達が会話に参加できない」

「ショートコントのこのお題終わり！ と言うか遊佐が喋るとそこで終わっちゃう！」

「次のお題は——クリスマス」

「クリスマス!? どうやってクリスマスをするってんだよ！」

「取り敢えず役割は、音無君が主人公。遊佐ちゃんがヒロイン。日向君はトナカイ。俺は近くに住んでる人役」

「待てい！ トナカイってなんだよ！ サンタ役もないんだつたらただの家畜じゃねえか！」

「野生かもしれないよ？」

「どっちでも関わられなくなるから！ トナカイがクリスマスに関われるのはサンタさんの存在がいるからだからー！」

「じゃあサンタ役でいいよ」

「俺が悪いみたいな言い方するなよ！」

「シヨートコント、クリスマス」

「ああ……今日も寒いな」

「そうですね……。まるで日向さんのいつもの行動を見ている皆の心境みたいです」

「お二人さん。このケーキをやろう」

「ありがとうございます。きつと彼女も喜ぶ」

「ああ。もしあの子が生きていたら——俺はこの子とこのケーキを食べただろう。だけれども……にあの子はいない。だから——これは君達で食べてくれ」

「多々さん……。ありがとうございます。貴方と貴方の彼女の代わりに、私達が幸せに

食べさせていただきます」

「ありがとう。俺達は必ず幸せになる。貴方と、貴方の彼女の為にも」

「二人共……」

「ちよーつと待つて!? 俺が入れる雰囲気がないんだけど!? ここでサンタがメリークリスマスと言つて現れても悲しいだけだから! なんてそんな思いテンションになるんだよ!」

「せつかくの雰囲気台無しじゃないか」

「日向君もつと空気読んで欲しいよね」

「日向さん、最低です」

「と言うか最初の日向さんのいつもの行動を見ている皆の心境みたいってなんだよ! それ伝わらねえだろうよ! と言うか本気でそう思つてんのかよ!」

「まあ思つてる」

「思つてるよー」

「はい。思つてます」

「俺もうこいつら信じられない! なんでこいつら俺にそんなに冷たいんだよ!」

と言う風に話をしていると、日向君も立ち直つてきたので俺達は次にどうしようか考え始める。

ていうかこれずつとやってるわけにもいかないし、次の企画に移りたいんだよね。

「じゃあ次のコーナー。日向秀樹の殴るなら俺を殴れ！」

「やめろ！ 元祖に申し訳ない！」

「じゃあ何すればいいのさ。日向君は何かあるの？」

「え、いやそれは……」

「シヨートコント。遊佐ちゃんと日向君」

「うつひよー！ こんなところに可愛い子がいるぜえ！」

「最低です。黙ってください。このゴミ虫が」

「それ違うキャラだから！ お前の声じゃないから！」

「声が同じじゃなかったらダメだといつから錯覚していた？」

「なん、だと……。じゃない！ なんだシヨートコント遊佐ちゃんと日向君って！ む

ちゃぶりにも程があるだろー！」

「割と楽しそうにしてたじゃん。なんだい文句ばかり言いやがって」

とと言うよりも最後だし、そろそろエンディングかな？

「じゃあ本日マジオもそろそろ終わり！ わがままな日向君も面倒なので、次回から

は呼ばないことにします」

「お前ら俺がつつこまなかったら大変なことになってましたからね！」

「本日の最後はC r o w S o n g！ ではまた次回！」

俺達は機材を回収すると、すぐに撤退した。

取り敢えず今回は遊佐ちゃんも仲良くなれたからいいでしょう。

第4章 《貴方に贈る恋の歌》 Song of the

love presented to you》

026 《Cure》

新しい音が聞こえる。

俺の頭を活性化させる様なその音を聞きながら、俺は一人で拍手をした。

「いいんじゃないかな?」

「そう? それなら嬉しいけど」

まさみちちゃんがギターを外して、そう笑顔で言った。

今俺とまさみちちゃんは二人で屋上に来ている。と言うのもまさみちちゃんが俺を誘ったからだ。

「ひさ子も関根も入江もバンドとしての曲ばかりだから、普通の人で音を聞いてくれる人は多々しかいなかったんだよ」

「それならしょうがないね。皆バンド大好きっ子だから」

俺は自分の腰についている日本刀を撫でながら、まさみちちゃんを見た。

この日本刀はギルドに頼んでいたもので、非常に優秀な日本刀となっている。

要は天使ちゃんの手ドソニックに対抗できる様に、非常に硬度の物を探した結果日本刀に行き着いたんだよ。

まあこの刀はある意味で、俺が他の人と繋がってることを示せてるのかなあ？

「多々は、歌わないのか？」

ドクンと、俺の心が跳ねる気がした。

俺はかつて感じたあの歌を無理矢理好きにさせられている感覚が嫌で、歌うことをやめていた。

風呂場ですら歌わないし、しおりという時は勿論いつだって歌っていないかった。

「ホントはね、歌いたいんだ」

「ならどうして……」

「でも何故か知らないけれど、俺は大切な人の為に歌いたはずだったのに皆の前で歌ったら凄く楽しく感じると同時に——違和感を感じた」

あの時の感覚を思い出すと、今でも吐き気がする。

「違和感？」

「楽しくされているんだ。俺は楽しくないはずなのに、酷く不自然に楽しいと言う思いを感じている。無理矢理楽しいと感じさせられている様なあの感覚が、俺の心の中で留

まってるんだ」

楽しく歌うことすら、俺には許されなかったのかと何度思ったことか。

「歌いたいのに歌えない……か。私もそうだった。歌いたい歌が歌えなくて、そしてこの世界に来た」

そうしてまさみちゃんも、自分の過去を語りだしてくれた。

「私の両親は喧嘩が絶えなくてね。いつもいつも一緒にいれば喧嘩をして、ずっとそれを見ないように部屋に閉じこもって耳を塞いでたんだ」

「それは、酷い家だったんだね」

「そうだった。でもそんな時に、CDショップで聞いたSAD MACHINEの曲で救われた。音楽の道に目覚めて、雨の日にゴミ捨て場に捨てられていたアコースティックギターを拾って、路上ライブをしながら音楽活動を始めたんだ」

路上ライブで音楽活動なんて、本当に音楽が好きじゃなかったらそんなこと出来るはずがない。

それに雨の日にゴミ捨て場に捨てられていたアコースティックギターって、雨の日に捨てられていた子犬を拾ってきたみたいに言われるとキュンキュンしちゃうじゃん。

心もぴよんぴよんし始めるからね？

「成績はこれでもかなり良かったんだ。でも音楽で生きて行きたかったからアルバイト

をしながらオーディションを受けてた。毎日バイトとオーディションを繰り返してたけど、案外楽しかったんだ」

案外楽しかったと言う言葉に、ああこの後に何があったのかを確信した。

何故なら家庭環境が壮絶なだけで、この世界に来るとは思えなかったから。

「そんな時だった。いつものように父さんと母さんが喧嘩してて、何故か知らないけれどその日は止めたいと思ったんだ。そして止めようとして——父さんにビール瓶で殴られて脳梗塞を起こした。でもそれに気がつかなくてバイト先に突然意識が無くなつて、起きたら声が出なくなつてたんだ」

声が出なくなつていた。それは音楽を志している者達にとつて、一番最悪なことだ。

歌いたいと思つていたものが歌えない。

俺なんかとは全然違う、歌いたいものが本当に歌えなかったんだ。

「それでそのまま18歳で死んで、私はここに来た」

それを静かに聴き終えた俺は、拳を握り締めていた。

人の過去を聞くのは辛すぎる。だって、俺とは違い本当に苦しい思いをしているのだから。

俺は——ただ上乗せされただけの記憶だから。

「なあ多々。私は——自分の好きな歌を歌えられているのかな？」

その問いに、俺は口を閉じたままだった。

歌えてるよと言うことは言いたいけれど、それを言ったら彼女は どう思う？

自分が歌えていることを感じて、消えてしまふんじゃないのかと。

「答えられない……よな。ごめん。そこでその答えを聞いてしまったら、私が消えてしまふと思つたんだろ？」

「いや、その……」

「そんな謙遜しなくていいよ。私達が元々あんたが消えることができるまで消えないつて約束してたんだ。その相手に自分が消えるかもしれない質問なんて、少しやりすぎたと思つてる」

違うんだまさみちゃん。

俺は絶対に消えることが出来ないんだ。

だから、もう消えてくれても構わな——。

そこで俺の思考は止まってしまった。

消えてしまつても構わないと、本当に思つたのか俺は？

本当に目の前からまさみちゃんが消えてしまつてもいいと、思つたのか？

「——まさみちゃんは、自分が好きな歌を歌えてないと思つたんだよね？」

「え？」

「だから俺に、自分が普通は歌わない様なバラードの曲を歌った。それがまさみちゃんが世界に聞いて欲しい曲だったから、俺に聞いてもらったんでしょ？」

その言葉に、まさみちゃんは何も返せなかった。

だって多分それが本当のことなんだから。

「まさみちゃん。これはしおりにも言っていないことだけど、俺は消えることが出来ない。例えば俺の未練が無くなっても、俺は消えることが出来ないんだ」

「待って。それは前も聞いたはずだ。けどもう一度なんで——」

「何故なら俺は——NPCなんだ」

空気が凍ったのがわかった。

「ちよ、ちよと待ってくれよ。だって多々はNPCって単語を使ってるし、私達と一緒にいつもルールを破ってるじゃないか！」

「ああ。でも気がついたんだ。ギルド降下作戦があったあの日、俺は消えてもいいと思える程皆を助けることに安堵を覚えた。なのに俺は消える予兆すら無かった。消えていいとも思ったのに」

「でも、だからって——」

「さっき言ったあの感覚も、何者かによって埋め込まれた感情だった。だから俺は消えることすらできずに、永遠にこの世界に囚われ続けなきゃならないんだ」

「そんなの、尚更許せるかよー」

まさみちゃんの叫びを聞いて、俺は嬉しく思った。

そこまで俺のことを大切に思ってくれてるって言うのは、分かっていてもやっぱり嬉しいものがある。

だっていつも一緒にいるんだから、表裏もなく俺達は接しあっているんだ。

互いの感情だって大体はわかる。

「しおりは多分、気がついてるんじゃないかな？ あいつはあれでいて察しがいいからな」

「だからって、あんたが消えられないなら私達は絶対に消えない！ 約束じゃないか！」

まさみちゃんが言ったことは確かに約束したことだ。

でもそれは俺が生きていた人間だったと思っていたから、その約束を嬉しいと思っていた。

だけど今からしてみれば、誰かを束縛していると言う鎖にしかならない。

「でも俺はもう自分が人間じゃないって気がついたんだ」

「そんなの関係ない！ 私達はあると一緒に居たいからそう言ったんだ！ 勝手に自己完結して、私達を置いてくくな！」

驚く程大きな声を出されたことに、流石の俺もビクビクしていた。

だっていつも音楽にしか興味がないまさみちゃん、凄い大きな声を出したんだよ？
「私達を、あんたを希望としてる私達を見捨てないでくれ！」

「どういう、こと？」

「私達だって辛い過去を持つてる。でもそれ以上に辛い過去を持つてる多々が明るく振舞ってるからこそ、私達だって強くないとダメだとわかったんだ！ だから私はあんたにこの歌を聴かせた。 My Song を聞かせたんだ！」

俺が希望？ 俺の過去なんて、誰かわからない人のものかも知れないのに。

それでも彼女達は、俺を信じてくれていたんだ。

自分が情けなくなつたし、こんな自分が理不尽だと思つた。

勝手に自分が消えるまで生きて欲しいって言つて、自分が消えられないとわかつたら消えてくれと頼む。

そんなの——許容できる訳ないじゃないか。

声が出なくて苦しんだ子が、こんな声が出なくなる様な叫び声をあげながら怒つてい
る。

涙を流しながら俺の両肩を掴んでいる。

「私とひさ子と入江は、関根みたいなあんたの特別にはなれないのかもしれない。でも、親友にはさせてくれ。お前が困ったときに話せる、親友にしてくれ……。じゃないと、

何のために私達が決意したか、わからなくなるじゃないか……」

自分の烏滸がましさに腹が立つ。

自分本位な考えしか出来なくて、他人のことを考えられなかった自分に無償に腹が立った。

いつもそうだ。

記憶にある俺は自分のことしか考えられなくて、周りに目を向けてみたら時既に遅し。

間に合わなくなつて悔しくなつて、未練となつてこの世界に来てしまった。

俺は——何も変わつてないじゃないか。

「私達はお前と共に行く。例えゆり達が消えても、戦線が無くなつても、そこに多々がいるなら私達はそこに行くんだ。それが私達の決め事だ。あんたが勝手に決めたことなんて知らない」

俺は、しおりしか愛することはできない。

だけれど男女間の関係は、愛がなければ成り立たないものなのか？

友達に、親友になることだつて出来るんじゃないのか？

それを理解せずに自分から身を置こうとしていたのは俺だ。

しおりに迷惑だからと関わりを少なくしていたのは俺だ。

でも——そんなのは俺の都合じゃないか。

勝手にしおりに迷惑だと思つて、勝手に距離を離れた方がいいと思つた俺の都合じゃないか。

そんなことでガルデモを、俺の仲間達を悲しませる様なことを言つたのか俺は。

何なんだ。何様のつもりなんだ。

例えNPCかもしれないなくても、例え植えつけられた感情かもしれないなくても、ここに居る俺は俺じゃないか。

誰がどう見たつて、ガルデモメンバーと一緒にいる雨野多々じゃないか。

自分で自分が信頼できなくて、自己不安に苛まれて吞まれていた馬鹿が一人いるだけじゃないか。

最悪だ。どうにでもなつてくれ。

だからつてこの子供達を見捨てるわけには行かない。

俺を頼つて、一緒に居てくれると言うのなら俺だつて考えがある。

「——見つけてやる」

「え？」

「俺が必ず、お前達と一緒にいる方法を探してやる。まさみちゃんがもし今の現実に満足して消えそうになつても、そこまで居たいつて言うなら必ず方法を見つけ出してや

る。それが一緒にいて欲しいと願った俺に出来る、君達への贖罪だ」

無いのなら見つければいい。

俺が消えることが出来る可能性を。

俺のことを考えて歌いたい曲を歌わないのなら、歌いたい曲を歌えるようにしてやる。

何がNPCだ。何が人間だ。

「俺は——ガルデモのマネージャー兼プロデューサーの雨野多々だ。それだけは誰にも譲れない」

「多々、あんた——」

「待たせたねまさみちゃん。俺が悪かったよ。こんなに可愛い子を泣かせちゃってさ」

指で軽く流れていた涙を拭うと、まさみちゃんは恥ずかしそうに腕でこすって涙の跡を綺麗になくした。

勿論まだ目は赤いけれど、それでも嬉しそうに笑うまさみちゃんを見て良かったと思う。

何を暗くなっていたんだ俺は。

結局、自分がしたいことが出来てないじゃないか。

復讐なんて、後回しだ。

子作りだつて、後回しだ。

結婚だつて、後回しだ。あ、順序逆か。

俺は今雨野多々で、しおりと付き合つていて、ガルデモのマネージャー兼プロデューサーで、死んだ世界戦線のメンバーなんだから。

なんだよ。俺を証明するものは一杯あつたんじやないか。

この場所に俺が俺である証明をする必要なんてなくて、ここにいる俺こそが俺だと証明出来てたんじやないか。

「いきなりそんなこと言うのは、卑怯だぞ」

「わかっているからダイジョーブ！ 迷惑かけてごめんね。それと——まさみちゃんは歌いたい曲を歌えてるよ。皆と一緒に歌いたい曲をね」

俺が軽くそう告げると、嬉しそうに頷いてから立ち上がった。

「涙の跡はあるけれど、俺が責められるだけでダイジョーブ。一緒に行こうよ。俺は皆のマネージャーだからさ」

「そうだな。じゃあ最後に——」

そう言つて振り返つた瞬間、まさみちゃんに唇を奪われた。

——え？

「知ってるか？ 外国だと挨拶にもキスするらしいぜ？」

「え、あ、うん。ってまさみちゃんも顔赤くなってるじゃん！」

「赤くもなるさ。私だって人間だからな」

「もー！ 後でしおりに怒られるじゃんよ！ 俺は隠し事はしたくないタイプなんだぞ
！」

「知らない知らない。私は私でやりたいことはやるタイプなんだ」

まさみちゃんがアコースティックギターを片手に走って屋上から降りていく。顔は赤い。

その後を追って俺も走って屋上から降りていく。顔はまだ赤い。

その顔の赤さを感じてああ俺は人間なんだなと思いつつ、ガルデモが待つ軽音楽部の部室へ向かった。

——友情エンドなのにキスとは、ヒロインに含まれるのかなあ？

そんな馬鹿みたいなことを考えて、俺は部室の扉を開いた。

いつもよりも綺麗に見えたその部室の中で輝く少女達に、俺は声をかけて。

「遅れてごめんね！ スーパーマネージャー兼プロデューサーの多々君が、今日も練習見ちゃうよー！」

絶対に、消える方法を見つけ出す。

S I D E : ???

「あらら。またプログラムを書き換えないと」

全く多々は色々な女の子を巻き込んでいくね。

でも結局の所恋心があるわけじゃないし、女の子の方もからかったに近いキスかな？
だけど彼女がしたことは大きいと思うし、私からも感謝したい。

多々が自分が人間だと理解し、彼女達と生きて消える道を選んだことは私が一番望んでいたことだ。

幸せを教えてあげて欲しい。

嬉しさを教えてあげて欲しい。

満足を教えてあげて欲しい。

「ありがとう岩沢ちゃん。今度あつたらよろしくね」

そう。まだまだ私の所に来れるまでには時間がかかるのだから。

027 《I Like Song》

「今回のオペレーション、人が注目することが目的なんだよね？」

今回のオペレーションは天使エリア侵入。

つまり女子寮の天使ちゃんの部屋に入ろうって言う空き巣的な行動なんだけれど、相手が天使ちゃんだから許されるであろう。

因みにしおりの部屋に突入できるのは俺だけで、他の男子が入ってきたらその首貰い受ける。

「そうよ。それで——多々君の頬についている紅葉は何かしら？」

「お察しの通りでございます」

「セクハラをしたの。最低ね」

どうやらみんなの中ではセクハラをした扱いになっただけらしい。

新曲は俺達が秘密で運ぶことにした。

その方が盛り上がるだろうし、俺がその方がいいと思っただけからだ。

「何か考えがあると見ていいわね？」

「女子寮から見れないギリギリの所でライブを行う。今回のライブのメンバーは、しお

り、みゆきちちゃん、ひさ子ちゃん、まさみちゃん、そして——俺だ」

「貴方も歌うの？ 確か学園祭で歌ったのよね？」

その言葉に頷くと、繋げる様に日向君が口を出してきた。

「因みに多々の人気は凄いなんだぜ？ その時はバスケの試合でバスケ部に大差をつけて勝った英雄なだけじゃなく、その後出店で美味しいと評判になりガツポガツポ。更にはその後バンドまで披露って言う無茶苦茶ぶりだ」

「なんつーか、やっぱ多々ってすげーのな」

音無君が尊敬の目で見えてくれたけれど、今回はあくまでも俺とまさみちゃんの夢を叶える為の土台になってもらうからね。

「集客数ならその方が上か……。いいわ多々君。貴方にまたプロデュースをさせる。ただし前回の様に今詰めすぎて餓死しないように！」

「りよーかい。今回はしおりとまさみちゃんが見張るらしいから大丈夫さ」

解散と言われてから、俺は手に持ったマイクをクルクルと回しながら移動する。

軽音部の部室で現在活動を行っているメンバーに対し、まだ俺が参加することは伝えていない。

「やーやー皆、ただいま」

「出た最低男」

ひさ子ちゃんの言葉に胸を打たれた俺はその場に凍りつき、それからガクンとうな垂れた。

そのまま窓の方に向かうと、足をかける。

「ちよつと……死んでくる」

「待て待て待て待て！ お前が悪いわけじゃないのは岩沢から聞いてわかってるから！

関根だつて怒つてないし、からかっただけだから！」

しおりの方を見ると、頷いていた。

どうやら本当に全てを理解した上で怒っていないらしい。

「タツ君の顔を見れば、タツ君が今まで悩んでいたことを打ち明けて気分が良くなった

ことくらいわかるよ。だってあたしはタツ君の彼女だから」

「……ごめんしおり。一番に話せなくて」

「距離が近ければ近いほど、話せないことはあるもんね」

認めてくれたしおりに謝つてから、俺は自分の全てを話した。

自分がNPCかもしれないこと。

自分が自分であることを認めさせようとして必死に生きて、結果的に周りが見えなく

なってしまったこと。

そのせいでまさみちゃんを泣かせてしまい、最終的にキスをされて仲直りしたこと。

まあ実際に会ったことだけれど書いてみると割と重かったりありえなかったりするよね。

「そう……か。お前はそんな大きなことを抱え込んでたんだな。同じガルデモのメンバーなのに見抜けなかった。わりい」

「ごめんね多々君。ずっとただ下ネタとネタが好きただけな男の子だと思つてた」
 やつぱりみゆきちちゃんは天使なのに俺に冷たいよう！

「こらしおり！ 可愛い奴めと言いながら抱きつかない！ そこ変われ！」

「正直に言つてあたしは気がついてたよ？ でもタツ君が言うまで待つてたんだ」

「ええ……。流石俺の嫁！」

「イエスフォーリンラブ！」

「うわつ。結局またお熱いカップルに逆戻りかよ。いいのかよ岩沢」

「いいさ。私達にはこの日常があつて、多々がその方法を見つけられるまでこれが続けば」

うっわー。まさみちゃんが達観してこつちを見てて少し心苦しいよ。

何？ もしかしてまさみちゃんつて俺を困らせる為にキスしたの？

——それはないか。まさみちゃんにはまさみちゃんの思いがあつて、俺にはそれに応えることができなかつたと言う現実があるんだから。

「じゃあ今回の作戦……の前に一つだけ聞きたいことがあるんだ。いいかな？」

「ああいいぜ」

「まさみちちゃん。——好きな歌を歌う覚悟はあるかい？」

唐突に告げた俺の言葉に、まさみちちゃんは止まってしまっていた。

好きな歌を歌うって言うのは、言葉にする程簡単なことじゃないんだ。

勿論好きな歌の中には、バンドではできない歌もあるんだから。

「おい多々それは——」

「歌う覚悟はある。私は自分の歌が通用することを学んで、今回覚悟を決めることができた。だから、覚悟はある。出来ている」

まさみちちゃんの視線を真つ直ぐに受けて、俺はその瞳に嘘偽りが無いことを確認する。

答えは勿論、嘘は無いだ。

「なら決まりだ。今回のライブをもつて、まさみちちゃんをガルデモのリーダー及びメインボーカルから外し、別の人物をガルデモのメインボーカルとして受け入れる。ガルデモのリーダーはひさ子ちゃんにして、副リーダーをみゆきちちゃんとする」

「ちよつと待てよ多々！ お前今自分がなんて言ったのかわかつてるのか!？」

ひさ子ちゃんが俺の胸倉を掴んで、壁に叩きつけた。

背中はかなりヒリヒリするし、痛い痛いけれどここだけは譲れない。

「ああ分かつてる。でもこれは必要なことで、いつかはそうしなければならなかったことだ」

「こいつがッ！　どんな思いでガルデモをしたのかわかつてるのか!？」

「分かつてる。だからこそ、ひさ子ちゃんもわかるだろ？　ここで歌い続けたって、まさみちゃんが感じるのには歌えたと言う思いじゃない」

俺はひさ子ちゃんの方を真つ直ぐに見て、告げた。

「次回を引退ライブとして、ガルデモからまさみちゃんを脱退させる」

「てめえ……!？」

「待つてくれひさ子！　多々。それは本気で言ってるんだな?！」

まさみちゃんが俺の方を見てきて、俺はゆっくりと頷いた。

まさみちゃんの思いは、過去は、既に俺の心の中で理解できていた。

好きな歌を歌いたいと言う願いに対して、バンドでしか歌えないのであつてはまさみちゃんは永遠に歌を歌うことが出来ない。

「まさみちゃん。好きな歌を歌う覚悟って言うのはこういうことだよ」

「ああわかつてたさ。多々が私のことを思つて言つてくれてたこともさ。あんたはそういう奴だ。自分が全てを背負つて、何とかしようとする」

ふっと笑ったまさみちゃんは、真摯な目でひさ子ちゃんを見た。

決意を秘めた瞳を見て、ひさ子ちゃんは手を離してから苦々しそうに俺を見る。

「代わりのメンバーは目星もついてる。それと今回のライブ、俺も参加するつもりでいる」

「お前、歌ったら強制的に自分の感情を変えられるんじゃない——」

「構わない。門出は盛り上げないと、可哀想だろ？ 幾ら自分が好きな歌を歌いたいからと言つても、彼女がこのガルデモで活躍してくれていたことは周知の事実だ。なら俺達は最大限に盛り上げる様にするまでだ」

もう全てを自分で背負うような真似はしない。

と言うかしたら今度からしおりだけじゃなくてまさみちゃんからも拳が飛んできそうだし、変なこととはもうできないなあと苦笑しつつもひさ子ちゃんの肩を叩いた。

「無茶を言ってるのは分かってる。でもまさみちゃんの為なんだ。協力して欲しい」

「……ったく。お前はいつもそんなだから、周りから馬鹿つて言われるんだよ。最初から言えばいいんだ言えよ。岩沢の為に岩沢をバンドから抜けさせて欲しいって。そう言えば誰も反対なんかしないよ」

「でもまさみちゃんだってバンドを抜けたくて抜けるわけじゃないからさ。それに——高々一定時間だけ抜けるんだから、そこまで憎む憎まずの関係にしなくてもいいでしょ

「？」

部屋の空気が止まった。あれ？ 俺なんか変なこと言った？

「待て多々。お前つまり、一時的に岩沢をバンドから放すつもりだったんだよな？」

「そうだよ。だからNPCには無期限の活動停止つてことでラストライブつて——」

「ややこしい言い方するんじゃないか？ そんな言い方したらもう二度とガルデモに戻つてこないみたいない方になるだろうが！」

「ええ!? だつてまさみちゃんの歌いたいたい曲の中にも、バンドで歌わなきゃいけない様な曲もあるだろうけど、結局バラードとかはバンドとは合わないからその歌を歌うだけの時間を貰おうかと——」

「お前は伝え方が下手すぎる！」

ひさ子ちゃんにすごい怒られたけれど、まさみちゃんはクスクスと笑い始めていた。

その笑顔を見てひさ子ちゃんも怒るのをやめ、ちよつと照れている。

「ありがとな、ひさ子、多々。やつぱり私はこのバンドが好きだ。勿論関根と入江もな」

そう言つたまさみちゃん表情は凄く嬉しそうで、この考えを出してよかつたなと思えた。

でも俺が勝手に話を進めたのは事実なので、後でしっかりと謝ろう。

「多々はA l c h e m yは歌えるな？」

「勿論だよ。全部の曲を歌えるからバツチリ。楽しみにしててよ、まさみちゃん。とうか久しぶりにしおりとみゆきちゃんとかと合わせるから頑張らないとね！」

「あたしに任せなさい！ 全部完璧に再現してやるぜい！」

「わ、私も頑張る！ 岩沢さんの最後のライブなんだから！」

いや別にこの世界の最後のライブと言う意味ではないんだけどねと思いつつも、俺達は決めたんだ。

必ずこのライブを成功させるって。

「——で、こういうことなのね」

「ふあい」

思い切りゆりちゃんにボコボコにされた俺は、正座をしていた。

ゆりちゃんに全く話さずにまさみちゃんの無期限活動停止を言ってしまったので、非常に怒られたのだ。

「彼女はそれをすると消えるのかしら？」

「普通……ならね。ただ一つだけ約束してるから、多分消えないと思うよ」

「約束ね。貴方が消えるまで消えないと言う願いだったかしら？ 本当にそれだけで何

とかなるのかしら？　もしも岩沢さんが消えてしまえば、陽動部隊は大打撃を受けることになるわ」

陽動部隊が活動できなくなれば、勿論オペレーショントルネードを行うことも出来なくなる。

ある種の賭けとも言えるこれだけれど、戦線の皆に言わないならば消えてしまってもいいと思ってる。

この世界で消えると言うことは報われると言うことだから、それはある意味この世界に満足できたってことになる。

そうなれば皆も踏ん切りがつくだろう。

「そうだったら俺が責任を取るよ」

「そう。なら安心ね。それと、多々君。貴方に一つだけ言っておくことがあるの」「何？」

正座をやめてから、俺は立ち上がってゆりちゃんの方を見た。

「この世界に、銀髪の美女を見たと言う者達が何人もいるわ」

「それって俺が女装した時の奴!？」

「いいえ違うわ。一般生徒と同じ格好をした、長い銀髪の美女を見たと言うの」

その言葉に——俺の思考は停止した。

頭をフル回転させろ。

覚えているはずだその存在を。

そしてその存在が、この世界にいることがあると言う可能性を。

「貴方じゃないことはわかっていているわ。心あたりは——ありそうね」

冷や汗が止まらなかつた。

この世界に、姉さんがいるかもしれない。

だがどうして現れない？

姉さんがこの世界にいるならば、俺のラジオを聞いてすぐにでも俺の所に来るはずだ。

なのになんで、この世界で俺は会っていないんだ？

「この件については戦線メンバーで情報収集をしながら調べるつもりよ」

「なんでそんな……」

「その噂にはね、続きがあるの。その美女は微笑みながら言ったらしいわ。【貴方は人間かしら？】って」

ゾクリと泡立つように俺の体を鳥肌が包み込む。

聞いたことがあるセリフだ。最初のラジオの時にも聞いたことがあるはずだ。

「なんで、噂なんだ？」

「そりゃいいからよ。この世界に長い銀髪の美女なんて。天使の可能性も考えたけれど、それは無い。何故なら彼女は生徒会長で、この世界のNPCは生徒会長を見たと言わずだもの」

この世界には姉さんがいるかもしれない。

そして姉さんは俺が考えている通りなら、俺と同じ存在か俺以上の存在だ。

「何かが起こり始めている。多々君もそれだけは頭に入れておいて」

「わかった」

俺は天使対策本部を出てから、自分の体を抱えた。

ありえない話かもしれないし、もしかすると本当に単なる噂なのかもしれない。

銀髪の美女と言うセリフも、姉さんとは違う人なのかも知れない。

でもなんだこの違和感は。

何かを忘れている様な違和感は。

一体何を、俺は覚えていないんだ？

一体俺の体に何が起きたんだ？

異変を感じる。どうしようも無いほど大きな異変を。

それが酷く恐ろしく醜いものだというのにも、俺の心は気づいている。

「俺は、これをなんとかしなきゃならない」

そう確信めいたことを思いながら、歩き出した。

028 《All Night》

俺はとある人物を訪ねていた。

「やつほーゆいにゃんお久しぶり！」

「これはこれは多々先輩じゃないですかー！」

それはゆいにゃんだ。以前一緒にライブをしてからかなり長い間出番の無かったゆいにゃんだけど、ここで漸くゆいにゃんの出番が来たのである。

「どうかしたんですか？ 関根先輩に飽きてあたしを誘いに来たんですか？」

「俺をそんな貧相な体で何とか出来ると思うなよ。それにしおりのことを諦めるはずがないだろ」

「誰が貧相な体だコラア！」

と言う風に常に喧嘩腰になってくるゆいにゃんにため息を吐いてから、俺はその振り回す腕を右手の前に出すことで止めた。

「今回ここに来たのはきちんとした用があるからだ。まずはこれ、ポスター」

「あ、そうですか。ありがとうございます」

取り敢えず宣伝用のポスターを見たゆいにゃんは止まっていた。

まあそうだろう。そこには岩沢ラストライブとデカく書かれているのだから。

「え、えっと先輩これ——」

「そこに書いてある通りだ。まさみちゃんは自分の音楽を追い求める為に一時的にガルデモを抜ける。そのポスターを貼るのが一つ目の……ってなんで泣き出してるの!？」

「い、岩沢さんはもう歌ってくれないんですか……?」

「違う違う! はいこのハンカチで目元とか拭きな。女の子が簡単に泣くもんじゃないよ」

ハンカチを渡してから、俺は再びため息を吐いた。

この子が本当に——ガルデモのメインボーカルとして相応しいかを見に来た。

「ここだ。次期ガルデモのメインボーカルに相応しい人物がいなか話してた時に、二人の名前が上がったんだ」

「二人、ですか?」

「二人は俺。まあこれでも軽音部でボーカルしてたし、ギターも弾こうと思えば弾けるからな」

それに対してゆいにゃんは納得していた。

以前一緒に歌ったこともあるし、先輩ならと言っているゆいにゃんに認められる気がして少し嬉しい。

「そしてもう一人が、ゆいにやんだ」

「あ、あたしですか!？」

「そう。因みに推薦したのは俺とまさみちゃん。ひさ子ちゃん達は知らなかったみたいだけれど、君が一人でライブしてたのをまさみちゃんは良く見てたらしいよ」

「い、いわしやわしやんがあしやしりのりやいぶを!？」

「ごめん翻訳してくれると助かる」

驚きすぎて何語喋ってるかわけわからなくなっていたゆいにやんを落ち着かせてから、本題を話す。

「ゆいにやん。俺は俺よりも君をボーカルにしたいと思ってるんだ。だから、引き受けてくれないか?」

真つ直ぐにゆいにやんの瞳を見て言う。

ゆいにやんの瞳にあるのは喜びと、困惑。

本当に自分でいいのだろうかと言う葛藤が、彼女の中で起こっているんだろう。

「まあそんなにすぐには決められないから、今日の夜しおりの部屋に来てくれる?」

「関根先輩の部屋にですか?」

「そう。知つてると思うけれど俺達はいつもパジャマパーティーをしてるからね。ちよつと見に来てご覧?」

「はー」

嬉しそうに応えるゆいに見て、前途多難だなあと思った。

俺の予想は当たった。

「……」

ゆいによんにとって憧れの人物四人がゆいによんを取り囲むように座っているのだから、ゆいによんが黙ってしまうのもしょうがないだろう。

つまり言えば、S M A P 好きの周りをS M A P が囲む様なものなのだ。

いつもテンションマックスのゆいによんでも黙ってしまうのは仕方がない。

「ってわけで、この子が俺とまさみちゃんが推薦したゆいによんです。しおりとみゆきちちゃんは知ってるよね？」

「あの時一緒にバンドした子だけい！」

「覚えてるよ」

「ってわけでゆいによんのことを知らないのはひさ子ちゃんだけです」

そうなのかと呟いたひさ子ちゃん。軽く疎外感を受けている様ですが、そんなことは無いから大丈夫。

だってひさ子ちゃんは元々胸の大きさを疎外感を受けてるから。

「えっと、その……ここは天国ですか？」

「落ち着けゆいじゃん。ここは現実で、天国なのはお前の頭の中だけだ」

「誰の頭がヘブン状態だこのやろう！」

「と言うわけでノリもいいです」

自分がどういいう状況にいるのか思い出したゆいじゃんが再び黙る。

もしかしてこの子割とめんどくさい子？

だとしたらもうごめん無理だわ状態に変わるだけなんですけどね。

「取り敢えずだ。ここはそういうことを話す場所じゃないだろう？ パジャマパーティ

しようぜパジャマパーティ」

「おう……。いつになくまさみちゃんかノリノリだ」

「たまにはいいじゃんか。取り敢えず、戦線のメンバーで誰が一番カッコイイか、加点方

式で考える方でやろうぜ」

因みに前回は減点方式でやった結果、最初100点だったはずの持ち点が――1000点までなってしまう無難な音無君が優勝しました。

「今回は誰をエントリーさせる？」

「前回は音無、松下五段、藤巻だったから今回は、日向、多々、TKでどうだ？」

なんというか無難な様で難しいメンバーを選んだなひさ子ちゃん。

「お前それやめてやれよ。前回それで——100点つけただろ？」
「えー。じゃあ11点」

ごめん。俺には君を救うことが出来なそうだよ。

因みに内心喜んでるから別に悪いとかそういう気分では一切ない。バカツプルの名は伊達ではない。

「最後に俺か。TKは優しいし、いつも何かと気を使ってくれるから85点」

最終的な点数は256点でしたと。

TKの点数256と付けてから、次の人物に移る。

「次は日向君で。はいひさ子ちゃん」

「日向か。あいつは最古参のメンバーだし、あたし達のことを色々しってるから何かと気を許せるんだよな。80点」

「確かにそうだな……。以外と気も使えるしな。75点」

お、流石日向君かなりのいい点数だ。

「ひなつち先輩はアホですね！ 1点！」

ここに酷い先輩がいた。

やめてやれ。ひさ子ちゃんが吹き出しそうになってるから。

「日向君か……。ちよつとああいうチャライ感じ苦手かも。30点」

それでも1点とか10点とか言わないだけマシだと思つた俺は問題ないはず。

「タツ君のケツを狙つてるから1点」

酷いと思うかもしれないけれど、実際ホモホモしいのは俺も音無君も感じてるから文句は言わない。

そして誰も否定しないところが妙に現実感を見せていた。

「……一応優しいし60点」

日向君の点数は……247点。

最初の頃はいい点数だったはずなのになあ。

「次は多々だけど……どうすつか？ お前の分なしにして、それを1.25倍して換算するでいいか？」

「それでいいよー」

「じゃああたしからか。……加点だとなあ。頭がいい。60点」

「次は私か。いつも私達ガルドエモのことを思つてくれてて、自分の命を削つてまで作業をしてくれていたから95点」

おお……とどよめきが発生した。

ひさ子ちゃんに至つてはもしかして多々のことを狙つてるのかとか言い出してる。

因みにしおりが俺じゃなくて遂にまさみちゃんのことを睨みつけたと言うことは、本

気で危機感を覚えているのだろう。

どこで俺フラグ立てたっけ？

「多々先輩は……アホですけど推薦してくれたので50点」

「多々君は運動もできるし頭もいいけど変態なのが玉に瑕かなあ？ 50点」

ゆいにはんとみゆきちちゃんには辛口だね。と言うかみゆきちちゃん実はTKに気があるんじゃないの？

「タツ君は勿論100点。パーフェクト！」

「つていうと思ったよ」

ひさ子ちゃんが呆れていた。

一応計算してみるとなんと444点だった。

これは死ぬと言われているのか？ 喜んでいいのかわからない点数だぞ？

一応四捨五入したからそうなったんだけどさ。

「取り敢えず優勝は多々か。まあわかってたとは言えここまで圧倒的になるとはな。これは岩沢と関根のおかげっていうこともあるんじゃないか？」

ひさ子ちゃんがニヤニヤしながら俺の方を見てきた。

ははっ。でもここにいるのはある意味俺の身内だから、俺が一番高いのは当然的な？

むしろ一番高くなかったらどうしよう的な？

「岩沢さんにタツ君はあげません！」

「いや、要らないから大丈夫。私は多々と親友なだけで充分だからさ」

ニツコリと微笑みながら言ったまさみちちゃんに、俺としおりは抱きついた。

「師匠！」

「お、おいおい二人共抱きつくくなよ。照れるだろ？」

「照れた岩沢さんも素敵です！」

「まさみちちゃん超可愛い！ イタタタタ！」

しおりに思いつきりつねられたせいで体がよじれ、二人してまさみちちゃんを押し倒す形になってしまった。

しかもこの最悪のタイミングで扉が開かれる。

「貴方達もう消灯の時間よ。早く部屋に——」

天使ちゃんに見つかりました。

どう考えても俺としおりでまさみちちゃんを押し倒しているこの状況。

傍から見れば3Pの準備ですわわかります。

天使ちゃんも逆にどうやって注意をすればいいのかわからないのか、俺の方を見て停止したままです。

「……テイク2を所望します」

「わかったわ」

どうやら頭の中が荒々しくなっていた天使ちゃんは一度戻ると、再び扉を開いた。

その間にしおりによって布団の中に体を入れさせられてその中にしおりも入つてきたので、布団の中で俺がしおりに抱きつく形になってしまった。

これがラッキースケベってものですか！

「貴方達もう消灯の時間よ。早く部屋に戻りなさい」

「あ、ああ」

「ところでさつき男の声が聞こえたのだけれど、誰かいたの？」

「いやいやいないって。ここは女子寮だけ？」

「ところでさつき雨野君の姿が見えたのだけれど、雨野君はいたの？」

「いやいやいないって。多々は今頃自室でぐっすり眠ってるからさ」

どうも。しおりちゃんのベッドの中でその柔らかい体の感触を満喫している多々君です。

「そう。ならいいわ。そう言えば今日は教師の先生達が寮の周りを囲んで、雨野君を確保する為に寝ずに待っているそうだから本当に雨野君がいなくてよかったわね」

「……しおり、麻婆豆腐の食券あげるから今日は少しだけ勘弁してくれって言って。青春のタメだ……」

「そ、そうだ。あたし麻婆豆腐の食券が余ってるんですよ。ところで生徒会長さん。青春を謳歌したいあたし達に時間をくれやせんかねえ？」

モロ麻婆豆腐の言葉に反応している生徒会長に気がついた全員が動き出す！

「そ、そうなんです。実は私も余ってます……」

「あたしもだ。なんなら数枚余ってるぜ？ 誰かもらってくれる人いないかなあ？」

「私もだ。うどんにかけたんだが合わなくてな」

「あ、あたしも持つてまーす！」

「……青春の為なら仕方ないわね。ここはそう言う場所だもの」

そう。仕方ないのと自己完結しながらとところで言った。

「余っているなら麻婆豆腐の食券を貰えるかしら？ 勿論別の食券と交換するわ」

「当たり前ですよ！」

しおりの引き出しから麻婆豆腐を引き出したみゆきちちゃんは自分の分も合わせてそのまま渡した。

因みにしおりは動くことが出来ないので我慢している。

「……明日の授業に遅れないようにね」

『はい！』

俺以外の全員が答えたことを確認してから、天使ちゃんは去っていった。

ふうとため息を吐くと、しおりがひゃんと声を上げた。

「く、くすぐつたいようタツ君」

「——で、どうするんだ多々。お前今日は部屋に戻れそうに無いぞ」

ひさ子ちゃんが下を見ながら言った。

「どうやら本当に教師達が俺を捕まえる為に躍起になっているらしい。」

因みに女子寮に入り込んでこないのは、前回入り込んでいたことがバレて女子から非常に多くの苦情が来たからである。

俺は別にいいらしい。何故？

「最終手段を取るしかないね」

「関根まさか——」

「タツ君を、あたしのベッドで寝かす」

衝撃発言に——俺どころか全員の思考が止まってしまった。

つまり俺としており、初めてのベッドイン!?

「ちよ、ちよつと待てよ。それは流石にマズイだろ。ヘタレとは言え男子を自分のベッ

ドで寝かすのは!」

「大丈夫。あたしも一緒に寝るから」

「いや全然大丈夫じゃないから!」

「ひさ子ちゃん声大きい。バレちゃう」

その言葉で声を小さくしたひさ子ちゃんだけれど、今俺ですらテンパっていることに
対応出来るはずもない。

「そもそもそれでバレないわけがないだろ？」

「大丈夫。一日中出てこなければ教師達も授業があるから向かう」

「——俺の鋼の理性に賭けるしかないのか」

「いやお前の理性は豆腐レベルだからアウトな」

綺麗に却下されてしまった。

「でも結局の所寝る場所はここしかないから、ここで寝るしかないんだよ？」

その言葉に俺は何も言い返せない。

ならば、ならば——ッ！

「今すぐ寝ればいいのか。おやすみ」

そして俺は現実逃避する為に——眠りに就いた。

029 《Virgin Night》

バクバクと鳴り止まない心臓を、どうか止めていただきたい。

確かに寝るとは言つたさ。皆が寝る前には寝てやるつて言つたさ。

でも——寝れる訳無いだろ！

俺の現状を説明してやろうか!?

俺が二段ベッドの上の奥に寝ていて、それをしおりが抱きしめてきてるんだよ！

動いたらふにつだよふにつ！

しかもそれ以上動こうとすると、妙に艶かしい声を出しながらギュツと抱きしめてくるしもう何なの!?

眠れるわけがないだろうが！

「タツ君……好き………」

寝言が聞こえてきた瞬間、俺の理性は吹き飛びそうになつたけれどそれを耐える。

頑張れ息子よ。後数時間の辛抱だ。

——数時間もこの状態を続けなきゃならないのかあ。

「……ねえタツ君、起きてるでしょ?」

「おはようしおり。いい朝だね」

実はしおりが起きていたことに気がつきながらも、このことを隠すことによつていい感じのムードを作ろうとしていた多々です。

「大丈夫だよ。みゆきちはこの時間に絶対に起きてないから」

「流石は相部屋」

「ねえタツ君。あたしに隠し事してるでしょ？」

俺は少し和らいだ拘束のおかげで振り向くことができた。

そこには——涙を溜めているしおりの姿があった。

何故泣いているのかと聞きたくなつたけれど、その答えは聞くまでもない。

俺のせいだ。

「タツ君はどうしてあたしに隠し事をするの？ 前にタツ君にあたしの過去も話した。

それで約束したじゃん。二人でならダイジョーブだから、絶対に隠し事をしないって」

真つ直ぐに俺を見て言うしおりに、俺は答えられなくなる。

既に俺は、しおりの真実を知っている。

自分のことを隠したくないからと、しおりが教えてくれたことだ。

なのに俺は——しおりに隠し事をしてる。

いや、俺の存在の99%以上が隠し事で出来ていると言つても過言ではない。

「そんなにあたしには話せないことなの？」

ここで領けば、しおりは今後一切俺に隠し事のことを聞いてこないだろう。

しおりはそう言う子だ。

「——ごめんしおり。俺隠し事してた」

でもそれは俺が許せなかった。

自分のせいで泣いてしまっている女の子を放つて置けるほど、俺は悪い男になりきることは出来ない。

「実は、さ。この世界に俺の姉さんがいるかもしれないんだ」

「それって——」

「うん分かっている。ラジオを聞いているはずなのに俺のところに来ないってことは、多分ないか俺のことを恨んでいるってことなんだと思う。でも一般生徒が言うには、そんな生徒何処にもいないらしいんだよ」

明らかにおかしい。

この世界に七不思議が存在しているかわからないけれど、いないはずの生徒が現れると言う事態が起こるはずがない。

なにせこの世界に来た時点で、この世界の生徒からは元々いた人物だと思われるのだから。

ならばどうして——この世界にいないはずの姉が居るのか。
それが問題だった。

「ねえタツ君、こうは考えられない？　ありえない可能性かもしれないけれど、この世界にいないのは何？」

この世界にいる者。それを考えて俺は——止まった。

しおりが出している可能性は0.001%とかそう言うレベルの話だ。

だけれどもNOと言い切れない部分がある以上、否定することが出来ないのもまた事実だ。

「この世界にいるのは、NPC。そしてあたし達人間。更に天使。もう一つ、いるんじゃないかな？」

「——姉さんが神かもしれないってこと？　幾ら厨二病とは言えそれはありえないかもしれない」

自ら私は神様とか言い出しちゃうようなレベルでは無い厨二病だったけれど、もしかするともしかするかも知れないという事実が俺の心を縛る。

「でも可能性が無いわけじゃない。NPCが感じられるけれど何者かわからない存在なんてそれこそ、神しかいないと思わない？」

ありえないとは言いい切れない。

もしかすると天使がいるんだから悪魔もいるかもしれないけれど、そんなのはいるかわからない空想の産物だ。

でも天使という存在がいて仕えている以上、いる可能性が最も高いのは神だ。

「あくまで可能性だからそこまで気にしないで」

「……いや可能性はある。もし神だとしたら、俺の存在がここにあるのもわかる」

何らかの思考があつて、俺はここに送られた。

それも人間としてではなくNPCとしてここにいる。

そんな新技が出来るのは神しかないだろう。

「タツ君。一人で悩むよりもダイジョーブだった？」

「うん。ごめんねしおり。いつも迷惑ばかりかけてるよね」

ぎゅつと、俺を抱きしめる力が強くなった。

もう目の前にしおりの顔があつて色々押し付けられて割とマズイ状態です。

「そんなこと——あるね。迷惑ばかりかけてくるし。流星はタツ君」

「いえいえそれほどでもありませんってばー」

二人で暫くしてからクスリと笑う。

自分が本当にNPCなのかという疑問は、未だに尽きることなく俺の心にある。

姉さんが本当に神なのかという疑問は、未だに尽きることなく俺の心にある。

でもそれ以上に、しおりという巨大な存在が俺の心にはあるんだ。

誰にも譲れない、今の俺のたった一人大切な人。

「タツ君ダイジョーブ?」

「ダイジョーブダイジョーブ。俺はやっぱりしおりがいないとダメだなあ」

更にしおりの大切さに気づかされたと思って、俺は自分からしおりを抱きしめた。

互いに抱き合うようになってから、誰かに見られたら結構危ないかも知れない。

「例え俺が消えたとしても、例えしおりが消えたとしても俺は必ず忘れない。しおりと

いう大切な少女がいたことを絶対に忘れない」

だつてしおりは俺の最高のパートナーだから。

「愛してるよしおり」

「……あたしもだよタツ君」

二人で抱きしめ合いながらそう言つて、俺達は微笑み合う。

「ねえタツ君……したい?」

理性が吹き飛びそうになるその一言を告げられて、俺の動悸が非常に速くなるのを感じた。

ヤバイ。ヤバ過ぎる。

「ここで童貞を捨てるのか俺は?」

ここで俺はチェリーから大人のボーイへとジョグレス進化をしいのか!?

「——二人ともそう言う話は別の部屋でしてくれないかなあ?」

「え」

ジト目で登ってきていたみゆきちちゃんを見て、俺達は完全に止まっていた。

と言うかジョグレス進化って合体進化って意味らしいから、卒業するのに一番合ってる言葉だよな。

しかもこの世界は生命は生まれないので、避妊の必要は無いというご都合主義。

あはははは——現実逃避はやめだ!

「い、いつから起きてたんすか?」

「ひさ子さんに頼まれて起きてた。多分しおりんが起きてて多々君を起こして暴走させようとするからって」

読まれていただと……と呟いたしおりんはきておき、これは結構マズイ状態ではないか?
?

抱きしめ合っていて、しかも人の寝ている上でやろうとしていたなんて……ねえ?

「土下座したら許してくれますか?」

「許すと思う?」

ピクピクと眉を動かしているみゆきちちゃんを見て、俺達は冷や汗が止まらない。

みゆきちちゃんのものとは思えないほどの殺気が放たれているのを見て、俺はオワタと思った。

「二人共、外で寝てろ」

拒否権なんて存在するわけがなかった。

「イエツサー」

二人して廊下に出たら確実に見つかるので、外を一度見てからどうするのか決めた。取り敢えず教師がいることは理解したけれど、多分抜けるのは容易かな。

「——しおり。俺の部屋に行こうぜ！」

「おうさあ！」

俺はしおりをお姫様抱っこすると、そのまま飛び降りて着地する。

俺が降り立った場所は教師の目の前で、唐突に落ちてきた俺を見て教師は目を開いている。

「お、お前——」

「ウルトラソウルツ！」

「へいー！」

教師の前で両手を叩いて猫だましを行ってから、すぐに走り出す。

そして木の上へと走って登ると、そのまま自分の部屋のベッドの上に足をかけた。

中を見ると——中にいた俺の相方と目があった。

「あ、雨野!? こんな時間に帰ってくるなんて珍しくないか!」

本郷君に中に入れてもらおうと、しおりをゆつくりとベッドに座らせようとして——止まる。

そこには何故か膨らんでいる俺のベッドがあった。

「オーケーオーケー」

俺はペラリと布団を捲ると、そこには目を開いたままこちらを見ている教師の姿があった。

「よお」

「本郷君。君に頼むよ。この教師が俺のベッドに入って俺のケツを狙っていたという事実を——全校生徒に伝えるんだ!」

「そんなことはしません!」

「残念だったなあ! どうせ俺がラジオで全部話しちまうからなあ!」

「タツ君! 君のケツはあたしが守る!」

しおりが俺の前に立とうとするのを俺が止める。

「反省室に行きたい奴はどうだ—?」

「仕方がない。しおり、跳ぶよ」

「え？」

俺はしおりを再び抱き抱えると、そのまま寮の部屋から飛び降りた。

それを予想していなかった教師と本郷君は驚いたような顔をしていたけれど、そのまま降り立つと下にいた教師に対して笑みを浮かべる。

「お前行ったり来たり忙しい奴だなあ！」

「でしょ？ でも俺も色々忙しいんでね」

教師が近づいてくるのを背後にジャンプしてから避けると、一気に走り出す。

真夜中の追いかけてこつて奴も割と楽しいなあ。

でもこれはある意味面倒だからつと。

「どこに逃げるのタツ君」

「取り敢えず教室だよね」

俺は走ったまま校舎に入ると、急いで対天使作戦本部こと校長室へ入って鍵を閉めた。

誰か入ってこようとしてもこれで安心だね。

「ふう。全く面倒な相手だぜ」

「あれ？ いつもならタツ君あそこまで来たら捕まってるんじゃないの？」

「今日はしおりがいたし、明日はまさみちゃん最後のライブだからね。こんなところ

で捕まる訳には行かなかったんだよ」

「……そうなんだ」

理由を話して納得してもらおうと、俺達はソファーに座ってコーヒーを飲みながら温まる。

「しおり。今回のライブは成功させなきゃならない。確かにこれは誘導の為のモノでもあるけれど、俺達にとってはそれ以上でもあるんだ」

「戦うんだね」

「たった一人でもいい。誰一人として教師は通さないし、天使ちゃんも通さない。生徒会も何もかもを、俺が止める」

「できると思うの?」

「やるしかないだろ」

俺がそう言うとしおりは俺に微笑みかけた。

つまりこれは無謀かつ現実味の無いありえない作戦なのかもしれない。

ライブを成功させるなんてことは、本来のオペレーションに必要な無いものなのだから。

でも——やりたいんだ俺は。

大切な人の為に戦わせて欲しいんだ。

「タツ君のそう言うところが好きだよ。誰かの為に無我夢中になれるところが」
にっこりと微笑みかけてきたしおりの表情に、俺は聖母マリア的なものを見た。

「じゃあ今日は明日タツ君が頑張れるように、好きなことをしていいよ」

やっぱり俺の理性が弾けそうになったのだが、それをしてしまえばこの対天使作戦室が白濁室へと変わってしまうので頑張つて抑えた。

「じゃあ膝枕してくれない?」

そう言つてしおりの太ももに抱きついた俺は悪くない。

そしてそのまま頭を撫でられて、俺は眠気に襲われる。

まるで昔姉さんに撫でられていた時の様な感覚に、俺の体がふわりと浮かぶような感覚に陥った。

ああ、やっぱり守りたい。

最後のライブを——まさみちゃんがいるガルデモのライブが成功することが、今の俺の一番の救いなのだから。

「必ず守るよしおり」

「ありがとうタツ君」

俺はそのまま意識を落としていった。

目が覚めた時に俺としおりの二人共寝っていて、入ってきたゆりちゃんに二人の愛の巣

にされたと叫ばれるまで。

030 《Important People》

取り敢えず目が覚めたらゆりちゃんに怒られました。

ここは天使の対策をするところであつて、俺達がイチャイチャする場所では無いとのことです。

ご最も。と言うよりも俺達も逃げてくるつもりは無かつたんすわ。

ちよつと心苦しそうな顔をしているみゆきちゃんにダイジョーブと告げてから、俺はガルデモが最終調整をしている合間に屋上で日本刀を振るう。

本来日本刀の使い方なんてものは長年日本刀と一緒に有り続けることで体感しているくんだらうけれど、俺には恐らくそんな必要はない。

きつとあの戦闘モードはある意味プログラミングされているものだからだ。

俺の記憶に存在しないということは、本当に俺は銃の扱いにもナイフの扱いにも長けてなかつた。

それをあの歌を歌つた時の様に無理矢理長けさせたのが、あの状態なんだろうと俺は予想する。

ならそれは日本刀であつても同じはずだ。

意識を研ぎ澄ませて振った日本刀は、綺麗に屋上の壁に薄い傷跡を残す。遠くから見れば傷跡すら気がつかない程の剣戟。やはり俺の記憶には無い。

「ふう」

息を吐いてから日本刀をしまうと、俺は日本刀を眺めた。

これはギルドと俺との繋がりを示す、新たな道筋だ。

その重さに軽く笑みを零してから、刀を結びつけると前を見る。

後ろを振り向くな。前だけを見て走れ。

今の俺に後ろを振り向いていられる時間は無いんだ。

「大切な人達が、ドンドン増えていって困るよ全く」

彼女、姉。そしてそこに新たに加わった、親友という大切な存在。

仲間という新しい存在。

俺の記憶とは全然違う今の光景に、変わったなという思いしか浮かんでこなかった。

——戦わなければいけないのだ俺は。

「迷っている様な顔をしているな」

「あ、ダークネス・ルシファアーさん」

「直井文人だ！ 取り敢えずお前に頼まれていた、生徒会会議の延長は行える。その付き添いをする為にガルデモに敵対意識を持っていた教師の一人を起用したから、以前よ

り一人少なくなっているはずだ」

今回俺は数多の厨二病の名前を持つ直井君に脅迫——もとい協力をお願いしていた。いやあ快く引き受けてくれましたとも。引きつった笑みで。

「だが天使と教師を相手にすれば、お前と言えどひとたまりもないだろう。何故そこまでしてあいつらに肩入れをする？」

そうだよな。直井君は俺の中に眠る、俺のものかわからない復讐心を知っているんだもん。

勿論自分がNPCかもしれないからって、その復讐心が消えるわけじゃない。

ただそれでも守りたい何かがあるだけだ。

「貴様のことはよくわからん。僕からしてみれば、その行いはただの偽善だ」
「偽善でもその行いは善だと、とある人は言ったのさ」

本物の悪なんてひと握りしか存在しない。

同じように本物の善なんてひと握りしか存在しないんだ。

「なる程な。確かに善かも知れないが、他一般的に見ればその行いは悪だ。わかっているのか？ 天使にこれから確実に狙われるんだぞ。それにお前は再び仲間との約束を破ることになる」

NPCを傷つけるな……か。

そのNPCに俺も含まれているんだから、しようがないと言えましょうがないよな。戦線のルールを完全に守れる気がしないもん。

「大切な人がいるんだ。その人の願いを叶える為にも、俺は頑張らなきゃならない」

「願いを叶えればこの世界から消える。貴様はそれでいいのか？」

「良くないさ。でも、永遠に願いが叶えられないよりはマシだろ？ そんなの、耐え切れないじゃないか」

グツと拳を握り締めた。

永遠に願いが叶えられず苦しみ続けるだなんて、そんなことは認めない。認めてなるものか。

彼女達が目指しているのは神を倒すことだ。

でもだからって、報われてはいけないなんてことはない。

「僕が神になればそんなことをしなくとも、願いを叶えることが出来るだろう。お前の願いを叶えてやることだって出来る。そう、僕が神になれば……」

声が小さくなりながらもそう言った直井君に、俺はそうかいと応えることしか出来なかった。

こんな時に何か気を紛らすことが出来るものがあつたらどんなに楽だっただろうかと思いつつ、自分で自分の馬鹿さに苦笑する。

しおりに合えばどうせすぐにそっちの方の考えに移行するというのが見え見えだったからだ。

それにしおりにだったら相談できる。あいつの前じゃもう、俺は只の雨野多々なんだから。

「……行くのか」

「ああ行くさ。俺にはやらなきゃいけないことが沢山、残ってるからな」

直井君に手を振りながら屋上の扉を開き、下に降りていく。

これでまさみちゃんが消えても、俺はその行為を良かったと迎えることが出来る。

約束したのは俺かもしれないけれど、それを裏切られても別にまさみちゃんを責めるつもりなんてない。

むしろよく頑張ったねと褒めてあげたいくらいだ。

「人間の感情なんて、一枚岩じゃないか……」

同時にまさみちゃんに消えて欲しくないという思いも、消えてしまったら責めてしまいたいという思いもある。

そうやってせめぎ合っている感情を感じて、ああ俺って人間ばいなと思うことができるんだ。

NPCでも人間でももうどっちでもいいんだけどな。

「多々」

声をかけてきたのは、日向君だった。

「何かな日向君」

「お前が何かをしてくかそうとしてるのは大体わかる。つかお前がガルデモに関わる時で何かしない時がないからな」

その言葉に俺は深く考え込む。

確かにマトモじゃないことしかしまくってきたから、警戒されてるのも無理はないか。

「ゆりちゃんに言いつける？ まあゆりちゃんも大体気がついてると思うけどね」

「別に言いつけることなんて何もねえよ。ただ一つ言いたいことがあるとすれば——俺達はお前が何をしてくかそうともお前の味方だつてことだ。高々ゆりつぺの言うことを破つたくらいで見捨てるほど、俺達はやわな気持ちでいるわけじゃねえよ」

ただのホモじゃなくてイケメンのホモだったとはね。

でも俺はしおり一筋だから惚れたりしないよ？ 安心してね。

「ありがとう日向君。その気持ちだけでも心がびよんびよんするよ」

そう答えてからでもと続ける。

「俺は俺の意思を貫く。例えどんな敵が相手でも、もし仲間達が敵に回つてもそれでも

俺は自分の意思を貫きたいんだ」

「わかっているよ。お前がそう言う奴ってことくらい」

「うん。じゃあ行ってくるよ」

取り敢えずバンドの準備をしないとね。

SIDE：日向

結局俺もあいつと同じか。

ゆりっぺからは多々がしようとしていることを止めなさいと言われたけれど、そりや無理だぜゆりっぺ。

あれは覚悟を決めた男の顔だからな。

「いいのか日向。あいつ放っておいて」

「悪いだろうなあ。でも止められると思うか？ あんな覚悟決めた奴を」

「前回だつてそれでNPCを傷つけたんだろ？ このままだとまた同じどころか今度は

もつとヤバイことをするんじゃないのか？」

確かに。あいつはもしかするとNPCを殺しちまうかもしれないからな。

それでも俺は止めねえし、あいつがそれで怒られたら俺も一緒に怒られる。

まあさつきはゆりっぺが約束破ったら戦線から抜けさせる位のことを言う様に聞こ

えたかもしれないけど、ゆりっぺはゆりっぺであいつのことそこそこ信頼してるからな。

多々を戦線から抜けさせるなんてことはねえだろ。

そんな簡単に仲間を抜けさせる様な奴は戦線にいないってーの。

「取り敢えず天使エリアの侵入を終えたら、俺達だけでも別働隊として多々の所に向かえるようにゆりっぺを説得するところから始めるぞ」

「わかった」

「今思うとお前多々のことになるかと物分りいいよな」

「そうか？ まあある意味戦線のメンバーの中で一番良くしてくれた奴だからかもな」

そんなことを言ってから、俺達は天使エリアに侵入する為の会議に向かった。

今回は本当にやばいかもしれないぜ、多々。

S I D E : 多々

「——うんオツケー。じゃあ俺が入るタイミングは最後の時だから、その時間になったらインカムに遊佐ちゃんから連絡が来る様にするよ」

最後のチェックをしながら、俺はそう告げた。

「今回はどこで見てるんだ？」

「ちよつと外でね。陽動とは言つても危ない奴が来るかも知れないしさ」

ひさ子ちゃんの問題にそう答えてからチラリとしおりを見る。

もうしおりの方はわかっているみたいだし、わざわざ告げる必要も無い事だ。

いつも通りライブをやつて、最後に華やかに出来る様にすればいい話。

怒られるのも、慣れてるからね。

「そうか。危なくなつたらすぐに逃げろよ」

「おやつ？ デレ期キタ——（。▽。）——!!」

「ちげーよ！ 普通に心配なんだよお前のことが。あたしも入江も関根も岩沢も、お前が一人で天使と戦おうとしてるんじゃないかと思つてるんだ」

はい戦おうとしております。

と言うかしおりは知ってるんだけど、隠しておいてくれたんだね。

つてことはこれは告げない方がいいことつてことかな。

「皆。今回のライブは必ず成功させなきゃいけない。絶対にだ。今までのガルデモの全てを賭けて、このライブを行うんだ。ゆいちゃんと合わせたら更にそれを超えなきゃいけない。だから——全力全開の音楽で観客をぶつ飛ばそう！」

「「おう（はい）！」「」」

全員の心が一つになっていくのを確認して、俺は目を閉じた。

振り絞れ力を。全力を出すのは歌だけじゃないはずだ。

「準備オツケー！　じゃあ準備班は搬入を開始してください！」

ポスターを学園中に貼ったし、本当に引退すると言う噂も流した。

新曲の披露もあると言ったし、ほぼ全てのガルデモファンが集まると言っても過言ではない。

そしてそのほぼ全てのガルデモファンが集まると言うことは、それに連れてこられた一般生徒や教師そして——天使ちゃんまで来ると言うことだ。

「多々さん。ゆりっぺさんからの伝言です。無茶はしないようにと」

「りよーかいつて返しておいて」

隣にいた遊佐ちゃんにそう告げると、遊佐ちゃんはそのまま伝えてくれたらしい。

そして少し会話をすることにする。

「遊佐ちゃんは、このライブのことをどう思う？」

「必要なことかと。ガルデモでは岩沢さんの好きな歌を歌うことは出来ませんから」

「だよなあ……」

真面目バージョンの遊佐ちゃんって言うのも久しぶりな気がする。

「多々さん。貴方が自分の命を賭けてでも今回何かをしようとしていることは、私でもわかります」

「俺ってそんなに顔に出やすい？」

「は？」

ちよつと傷つくかも。結局俺って顔見られれば何しでかそうとしているかわかったらちやうのか。

それじゃあいつも一緒にいるしおりにバレても仕方がないかなあ。

「ですが私はそれを咎めるつもりもありませんし、戦線のメンバー全員が応援していることを忘れないでください。私達は言い換えてしまえば家族の様なものですから」

ゆりちゃんを中心に出来上がった家族。

そう考えれば割としつくりくるから驚きだ。

きつとゆりちゃんは生前長女だったんだろう。

「頑張ってください。応援しています」

「ありがとう」

日向君も遊佐ちゃんもしおりも。

ううん。きつとゆりちゃんも、音無君も、まさみちゃんも、みゆきちちゃんも、ひさ子ちゃんも、藤巻君も、TKも、松下君も、高松君も、直井君も、大山君も、椎名ちゃんも、野田君……は論外か。それに最近会ったクライスト君も。

皆が皆俺の作戦に気がつきながらも、俺の好きにさせてくれているんだ。

「なら、失敗するわけには行かないよな」

クスリと笑ってから、体育館へ荷物を搬送し終わったことを確認する。

準備は整った。開演を前にして生徒達が集まってこようとしている。

教師はまだ来ていない。疑わしきは罰せずがこの世界のルールだからだ。

何かして初めて、教師は動き出す。

開演の音が聞こえてくる。

きつと今から音楽が始まるんだ。

俺の大好きなまさみちちゃんの声が、体育館の中を征服していくんだろう。

俺の大好きなみゆきちちゃんのドラムが、ガールズバンドとは思えない程力強いビ-

ートを刻むのだろう。

俺の大好きなひさ子ちゃんのリードが、まさみちちゃんのリズムごと引つ張っていくん

だろう。

そして俺の大好きで彼女なしおりのベースが、周りを引つ掻き回しながらも最も重要

なリズムを奏でるんだろう。

俺はそれを守りたいんだ。

「――皆の声を、俺にも届けてくれ」

そうやって俺は、体育館の入口で柄へと手をかけた。

031 《Defensive》

そのまま体育館の前で待っていると、足音が聞こえてきた。

新しく来た観客かどうか判断しようとしたが、背の高さと服的にそれは無いなど確信する。

まさみちゃん達の演奏を止めようとしている教師達——つまりはまさみちゃん達の敵だ。

「すいやせん先生方。こっから先は生徒以外立ち入り禁止なんすわ」

「校則違反だ」

お堅い頭だと思いつつも、俺はヘラヘラとしながら教師を見る。

「まあ見逃してくださいって。今日が引退ライブなんですすよ？ それを邪魔するのは、流石にどうかと思うんですけどねえ」

「また日を改めて別の時にすればいいだろう。キチンとした状況でな」

はあ。呆れて物が言えねえぜ。

その態度から自分達が馬鹿にされていると思ったのか、教師達に苛立ちが溢れ出している。

「今やつてるのにそれを止めるのが野暮だつて言つてんだ馬鹿教師共」
「貴様教師に対しての口の利き方が——」

なつてないと言う前に俺は刀を抜くと地面に突き刺した。

思い切り突き刺したのでかなり深く突き刺さつたが、こいつら相手に武器を使うのは癪だ。

必ず殺すと思つた瞬間、既に行動は終わつている。

そんなことが出来たら良いのと思いつつも、俺は拳を握り締めた。

強く、強く、芯まで撃ち抜けと。

さあ俺の中にある別の俺君。これは君にとって願つてもいない状況じゃないのかい？

あの時守れなかつた大切な人が——この先にいる。

自分のことを大切に思つてくれる人達が——この中にいる。

それを守ることが出来るんだぜ？

その為の為に戦うことが出来るんだぜ？

なあ相棒——それがお前の願いじゃなかつたのか？

俺は踏み出す。

全身全霊を賭けて、ここを通さないと決めた一步を踏み出す。

「——わかつてるさ。例え教師であろうと生徒であろうと、女を守りたいと思った瞬間それは男と男へと変貌する。簡単な自然のルールだ。女を守る為に男が戦う」

踏み出した瞬間俺は世界の見え方が変わったのに気が付くことができた。

いいじゃないか雨野多々。ここに俺がいるのだから。

俺が俺で——お前も俺つてことで全部。

俺の中に埋め込まれている記憶も、埋め込まれた感情も全て引つ括めて雨野多々だ。そう教わつただろ、大切な人達からさ。

「舞おうぜアミーゴ」

加速した。

今までの戦いが嘘だったかのように体が動く。

疾風迅雷。電光石火の速さで教師達に向かつていく。

そうだこれだ。これが——守る為の戦いつて奴だ。

「こいつ速——」

最後まで言わずに殴り飛ばした。

そのまま足を引つ掛けると空中で一回転してから地面へと叩きつけられた教師を一瞥してから、それに驚いていた教師の顔を右拳で殴り飛ばす。

どうだい？ 楽しいだろう？

失ったものの為に戦う喧嘩じゃなくて、今守る為に戦う喧嘩って奴は——最高だろ
うッ！

「例えそれが善であろうと、例えそれが悪であろうと、たった一人の女の為に戦う時点でそんなものは関係ないとは俺の恩師が言った言葉さ。その金玉——潰される覚悟は出来てんだろうなあ！」

顔面を殴って体勢を崩した教師の股間に、右拳を引く動作と同時に左足の蹴りを放つ。

右拳を引く時の力がかかっている左足の蹴りはそのまま教師の股間から炸裂音を響かせると、そのまま振り上げた左足を次の狙う教師がいる方向に向けて勢いそのままに右拳を放った。

だが既に一度見られていたことによって、両手をクロスして防がれたのを確認した俺は右足で教師の右足を踏みつける。

それによって後ろに逃げる事が出来なくなった教師は、右足の筋を伸ばしながらも耐える。

その耐えた瞬間に右足を離すと、力を込めていた足が一気に解放された反動で転ぶ。そして——真上から金玉を踏み潰すとグリグリと痛みを与えて気絶させる。

「——お前らにそんなもんいらねえだろ？」

三人が瞬時に倒されたのを見て、もう一人は驚いたようにこちらを見てきた。

その瞳からは恐怖が感じられるが、関係はない。

俺は走り出すとその最後の一人の股間を掴んで持ち上げる。

「いだあああああああ!？」

「彼女作つてから出直してきなあ!」

手に嫌な感触を残しながらも握り潰すと、その教師を投げ捨てる。

四人全員潰した。

そのまま気絶している教師達を放つておいて、俺は地面に刺しておいた刀を抜くと鞘に戻した。

そして再び誰かが来るまで待つと言う単純な作業を繰り返すことになる。

1分、2分、3分、4分、このまま来ないで欲しいと望んでいた。

これだけの時間が長く感じたのは初めてだなと思いつつも、刀の柄を掴んだ。

時間稼ぎも大体5分が精一杯だったか。

「……また教師に手を出したのね。それほどまでにあの子達のことが必要?」

「ああ。大切だ。大切に守りたい存在だ」

多々と言う一個人として、絶対に守りたい存在として、かけがえのない存在へ既に変わってしまった。

姉さんや蓮花のことも忘れたわけじゃないけれど、それと同じくらいに大切に思ってしまったんだ。

周りの皆は姉さんや蓮花のことを捨てて、今いるしおり達に走ったと言うかもしれない。

俺はそれを否定できないし、否定するつもりもない。

それが現実ならば受け入れるだけだ。でも俺は——しおりのことが好きだ。大好きだ。

この世で一番愛していると言うことを誓うことができる。

でも結局人間は一人しか選ぶことができななんだ。

しおりを世界で一番愛していると誓えば、姉さんや蓮花のことを世界で一番愛しているわけではないと言う事になってしまうだろう。

それでも構わない程にしおりのことを愛しているんだ。

「貴方は自分の存在に気がついていないの？」

「気がついてるさ。気がついてるけど——だからなんだ。俺には記憶がある。思いがある。未練がある。誰がなんて言おうと俺は雨野多々だ。それが事実なんだよ。それが現実なんだよ」

刀を抜くと、鞘を捨てた。

動くのに鞘は少し邪魔になる。

「誰になんて言われようとも、俺はしおりを愛している！　そしてガルデモの皆のことが大好きだ！」

堂々と言い張った俺は、刀を地面と水平に構えて真っ直ぐに天使ちゃんを見る。

「それだけは絶対に譲れねえ」

「そう。なら私もこの学校のルールを守る義務があるの」

ハンドソニツクと呟いて現れたハンドソニツクを一瞥してから、天使ちゃんは告げた。

「演奏を停止しなさい」

「無理だ！」

俺は走り出すと、天使ちゃんの首を狙って日本刀を振るう。

しかしそれをハンドソニツクで防ぐ。

ガチガチと言う金属同士が削り合う特有の音が鳴り響く中で、俺は日本刀の刃を反した。

それにより峰の部分とハンドソニツクが激突し、流すようにしてハンドソニツクを俺の後ろに向ける。

残されたのは無防備になった天使ちゃんの体だ。言うだけだと犯罪臭が凄い。

でも実際この状況に持ち込むには非常に精神力を使います。

「切り捨て御免！」

「ガードスキル、《テイレイ》」

一瞬にして俺の背後へと移動した天使ちゃんに俺は目を見開くが、すぐさまポケットの中に入れてあつたFive Sevenと掴むと背後に向けて発砲する。

ノールックで撃つたけれど、真後ろにいたから直撃したらしい。

少し顔を顰めながら右脇腹を抑えている天使ちゃんを見て、罪悪感が生まれたけれどそれを全て心の奥底に飲み込む。

そんなものを持つていたら負けるだけだからだ。

因みにFive Sevenは二つ目を貰いました。前壊したからね。

すぐにFive Sevenをしまつと、両手で刀を持って天使ちゃんに向けて振るう。

それをバク転をしながら避けた天使ちゃんを見て曲技団かよと思うけれど、天使ちゃんの身体能力ならその位出来てもおかしくはないから声には出さない。

と言うかマジで勝てるんですかねえこの子に。

前回は相討ち覚悟の自爆でぶつ飛ばしたけれど、今回はこの後に歌わなきゃいけないからそんなことしてる暇はない。

死ぬわけには行かなくて、倒さなきゃならない。

「いつつ……」

「げ」

しかも教師達も目を覚ましやがった!?

多分金玉は再生されていて、俺に殴られて気絶させられた程度のことしか覚えていないだろうけど。

最悪の展開と言ってもいいかもしれない。

——殺すか？

教師を殺すという選択肢も頭に入るが、そんな隙を天使が何とかしてくれるはずがない。

でも俺は、守るって決めたんだ。

俺は天使ちゃんから離れて距離を取ると、体育館の入口の前で両手を広げた。

刀は地面に置いている。

「……何のつもりかしら？」

「通さないってつもりですわ」

苦笑いをしつつもそう言った。

絶対に入れるわけには行かないんだ。

「あああああああああ！」

俺は地面に置いた刀を——自分の右足に突き刺した。

「なっ!?! お前は何をしてるんだ!?!」

「こ、こうすればさ……。俺の足は動かねえだろう?」

血が漏れ出すのを無視して、俺は両手を広げた。

気迫を込めて全身全霊の力で動かないことに徹する。

「正気じゃない! あいつを押しつけてでも入るぞ!」

俺に対して突撃してきた教師達を前にしても、俺は動かなかった。

四人の体重がかかって俺の足から血が出るが、それでも俺は全身の力を全て込めて押し返す。

傷口が開いて血が大変なことになってるが、気にしない。

「男四人でぶつかっても返すだと……?」

「あつたり前だろ……。あんたらとは覚悟が違うんだよ。こちとら死ぬ気で、ガチで止めに入ってるんだからなあ!」

俺は再び両手を広げて立つ。

それを見た天使ちゃん俺を見て驚いたような顔をしていた。

「何故貴方はそこまでするの? 守るといふ行いは既に果たされているはずよ」

「わかってないな天使ちゃんは。好きな女一人守れない男なんて、カッコ悪いじゃん？」
守るべき女がいるから俺は立ち上がることができるんだ。

例え死のうとも、例えこの命を無駄にしようとも。

女が守られるならそれでいい。それだけでいいんだ。

「……諦めて」

ピシヤツと言う音と共に、俺の刀で支えていた右足が切り裂かれた。

その行動に驚いている教師達だが、今の隙にと体育館に入ろうとする。

「させるかあ！」

俺は右手の力だけで跳ぶと、教師の体を掴んで投げ飛ばした。

その間に一人の教師が入っていかうとするが、俺はそれに飛びかかると右手で柱を掴んで左手で教師の服を掴んでそこから奥に行かせないようにする。

「があ!？」

ブシユツと俺の右足から血が噴き出したが関係が無い。

俺は守りたいんだ。

あの頃守れなかった皆を守りたいんだ。

「離せ！」

「離さねえ！ 離したら——俺はまた誰かを失うから！」

そして次の瞬間——俺の体は天使ちゃんによって貫かれた。
「あ」

無防備になりすぎたと思いつつも、自分が心臓を貫かれたのだと気が付く。
それによって力が抜けて、俺が掴んでいた教師ごとライブ会場に倒れ込んだ。

「——タツ君?!」

血だらけの状態の俺を見つけてしまったしおりが叫んでしまい、全員が俺の方を見て
悲鳴をあげる。

もう動く力すらねえよ。

だけど——。

「お前達に、邪魔させつかよ」

渾身の力を振り絞ってFiveSevenを抜くと俺が捕まっていた教師の頭を撃ち抜いた。

これで、もう——。

ごめんしおり。約束、守れなかったよ。

俺の意識は闇へと落ちていき、そこで止まった。

032 《My Song》

——夢を見ていた。

昔の夢だ。

俺の家は四人家族で、姉さんと俺と両親で暮らしてた。

姉さんは生まれつき重い病気にかかっている、その費用で家の金がドンドン無くなってしまうというのとは後から教えられたことだ。

姉さんが病気だったのは知ってたんだけどね。

俺は姉さんがテレビを見ながら、これがしたかったなあ言っていたことを無我夢中になつてやった。

姉さんの代わりに俺が全てをやっていると意気込んで、バスケもバンドも料理も家事も勉強も全部やった。

周りからは何でそんなに色々なことが出来るんだよと言われていたけれど、それは俺が姉さんの為と思って全力で努力をし続けていたからだ。

そんな俺の姿を見て、一緒に居てくれる人が出てきた。

それが蓮花だった。

蓮花は俺が姉さんの為、に頑張っている姿を見て、いつか自分も姉さんの代わりに何かできるようにと思ってくれたらしく頑張ってくれた。

姉さんは蓮花に俺との結婚を勧めるくらい、の、俺達は仲になっていた。

でもその幸せは、長くは続かなかった。

姉さんの病気にドンドンお金を持って行かれて貧乏になっていった俺達の家族は、分断スレスレにまで陥っていた。

母さんと父さんは共働きだ。

そして俺もアルバイトをしながらお金を稼ぎ、頑張っていたんだ。

それでも毎日毎日飲まなければいけない薬は増えていき、そして遂に——母さんと父さんは夜逃げをした。

勿論俺もついてくるように言われたけれど、姉さんを置いていくと言う判断がどうしても出来なかった。

どちらにせよ長くは生きられないと告げられたのに、俺は姉さんと共にいる道を選んだ。

姉さんの治療費を稼ぐ為に必死に俺はアルバイトをした。

寝る間を惜しんでアルバイトをしていたし、それでも成績をキープして運動も軽音も頑張った。

蓮花も手伝ってくれて、二人で姉さんを支えながら生きていこうと思った。

でもそれは、ありえるハズのない未来だったんだ。

蓮花は姉さんの為にアルバイトをしてくれていただけでなく、両親のお金まで盗んでいた。

それを俺が知った時、既に蓮花は窃盗犯として捕まり学校の中でも誹謗中傷を受けていた。

勿論その原因である俺も極度のイジメにあっただけけれど、それでも俺は笑い続けた。

俺の本当の笑顔は姉さんと蓮花の為だけにある。

偽りの笑顔を皆に見せつけても構わない。

最早俺にとって蓮花と姉さんはかけがえのない存在であり、今思えば俺は姉さんと蓮花に対して依存していたんだと思う。

そして——最悪の結末を迎えた。

父さんと母さんは夜逃げした後にはヤクザから金を借り、その担保として姉さんを出していたんだ。

金が払えなくなったとわかったヤクザ達は俺の家に押し入り、姉さんを連れて行った。

目の前で犯されたりもしていた。

それでも姉さんは、大丈夫必ず帰ってくるからと告げた。

蓮花はそれを探してくると俺の静止を振り切り、そのまま次の日に河川敷で死体となつて発見された。

数々の陵辱の痕があつたことから俺も犯人に浮上し、そのまま逮捕された。

証拠不十分で解放された後、家に帰つて見たのは同じように陵辱を受けて死んでいる姉さんの姿だった。

その日から俺は壊れた。

学校に行つてはいつもの偽りの笑みを浮かべ、周りからの誹謗中傷を受けても何も言わない。

ただ笑うだけでいるだけの人形。

怒りだけは忘れることがなかった。

最初に、俺の生死を確認に来たヤクザをナイフで殺した。

その後そいつの荷物を調べて、ヤクザの本部を突き止めるとナイフ一本で何人も殺した。

銃で撃たれても、刀で切られても俺は何も感じなかった。

殺したいと言う意識だけに染られた俺は、もう人間ですら無かつたんだ。

奇跡的に俺は死ななかつた。

殺人犯として逮捕されたのに、俺の心は晴れずにいた。

俺の精神状態が不安定だということで、精神病棟にも入れられた。

結局俺は何の為に生きていたんだろう？

俺は幸せだったんだ。

なのになんでこんなに、幸福じゃないんだろう？

姉さんと蓮花と一緒に暮らすことができ、二人が殺されても簡単に仇を取ることが出来た。

なのになんでこんなに幸せなはずの心にぽっかりと穴が空いてるんだろう？

ああそう言えばいつも言ってたっけ？

俺には悲しいって感情がないんだった。

ねえ皆。どうして俺は嬉しいはずなのに、悲しくないはずなのに幸せを感じられないの？

どうして幸せなのはずなのに——幸せを感じられないの？

ある日俺は死んだ。

何故か知らないけれど幸福感を感じられると言われて錯乱し、死んでしまった。

何をしたのかと言われればナニをしたとしか答えられないけれど、俺は死んでしまっただんだ。

テクノブレイク。世間ではそう呼ばれている死因によって……。

薄れていく。

——違う。

何が違うんだ。

——何かが違う。

きっと俺は自分が思っていた最高のハッピーエンドを迎えられたんだ。

——それは違う。

さつきから否定している君は誰なんだ？

——俺はお前だ。

意味がわからない。俺は人間じゃないんだ。だからあの終わり方が、一番のハッピーエンドなんだ。

——お前は本当の幸せや満足感を知らずに世界を終えてしまった。

本当の幸せ？ 姉さんと蓮花と暮らせたところが俺の青春じゃないか。

——違う。それは青春じゃない。ただ言いなりに動いていただけの、白紙の青春だ。

パリンと、何かが割れる音がした。

——お前に感じて欲しいのは、本当の青春なんだ。仲間達と助け合い、傷つけ合い、そ

して協力し合う大切な青春だ。

せい、しゅん……。

——お前はそれを知らずに死んでしまったせいで、自分が幸せな生涯を送ったと思っている。それではこの世界に来たとしても永遠に戸惑うだけだ。

俺が知らなかったっていうのか？ 本当の幸せを。

——ああ知らなかったんだ。お前は自分の幸せが世間一般的な幸せと勘違いし、世間と自分の幸せの違いに困惑して死んだ。

俺が世間一般とは違う幸せを持っていた？

だからなんだ。それは俺の思いで、誰にも汚されるハズのない宝物だ。

——それじゃあ許せない人だっているんだ。君に本当の幸せを知って欲しかった人だっているんだ。

それは……。

——だからお前は知るべきだ。本当の幸せを、本当の青春を。

もう一度だけ、教えてくれ。君は一体誰なんだ？

——俺か？ 俺は——。

「俺は雨野多々だ。お前と同じ、雨野多々だ」

目が覚めた。

傷ついたハズの体が元通りになっていて、体も非常に軽く感じる。

そうだ。俺はNPCであり人間だったんだ。

一般的な感性を持っているNPCと言う存在に、幸せを知らない雨野多々と言う存在を複合させて生まれた雨野多々だったんだ。

……何だよ。どっちにしる俺は俺だったってことじゃないか。

「え？ 嘘……」

驚いたようにこつちを見てきているしおり。

組み伏せているのは恐らく俺が止めようとして、失敗した教師達の姿だ。

他にも何人も教師が来ているところを見ると、俺が死んでから数分つてところだろう。

こんな早く生き返ることがあるのかと思いつつも、俺は体育館の床を踏みしめた。

「俺の女に触れるんじゃないやねえ！」

体育館の壇上まで走って行ってジャンプして乗った俺は、しおりに触れている教師の顔を右拳のストレートで殴り飛ばした。

「しおり、全部取り戻したよ。やっぱ俺は記憶が抜けてたんだ」

「タツ君、それって……」

「ああ。俺の死因は変わらなかつたけれど、それでも俺は全てを知つたよ」

しおりの頭を撫でてから、俺はすぐにみゆきちゃんを抑えている教師の顔面を蹴り飛ばす。

「お前なんで——!？」

「こいつらは全員俺の仲間だ。まあしおりだけは仲間じゃなくて嫁だけだな」

ひさ子ちゃんの上に乗っている教師の腕を掴むと一本背負いで投げ飛ばし、まさみちゃんを抑えている教師の首を絞めるとそのまま壇上から投げ落とした。

因みに遊佐ちゃんの上に乗っていた教師は遊佐ちゃんが普通に処理してました。あれえ？

「——皆さんお待ちせいたしました！ 邪魔な奴らは入ってきたけれどももう安心！ まさみちゃん、よろしく！」

「ああ。聞いてくれ——My Song」

バラードとしての曲を歌い始めたまさみちゃんの声を——ひさ子ちゃんがすぐに上へ上がって全校放送へと切り替えた。

その歌唱力は止めようとしていた教師達をも驚かせ、歩を止めさせる。

前回屋上で聞いた時よりも、ずっと綺麗な歌声だった。

全く適わないあまさみちゃんには。

「タツ君……」

しおりは俺に抱きついてきた。

そのまま俺もしおりを抱きしめ返すと、一緒にまさみちちゃんの方を見る。

「俺、NPCと人間両方だったんだ。余りにも壮絶すぎて幸せすらわからなかった俺に、NPCの俺が心を貸したんだ。だから、俺はNPCであって人間であって、NPCでなくて人間でもない」

「色々いややしこしいってことはわかったよ」

「そう言えばしおりはあんまり難しいこと好きじゃなかったね」

ごめんごめんと謝りながらも、俺達はまさみちちゃんの声に聞き惚れていた。

美しすぎるその歌声に、目を閉じて聞いて心から酔いしれる。

歌い終わった時、コトリとギターを置く音が聞こえた。

——逝っちゃったかな。

そう思つて目を開くと、そこには満面の笑みを浮かべるまさみちちゃんの姿があった。

「消えると思つたのか？」

「まあね」

「馬鹿だな多々。私は言つただろ？ お前が消えるまで消えないって」

律儀に守ってくれちゃつてと思ひながらも、俺はひさ子ちゃんからマイクを受け取つ

た。

「——まさみちゃんの最後の曲、酔いしれたかい？」

俺が聞くとそれに返事をする代わりに頷きが返ってくる。

その反応に満足すると、俺は目を閉じた。

「教師の皆さんはご退場ってね」

突如として現れた戦線メンバー。

体育館の入口から入ってきた皆は俺の方を見ると喜んで手を挙げてくれる。

そう言えば俺の今の服装って、右足が途中から切れてて心臓の所に血がメツチャついでる凄いい格好なんだよね。

左足のところも結構血がついてるし。

「日向君達は教師の皆をどうにかしてくれるかい？」

任せろと言う声と共に教師の清掃作業に入ってくれた皆を見つつ、俺は声をあげる。

「しんみり最後って言うのもいいかもしれないけれど、それはガルデモのまさみちゃんの終わり方に相応しいと思うかい？」

その言葉に会場は黙り込む。

「おいおいのかよそれで。これはまさみちゃんの、ガルデモとしての最後の舞台なんだぜ？ だったら——盛り上げていくしかねえだろ皆！」

うおおおおおおお！　と言うドデカイ歓声が聞こえてきたのを感じると、俺はマイクスタンドにマイクを取り付けてそれごと握り締めた。

「Crow Song二発目！　これは普通とは違うから覚悟しやがれ！」

そして——ボーカルとして俺が入った。

同時に巻き起こる歓声に、もしかして俺って割と人気あると思いつつ叫ぶ。

歌に爆発するようなこの思いを込めて放つ。

感情を埋め込まれるだ？　勝手にしやがれ！　俺が求めてるのは今熱さだ！

燃え盛る様なこの会場を包み込む、もつと膨大な熱さだ！

「もつとだ！　もつと熱くなれよ！」

更に煽る。最後ぐらいこんだだけ大きくしなないと盛り上がらないだろうが！

誰が来ようと何をしようとうでもいくらいの大きな盛り上がりを見せたこのま

さみちやんの無期限活動停止のライブを、最高のショーとして提供出来た。

全てを終えた俺はその場に倒れて、大きく息を吐いた。

——楽しかった。

観客の前で歌えたことよりも何よりも、このガルデモと言うメンバー全員と一緒に歌えたことが楽しかった。

——どうだい。これが本当の幸せと満足って奴だぜ。

俺が俺に問いかけると、俺は普通にそうだねと返してきた。

全く俺ってやつは……と言う感じで俺と言う言葉がゲシユタルト崩壊思想になつて
いる件について。

「良くもまあこれだけ暴れてくれたわね。天使エリアの侵入には成功したけれど、これ
じゃあ台無しじゃない。このバカとんちんかん」

「いやあ、楽しくなつちやつてついつい。てへぺろ☆」

「お前が言つても可愛くないわ」

「うん。自覚はあつたんだ。そつとしておいて」

軽くいじけてみるけれど、やっぱりこの感じがいつも通りで調子が良くなります
わー。

「みゆきちちゃんに慰めてもらうもーん!」

「た、多々君いきなり来ないで!」

「いいじゃんみゆきちちゃん。しおりともイチャイチャしてるんだし俺ともイチャイ
チャしたつていいだろ? 三角関係って奴?」

「こ、困るよう」

「困つてるみゆきちちゃんマジ天使! しおりもそう思わない?」

「思う思う！　つてあたしの前で堂々とみゆきちを汚そうとするな！　この馬鹿彼氏！」

いつも通りじゃないかもしれないし、いつも通りかもしれない。でもどつちでも良くて、今が楽しければそれでよし。

そう言う考えで生きていったっていいじゃないですかー。やだー。

「取り敢えず、次回からも新生ガルデモで頑張りましょう！　イツツショウタイム」

「それレッドギルドだから。プレイヤーキルし始めちゃうからー！」

「たっはー！　間違えちった」

「もー。タツ君のド・ジ・っ・子♪」

「この二人いつになくテンションが高いわね。殴っていいかしら？」

「オーケーゆり。あたしも手伝うぜ」

二人してゆりちゃんとひさ子ちゃんに殴られて停止するまで騒ぎ続けていたのも、いい思い出です。

033 《Engage》

「——つまり貴方は可略化して言う、NPCに憑依した人間と言うことなの？」

「それで大体合ってる」

「漸く自分のことを理解した俺は、リーダーであるゆりちゃんにキチンと説明していい。鬼嫁だ。」

と言うのも説明しなさいとしおりに怒られたからである。

「はあ。確かに貴方は普通とは違うと思っただけで、まさかそんな存在だったなんてね。いつどこでもイレギュラーと言うものは有り続けると言うことかしら？」

「そんな感じじゃないかなあ？　そこに存在している以上、バグやイレギュラーって言うのは必ず何処かに存在しているものだからね。強いて言えば影みたいなものかな」

人がいれば光にあたって影ができる様に、存在していればバグやイレギュラーは起こってしまうんだ。

それは何処の世界であっても何であろうとも、変わらないと言うことだね。

「とにかく、貴方は人間でありNPCであると捉えていいのかしら？」

「そこらへんはゆりちゃんの勝手にしてくれにや。俺的にはガルデモと一緒にいれれば

万事オーケー」

ラブじゃなくてライクですけどね。ここは譲れない俺の一線。

ハーレムとか言っているけれど実際はただの一途な男の子なのね。

「そう。なら貴方は人間と扱うわ。元々人間として扱っていたわけだしね」

その方がありがたいでござると言おうとしたけれどやめた。

結局の所俺はどっちでも良いしなー。

「超個性派NPCとして扱っても良かったんだけど、それだとNPCとしての前提が崩れるじゃない」

「まあそう思うんならそれでいいんじゃない？」

別に俺達が思っていることなんて、全部把握できているわけじゃないし。

「なら報告は終わりよ。貴方は私達の仲間。それでいいじゃない」

「流石はゆりちゃん。そこに痺れる憧れるう！」

そんなことを言いながら校長室を後にすると、ふうとため息を吐いた。

——しおり成分が足りない。

「アイキッスユー！」

「うわっ!？」

しおりに飛びついた。

いやあもう名前の通り飛びつきましたともそうですとも。何か問題でも？

「うわあ……。アホツプルがいる」

ゆいじゃん何かに咳かかれていた気がするけれど、そんなことは問題ない！

取り敢えずひさ子ちゃんに襟首掴まれて持ち上げられてしまったので、どこからそんな筋力が出ているのか小一時間問い詰めたい多々君です。

胸か!? 胸なのか!? それは実は胸筋なのか!?

「お前なあ。暴れるのはいいが練習中に関根がギターを置いた瞬間に飛びつくのはやめろ」

「廊下で機会を伺ってました。ここだと言う瞬間に飛びつきました。反省はしてません」

投げられます。だからどこからそんな筋力が——以下略。

投げられた方向にいた遊佐ちゃんにやっと手を挙げると、やっと手を挙げて返された。

今日も今日とてノリが良くてお兄さん嬉しいです。多分俺の方が年齢下だけど。

「多々さんはいつでもひさ子さんに投げられていますね。その襟首は飾りですか？」

「ごめん。俺でも理解できないネタは振らないで欲しいんだ」

そこからどう偉い人にはそれがわからんのですと繋げれば良いのでせうか？

「多々さんはこの世界について気がついてるので一つアドバイスを。この世界は卒業する場所です」

俺にしか聞こえない声で、遊佐ちゃんはそう言った。

多分そうだとは思っていたけれどね。

この世界は青春時代をともに遅れずに死んだ者達で、未練を無くして卒業——成仏して転生する世界であることも。

いつか全員で卒業しなければならぬことも。

「そっか」

「わかっではいるようですね」

「理解することと実行することは別だよ。今しなきゃならないことは別に他にもあるし、最優先ってわけじゃないかなあ」

「実際岩沢さんの卒業を食い止めていましたからね」

そうなんだよねえ。俺がまさみちゃん卒を止めちやっただよねえ。

これは責任取らないといけないかな。

「別にいいさ。ガルデモのメンバーは俺と一緒に卒業してもらおうから」

「お熱いことで」

遊佐ちゃんの言葉に俺はクスリと笑った。

例えばそれがエゴであっても、愛している人と大好きな人達と一緒にいたいんだよ。それが——人間って生き物だからね。

「きつと選択する時はいつか必ずくる。それを、無碍にするわけには行かないんだ」
選択がいつ起きるのかはわからないけれど、それでもし俺を選んでくれたとしたならば俺は皆を導く責任がある。

だから俺は進むんだ。次のステージに、進まなきゃいけないんだ。

「それならば問題ありませんね。いつか私も貴方に卒業させてもらえることを楽しみにしています」

「……そうかい」

また一人大切な人が増えたなと思いつつも、それが嬉しくて仕方が無かった。

大切な人がドンドン増えていって、いつか大切な人の輪が出来る。

そうすれば俺は本当に、ああここにおいてよかったなあと思うことができるんだろう。けどまだ、根本的どころが解決していない。

どうすれば俺が卒業することが出来るのかということが分かっていない。

ヒントとなるのは、姉の存在だ。

ややこしいことになるな——と思いつつも、俺はゆいちゃんの歌声を聞きながら瞳を閉

じた。

——目を開くと夕方になっていた。

結構長い間寝ちやつたかなと思ひ練習室を覗くと、そこにはしおりの姿があった。恐らく俺が起きるのを待っていてくれたんだろう。

「起こしてくればよかつたのに」

「あはは。タツ君がいい寝顔で寝てたからね」

笑いながら言ったしおりに、そうだったんだと答えつつも俺達は無言になった。

「実はあだし、タツ君のこと知ってたんだ生きてた頃に見たテレビに雨野多々つて人が出てた。タツ君特番を組まれてたこともあつたんだよ？」

「いやそれ以前の問題として俺のことを最初から知っている時点で驚きなんです」

「ってことは最初から俺が殺人犯だつたって知ってたってこと？」

「何故それなのに俺に近づいたし。」

「幸せを求めて死んだ殺人犯ってタイトルでね？ その時タツ君つてもう被害者の扱いだつたんだ。映画にまでなつてたんだよ？ 両親に捨てられて、大切な人を奪われた主人公が復讐の為にヤクザに乗り込むストーリー。結構人気の映画だつたんだ」

まあわからなくはない。

日本人が好きそうな波乱万丈の人生だったし、ヤクザを日本から遠ざけたい人にとってはこういうことをしてますアピールにも十分使えただろうしさ。

死人に口なし。誰がなんて言おうとも、美化しようとも、俺という存在がそれに文句を言えることは何もなかったんだから。

「死因は変えられてたけどね。映画は最後にヤクザに撃たれて死んじゃったけど」

「そりゃ死因テクノブレイクなんてしたら映画としての評判ガタ落ちでしょ」

ただの喜劇じゃねえか。

「あたしはその映画を見て、ああこういう人もいたんだって思ったんだ。あたしはまだマシかかって」

あの頃の俺はそんなこと思ってないし、NPCに一般的な感性を貰わなかったら今でもあれが幸せだと思いついていたんだと思う。

蓮花と共に依存して、姉さんの為だけに時間と労力を惜しんだ空っぽな俺。

自分がそこに無かったとしても、それも幸せだと考えてしまう程俺の思考は衰弱していた。

「最初にタツ君と会った時、別人だと思ってた。あたしより前に死んだ人だし、明るい雰囲気だったから。でも違った。過去を聞いた時に、ああやっぱりこの人はあたしの知っている映画の中の主人公なんだって思った。あの時の一人じゃダメでも、二人ならダイ

ジョーブって言うのはあたしがその映画を見てずっと思っていたことだったんだ」

次々と現れていく事実には、俺は聞くことしかできない。

「タツ君も、タツ君の元カノも、タツ君のお姉さんも、依存はしていても一緒じゃなかった。考えるのは全員一人で、二人でどうしようかと考えるシーンが殆ど無かったのだから——」

「二人ならダイジョーブ。二人なら二人で分かち合うことが出来る。そんな根本的なことも、あの頃の俺達は理解できていなかったんだな」

全く酷い人生だったよと軽く呟いた。

俺は、俺達は何もかもを知らなすぎた。

一般的なことを知らなすぎたんだ。

「そして一緒にいて、ああこの人はやつぱり自分で自分のことをずつと考えちゃう人なんだなと思って、ずっと一緒にいたいと思った。最初はそんな気持ちだったけれど、段々それが好きって気持ちに変わっていった。で最後には、愛してるって気持ちになっただ」

しおりから愛してると言われた瞬間結婚しようと言いそうになっただけれど、それを我慢して心の奥にしまう。それを言ってしまったらいけない気がしたから。

「だからあたしはタツ君が好き。愛してる。これからもずっと一緒にいてください」

「しおり……」

俺はしおりに近づくと、しおりを抱きしめた。

壊れないように優しく。されど離さないように強く。

しっかりとしおりのことを抱きしめて、その体温を感じながら俺は思う。

ああこの子には絶対に勝てない。しおりには勝つことなんて出来るはずがないんだ。

「愛してる。ずっと一緒にいたい」

自分の中の何かが壊れていく音を聞きながらも、俺はしおりを抱きしめ続ける。

「結婚しようしおり」

「——うん」

互いの愛を知り、愛を受け止めることをしつた俺はしおりに告白をした。

それが叶えられた時、俺の中の何かがカチリと無くなった。

S I D E : ???

——一つ目が解けたんだ。

私はそれを察すると、少し笑みを浮かべてしまう。

良かったね多々。

貴方が叶えたいと願っていたものが、遂に一つ叶えることが出来たのだ。

この長い長い時を生きる中でも、忘れなかった貴方の大切さと思い、それを十二分に理解して、貴方にそれを与えたの。

まだ後二つ残っている。

だけれども、それで貴方の中にあつたプロテクトは無くなつた。

今までの貴方は生前の貴方。

価値観が手に入つただけの、昔と変わらぬ貴方。

だけれども今からは違うの。今からの貴方は、この世界で進化していく。

プログラムなんて関係なく、ただ自分の行きたいと思う方向に進んでいくことができる存在。

自由の翼を手に入れた天使。

さあ見せて。貴方が何を望むのかを。

034 《On Air Third》

「——第三回死んだ世界戦線ラジオ！」

「珍しく音無君がやる気満々!？」

俺は驚愕した。

「いや、これを見て楽しんでる奴らがいるって聞いてから、何故か知らないけど凄いやる気が出てきたんだ。お客様の為ならばなんでもする精神だな」

「流石は音無君。俺じゃ考えつかないことまでやってくれるぜ」

因みに俺にそんな精神は存在しない。つまり俺は自分が楽しむ為だけ行っているんだ!

「今回のゲストは戦線のリーダーことゆりでお送りします」

珍しい一人だけのゲストだよ。でもこれには事情があるんだよ。

「はい! ゲストのゆりです! ってなんで私がラジオなの! ここは今回の章で活躍していた関根さんとか岩沢さんだろうが!」

「いや、もう被ったら面白くないじゃん?」

「じゃんじゃないだろうがじゃんじゃ! でもまあ面白い企画出されたから許す」

ふうよかったと思いつつも、音無君が既にお便りを持ってきていた。

完璧だな。歴戦のMCかよ。

「最初のコーナーは質問トーク。死んだ世界戦線に送られてきたお便りについてゲストを交えてトークすると言うコーナーです」

いつも通りに進むけれど、今回正直この場にいない人達にご愁傷様と告げたい。

だってここにあくまがいるから。悪魔じゃない。あくまだ。

「最初の質問です。岩沢さんがガルデモを脱退したと言うことは、もうガルデモのライブで岩沢さんは出てこないのですか？　音楽活動はもう今後行わないのですか？」

「まさみちゃんはあくまでも脱退したとは言え、戦線のメンバーです。路上ライブは行いますし、バンドとしてではないシンガーとしてのまさみちゃんを楽しんでください。因みにスペシャルゲストとしてライブに呼ぶかもしれないかもしれません。要チェック！」

「割と普通ね。もっと面白いこと言いなさいよ」

「次回のライブにはゆりちゃんが出ます」

「それが面白いことかよ！　なんでいきなり私がライブに出されることになってるのよ！　出来ると思ってるのか！」

「いや、ライブに関しては俺の方が立場上なんで」

「そーだったー！　あたしがなんか最近多々君に任せておいたほうがトルネードしやす

いからって、最高責任者とか言っちゃったんだってー！」

「墓穴掘ったのか？」

「うん。特大の墓穴掘ったの。俺に任せれば暴れることなんてわかっているのにね」

「じゃあ次の質問。最近ブラックコーヒーが売り切れていることが多いです。何故ですか？」

「どうしてだろうね、音無君」

「「お前の（あなたの）せいだ（よ）」」

「おっと。二人がはもつて俺を攻撃してきた。酷い。酷すぎる」

「お前が関根に告白してしかも最近結婚までしようとしたらしいからか知れないが、最近だと特にそのオーラにイチヤイチャが入っていて砂糖が出てくる」

「本当よ。前なんて二人で対天使対策室に膝枕してもらいながら二人共寝ってたんだからね？ 嫌味か。独り身に対する嫌味か」

「そんなことないよー。俺だつて自重してるんだよ？ それにあまりイチヤイチャしすぎるとみゆきちちゃんが修羅になって襲いかかってくるから」

「そんな入江さん知りたくなかったわ。と言うか結局あなたのせいじゃない」

「お前がそんなことをしてるから、最近日向が「俺、人気ねえよな。ははっ。そう言えば多々に聞いたんだけど俺って戦線男子ランキング最下位らしいぜ。俺って消えたほう

「がいいのかな？」とか言い出すんだぞ」

「別に最下位とは言つてない。低いとは言つた」

主にゆいによんのせいだ。

「ともかくその原因はあなたよ。因みに私はブラックコーヒーを売り出したところ結構儲かったから何も文句は言わないわ」

「実はその次の質問がそれに該当しているんだ。戦線男子ランキングなるものがあるらしいのですが、それは一体何ですか？」

「戦線にいる男子の中でも主要メンバーを話し合つた結果、誰が一番〇〇なのかと言うランキングのことだね。一応決めているのは最もモテる人、最も頭がいい人だね。あ、今度から皆に投票してもらつて、それで決めていくつて言うのもいいかもしれない」

「毎回犠牲者が出るのね。いいじゃない！」

ゆりちゃんは犠牲者——もとい被害者が出る場合喜ぶ傾向がある気がする。

この子絶対将来碌な人にならないよ。

「じゃあ最初のお題は——そうだな。戦線男子の中で一番かつこいい人ランキングつて言うのはどうだ？」

「それいいじゃない。よくやつたわ音無君。じゃあ出場メンバーは、多々君、音無君、日向君、藤巻君、松下君、大山君、TK、野田君、高松君、竹山君は……却下でいいか。こ

の9人で争ってもらうわ。勿論敗者には罰ゲームをしてもらうけどね」

「流石ゆりちゃん！ ただでは終わらせない！」

「罰ゲームはそうね……今度のランキングが発表されるまで俺かつこいいですアピールを続けてもらおうかしら？」

「自分が戦線内で一番カツコよくないとわかった後にかつこいいですアピールをさせるなんてなんて鬼畜……！ 因みに俺の場合は常にそういったネタをしているのであまり変わらないじえ」

「貴方が最下位になるなんてことあるかしら？ フラグ立てたとかそういうことを抜きにして」

「まあ多々ならなんとかなるだろ。問題は俺とかその辺だろうな」

「いやいや音無君も普通に大丈夫だと思うよ？ 強いて言うならば野田君辺りがアウトじゃない？」

「でも見た目だけはいいいからな、あいつ」

「見た目だけならね。頭の中は底なしの馬鹿だしな」

しかし一途なのである。そう言う人は応援したい。

「じゃあ次行くわよ。次はショートコントのコーナーじゃないの？」

「いえいえ。これからが本題ですよ。題して——匿名悪口のコーナー」

「匿名悪口？ 何かしらそのコーナー？」

「新しいコーナーでして、戦線の主要メンバーから集めてきた戦線の主要メンバーに対する悪口をラジオで発表するんだ。それで——誰が言ったのか疑心暗鬼に陥らせてそれでも信頼できるのか信頼を確かめ合うコーナーさ」

「あらいいじゃない。疑心暗鬼に陥る戦線。表では信じてるぜと言いながら裏では誰が何を言ったのかと探し回る。これは明日からが楽しみね」

「じゃあ最初の悪口！ ペンネーム殴るなら俺を殴れさん！」

「あら、どこかで聞いたことがある人ね」

「ゆりつぺがいつも傍若無人で困る。あいつを誰か止めてくれ。迷惑」

「……いい度胸じゃない。何処かの前回殴られたかった人さん。お望み通り貴方を殴つてあげるわ」

やっぱりこれはちよつと面白いかもしれない。

「ペンネーム相手の対策でデッキを作るさん。日向がホモで狙われてる奴らが可哀想。女を狙え女をだそそうです」

「実際本当にホモホモしいから否定できなくて困る」

「日向君女の子をキチンと狙ってねー」

「というわけで次の悪口。ペンネームブラック☆スターさん。最近NPCと呼ばれてい

る。お前がNPCだろうが」

「……ほう。いい度胸じゃないかブラック☆スター君。言いにくいし長いからここは大
山君と呼ぼう」

「いやそこに大山の要素一切無いから」

「これはノリと言うものだよ音無君。ところで最近新しい日本刀が来て、試し切りをし
たいんだ。そこに君がそんなに言うなら、君を切つてあげてもいいんだよ？」

「これ見てる分には面白いな。次の悪口。ペンネームゆいにゃんさん」

「馬鹿だ。馬鹿がいる」

「ひなつち先輩死ね」

「おー。ドストレートだね。しかも名前を隠すつもりがないと見た」

「馬鹿ね。正真正銘の馬鹿ね」

「次の悪口。ペンネーム氷の造形魔法使いさん」

「またコアなところ使ってきたなー」

「最近ひさ子がギターを弾いている姿を見ると殺意が湧いてくる」

「プルンプルン揺れてるからですね。無いからなー」

ピックが俺の頭に激突してきた。

「これが最後の悪口。ペンネームちっちゃくないよ！さん」

「なるほどなるほど。誰かわかった」

「最近自分の上で寝ている人が彼氏を連れ込んでいて困ります。砂糖を吐き過ぎてイライラします。糖分過剰摂取らしいのですが、それを現在全て相方の口の中にぶち込んでいるところです。次は貴方を糖分過剰摂取で殺害します」

「……しおりごめん。俺は——ッ！ このみゆきちちゃんが吐いたと言うある意味で間接キス以上のものに相当する砂糖を見過ごすことができない！ さあ来るがいいみゆきちちゃん！ 口と口を合わせてその砂糖を俺の口の中に放つがいい！」

「し、しないもん！」

いつの間にかラジオ室の前までできていたみゆきちちゃんが走って逃げていった。解せぬ。

だがしかしあの時の顔を赤らめているみゆきちちゃんは可愛かったなあ。

「にしても色々なペンネームがあって面白かったな」

「因みに音無君のペンネームはきつと天帝の瞳なんだろうね」

「オヤコロ☆つてする訳無いだろ！」

「今したじゃん」

「取り敢えず、フリートーク！ ゆりちゃんは今回どうだった？」

「どうってなんのことかしら？」

「一応はこの企画考えたのゆりちゃんでしょ？」

「そうね。取り敢えず日向君を殺すわ」

「じゃあ一緒に行くよ。俺も相部屋のブラック☆スター君。通称大山君に用があるんだ」

「夜中に襲撃でもかけようかしら？」

「あー、それはきついかも。今日もしおり達とパジャマパーティーする予定なんだ」

「ほほ毎日やってるのによく飽きないよな」

「それはまあいつか音無君にも分かる時が来るよ。愛する女と大好きな人たちと一緒にいるだけで、心って言うのは幸せになれるんだよ？」

「ノロケ乙。でもなあ、俺はまず記憶から取り戻さないといけないからな」

「もしかすると君もテクノでブレイクな死に方をしたかもしれないゾ☆」

「そしたら自殺するわ。まあこの世界じゃあ死ねないんだろうけどな」

「因みに二人もそんな死に方した奴がいるなら、片方は追い出すわ」

「そりゃそうでしょ。俺だってそうするもん。そうなたら後から入ってきた音無君を追い出すからね」

「何言ってるんだ。普通に考えて害の無い俺だろ」

「それじゃあ音無君じゃなくて害無君じゃないか」

「ごめん。意味がわからん」

「意味なんてわからなくていいのよ。順応性を高めなさい。あるがままを受け入れるのよ」

「それは私のセリフ！」

「じゃあ……お前立派にリーダーしてんよ」

「それは俺のセリフ！」

「じゃあ……成人男性には興味ありません。シヨタ、14歳までの男の子は——」

「それは淡きんのセリフ——って淡きんって誰よ！」

「じゃあ……ルーム——シャンブルズ！」

「それは俺の能力だ！　って俺に能力なんてねえ！」

「ここは放送室だからきつと他の世界の電波まで受信しちゃうんだよ。因みに僕と契約して魔法少女になってよって言う言葉があるんだけど——」

「それはお前の彼女の電波だろ！」

「流石二人共。息が合ってるう！」

「——音無君がいつもどれだけ苦労しているのかわかった気がしたわ」

「だろう？　俺はいつもコイツの相手をさせられてるんだぜ？」

「酷いなあ音無君は。俺だってそんなにバカばかりしてわけじゃないでしょ？　ほ

「うちよつと前のこと思い出してごらんよ。戦つてたじゃん俺」

「お前の場合は戦つてる時と戦つていない時の差が激しすぎるんだ。何だよ舞おうぜアミーゴつて」

「いいじゃん。あの時はテンション上がつてたんだから。何だよ立派にリーダーしてんよつて。してたら日向君にこんなに言われてねえわ」

「確かにな」

「納得すんな！　ともかく、二人共これからもラジオ頑張つてね。以外と人気が出てるんだから」

「そう言われてもなあ？　あ、こんな企画どうだ」

「そうだよねー。いいと思うよ？」

「やる気満々じゃねえか！　最初の頃の嫌がりはどこに行つた！」

「いやだつてお客様の為に全力でなんでもするのがMCだろ？」

「俺はそんな高潔な精神持つてないけど、他人弄れるのが楽しい」

「順風満帆だな！　でも次はちよつとメンバー変えるわ。それで新しい風を巻き起こすの」

「なるほど。で、次の司会は誰？」

「入江さんと関根さんよ」

「俺ゲストで行くわ」

「ええ勿論いいわよ。その為だもの」

「と言うわけで次回は司会が変わるよ！」

「やったね！」

第5章 《たった一つの思い Only one of

expectation》

035 《Search First》

SIDE：音無

ふと思ったんだ。

俺は戦線メンバーについてまだあまりよく知らない。

最初は記憶を取り戻す為の準備期間だったつもりだけれど、こんなに長くいれば親近感だつて湧いてくる。

だから色んな奴と話そうと思ったんだけど、何も話題がわからない。

そして同時に思ったんだ。

そうだ——誰かのことを調べれば、それについて聞いてまわつてるとすれば話せるんじゃないかと。

その一番手として挙がったのは——多々だった。

あいつはいつも何かしているし、実は頭が良くて運動が出来る天才タイプの間人だ。

それに俺に色々なことを教えてくれた、優しい奴でもある。でもその反面謎が多い奴だ。

だから聞いてみることにした。

一人目 《仲村ゆり》

「多々君について知りたい？」

「ああ。あいつつてよくわからないことが多いし、いつも世話になってるのに知らないのはもどかしいなと」

「なるほどね。いいわ。教えてあげる。彼は——正真正銘のリア充よ」

「うん知ってる」

「それでいて運動神経抜群でバスケットが非常に上手くて、頭の回転も速い上に頭脳が非常に高いの」

「聴けば聴くほどあいつつて凄いやつだな」

「ええ。それでいて周りへの気遣い、特に女性の扱いに長けているわ」

「それはどういう点からわかったんだ？」

「あら、やっぱり男子だものね。多々君の扱い方を学ぶことはいいいことよ。そうね、他の人にも聴くなら私だからこそ話せることにするわ」

「頼む」

「多々君が来て数日のことだったけれど、前を見ないでいた男子生徒が私とぶつかったの。そこに多々君はいなかったんだけど後から来てね。すぐに尻餅をついている私に手を差し伸べたのよ」

「まあ普通だな」

「それだけじゃないわ。その男子生徒に対して注意して、尻餅をついた私をその……お、お姫様抱っこして保健室まで連れて行ってくれたの。あれは不意打ちだったわ。歩けると言ったのに、調べた方がいいと言って連れて行ってきてそのままずっと外で待っていてくれたの」

「やっぱりいい奴なんだな」

「そうね。彼はいい人よ」

二人目 《日向秀樹》

「多々について知りたいだ？ お前、これなのか？」

「それはお前だろ？」

「なあ!?! 多々のせいで俺がホモだと思われてる!?!」

「それについてお前に聞きたいんだが、あいつは何をしてるんだ？」

「あいつがしてること？ そうだな……一番してるのはやっぱりガルデモのことだろうぜ。あいつはマネージャー兼プロデューサーをしてるんだ」

「それって凄いことなのか？」

「ああ凄いことだとも。あいつが来るまでガルデモにマネージャーもプロデューサーもいなかったんだ。だけどあいつがマネージャーをし始めてからはガルデモの練習を覗こうとしていた奴らも許可を取らなきゃならないと言うルールを定めたり、飲み物を飲む時間や練習時間を正確に決めたりしたおかげでガルデモの実力も鰻上りになったらしいぜ」

「そんなになのか」

「ああ。それにプロデューサーとして最初のライブを大成功させたんだ。因みにその時ご飯を食べるのも水を飲むのも忘れて三日間徹夜して餓死した。それがこの世界で最初の死因だ」

「真面目なんだな」

「そうだな。あいつは仕事に一番真面目な奴だ。多分戦線の奴ら誰もが認めている努力家だよ。努力は人を裏切らないって言ってるしな」

「努力家か。俺は記憶がないから何をすべきなのかもわからないな」

「それは仕方ねえよ。あ、後多々は情報操作もしてるんだぜ？」

「情報操作？ 初めて聞いたな」

「気がついてる奴は殆どいないかもしれないけど、あいつがこの学園内にある噂の殆どを作り上げてるんだ。それでいて戦線が不利になる情報とかは自然に封鎖していたりとか、ライブの情報もかなり制限しながら流していたりとかされてるんだ」

「知らなかった」

「そりゃ知らなきゃ気がつかないレベルの情報操作をしてるんだからな。そう言う意味でも尊敬できるよあいつは」

三人目 《高松》

「多々さんですか……彼は一言で言えば師匠ですね」

「し、師匠？」

「ええ。実は以前彼に恋愛相談を持ちかけたことがあるのですが、それはそれは親身になつて聞いてくれました」

「そ、そうなのか？」

「はい。それに私の肉体について理解もありますし、多々さんも実はかなりの筋肉の持ち主なんです。脱いだら凄いです」

「それは知らなかった」

「多々さんは色々多彩な趣味を持つていまして、その中の一つに読書等があるので多くの知識を持つていっているのです。私は実は遊佐さんのことが好きなのですが、最近では一緒にご飯を食べれるところまで進歩しました」

「すごいな!」

「勿論この気持ちも告げたいと言う気持ちはありますが、私は多々さんと違つて消えてしまう。なのでもし私達がこの世界を去ることがあれば、最後に遊佐さんに告げる方がいいと言われました。そのあるかないかの最後の為にも、私には努力が必要だと」

「いや多々も凄いいけれどそれを理解して実行するお前も凄いなと思うんだが……」

「多々さんは言っていました。恋愛とは逃げではなく攻めが基本なのだ」と

「あいつほど恋愛相談が似合いそうな奴はいないからな」

「その通りです。この戦線唯一の彼女持ち。もしくは嫁持ちと言う凄まじい人なんです。貴方もいつか彼に弟子入りしたいと願う日が来るでしょう」

「確かに男としては弟子入りしたい奴だな」

「はい。それでは今から遊佐さんとお茶を飲みに行くので」

「ああ。頑張れよ」

「奴は……俺のライバルだ」

「ライバル?」

「俺はゆりっぺに惚れているが、奴の動きにはゆりっぺに好意を持つ動きがある」

「いやそれが女性に対して行う仕草らしいぞ。ゆりも言ってた」

「何!?!」

「それに高松はあいつの恋愛指導を受けていいところまで行っているらしいぞ」

「そ、それは本当なのか!?!」

「あ、ああ。小細工とかそういう言う仕方じゃなくて、女性に対する接し方や恋愛相談を受け入れているらしい」

「俺は……どうするべきなんだ?」

「さあ?」

「俺は確かにゆりっぺのことが好きだ。だがだからと言って奴に頼み込むのは、小細工をしているのと変わらんのではないか?」

「——野田。俺はお前に何があったのかは知らない。記憶も無いからお前について何も言うことは出来ないかもしれない。だけど、俺は一つだけ言えることがある」

「……何だ」

「誰かに恋愛を相談することは小細工ではなく努力だ」

「!？」

「それは相手に気に入られようとする小細工じゃなくて、相手を幸せにしたいって言う努力だと思うぜ？」

「……ふっ。俺はお前を間違った目で見ていたようだ」

「そうか」

「少し奴の所に行ってくる」

「ああ行ってこい。……あいつチョロイな」

五人目 《椎名》

「それで、多々のことを知ってるか？」

「……知ってる」

「普通に喋れるんだな。じゃあ教えてくれないか？」

「奴は可愛いものをくれた」

「は？」

「この人形も元々は多々が作ってくれたものだ」

「これをあいつが作ったのか!？ この犬のぬいぐるみを!？」

「そして私に裁縫を教えてくれたのは多々だ」

「あいつそんなことまで出来るのか!？」

「奴のパジャマである着ぐるみは私が作った」

「確かあいつがいつも着ているパジャマだよな？」

「そしてこのパジャマは奴が作ってくれたものだ」

「このウサギのパーカー風パジャマをか？ あいつもお前も手先が器用なんだな」

「あさはかなり……」

「照れたのか？」

「照れてなどいない」

六人目 《遊佐》

「どうも遊佐です。ドヤリ」

「あ、ああ。ところで多々について知ってるか？」

「多々さんのことを知ってどうするつもりですか？ 襲うつもりですか？ 多々さんを

襲つても残念ながら薄い本は厚くなりませんよ？」

「そんなものはいらねえし襲うつもりも無い！ それで多々について今色んな人に聞いてるんだ」

「そうだったのですか。多々さんはネタに生きています」

「だろうな」

「なのですが実際はそのネタで誤魔化しているだけの普通の傷ついている人です」

「そうだったのか」

「はい。彼はただの強がりです。ネタに走って元氣一杯に見せかけて、実はいつも心中で泣いている可哀想な少年なんです。シユン」

「俺、知らなかった」

「と言う設定でどうでしょう?」

「設定かよ!」

「それを慰める為に音無さんが俺で暖めてやるよと襲いかかるのはどうでしょう?」

「本人目の前にして薄い本の話をするな!」

「ダメでしたか。では次の設定を——」

「俺は多々本人について知ろうとしてるんだ! お前の薄い本の設定を知ろうとしていくわけじゃない!」

「残念です。シユン。ですが私は諦めません。ドン!」

「口で自分の状態を表すな」

「多々さんには面白いと言われたのですが。ニヤリ」

「本当にニヤリとしてないのにニヤリとか言うな。ともかく、多々ってどんな奴なんだ

？」

「完璧超人から性格を抜き取った人です」

「……今までで一番わかりやすい説明に俺が驚いている」

「全音無さんが驚愕した遊佐のストーリーです。きつと大ヒット間違いなし。ブイブイ」

「だからネタに走るなって。じゃあ俺次の奴に聞いてくるわ」

「行つてらっしゃい。まあ実際あの設定は本当なんですけどね」

七人目 《藤巻》

「多々について？ あいつがなんかしたのか？」

「いやそういうわけじゃなくて、ただ単純に多々つてどんな奴なのか気になっただけだ」

「多々がどんな奴かって言われたら、あいつは元々軽音部だったつーことか」

「軽音部？ だからガルデモのバンドを手伝つてるのか？」

「ああ。何でもボーカルをしてたらしくてな。あいつ滅茶苦茶歌が上手いんだぜ」

「やっぱり完璧超人か」

「あ、でもあいつ甘いものが苦手って言ってたな」

「意外だな」

「なんか甘いものは高級品だからって言ってたんだが、まあそこらへんはきつと過去に色々あったんだろうよ。詮索してやんなよ」

「わかった。他にはなにかないか？」

「俺もそんなに長く多々と一緒にいるわけじゃないからな……。あ。あいつは大体四つに人を分けてるぜ」

「四つ？」

「確か、愛してる奴、大好きな奴、普通、嫌いだ」

「その四つなのか？　大嫌いとかはないんだな」

「そうらしいぜ。何でも嫌いの中は殺したい奴しかいないらしい。因みに俺達戦線メンバーは普通以上大好きな奴未満が多いらしい。ガルデメンバーは全員大好きな奴。関根が愛してる奴らしい」

「あいつって割と一途なんだな」

「他の女に手を出す時もあるが、あいつがいつも言ってるのは可愛いし大好きだけれども愛しているのはしおりただ一人だとよ。あいつに愛されてる奴は幸せもんじゃねえのか？」

「確かにそうかもしれないな」

「あいつは常に女の幸せを考えながら動いているし、絶対に彼女を裏切る様な真似をし

ねえ奴だと俺ははつきり言えるね」

「あいつのことを信頼してるんだな」

「まあな。確かにあいつは見た感じ頭がおかしい奴かもしれないねえが、結局の所一人の間違ったつてことだよ。勿論天才で完璧超人でも苦悩するし、普通の奴と変わらないつてことだ」

「なるほど。ありがとう」

「気にすんな。あいつになにかされたらすぐに動けよ。手遅れになるからな」

「ああ。気をつけておくよ」

取り敢えず本日の成果はこのくらいか。

もう遅いしまた明日にしよう。

S I D E : 多々

「多々!」

「うわあ!?! どうしたの野田君!?!」

「俺を……弟子にしてくれないか」

「いきなりどうしたのさ」

「俺はゆりつぺを俺の手で幸せにしたいんだ。頼む! お前にしか頼めないことだ!」

「そんな土下座までして!? でもその心意気、流石だよ野田君」

「多々、お前……」

「俺で良かったら協力させて!」

「ありがとう! いや、ありがとうございませす師匠!」

「やめてよその言い方は」

「ではマスターとお呼びする!」

「……なんか嫌な予感がしてきた」

036 《Search Second》

八人目 《TK》

「多々について……何か知らないか？」

「♪」

「あの……TK？」

「ワイは彼を師匠と慕っているんや」

「!? まさかの関西弁!？」

「師匠のことはやから話せん」

「……わかった」

「すまんの音無はん」

「いや、こつちこそ悪かった」

九人目 《松下》

「多々についてか……。奴は非常に人を操るのが上手い」

「人を操るのが上手い? どういうことだ?」

「主に天使においてだが、奴は麻婆豆腐が好きだ。だから知らないが、許可が取つてなく天使が来た時も麻婆豆腐を基本としたあの手この手で動きを封じる」

「知らなかった……。でも俺と一緒に天使と戦った時はそんなことしてなかったぞ?」

「奴はキチンとシリアスな時はシリアスに、コメデイの時はコメデイに出来る奴だ。心の中は知らないが、有能であることに変わりはない」

「まあ確かに有能だよな」

「それとゆりつぺには秘密だが、生徒会副会長ともコネがあるようだ」

「生徒会副会長? それって確かNPCの……」

「本当にNPCであるかどうかは別だがな。見たところNPCの様に見えるが、俺は実は違うのではないかと思っておる」

「生徒会副会長がもしかするとNPCじゃなくて人間かもしれないってことか?」

「多々のこともある。普通にしても消えない人間がいてもおかしくはないのでないかと思つてな」

「確かにそうだな。多々だけが消えないなんて誰か決めたわけじゃないし」

「ああ。俺が疑っているのもこのことも、内密にして欲しい。俺は多々の友好関係に文句を言うつもりはないし、多々のことを疑いたいと思わない。変な誤解を招くからな」

「わかった。色々教えてくれてありがとな」

「気にするな。新しいメンバーが来て、多々も喜んでいる」

「なんとなくだけでも、まるで多々の兄貴みたいなことを言うんだな」

「兄貴……か。奴の兄になるならばそれもいいか」

「そっか。慕われてるんだな」

十人目 《大山》

「た、多々君!? 今は彼のこと若干トラウマになつてるんだ!」

「何かあつたのか?」

「前回君達がやったラジオの時に僕の送った手紙がバレて、それはそれは酷い罪を受け
たんだ!」

「何を受けたんだ?」

「そこを聞いてくるの!? 怖い、怖いよ音無君!」

「いや別に普通に知りたいから聞いただけなんだけど」

「そうなんだ……。良かった。前回のラジオの結果、僕は全裸にさせられて女子寮の前
に磔にされたよ」

「それはまた……。酷い目にあつたんだな」

「それだけならまだ良かったよ。でも多々君は——僕が見られて興奮するタイプだから自ら磔されたって学園中に言いふらしたんだ！」

「そう言えば情報操作が得意って言ってたな」

「おかげで女子は僕のことを避けていくし、男子からは冷ややかな目で見られるしもう散々だよ！ それにいつも静かなのは趣味を隠すためとまで言われてるし！」

「じゃあ最近出てこないのは……」

「外に出るのが怖くて部屋の中に閉じこもっているからだよ。音無君、悪いことは言わない。多々君を怒らせる様な真似は絶対にしちゃダメだよ？ ゆりっぺみたく肉体的に酷い目に遭うんじゃないやなくて、精神的に酷い目に遭うから」

「ああわかった。しっかりと注意しておく」

「それと、困った時があつたらいつでも聞いてね」

「サンキューな」

十一人目 《岩沢》

「多々？ あいつがまた何かしたのか？」

「いや。普通にあいつと結構一緒にいるのに何も知らないなと思って」

「そうなのか。あいつについて……」

「別に難しく考えなくていいぞ」

「そうか。ああ、あいつはNPCだ」

「ぶほっ!？」

「おいどうしたいきなり吹き出して。何か飲み物が喉に突っかつたのか?」

「いきなりそんな爆弾発言されたら誰でもそうなるわ!」

「わ、悪い。でも別に普通のNPCってわけじゃないらしいぞ? 何でも、普通の価値観

のままだと本来の青春を知らないままで死んでしまうから、止む終えずNPCと一体化

させて一般的な価値観を示すだったかな? 私も詳しく聞いたわけじゃないからな」

「それでも凄いい情報が飛び出してきて俺は驚いたよ」

「でもあいつは人間だよ。じゃなかったら、あんな重苦しい過去は持つてない」

「つまりNPCに憑依した人間ってことなのか?」

「そうなるな」

「と言うかこれって話でいいことだったのか?」

「多々は自分のことについて誰かに言わないで欲しいと思うことなんて殆どない。あいつ

が私達に告げた時点でそれは公式発表ってことさ」

「随分と信頼されてるんだな」

「そりゃああいつがマネージャーで私達のことを信頼してくれるんだ。こつちもその信頼

に答えないといけないだろ？」

「それもそうか」

「まあ他にも言ってみれば、あいつは歌うことが大好きな奴だ。特に誰かの為に歌うっていう行為がな」

「誰かの為に歌う……」

「ああ。そこがあいつの悪いところでもある。自分の為には歌わず、人の為にだけ歌う。自分がどうでもいい存在だと思っていた弊害だよ」

「昔にそう思っていたことが、もう違うと思ってる今でも出てきてることか？」

「うん。度々あるんだ。自分が周りから信頼されていて、大切に思われているから無駄な存在じゃないとわかった。それでも自分が犠牲になればって、自己犠牲を最初に考えってしまう悪い癖。考え方の一つや二つで変わるほど簡単な問題じゃないんだ」

「それを、アンタ達はわかって一緒にいるんだな」

「誰かが一緒にいてやらないと、あいつは壊れてしまうよ。そんなことはさせたくない」
「そっか」

「あんたもあいつと一緒にいてやってくれ。一人でも多い方が、あいつの為になるはずだ」

十二人目 《ひき子》

「多々？ 馬鹿に決まってるんだろ」

「馬鹿か。まあ確かにやることなすこと馬鹿だけど、あいつは頭がいいんじゃないの？」

「勉強が出来ることと頭がいいことは違うんだよ。あいつは勉強は出来るけど馬鹿だ」

「それに根拠があるってことか」

「そう。あいつはややこしくものを考えすぎてる。頭が良すぎるとも取れるかもしれないけどな」

「勉強が出来る故についてことか？」

「それだな。まあでも素直に人の話は聞かないし、勝手にネタに走るし、他人の気持ちを無視して平気で突っ走るし、散々な奴だよ」

「酷い言いようだな」

「そりやそうさ。だけど、そんなあいつにあたし達ガルデモは救われたんだ」

「少しだけ聞いたよ。ガルデモを大切に思ってることは」

「あいつがそう思うように、あたし達もあいつのことを大切に思ってるってことさ。あいつの死因の大抵はあたし達ガルデモに関わることだ。もしあたし達に関わらなければ、あいつは殆ど死なないで居られたはずだ」

「でもそうすると実働部隊だろ？ もっと死ぬ確率が増えるんじゃないのか？」

「ギルド降下作戦で一回死んだけれど、それはあいつが武器を捨ててたからだろ？ 万全の状況だと天使にだつて互角以上に戦える様な奴だ。死ぬことなんて殆ど無いだろうよ」

「なるほど。ゆりみたいなものか」

「そういうこと。あたし達も結局の所死んで、苦しい思いが一杯あつてここにいます。それを緩和してくれているのは、多々だ。実の所を言うと、あたしも岩沢も入江も関根も皆多々がいるからここにいますだけなんだよ」

「それつてつまり、多々が消えれば自分達も消えるつてことか？」

「そう言うこと。あたしなんて実は多々に未練叶えて貰ったんだ。でも全員で約束した、多々が消えるまで消えないと言う願いがある限りあたし達は絶対に消えない。消えちゃならないんだ」

「そこまでして、どうして多々に固執するんだ？ 俺は記憶が無いからどれだけ皆が苦しい思いをしてきたのかわからない。多々の真実もきつと酷く重いものなんだろうとはわかつてる。だけど知りたいんだ」

「そう……だな。強いて言うなら家族みたいなものだ。多々を中心として集まつてきた家族。バラバラだったはずの心が、思いが、多々と一緒にこの世界から卒業すると言う

願いに変わったんだ」

「家族……」

「家族を思い出せないお前にはちよつと酷かもしれないけれど、家族って言う存在は凄
いんだ。家族がいるから我慢できることっていうのはたくさんある」

「その一つが、多々への思いなんだな」

「そうだな。詳しくは関根に聞けよ。あいつが一番多々のことをわかつてるからな」

十三人目 《入江》

「多々君は、いい人かな？」

「いい人か。それはどういった意味でのいい人なんだ？」

「私達はやつぱり多々君のことが好きでここにいとところがあるから、全体的にいい人
だと思う」

「好き？ あいつには関根っていう彼女がいるんじゃないのか？」

「しおりんは気がついてるかもしれないけれど、ひさ子さんも岩沢さんも隠してるつも
りで実は異性として多々君のことが好きなんだよ。勿論私もだけどね」

「あいつそんなに好かれてるのに気が付いてないのか」

「気がつかない様にしてるの。それに私達は気がつかれたくないと思ってる。友情エン

ドはヒロインに含まれないって多々君はよく言ってるからね」

「それは気がつかれてるって意味じゃないのか？」

「多々君にはlikeを送る。でも心の中はloveで一杯。それが今の私達の状況。苦しくなんてないんだ。だって、多々君はそれを知っていてくれるから」

「知っていると気がつかれるは違うのか？」

「言葉遊びに近いけどね。知っているのは、元々知識として存在しているもの。気がつかれるのは唐突に知識として把握するもの。要するに、多々君が持ち出したら負けってことかな？」

「もし持ち出されたら、どうなるんだ？」

「多々君を巡って血で血を洗う世紀末な世界に変わるかもしれないね」

「なんつーか、面倒な所に多々は立ってるんだな」

「多々君はきつと皆から好かれてるって聞いたたら、全員幸せにしようとする」

「それはいいことなんじゃないのか？」

「普通はね。でも多々君はそれに失敗して、心が壊れて、人として一般的な価値観を失ってまで自らを幸せって言ってるって正当性を高めようとする様な人なんだよ？ また皆を幸せにしようなんてしたら、心が壊れちゃう」

「だから、誰にも気がつかせない」

「音無君に言ったことは秘密だよ？ 多々君が苦しむ姿はもう見たくないから」

「よくパジャマパーティをする時に見るのか？」

「たまにね。でもそれも全部しおりんが何とかしちゃうから凄いなと思うんだ」

「……ありがとう。じゃあ一番重要な奴に聞いてくる」

「うん。行つてらっしゃい」

十四人目 《関根》

「やつほー音無君。待つてたよ」

「知つてたのか」

「そりやあたしはみゆきちのパートナーですから。健やかなる時も病める時も一緒にす」

「それは多々に言つてやれ」

「アイタタ。予想外の所から反撃くらつちつた。でもまあ話してあげる。タツ君についてでしょ？」

「ああ」

「タツ君はねえ、寂しがり屋さんなの。」

いつもずっと一人でいて、それが実は寂しくて周りの暖かさを求めるんだ。

だけれどもそれはいつも叶わなかった。お姉さんと元カノをそれで失ってしまった。いつもタツ君は恐れている。自分の友達が消えてしまうことを。

いつもタツ君は恐れている。自分の大切な人を失ってしまうことを。

恐れて恐れて、心の中で目一杯恐れているからいつも笑ってる。

自分が恐れていることを見られたら、きつと自分が壊れてしまうから。

かつてタツ君の周りの人は皆タツ君に依存して、タツ君は依存に依存した。

だから自分だけは常に正常でいなければならぬと思ってるし、絶対に正常だと思いでんできてしまっている。

正常だと思いでんきているからこそ、自分がしたことが幸福だと思って涙を流さない。悲しまない。

幸福だから悲しいはずがないと、涙を流すはずがないと、心の奥底に封印してしまう。いつかその封印が解けてしまった時、タツ君は壊れてしまう。

だからあたしはいつもタツ君と一緒にいる。

タツ君に依存するんじゃないくて、タツ君があたしと一緒に歩めるように。

おんぶ抱っこで少しずつ進む関係じゃなくて、二人で一緒に歩ける関係になれる様に」

「……凄いな。聞き入っちゃったよ」

「それがあたしの話術なんだぜい！　と言う冗談は置いておいて、実際さつき言った通りなの。タツ君は全てを恐れているから笑ってるし、泣かないし、悲しまない」

「矛盾してるって言いたいけれど、それすらダメなんだろうな」

「周りが思っている以上にナイーブな子だからね。周りに温めて欲しいと近づけないから、あたし達が温めるために近づかないといけないんだ」

「だから、多々のことをいつも思っているんだな」

「そのとおり！　あたしはタツ君のことが大好きだからね！」

「愛は変わらず、思いも変わらず。本当に凄いやお前達は」

「でも結構難しいんだよ？　タツ君が最も楽な姿勢である依存をさせずに、一緒に歩くのは」

「かもしれないな。でもするんだろ？」

「勿論だよ。だってそれが——あたしの役割だもん」

笑顔でそう言った関根を最後に、俺はこのインタビュをやめた。

同時に理解できたんだ。なんでこんなに多々が好かれているのか。

確かに複雑なことが色々あったけれど、それを踏まえても多々は——人間らしいんだらう。

普通とは違う状況で生きて、もがいているのに明るく振舞おうとする多々を——救いたいんだろう。

「お前はすごいよ多々」

心の底から、正直にそう思った。

037 《Break Time》

俺は一人で部屋の中で転がっていた。

既に部屋の住人である相手は教師の居る彼らの愛の巢にランデブーである。

いや、実際本当に彼らが愛し合っているかどうかは俺には全くわからないんだけれど。

と言うか愛し合っていたらそれはそれで嫌なんだけど。

「……暇だなあ」

本日は休みなり。

取り敢えず頑張ってくれたお礼として休日を与えられてしまった俺は、いつの間にかクリアしてしまっていたモンスターをハンターするゲームを机の上に置いてどうするか考える。

いつもならばしおりの部屋に行くのだろうけれど、今はしおりは作戦会議中である。

どうやら今回は俺を休みに行うらしく、何かを考えているのはわかっているけれど俺には何もわからないのだ。

いやホント、やることが一切無くなった。

「エロゲでもするか」

説明しよう！

ここは高校生ならば誰でも持っているものは手に入る場所である。

つまり健全な高校生ならば持っているであろうエロゲーも実はあつたりしたのだ！

だがハードはパソコン！ 惜しい！

「どっしょよ」

読み飽きたエロ本を適当に放り投げてから、俺は伸びをする。

いつもいじるべき人もおらず、一人でグダグダするというのはつまらないものだ。

何時までも一人でうじうじしているのは癪に障るのである。

え？ 俺がいつもうじうじしてるだろって？

やだなー。そんなわけないじゃない。

……ふむ。本格的に虚しくなってきた。

俺は立ち上がると、取り敢えず外に出ることにした。

休日だからといって部屋から出てはいけないわけではないのだ。

「次のラジオは撫子ちゃんでも呼ぼうかな」

どこかから電波が飛んできたかなと思いつつ、撫子ちゃんって誰だよと心に突っ込みを入れる。

メデューサなんて知ってるわけじゃないですかヤダー。

「……まさかの誰もおらず」

男子寮には本格的に誰もいなかったの、俺は仕方なく寮から出た。

陽の光を目一杯浴びようと大きく伸びをし、爽やかな姿を描こうと思ったが残念ながら雨である。

浴びたのは陽の光ではなく虚しい雨水だけだった。

「外で暴れているわけもないし、ふむふむ」

こう言う時は教室に行こうかなと思ひ、俺は校舎に入った。

校舎の中では授業が行われていて、さて教室に入ろうと思つて止まった。

俺のクラスがわからないのである。

これは緊急事態だ。由々しき事態だ。

「助けて天使モーン！」

「私はデジモンじゃないわ」

後ろに唐突に現れた天使ちゃんにビクビクと震える。

べ、別に感じたわけじゃないんだからね！

「エンジェモンと呼んだ方がよかつたかい？」

「せめて女性にして欲しいわね」

「ふむふむ。……いける口ですかい？」

「私的にアグモンが素晴らしいわ」

「や」

「や」

唐突にデジモン談話を始めようとした天使ちゃんに挨拶をすると、普通に返されてしまった。

取り敢えず何で授業中なのにいるのか聞こうと思う。

「貴方はきつと私が何故ここに居るのか聞くと思うから先に答えるわ。見回りと言うことで現在の授業だけは免除されているのよ」

「君には未来予知能力があったのか」

「そんなものはないわ」

そうだな。そんなものがあつたらゲリラライブとか何時も潰されるもんな。

「天使ちゃんは何でも知ってるんだね！」

「何でもは知らないわ。知ってることだけ。これは私のネタではないのだけれど」

誰が使おうともその時適していればそれを使えば良いのではないだろうか？

「取り敢えず俺は授業を受けてみたいので、教室に案内してください」

「任せました」

天使ちゃんと同じクラスらしいので、案内してもらって教室に入る。
クラス中の視線が俺に注目する。

「やつほー！ みんな元気がいいなあ。何でも知ってる様で何にも知らないちよつぱり先っぽだけ知ってる雨野多々君だよー！」

「ちよつと待って」

天使ちゃんに教室からフェードアウトさせられました。

「貴方は本当に授業を受けに来たのかしら？」

「勿論」

「ならいいわ」

そして俺は再び教室の扉を開いた。

「貴方の隣に何体も這い寄る変態、多々君だよー！ もしくはDJ撫子だよー！」

「まーつんだYOー！」

首根っこ掴まれてDJ風に天使ちゃんに引き戻されてしまった。

更にそのまま正座である。

「やあ天使ちゃん元気がいいなあ。何かいいことでもあったのかい？」

「今すぐ貴方を殴りたいわ」

拳を握り締めている天使ちゃんをステイさせると、俺は次の挨拶を考えて正座を解い

た。

「その次の挨拶を決めた的な顔をやめなさい」

怒られてしまったのである。

割とガチのおこ顔初めて見たお。

「激怒ワロタｗｗｗｗ」

「えい」

可愛い掛け声と共にどう考えてもその声が合わない程の威力で殴られた俺は教室の扉を吹き飛ばして教室の中に入った。

「——すいません！ 老婆が転がってて躓いてトラックに引かれそうになりました！」

「そんなよくある遅刻の言い訳を意味もなく羅列しないで」

老婆の荷物を持ってあげていて。

落とし物が転がっていて。

躓いて怪我をしてしまつて。

トラックに引かれそうになつたので。

この四点でお送りしております。

「……立華。雨野を連れてきたことには感謝している」

「立華!? そんな名前だったんだ。じゃあタッチーね」

「ノリが変わりすぎて良くわからないわ」

要するに、暇な時間が多すぎてフィードバックである。バックラッシュである。

「タッチーは授業する?」

「授業は受けるものよ」

「雨野、席に着け」

奇妙な空間に放り込まれてしまったクラスメイト達はポカーンとしている。

「イエーイ。ピースピース」

「無表情でも意味はないわ」

「今回の件からタッチーが得るべき教訓は、俺に関わると大抵問題を芋づる式に持つてくると言うことだ」

「今初めて人と関わることを激しく拒絶したいわ」

面倒くさい男ナンバーワンこと多々です。どうもどうも。

「はっ。そんなおっぱいで俺に関われると——」

俺の顔面にタッチーの拳がめり込んだ。

「次は貫くわ」

「脅しが怖いよう」

いい感じにタッチーのキャラが壊れてきたのを見て、俺はニヤニヤとする。

「先生。彼は頭が悪いようなので保健室に送ります」

「いや立華。保健室に送るのは多々の頭が悪いせいではなく、お前の攻撃による外傷だと思うんだが」

先生公認の頭の悪さであった。

いや、多分学力の方じゃないとは思うけれど。

「恋愛サーキュレーションでも歌ってやがれ！」

「なら貴方は三途の川でチチをもげを歌っているのね」

それはそれで酷くシユールな光景だと思うのは俺だけでせうか。

取り敢えずタツチーと一緒に廊下に出ると、ハンドソニックでそれはもう滅茶苦茶になるまで突き刺された。

攻撃をするのは俺から殴りつけた場合じゃないのかと聞いたが、何事にも例外はあるらしい。

「これから貴方のことは見かけたらハンドソニックで切り裂くわ」

「ジャック・ザ・リッパーかよ」

「私たちはそう決めたのよお母さん」

何故彼女はここまでネタに付いてこれるのだろうか。

「霧が出ていないので無効。ついでに俺は女じゃないから無効。しかも今は夜じゃない

「から無効」

「臓器を出すくらいなら出来るわ」

「俺が悪かったので許してください」

さつき内蔵が引っ込んだばっかりなのである。

「じゃあ保健室に行きましよう」

俺はそのまま保健室に連れて行かれた。

わずか教室から出て数分の出来事である。

「ナース服着てよナース服。と言うかしおり呼んで。コスプレしてもらいたい」

「悪い子には注射が必要な様ね」

「タッチー、それ注射ちやう。刃物や」

ぶっ刺されました。

「私的にはしおりのナース服を堪能したいのですが、呼んでもらいなんでしょうか？」

「そうね。頭の悪い馬鹿が起こした事件について、保護者を呼ばないといけないわね」

しおりは俺の保護者らしい。

これで彼女は何度天使から連絡を受ける事になるのだろうか。

タッチーはそのままトランシーバーを取り出すと、電源を入れた。

するとスピーカーからお知らせの音が流れる。

「雨野多々さんの保護者の関根しおりさん。貴方の彼氏が重度の頭の悪さで保健室で休んでいます。支給保健室まで迎えに来てください」

酷い放送を全校生徒に向けて流したもんだ。

これはもういじめと言っても良いんじゃないだろうか？

そんなことを思っていると、しおりが保健室に入ってきた。

「ウチのバカが失礼しました」

「いえいえ。貧乳と呼ばれたことや、毎回毎回迷惑をかけてきたことなんて気にしていいわ。ええ気にしていないもの」

すごい気になっている奴の言い方だ。

取り敢えずしおりに対して俺は微笑みかけた。

「しおりのナース服が見たいな」

「その目に貼り付けて永遠にナース服に見せてあげようか？」

激怒だった。

何でもあの放送は流石に恥ずかしかつたらしいので、怒るのも仕方がない。

「謝ってチツ君」

「俺のあだ名はそんな舌打ち見たいなあだ名じゃない」

「失礼。嘸みました」

「違う。わざとだ」

「失礼。嘸みまみた」

「わざとじゃなかった!」

「一通りネタをしてからハイタッチをすると、タッチがそれを見てため息を吐いてい
た。」

「貴方達は二人揃っても厄介なのね」

「多々だよ!」

「しおりだよ!」

「二人揃って、天上学園のツツコミ殺しカップルズ!」

「迷惑ね」

辛辣だった。

俺としおりの心にグサリと刺さったそのトゲはあまりに大きく、しおりを開發してし
まうレベルのものだった。

何処に何をとは言わないが。

「ツツコミ殺しカップルズの実践担当、雨野多々です」

「ツツコミ殺しカップルズの実践担当、関根しおりだよ」

「二人共実践担当なら、参謀はいないのね」

参謀。そこまでネタで頭が回りきらないのがこの二人の弱点なのであります。

ここに参謀担当のみゆきちちゃんが入ることによって、これは成功するのである。
通称悪魔様である。

「つまり、みゆきちちゃんは小悪魔……!?!」

「今度あたしみゆきちの為の小悪魔衣装用意しとく」

恥ずかしがりながら小悪魔衣装を着ているみゆきちちゃん。実に小悪魔である。

「それならミニスカニーソが良いわね」

「ツ!? 貴方が天才か!」

どうやら戦線の敵と言う設定すら何処かへ行ってしまうレベルだったようだ。

「沼神様路線で、泥を塗るだけと言う案もあるわ」

「沼……泥……!?! そこまでの妄想力があるなんて、貴方は一体……」

「蛇神様よ」

まさかの自分ネタだというのか!?

俺の想像を超えるレベルの出来事に流石に戦慄する!

「あたしは人を迷子に出来る隠し能力が……!」

「まず自分の考え方が迷っていることに気づこうか」

どう考えてもこれは蝸牛である。

と言う風にネタばかり出していた時だった。

「コスプレパーティーをしてはどうかしら？」

まさかの名案だった。

「確かに戦線メンバーと生徒会はいがみ合っているけれど……」

「俺としおりが間に入ればこの企画を通すことができる……？」

いつの間にかしおりとタッチーが手を組んでいた。

「お互いに頑張ろう」

「ええそうね」

「素晴らしき小悪魔みゆきちの為に」

あー、そっち側かと思っってしまった俺は悪くない。

……え？ 続くのこの話？

038 《Start Baseball》

世界中の這い寄る変態の皆！

いつも元気いっぱい！ 何かいいことあるのが俺！

雨野多々君とは俺のことさ！

「と言うことで、コスプレパーティーをすることになった件について」

「と言うわけじゃないわよ。貴方は本来休日を謳歌するべき存在でしょ？ 何故天使と

会って、あんな恥ずかしい放送をされて、生徒会主催のコスプレパーティーを取り付けてきてるの？ いっぺん死んだら？」

「はっはっはっ。やだなあ。俺もう死んでるって」

俺の真横を銃弾が貫いていったので口を開くのをやめた。

「取り敢えず何故そんなことになったのか説明してくれるかしら関根さん」

「みゆきちにミニスカニーソの小悪魔衣装を着せようと思った」

「そう。面白そうね。やりましょう」

即答されたことに、話の中心であるみゆきちちゃんは驚きながらオロオロとしていた。可愛い。

真っ赤になって着ませんと言っているけれど、それは無理な相談だよみゆきちちゃん。
ん。

だって相手は天使とゆりちゃんとしおりなんだぜ？

逃げられる未来が見えない。

「それならそれぞれのコスプレを決めましょう」

ゆりちゃんの言葉に、戦線メンバーのコスプレを考え始める。

「取り敢えず遊佐ちゃんはバニーで」

「待つてください多々さんの顔面に十何本かナイフを刺す位待つてください。私はキメ顔でそう言った」

「遊佐ちゃん。それキメ顔やない。キメちゃつてる奴の顔や」

そんな遊佐ちゃん見たくない。

「仕方ないですね。新しいキャラを目指します。私はドヤ顔でそう言った」

「うわうぜえ」

まさにドヤ顔。しかし無表情。

これは一体どうやって言い表せばいいのだろう？

言葉にできない。

「なーなーなー」

「やめろ。規制に引つかかる」

どこの規制にとは言わない。

「取り敢えず遊佐さんはバニーで良いわね」

「待ってくださいいゆりっぺさん。貴方の試着室に野田さんをぶち込みますよ。私はドヤ顔でそう言った」

非常に怖いし具体性のある脅しだった。

「え？ もう決定よ？」

「拒否権が無いというのか……！ 私はドヤ顔でそう言った」

「その私はドヤ顔でそう言ったって言うのどうにかならないかしら？」

「吾輩はドヤ顔でそう言ったで候」

「私はドヤ顔でそう言ったでいいわ」

ゆりちゃんが折れた!?

取り敢えず最近遊佐ちゃんのレベルが上がってきたなあと思いつつ、俺はふと考える。

しおりのコスプレかあ……。

「しおりは露出度低めの奴がいいなあ……」

「あら意外ね。貴方なら露出度高めでとかいうと思っただけれど」

いやそんなこと言われても、しおりの体を俺以外の男の前に晒すということがあまり好まないわけで。

独占欲が強いとか、思われるのかなあ？

「キユウベえのコスプレとかどう？」

「それは着ぐるみではないかしら？」

「じゃあ何のコスプレがいいんだろう？」

少し考える。そして決めたんだ。俺は決意したぞーッ！ ジョジョーッ！

「しおりのコスプレは——ッ！」

来月に予定されることになったコスプレ大会に胸を躍らせる中、俺と日向君と音無君は三人で歩いていた。

珍しい三人組だと思うかもしれないけれど、俺と日向君は仲が悪くはない関係で、音無君とは普通に友達で、音無君と日向君は愛し合っているらしいので別に三人でいてもおかしくない。

「いやおかしいから！」

「あれ？ 声に出てたのかな？」

しかしすぐに反応をしなくなった二人を見て俺は酷く怒った。

全く。これだから素人は。もつといいつつコミをしてくれよ。

「取り敢えず日向、これからどうするんだ？」

「まあ松下五段とか、ひさ子とか誘うか」

「ひさ子ちゃんは藤巻君のところに入ったよ。因みに松下君は高松君のところ」

ベースボール大会。通称ワールドベースボールクラシックが開催されるというこ
とで、俺達は大きく興奮していた。

通称WBC。私のバズーカでクラッシュするの略である。

「じゃあ誰もいなくね？」

「日向君に合わせずに俺が回った方が人集まったかもね」

「これでも有名人。」

「取り敢えず、誰か誘えそうな奴いないのか？」

「えっと、タッチーと直井君と、しおりと、ゆいにやんと、椎名ちゃんと、野田君かな」

「待て。その最初の二人は生徒会だろうか」

「そう言えばそうだった。」

「取り敢えず関根と椎名と野田に回るか」

「残念ながらその外しているゆいにやんは既に貴方の隣で拳を構えているのです」

「え？」

振り向いた瞬間顔面にゆいじゃんの右足の蹴りが入った。
拳を構えていた意味とは。

「あ、後まさみちゃんもみゆきちちゃんも誘えるね。女の子一杯。因みに遊佐ちゃんは高松君のチームに入ってるから誘えません」

「あいつ最近頑張ってるからな」

遂に一緒に料理をする仲にまで昇格した高松君。

しかし俺が思うに遊佐ちゃんは一筋縄ではいかないのです、ここからが問題だろう。

と言うよりも遊佐ちゃんからどう対応すればいいのか聞かれています。くだし。

「流石は恋愛成功者って所なんだな」

「……ん？ 何故それを音無君が知っているのかな？」

ピクリと音無君の眉が動いたのを俺は見逃さなかった。

「そう言えば最近、妙にうざいやつナンバーワンこと野田君がいきなり俺に恋愛を教えてくれることを言ってきたのも、もしかして君が関係しているのかな？ かな？」

ピクピクと高速で動き続ける音無君の眉に賞賛を与えつつも、俺は刀を鞘から抜く。

「そう言えば最近この子に血を吸わせてあげてないからね。君のを頂こう」

「待て待て待て待て！ 俺は別に悪気があったわけでもないんだ！ 俺はただ相談されて、もっと詳しい人がいるからって紹介しただけ——」

「問答無用☆」

音無君が刀の錆になったところで、俺はそろそろ真面目にメンバーを考えることにした。

野田君と椎名ちゃんは確定。しおりは誘わなければ俺が死ぬ。

これで7人。まさみちゃんとみゆきちちゃん、9人か。

「じゃあ全員誘おう。取り敢えず俺がしおり達を誘ってくるね」

「おー。頼んだぞ」

「任せてよ。君とは違うのだよ君とは」

俺はそのまま音楽室に、ジャンプして入った。

それを見ていた日向君達が驚愕した表情で俺を見ているけれど、別にこれは俺だけしかできないことじゃない。

死んでるし傷も回復するんなら、脳のリミッターを外せるはずだ。

と言うわけでやろうと思ったら出来ちゃう系男子、多々君ですどうもどうも。

え？ 右足が変な方向向いてる？ ハハッ。気にしちやダメだよ。

「や、やあしおり。野球しようぜ」

「……タツ君。格好つけるのはいいけど、それで外したらただの可哀想な人なんだよ」

冷たい視線が突き刺さった。

これが絶対零度!? ポケモンの一撃必殺とはこれほどの威力か……ッ!
と言うか一撃必殺って言ってるのに必殺してないよね。瀕死だよな。

一撃瀕死と命名しよう。

「ぐすん。みゆきちちゃん慰めて」

「え? うーん、よしよし」

「治った」

最近みゆきちちゃんが優しい気がする。

まあ仕方がないことかもしれないね。

前方のゆりちゃん、後方のタッチー、右のしおりと来たら残された唯一の突破口である俺に縋るのは。

でもごめん。君の小悪魔衣装は決定なんだ。

「そんな早く治らないでしょ? ほらおいで」

「わーい」

しおりの太ももにダイブした俺は——勿論勢い良くダイブはしていない——上を見上げる。

そこにはしおりのおっぱい。通称乳があるのだ。

これなんて天国。

「取り敢えずしおりとみゆきちちゃんとそこで我関せずのギターを弾いているまさみちゃん。野球しようぜ」

「理由は？」

「人数集め」

「実家に帰らせていただきます」

「俺のいるところがしおりの実家だよ」

二人でクスクスと笑っていると、絶対零度の視線が二つ突き刺さっていた。

見れない。見た瞬間俺は眠れなくなってしまった。

「……まあ、そんなに頑張らなくていいならしてやるよ」

「私も運動は苦手ですけど」

まさみちゃんとみゆきちちゃんが参加してくれたので、これ以後はホモ軍団が追加の男と椎名ちゃんを連れてくれば完成するだろう。

それにしても柔らかくていい匂いのする場所だ。

「まさみちゃんは全身包帯で行こう」

傷が増えた。

ポロポロになって戻ってきた俺に驚愕する音無君と日向君をスルーして、ひさ子ちゃ

んを除くガルデモメンバーが鉢合わせする。

夢のメンバーである。

「取り敢えずこのメンバーでバンドでもしようものなら、尋常ではない数の生徒が集まりそうだ」

「そうだろうねー」

音無君の疑問に軽く答えつつ、俺は野球を久しぶりにするので少し気になることがあった。

「日向君」

「なんだ？」

「野球って金色のボールを打ったらアウト？」

「お前の頭の中はゲームセットだな」

試合終了していた。どういうことだろう？ 掘り下げようかな？

でもその言葉をどこで遊佐ちゃんを観察しているかわからないから、掘りという言葉を使うわけにもいかないのが現状である。

「……」

それにしても妙に空を眺めている日向君を見て、まさみちゃんがピクリと反応していた。

まさか恋!? ——なんてふざける空気でも無いか。
未練が叶いそうだとするのは俺でもわかるよ。

「さてと、ゲリラ参加しようか」

正直に言えば日向君が成仏することに関しては賛成だ。
報われるということの大切さは俺は良く知っている。

「じゃあメンバーを決めるよ。一番セカンド日向君」

「……ああ」

本当にボケつとしてるな。ぶっ殺してやろうかな。

「二番センター俺」

これは別に問題ないな。うん。

「三番ピッチャー音無君」

「ピッチャーが出来るかわからないけれど、頑張るしかないか」

「四番キャッチャー野田君」

「任せておけ」

「五番サード椎名ちゃん」

「……任せろ」

「六番ファーストしおり」

「あいよー！ あたしに——ッ！ まーカーセーとーけー！」

「勿論だよ。七番ショート、ゆいにやん」

「ゆいにやんの出番ですか!? これは打つしか——」

「八番ライトまさみちゃん」

「無視しないでください！」

「あたしか。……うん。久しぶりに運動を出来るんだから楽しまないと」

「九番レフト兼清涼剤兼マススコット、みゆきちちゃん」

「い、色々多くない？」

何を言っているんだ。これは正当な権利なんだよみゆきちちゃん。

因みにしおりが一番好きだけれどね。

「じゃあこの九人で殴り込みしよっか」

俺はそう言うと、金網の向こう側で試合をしようとしている2チームに話しかけた。

「ゲリラ参加です。取り敢えず二つ纏めてかかってきな。相手してやるよ」

堂々と俺は言い放つのだ。

何故ならこれでも、しおりの前でカツコつけられるとテンションが上がっているからである。

039 《Cold Game》

バッターである日向君が打席に入ったのを確認して、俺は頷いた。

この試合、俺達の先行でお伝えしております。

「取り敢えず7点コールだから、二桁位取って音無を楽にしてやろうぜ」

日向君の愛する音無君へのラブコールを理解し、俺はバントをしない気満々だった。

日向君がヒットで塁に出たのを確認すると、右打席に入る。

一塁に居る日向君に盗塁のサイン——しおりへのラブコールをしてから、ピッチャーが怒りの投球を放った。

非常に甘い球で打とうか迷ったけれど、現実性を重視する為にここは見逃す。

足の速い日向君はすっぽ抜けたようなピッチャーの球を見てすぐに走り出し、余裕で盗塁に成功していた。

キャッチャーの子は普通の子だ。

キャッチャーって言うのは盗塁に対して最も注意しなければならぬ立場で、キャッチャー歴が低いとかかなりの確率で盗塁されてしまう。

因みに野田君の場合反射神経が伊達ではないので、ある程度戦える可能性が高い。

「バッタービビってるビビってる！」

「お前が言うな」

ネクストサークルで構えている音無君からの鋭いツツコミに少し感激しながら、再びのラブコールである。

いやカツコいいところってお前何もしてないじゃんとか言うツツコミはスルーである。

ピッチャーの子の視線も何だかいたたまれないモノを見る目になっていたけれど、そんなことはきつと無い。可哀想な子なんかじゃないよ俺は。

少し逸れた打球が来た。

きつと盗塁を警戒したんだろうけれど、サードとキャッチャーの一直線上に俺が居る以上キャッチャーはすぐには投げられない。

その隙に盗塁に成功した日向君を見て、俺は頷きながらバットを構えた。

「さてと、そろそろしおりにいいところ見せよつと」

少し逸れていく球を目で追いながら、バットを振るう。

芯で捉えたその打球は、軽く飛んでそのまま森の向こうへと消えていった。

堂々のホームランである。

「何で俺を走らせたんだてめえ！」

「やだなあ日向君。そんなの嫌がらせ以外の何者でも無いに決まってるじゃん」

元からホームラン狙ってました。(。・ω<)ゞてへぺろ♡

「取り敢えず二点とつたから、後は音無君と野田君で2点。その後は何とか頑張つてもらうしか」

次からはちよつと打順を弄ろうと確信しながら、次のバッターである音無君を見る。

音無君は普通に打った。

もう少し面白いことしよーぜとツツコミを入れたくなつたけれど、まあ打つたからそれでもいいや。

その次のバッターこと馬鹿が居るから。

「かつとばせー! 野田君! ゆりちゃんが見てるよ!」

「何!? せい!」

一瞬だった。そう言つた瞬間に反応した野田君は思い切りバットを振るうと、ホームランを決めた。

「どうだ! 見ていてくれたかゆりっぺ!」

「ごめん! 幻覚だった! 最近疲れてるから!」

文句を言いくい言いい訳をしてから、その次のバッターである箒を指先で立てている椎名ちゃんを見る。

……箒？

「椎名ちゃんどうして箒を持ってるんだろう？」

「忍耐力を鍛える為らしいぜ」

なるほど。彼女もまた馬鹿でアホな戦線のメンバーの一員であるだけはあるか。

それでもツーベースヒットを打ったのは、彼女が戦線のメンバーであることを示しているだろう。ザ・脳筋。

そんな中で立ち上がったしおりは、笑みを浮かべていた。

「ふっふっふっ。遂にあたしの出番が来たぜ……！」

「いやー。期待しちゃいますわー。日向君、しおりがホームラン打つって」

「えっ。ちよっ」

「マジか!? 音無、関根がホームランを打つだつてよ」

「何!? えーつと……野田! 関根がホームランを打つらしいぞ」

「そうか」

「「お前はネタを続けろよ!」」

「す、すまん」

何故止めたし。

これで全員に回ればプレッシャーをかけれると思ったのに。

チームワークも抜群になったのに。

「取り敢えずしおり、ホームランで」

「任せんしゃい！」

すとらいーく。ぼったーあうと。

うなだれて戻ってくるしおりの姿をうんうんと頷きながら見てから告げる。

「知ってた」

「いやお前が言うな」

続く三振は勿論ゆいにやん。

セリフなんて入れさせない。ただただ流すさ。

向こうからあたしのコメントも入れろー！ とか聞こえるけれど、それは全て幻聴。

最近コスプレ作るのに非常に睡眠時間を取られてしまっているから、寝不足から来る

幻聴なんだ。

「バットか……ギターなら振ったことがあるんだけど」

「ごめん意味わかんない」

まさみちゃんの超絶意味がわからない言葉に対して、混乱を極める俺達。

ギターを振るってなんぞや。

あれかな？ ギターは暴力の道具ですって奴かな？

取り敢えず当てれば良いと言ったら、ツーストライクになった。

……待てよ？

「まさみちゃん！ それはバットって言う、ボールを打って音を出す楽器なんだ！」

刹那、快音が響き渡った。

「確かにいい音色だ」

やっぱり音楽キチには音楽キチ語で対応すればいいんだな。

多々君覚えたゾ！

「取り敢えずファーストまで走って！」

「おっとそうだった」

スリーベース位大きな辺りだったけれど、普通のヒットで終了。

椎名ちゃんも三塁から動かなかったので、九番のみゆきちちゃんに。

プルプルと震えているみゆきちちゃんが可愛すぎる。

「ピッチャー悶えてる！ へいへーい！」

「確かに悶えてるな」

そりゃ滅茶苦茶可愛い女の子がバットが重くてプルプル震えながら持ち上げてるのを見れば、悶えるだろう。

それでもボールを投げたピッチャー。結構早かったのか、涙目でひゃいと言いながら

下がってしまったみゆきちちゃんマジプライスレス。

それを見たキャッチャー、サインでボールを転がすことを要求。

ピッチャーも頷いた。

コロコロと転がってきたボールを見て、みゆきちちゃんはバットを振るがそのままバットの重さで倒れてしまう。

審判、何故かファールコール。

続く球、みゆきちちゃんは空振り。何故かファールボール。

ピッチャーが掠ってなかったと言ったのだが、僕の心に掠ったと言う謎の言葉によりファール続行。

続く球、みゆきちちゃんは当てた。

ボテボテのゴロだったけれど、それを取ったキャッチャーがボールを投げられなかった。

一生懸命走っているみゆきちちゃんに萌えてしまったのだ。仕方ないね。

「二番日向君だね。いやーきつと、ピッチャーもみゆきちちゃんにホームベースを踏ませてあげないなんて、そんな酷いことはしないだろうからきつと優しく投げてくれるよ！」

実際、この試合を外から見ている人達は全員みゆきちちゃんの味方だった。

みゆきちちゃん恐るべし。

「かっとばせー！ ひ・な・た！ 日向は木ノ葉にて最強なんだろー！」

「それはひゆうがだ！」

日向君の打ったボールはホームランとなり、既にこの時点で8点取れた。

続くバッター俺。

「あ」

まさかの三振でした。

理由を述べさせてもらおうとすれば、今まで満足に投げられなかったはずのピッチャーがここに来て覚醒した。

煽りすぎたせいで目の敵にされたみたい。

「さー。守備行くぞー！」

と言うわけでコールド勝ちしました。因みにレフト方面、つまりファースト方面にボールは一切跳びませんでした。

彼らの保護欲はバッティングセンスにまで影響するらしいです。

過ぎて決勝。え？ 早くないかって？

途中でタッチー達に、私を決勝戦まで連れてつてと言われて貧乳王者決定戦？ と聞

いたらマジで殺されたせいで今の今まで寝てました。

決勝戦、相手はタッチー達でした。

「やっほー！ タッチー元氣!?!」

「貴方の内臓を全て引き摺り出したのに、もう戻ってきたの?」

「内臓と言えば俺レバー好きなんだ」

「自分の内臓引きずり出された話をしたのに、レバーの話に持って行くのね」

そりやもう。俺はノリとツツコミで生きていくタイプの人間ですから。

多々、聞きたいことがあるの。

「何で俺生徒会チーム?」

「貴方の死体の処理を私達がしたからよ」

とは言っても血だらけになっているのは直井君だけなのですがが。

「USB、見つからなかった……!」

「俺の体を隈無く探しちゃいやん」

「黙れ殺すぞ」

取り敢えず俺が生徒会チームに入ってるってことは即ち、敵はしおり!

愛する二人が敵同士になってしまう王道的故事ー!

「いい? タッチーは必ずあたし達が殺すよ! パンツァー——」

『フォー!』

なんか一致団結していた。

その中心にしがおりがいた。アイエエエエ!? ナンデエエエ!?

「タツチー。俺頑張るよ。例え愛する人が敵になっても!」

「そう」

試合開始前になり、俺達は作戦会議を始めていた。

「いいか? 日向君には最初にテッドボールで股間を狙え。そうすればあいつはもうダメだ」

『イエッサー!』

「野田君は煽つとけばなんとかなる」

取り敢えず一通りの作戦を作ってから、一番の俺がバッターボックスに入った。

「さあ行くぞ!」

ボールを振りかぶって投げた音無君。

一発目を見極め、俺は静かに息を吐いた。

レフト方面に打つわけには行かない。

それは俺のプライドが、心が、善良なる精神が許さない。

俺の中の善良なる精神は10%で他は悪意90%だけれど、それでもみゆきちちゃん

を狙うことは許されない。

目指すは俺の代わりとしてセンターに入った松下君。

目標を決めた俺に、敵は無い！

「ストライク！」

普通の球じゃなかった。

スライダーっぽかったから、掠りそうになってヒヤヒヤした。

本気で勝つならば、俺は打つ！

三球目、俺は思い切りバットを振った。

「「あ」」

その打球は上に乗った。

——日向君の上、つまりセカンドフライだった。

040 《Injer Heart》

セカンドフライが上がった瞬間、俺はやってしまったと思った。

日向君の過去は聞いている。

セカンドフライが取れてしまったら、きっと日向君は消えてしまうのだろう。

だからこそ、そんなトラウマを――。

「こんな形で破ってしまうなんて」

手からすっぽ抜けたバットは満足そうな表情でセカンドフライを取ろうとしていた日向君の股間にヒット。

金玉を破壊し、絶命と言う死をくれてやった。ショック死である。

啞然とする全選手。

俺も一塁を過ぎて二塁で止まった所で現状の酷さを確認した。

折角報われるのかと思ひ手を伸ばしてしまったまま硬直して死亡している日向君。

日向君が消えてしまうかと思つて追いかけていた体制のまま止まっている音無君。

その痛みを知っているが故に股間を押しえてしまっている野田君と松下君。

あまりの出来事に理解が追いついていないしおり、ゆいにゃん、みゆきちちゃん、ま

さみちゃん。

唯一動けた椎名ちゃんだけが俺に気がついていたけれど、場は騒然としていた。

野球部も涙目である。

「すいません担架お願いします」

満足気な表情のまま死亡した彼を実行委員が連れて行った所で試合スタート。

何というか音無君がそんなのってねえよ。あんまりだよと呟いていたけれどその言葉はまだ早いのでは？

取り敢えず日向君のご冥福をお祈りしながらも、次のバッターが打ったのを見て走り出す。

サードには椎名ちゃんの姿。

俺は椎名ちゃんに向けてダイブ！

避けられました。

ベースに触れたままズシヤアと音を立てて滑った俺の顔は少し皮膚が擦り剥けていた。

野球部らしい傷である。

「よっしゃー！ バッチコーイー！」

サードライナー。俺の顔面を強襲。

来いとはいったがあれ程の速さで来いと言った覚えはない。
そう思いながら俺は倒れた。

目が覚めるとそこは保健室だった。

取り敢えず隣のベットにも誰か寝ているなど理解し、起き上がると寝ぼけ眼を擦って
伸びをする。

「目が覚めたの」

そこにいたのはゆりちゃんだった。

少し真剣そうな顔をしているゆりちゃんに、俺はああやっぱりかと確信する。

「彼、閉じこもったわ」

「今回はわざとじゃないんですごめんなさい」

日向君は絶賛引きこもり中だった。

あそこまで完璧に再現された中で唯一跳んでいったバット。

これが取れたら最高に気持ちがいいだろうと言った後で来たのは、気持ちよさでは
なく激痛だった。

これは辛い。

「わざとじゃない分タチが悪いのよ。これでわざとだったら、きつと彼も怒るだけで済

んだでしょうけど」

割と大問題じゃないか。

ギャグのせいでシリアスが巻き起こるのは勘弁願いたい。

「どうするつもり？」

「うーん、俺が謝った所で正直状況は変わらないだろうしな」

そう。ここでの問題はそこなのだ。

俺が日向君の股間にバットをシュートして超エキサイティングしたのは事実だけれども、それはあくまで事故であり原因の一つでしかない。

きつとだけれど日向君が本当に悩んでいるのは、自分が勝手に成仏しようとしたことと、あれだけカツコ良く成仏しそうになつておきながら結局残っていることへの恥ずかしさだ。

それさえ抜ければ、ごめんごめんで済む話なんだ。

しかしそれを俺が言つても、これについては意味がない。

「ま、誰かがするでしょ」

「……適当ね。今初めて貴方を少し軽蔑しそうになつたけれど」

「はっはー。ゆりちゃん。誰かがするんだよ。何時するかは知らないけれどね」

日向君の為に動く人物を俺は二人知っている。

一人は間違うことなく音無君。

だけれどもう一人俺は知っている。

きつと音無君もそれを邪魔しないだろう。

「貴方は誰かがこの状況を打破すると知っているからこそ言っている。それは理解しているわ。それでも、自分から解決しようとしなければ良くないことよ」

「分かってないねゆりちゃん。俺から解決しようとしないうんじゃなくて、俺は解決する役目を譲つてあげているだけなんだよ。もつと相応しい人がいるからね」

もつと相応しい人が、このお役目をしていることは誰よりも俺がわかっているからね。

「そう。それなら貴方を信用するわ」

「そうしてもらえると助かるよ」

さてと、そろそろ動き出す頃かな？

SIDE：高松

——初恋だった。

初めて見た感想は、何も動かない人だなと言う一点だけだった。

しかしインカムを通して常に連絡をしている所を見て、真面目だという印象を受け

た。

いつの間に彼女のことを好きになっていたのかはわからない。

だけれど、彼女のことが好きと言う感情に気づいたのはつい最近だった。

多々さんが遊佐さんと話しているのを見て、心が苦しくなったのを知ってからだ。

もしかすると多々さんもと思ったが、実にあつさりと関根さんと付き合い始めた。

そのイチヤツき度と言えば、校内でブラックコーヒーの売り切れが続々と続くほどだった。

だからかもしれない。私が多々さんに相談したのは。

「多々さん。実は遊佐さんのことが好きなんです」

「そう。それを俺に言っても何も解決しないよ」

きっぱりと前から切り裂かれた。

相談と言ったのに対し、その切り返しである。

実はこの人は女子にだけしか興味が無くて、男子に酷く冷たい人物なのではないかと思っただ。

しかし実際は違った。

ふと多々さんが遊佐さんの情報を聞き出しているのを聞き、それをノートに纏めてい
るのを見た時だった。

この人は私が遊佐さんのことが好きだと知って、その上で付き合おうとしていたのではないか。

イメージとしてあった男子に酷く冷たい人物と言う考えが先行してその考えに至り彼の前に出た時、彼はそのノートを私に放り投げた。

「まず行動で示す。どれだけ好きなのか理解した上で、相談しに来な。ただし、好きなことを相談するな」

好きなことを相談するな。

最初はその意味がよく分からず、そのノートを見て熱心に勉強した。

好きな食べ物や嫌いな食べ物。よくノってくれる会話等も細かく記されていたそのノート。

これさえあれば遊佐さんの心も掴めるのでは無いかと考え、何回か行動に移した。しかし全部失敗した。

彼女は私に関心を示してはくれなかった。

なぜと疑問に思った。

考えて考えて考えた結果、とあることを思い出したのだ。

———「どれだけ好きなのか理解した上で、好きなことを相談するな。」

自分が何を相談したのか。

遊佐さんのことが好きなんです。どうすればいいですか？

違う。これは要するに、自分が遊佐さんを好きだと宣言したまでだ。

相談と言うべきじゃない。

私は多々さんに、何を相談するべきだったのか。

その答えは簡単に、余りにもあつさりと日向さんが教えてくれた。

「お前遊佐のこと好きって言ってたもんな。で、どうすんの？」

そう。自分がどうしたいかだった。

それが明確に決まっていなかった。

私はそのことに漸く気がつき、その上で多々さんの所に相談しに行った。

「多々さん。遊佐さんと付き合いたいです。自分がすべき行動を教えてください！」

「違う！ 君は遊佐ちゃんと付き合いたいだけじゃないはずだ！」

「遊佐さんの○○○○を○○して私が○○って、その状態で○○○をしたいと思います！」

「と言うと？」

「実は私は黒。パンスト派ですね。確かに遊佐さんの黒。パンストはエロくて堪らないくらいハイテンションになるのですが、別に性欲的な意味で襲いたいとかそういう欲求不満ではないのです」

「わかる。俺もしおりのことを愛してるししおりのあの絶対領域が完璧だと思うけれど

襲いたいとは思わない。襲うつもりはあるけれど」

「つまりエロいけれども恋している相手には何故か襲い掛かりたくならないのです！」
「よく言った！」

欲望だだ漏れの話だった気がする。どこからそれたのだろうか？

私はさっぱりオボエテイナイ。

黒。パンスト派の私にとってこの程度の話は造作も無かったですし、久しぶりに男子とずつと猥談をし続けると言うのも懐かしい気もしました。

多々さんは白ニーソと言うよりもどちらかと言うと黒ニーソの関根さんを見たいとぼやいていました。

しかし二人共コスプレ好きなのですし、多々さんは裁縫が尋常ではないほどうまいので問題ないかと思いました。

そんな男子高校生らしい猥談の最後に、多々さんはこう言いました。

「確かに遊佐ちゃん、黒。パンストを脱がして自分で被つてその状態でエッチしたいと言う個人的な願望はいいかもしれないけれど、一つだけ言うとすれば君がどれくらい遊佐ちゃんのが好きかどうかってことだ」

私はそう言われると思っていました。

ですから多々さんに渡されたノートを、多々さんに返しました。

「多々さんの努力は嬉しかったです。ですが本来、このノートに書かれていることは私
が本人に聞くべきことです。なのにそれをせず、ノートに甘えてしまった。それが最初
の、自分が好きの程度を知らない頃でした」

だからこそ、言えるのだ。

「今の私は本気で遊佐さんを愛しています。これ以上の遊佐さんに関する情報は要りま
せん。それは自分の信頼関係を表すものでもあるんです。本気で、全力で、遊佐さんを
幸せにします」

それを聞いていた多々さんはにっこりと微笑んでいた。

「安心したよ高松君。最初の頃の高松君からは、ただただ己の願望を叶える為だけに遊
佐ちゃんに強要したいという思いが感じられたからね。恋つて言うのは、確かに自分の
欲望を叶えたいってものでもあるけれど、同時に相手の欲望を叶えたいって願ひも持た
ないといけないんだ」

そこからの毎日はまさに怒涛の日々だった。

まず会話の作り方から練習し、歩き方や聞き方等全てのことを教えられました。

勿論その全てを理解したわけではありませんし、多々さんの行動をまんま使うと言う
ことが違うと言うことは知っていました。

だからアドバイスなのです。

彼はアドバイスをすると言っていたのです。

「遊佐さん。一緒に寮食に行きましょう」

「はっ」

二人で寮食に行った時のことは、今でも鮮烈に覚えている。

彼女がうどんで、私がそばを食べた。

緊張して味なんてわからなかったはずなのに、酷く美味しく感じた。

あの感覚が忘れられなくて同時に——心の壁を感じた。

SIDE：音無

何かわからない。

普通に過ごしているはずなのに、どこか疑問が上がるようなこの感覚に俺は異様な悪

寒を覚えていた。

何かが動き出そうとしている。

止まりかけていたはずの時計が、何処から電気を手に入れたのか再び針を揃えて動き

出すように。

俺も、俺達は何も知らない何かが動き出すような感覚がしていた。

そもそもこれは悪寒なんだろうか？

最早これ自体が何かヨクナイモノなんじゃないだろうか？

わからない。わからないけど——不気味で仕方が無かった。

日向に起きたあれはただの事故だ。

多々が起こしてしまつたと言う原因はあるにしても事故だ。

ならばこの悪寒は多々のせいではない。

何かもつと別のよからぬ何か動き出そうとしているんだ。

「クソ……。何なんだよこれ……」

あまりにも簡潔にそれは始まるのだろう。

多々も知らないその物語が、動き出すまでのリミットはもうあまり残されていない。

たつた一つの思いを貫く為の物語が——。

041 《Commentary First》

「全世界100億人のゾンビカッター皆さんコンバトラー！ 貴方の隣に住まいを構える永遠のJK！ 関根しおりだよ！」

「確かに死んでるけどゾンビじゃないから！」

「今回はタツ君が不参加なので、あたしが司会を務めるんだぜい！」

「ツツコミが激しく不安だ」

「そろそろ自己紹介した方がいいよ？ あたしのトップスピードについてこれなくなるから」

「既についていけてねえよ。音無結弦だ」

「と言うわけで第一回ラジオの様でラジオじゃない。ちよつぴりラジオっぽいコメントリー始めるよー！」

「でも今回からは方針が少し変わったんだろ？」

「そうなんだよ。今回からは、二人組でペアを組んで永遠にトークをし続けるという地獄の様な作業へジョブチェンジしました。そんな中で選ばれたのが、あたしと音無君つてわけです」

「……ん？ 何で俺と関根なんだ？ ここは普通主人公の多々と関根じゃないのか？」

「本当だったらそうしたかったんですけどねえ……。タツ君は色々とすることがあるからってちよつと出かけちゃいました」

「そうなのか。でもまあこう考えてみると、俺達って二人で話したことないのな」

「そうだね。あたしは元々ガルデメンバー以外と話してないし、タツ君は彼氏だし」

「さりげなく惚気けてくるのな」

「音声オンリーということからわかるとおり、これは作者が物語シリーズを全話見たことによつて考えられた企画なんだぜい。彼は実は猫物語を見ていないのに副音声のみ聞いてしまったという驚愕のことをしてしまったんだ」

「つて言うか、普通に猫物語だけ見てないこと忘れてて、普通に全部のコメントリー流したからだろ？」

「アホだからね」

「アホだな」

「まあ作者アホトークは置いておいて、それよりも一つ気になったことがあるんだよね」

「ん？ 俺に聞してか？」

「そうそう。音無君って、ホモなの？」

「俺はホモじゃない！ ホモは日向で、俺はそれに巻き込まれかけてるだけだ！」

「その発言もどうかと思うけど……」

「ごほん！ 俺からも質問いいか？」

「やだ」

「会話のキャッチボールを放棄するな！」

「もうしようがないな首無君は」

「違う。俺の名前はそんな戦国時代の武士の死体みたいな名前じゃない。俺の名前は音無だ」

「失礼。噛みました」

「違う。わざとだ」

「噛みました！」

「わざとじゃな——ってノれよ！」

「ところで音無君。あたしは何時までこんな彼氏じゃない人と二人つきりで密室に居ればいいの？ 貞操の危機を感じちゃうな」

「俺は今お前に命の危機を与えたい」

「いきなり殺す発言されても……照れる」

「照れる!?!」

「嘘。タツ君に言いつける。もしもしタツくん？」

「やめろ！ あいつにその電話された場合俺が碌でもない目に遭うのはわかってるんだ！」

「仕方ないなあ。取り敢えず普通に話し始めるとして、音無君は生前の記憶が無いんだよね？」

「まあ無いな」

「でも常識とかしつかりしてるけれど、生前の記憶が無いってどの範囲なの？」

「うぐつ。いきなり切り込んできたな……。まあ実際に言うのと、俺が失っているのはエピソード記憶ってものが無いんだ。」

記憶には意味記憶とエピソード記憶っていうものがあって、意味記憶は言葉の意味。つまり常識的な部分における記憶を指す。反対にエピソード記憶っていうのは個人的な体験や出来事についての記憶。

まあもつと大まかに言えば陳述記憶と非陳述記憶にも分けられるんだけど、そこまで詳しいことは別に授業でも無いし言わなくてもいいか」

「凄い詳しいんだね」

「まあな」

「よく考えてみるとこの戦線で頭がいいのって音無君とタツ君くらいだよな」

「そうなるの……かな？ 松下五段とか頭良さそうに見えるけれど」

「頭がいいって言うよりは、頭が悪くないって言った方がいい位かな」

「大山は？」

「普通」

「だよな」

「タツ君にNPC呼ばわりされて俯いてた頃があつたしね」

「その多々がNPCだったわけだけだな」

「そう考えると、あれも実は伏線だったのかなあ……？ 同族嫌悪的な？」

「だったらNPC同士がもつと仲良くないだろ。多分だけれど、普通で居られることに嫉妬していたんじゃないか？」

「あー。それはあるかも。実際タツ君って凄いか格好良いとか思うけれど、普通って思うことは無いからね」

「それが惚気けられたと取るかは自由だけれど、あいつの場合は何でも出来てしまうからこそ普通に憧れていた面もあったのかもしれないな」

「努力をすれば何でも出来るからこそその悩みか……。でもそこは悩みどころだよな。もしもタツ君が普通だったたら、多分タツ君はもつと悲惨なことになっていたと思うし」

「まあそこはああだったらとか、こうだったらっていう理想論だからな」

「今話している思ったけれど、タツ君という話題だけでここまで暗い方向に進むのに、何

時も明るく元気であるタツ君で凄いよね」

「厄介なところがあることは否定できないけれど、それはそうだな」

「伊達に天上学園のツッコミ殺しカッブルズの実践担当じゃないね」

「それ、二人共実践担当じゃなかったか？」

「愛玩キャラクターのみゆきちが参謀担当。実は今までのネタとか全部みゆきちが考案してた」

「な、何だつてー!？」

「みゆきちああ見えてアニメとかマンガとか大好き」

「な、何だつてー!？」

「最近ハマっているのは遊佐ちゃんの本」

「な、何だ——ちよつと待て！ それはヤバ過ぎるやつだ！」

「そんなこと言つてももう世界各国に広まっちゃつてるよ？」

「世界規模!？」

「最近だと宇宙人にも売れているって聞いたかな」

「まさかの宇宙規模!？」

「そう言えばもう一人の自分にもあげてたつて」

「まさかの平行世界!？」

「取り敢えず遊佐ちゃんも謎って言えば謎だよ。高松君が遊佐ちゃんのこと好きだけど」

「あー、それは俺も聞いた」

「高松君のこと、最初は遊佐ちゃん本気で嫌がってたもん。吐きます。気持ち悪いです。消えろとか言ってたし」

「そんなアグレッシブなのか。まあ本編でも言っていたけれど、最初は恋も知らない普通の男子高校生だったからな。エロい方向を優先してしまうのはわからなくもない」

「そこで登場したのがあたしの彼氏であるタツ君ってわけですね！」

「まあ最初は切り捨ててたけどな。あいつの言っていることは難しかったけれど、結局どういう意味なんだ？」

「要するに、女を好きになるなら相手を幸せにしろってことかな。付き合いたいっていうのは自分の意見であって相手の意見ではない。付き合うまでの過程は自分の意見を相手に伝えて、相手を妥協させるまでって言ってたから」

「多々らしいと言えば多々らしいのかもしれないな」

「実際付き合う時って、二人でこの人のことが好きだっと思う場合は少ないじゃないですか。実を言ううとあたしも最初は別にタツ君のこと好きじゃなかったよ？」

「ええ!! マジで!!」

「マジもマジも大マジ。ああ別にタツ君でもいっかなー程度にしか思わなかったから。と言うか基本的に女子って妥協だからね妥協」

「知らなかった。女子怖」

「そしてそこからが付き合いから結婚までの過程らしいんだけれどね。妥協から自分ではなくてはならないと言う確定まで持ち上げられるかどうかポイントだそう」

「それはまた難しそうだなあ……」

「すつごく難しいんだよ。だから実際、タツ君は付き合い合えたからって自分の努力を怠らなかつたでしょ？」

「あつ。なるほど。付き合い合えてから本番って言う奴か」

「そのとおり。付き合い始めるまでがスタートラインまでの道で、付き合い合ってからスタートらしいからね」

「付き合い始めてイチャイチャしていたのって要するに、多々が自分のことを関根にアピールしてたからってことなのか」

「まー、周りからはいちゃつきすぎとか言われたりしてたけど、ヘラヘラしながらもタツ君も必死だったんだよ。どうにかしてあたしがタツ君じゃないとダメ！　って言うレベルまで上げたかつたらしいから」

「要するに結婚したい願望って奴か」

「ま、そうなるね」

「だけれど実際に行える奴って少ないだろ？ その場合はどうなるんだ？」

「妥協結婚。要するに、まあいい感じだしいいんじゃないみたいなの結婚。この場合半分の確率で離婚になるから要注意だね」

「そうだろうな。妥協なんだし」

「話は逸れたけれど、高松君はスタートラインまでの道のりとは逆に歩き出していただけで、最初のノートは加速させてたわけなんだよ」

「え。あれって高松に普通に頑張つて欲しいから調べたんじゃないの？」

「考えてみて。最近付きまどつてきている男が、いきなり自分の詳しい情報を知りだした」

「ストーカーだな」

「そうでしょ？ だからもうその時の遊佐ちゃんは憤怒だったね。近づかないでください。貴方のことが嫌いですみたいなオーラプンプン出てたもん」

「きつと一回痛い目みろみたいな気持ちだったんだだろうな」

「不誠実だったからね。でもまあ気がついたわけだよ。間違つてたつて」

「その原因が日向と言う所に悪意を感じざる負えないが、まああいつもあいつで相談される役割だしな」

「その結果が、タツ君の本格参戦と言うわけです」

「気づいたなら手伝つてやるつて感覚だったのか」

「まあそこまで上から目線じゃないと思うけれどね。女子に甘くて男子に厳しいと言うイメージは強ち間違っていないと思うし」

「そうなのか？」

「考えてみて。タツ君の過去を」

「あー。確かに」

「そんなタツ君に欲望に塗れた男子が好きな人が居るつて言つて来ても、正直タツ君はノリ気にはならないでしょ」

「でも改心したから教えたんだろ？」

「教えてないよ。タツ君は何一つ教えていない」

「あれ？ でも高松は教えてもらったつて……」

「それは彼の勘違い。タツ君は大切なことに気付ける様に仕向けただけであつて、それで自分で気がついたことをタツ君が教えてくれたと思つてるだけ」

「うーむ。聞けば聞くほど多々のことが分かつていくな」

「でもまあ高松君が気づいた通り、遊佐ちゃんは人との間に明確な一線を引いてるんだけどね」

「明確な一線……か。それを乗り越えない限り高松は絶対に付き合えないんだろうな」
「そうだね。さつき妥協について話をしたけれど、遊佐ちゃんに妥協は無い。むしろ付き合うと言う感覚すら持っていない。これは遊佐ちゃんの過去に関わる話しなんでしょうけどね」

「初期装備でラスボスに挑んだようなものか」

「そうなのかな？ あたしからしてみれば、壁さえ乗り越えちゃえばあつと言う間にくつつきそうなイメージではあるけど」

「そうなんだ」

「タツ君の知られざる名言なんだけれど、無いつてことはそこに作れるつてことなの」

「要するに、壁を乗り越えた先に付き合うつて言う感覚が無いなら作れるから早いんじゃないかってことか」

「そゆこと。遊佐ちゃんのそんなところまで入ってきたのがきつと高松君で初めてになるだろうし」

「初めての感覚に戸惑うつてことか」

「遊佐ちゃんの場合はスタートラインまでが長いタイプだね」

「お前はどうかんだ？」

「あたしの場合は一応スタートラインからが長いタイプ。タツ君に最速で攻略され

ちやっただね」

「それを見分ける特徴は？」

「見分ける特徴は無いな。例えば岩沢さんはあれでいてスタートラインからが長いタイプ」

「スタートラインまでじゃなくて？」

「そう。それでいてひさ子さんはスタートラインまでが長いタイプ」

「意外だな」

「あの人そう言う所は奥手だから。あれだよ。初めては大好きな人にタイプ」

「そう言われると分かりやすいようなわかりやすいような……」

「みゆきちはスタートラインまでが長いタイプだね。まず人間として認識されることからのスタート」

「そこから!？」

「みゆきちは人見知りが激しいから、仲の良い人以外は皆キャベツって考えてるから」

「カボチャじゃなくて？」

「そう。因みに現在人間かつ男子として認識されているのはタツ君だけ」

「あくまで男子として認識されているだけで、好きな異性ではないってことか」

「まあそこまで入ってきたのはタツ君が初めてだから、少し困惑はしてるみたいけど」

ね」

「それがさつき言つてた遊佐のタイプってことか？」

「そうだね。いい実例だね」

「椎名とかゆりとかはわかるのか？ 後ゆい……はいいか」

「女子に興味を持つことは良いことだよとかタツ君なら言いそうだね」

「俺は最初から女子だけしか興味を持っていない。勝手に男子にも興味がある風な言い方をするな」

「はーい。椎名つちは強敵だよ。まず異性を認識すると言う感覚を教えることからのスタート」

「うわー」

「椎名つちは要するに、異性と交友関係にあると言うことまでしか知らない子だからね。初心とかそういうレベルじゃない」

「常識から教えるってことか」

「光源氏タイプだね。ゆりっぺさんはあれもあれで強敵なんだよね。異性を好きになることを認めさせることが必要だから」

「と言うと？」

「なーんかゆりっぺさんって、自分は何じやなきやならないとかって自分を追い込んで

る風なんだよね。だから、そこまでしなくていいんだよって教えることをしないとならないかな」

「確かにリーダーとして気負いすぎている気もするな」

「そう言う事なので、ゆりっぺさんはどちらかと言うとスタートまでが長いタイプかな。椎名っちも同じくスタートまでが長い」

「色々と参考になる授業を聞いた感覚だ」

「あははー。と言うか第一回ってこともあつて真面目に話したからね」

「そう言うことなのか」

「もしも第一回じゃなければタツ君と一緒に暴れていたよ」

「あー、そう言う意味も含めて関根だったのか」

「かもしれないね。と言うわけで、第一回もそろそろ終幕」

「今回は初の試みってこともあつて、第二回も続けてやるんだろ？」

「投稿日時は空くと思うけどね。それじゃあコメントリーはタツ君の彼女関根しおりと
！」

「死んでもいいことあるのが俺達。音無結弦でした！」

「次回に続く！」

042 《Commentary Second》

「全世界100億人のエロかつこいい皆さんグーテンモルゲン！ この作品の永遠の主人公、雨野多々だよ！ またの名を石田雨竜だよ！」

「お前がクインシーか」

「ナイスツツコミタツチー！ と言うわけで今回のコメントリーは雨野多々と！」

「立華かなででお送りします」

「さーて、さっきのファーストにて多々君が出てこない！ あんなにカッコいい主人公が出てこないなんてこの作品じゃない！ って思った皆さん。俺はここにいます！」

「誰も貴方を求めていないわ」

「ツツコミ辛辣スギイ！」

「貴方が苦しむ姿が見たいのよ」

「まさかのDS!？」

「いいえ。違うわ。貴方だけよ。何だろうこの気持ち……」

「えっ。まさか……」

「貴方の体をハンドソニックでメッタ刺しにしたい」

「殺人鬼の発想じゃないですかー」

「と言うわけで天使改め殺人鬼と言うのはどうかしら？」

「何を改めたのかな？ それを人は悪化と言うんじゃないかな？」

「殺人鬼ソニツク」

「ぎやあああああああ?!? 俺の右足があああああああ?!?」

「刺さつてもいいのだからそんなに大きな声を出さないで」

「刺さつてる刺さつてるうううううううう！」

「間違えたわ。男の子だからそんな大きな声を出さないで」

「意味わかんない！」

「まあ嘘なのだけれど」

「知ってた」

「取り敢えず挨拶をします。かーなでーだYO！ いつもこの作品を見てくれてありが

TO！ それにサンキュー、多々はファツキユー！ 今日に来て欲しくも無かったバ

ディーを紹介するよ！ カモン！」

「だからフリがひどすぎるって！」

「そう言えば私、神様になったじゃない？ なのに天使ってどうなのかしら？」

「神様になったのはあくまで別のキャラの話であつてタッチーの話ではない！」

「知ってるわ。何馬鹿なことを言ってるの?」

「あるえ? 今日俺がダメージを負ってるぞ?」

「ええそう。今日は貴方がアウエーなの」

「なるほどそう言うことか。要するに何時も俺に好き勝手されているからって、俺をイジメようとしていると。生徒会長ともあろう人が随分と姑息な手を使うんだね」

「軽蔑しても構わないわ。私も貴方を軽蔑しているもの」

「ハンドソニックって厨二病っぽいよね。発病してる? ねえ発病してるの?」

「……厨二病じゃないわ」

「へー。じゃあガードスキルって言う名前は? 普通に出してもいいと思うな」

「殺すわよ」

「うわお。脅しが怖いなー。ふふふ。君が俺をアウエーにたくて堪らなくて厳しく接してくるのだったら、俺にも考えっていうものがあるからね。煽って煽って煽りまくる」

「酷い話ね」

「全くだよ」

「いえ。貴方の話なのだけけれど」

「そう? いやあてつきり自分のことを言っているのかと思ったよ」

「……本格的にうざいわ。私もやめるからやめて」

「いやよ。つてことでタッチーおっはー」

「おっはー。懐かしい挨拶ね」

「俺はこれにドストライクの世代だから」

「そうなの。私は少し違うけれど、貴方の世代から聞いていたわ」

「そんな俺が年寄りみたいない方しないで!？」

「でも実際この世界は時間軸がズレているのよ。前に貴方の彼女が言っていたように、貴方の特番が貴方より先に来た人が知っているなんてことはザラにあるわ」

「そーなんだ。要するに俺つて実はこの世界の中で結構おじいちゃん?」

「それでもあるしそうでもないとも言えるわ。要するにこの世界では年齢と言う概念がそもそも無いのよ。教師の中に貴方に対して教師になんてことをと言う人はいるけれど、年上になんてことをと言う人はいないでしょ?」

「確かに」

「職員室に行けばわかるのだけれど、同じ立場の人間に対してはタメ口なの。例えば数学の教師と言う一つの事柄のみが与えられたふたりの先生、A先生とB先生としましょう。その二人は一人は女性で20代、一人は男性で60代だとしても彼らはタメ口で話すわ」

「ふーん。あくまで立場にこだわるんであって、年齢では拘らないんだな」

「そこが貴方達の言う神の作った設定なんでしょうね。中には俺の方が年上だと言っていること聞かない様な人もいそうだし」

「どちらにせよ俺は聞かないけどな！」

「だからこそ生活態度が悪いと言われるのよ」

「それにしてもそうなるか？」

「フシギバナに進化するのかしら？」

「その前にフシギソウにならないと」

「そう言えば貴方はポケモンの初代御三家で誰が好き？ 私はフシギダネよ」

「ゼニガメ派。カメックスは強いぜ」

「でも実際、フシギダネ、ゼニガメ、ヒトカゲの中でどれが一番強いかって言われたら反応に困るのよね」

「それ。言ってしまったえば弱点属性である草に対抗できる氷タイプの技を覚えるカメックスが有利って答えられるけれど、リザードンは種族値的に有利。フシギダネは状態異常数が半端ないからね」

「戦ってみないとわからないとはこのことね。私のパーティと今度戦ってみるかしら？」

「かかってくるといい。俺の雨パの前に葬り去ってやる」

「私の霧パの前に視界は無いわ」

「なにそれこわい」

「話は逸れたけれど、生活態度が悪いと言った時に何が不思議だったのかしら?」

「最初から知っている様に扱ってくる奴らなんて、気持ち悪いだけじゃん。何で理解できなかつたんだろ?」

「そうしないと世界が成り立たないからではないかしら?」

「それはあるかもしれないけれど、俺みたいなタイプだっていたっていいじゃん。いや俺が居るんだけどさ」

「確かにそれには一理あるかもしれないけれど、貴方みたいな人が増えたらそれこそ問題になるわ」

「そっか。でもさ、俺達がこの世界に居続けられるのって理由があると思うんだよ」

「例えばどんな理由かしら?」

「この世界には不良がない。例えば不良から好きな人を救えなかった人がいるとするでしょ?」

「貴方自分の過去をネタに使うのやめたらどう? 涙が出てるわよ」

「(めん)」

「確かにでも、不良から誰かを救いたいって願いで来た人が居ればその人は永遠に叶えられないものね」

「だから考えられるんだけど、俺達がこの世界にいるのはそう言う普通では叶えられないモノを叶える為にいるんじゃないかなって思うんだ」

「そうね」

「それと別に、もしかするとNPCって言うのは俺達死んだ人達に必要な人材が再現されてきているのかもしれないね」

「必要な人材と言うのはどういうことかしら?」

「単純な考えなんだけれど、俺達って特殊な体験をしてるでしょ? だから俺達が何処かで普通の人達を望んでいたんじゃないかな?」

「それは要するに、私達が彼らを作り出していると言うことかしら?」

「仮定段階だから推測でしか言えないけれど、俺は強ち間違っていないんじゃないかなとは思ってる」

「貴方がそう思うならそうなんでしょうね。貴方の中では」

「何故いきなり強気」

「しかしそれにしても貴方は色々なネタを使うのね。テレビあまり見れなかったんじゃないか?」

「お姉ちゃんが教えてくれたんだ」

「そう。優しいお姉ちゃんだったのね」

「おや？ そう言えばタッチーも銀髪だよ。もしかして親戚？」

「それは無いわ。だって貴方が死んだ以降に私は生まれているのだから」

「そうとも言い切れないさ。俺達を捨てた両親がそこで子作りしてたかもしれないじゃん」

「子供を支えられずに逃げた人がまた子供を作るとは思えないけれど」

「結局それも推測の域を出ないからね。所詮仮定論さ」

「貴方は大人びた考えをするのね」

「大人にならなきややっていけないよ」

「壮絶な過去を持つている人はこの世界に多いわ。その中でも貴方のものはトツプクラスよ」

「そうかな？ 言伝によると遊佐ちゃんも結構アレだと思うけれど」

「今はいいかもしれないけれど、貴方の場合はそれを不幸として認めていなかったからこそ壮絶なのよ。普通はあの状況を幸せだったとは思えないわ」

「そんなに？」

「貴方自分に起こったことを理解していないの？ 両親に捨てられ、姉を犯され、彼女が

自殺し、自らは逮捕され、そして殺された。どう考えてもそれを幸せだったなんて感じられないわ」

「そこが俺がここに来た理由とも言えるかもしれないね。本当の幸せを知りなさいと」
「でもそれを幸せと認めてしまっている以上、貴方はすぐに消えてしまう。だからNPCの価値観を共有させる為に憑依した。と言うことであつていいのかしら？」

「大体ね。いつか本当のNPCとしての雨野多々とも話して見たいものだ」

「貴方が二人に増えると考えると悪夢としか思えないわ」

「しおりと3P出来るしね」

「……その発言で気になったのだけれど。いえ、これはコメンタリー時空だから聞くわ。貴方と関根さんは既にその、あの……」

「セックスしたかつてこと？」

「隠せ」

「ごめんなさい。取り敢えず言えばまだピッチピチの童貞でございます」

「女装したら可愛いのだつたら、ヤクザに掘られたりしなかったのかしら？」

「何でそっち方向へ持つてくんですかねえ……。まあ犯されたりしてないよ。あんなことは普通同人誌とかでしか起こらないからね」

「それにしてもあれだけ変態発言や色々際どい発言をしているのに、まだ童貞なのね」

「あはは。だつて両方共相方がいるし、エッチ出来る場所殆ど無いしね」

「あれだけ生徒が多いのだもの。仕方ないわ」

「最初は野外ではしたくないって決めてるから、屋内の何処かに場所を見つけたらやろうと思つています」

「取り敢えず止めておくわ」

「ハプニングフラグが見えた」

「やめなさい。洒落にならないわ」

「俺の36cm三連装砲を見るかい？」

「三連装砲の時点で嘘確定よ」

「36cmはいいのか。普通だよ普通。別にエロ小説みたいにマジカルではないよ」

「女子になんて発言をするのかしらこの童貞」

「言い方がきついなあ」

「別に私は貴方の大きさなんて求めてないわ」

「器の大きさなら自信がある」

「そうね。不快極まりないけれど、確かに貴方の器は大きいわ」

「あれ？ 褒められているのに貶されている気がする」

「貶してるのよ」

「やっぱり。でも俺の器は大きくなつてないよ。本当のところ自分ではそんなに感じてないけれど、本当に器が大きかったら皆の好意も受け止めてるさ」

「二人で手一杯なのね。でもそれは優しさ」

「それを優しさと言うのなら、それはきつと俺の優しさじゃなくて周りの優しさだよ」
「そう言うところで謙虚なのね」

「俺は自分の気持ちに素直だよ。だからしおりに何時までだって愛してるを告げるし、周りの成果は周りのものだ」

「そこまで愛されているなら、貴方の彼女は幸せでしょうね」

「幸せかどうかは俺達が判断することじゃなくて、しおりが判断することだけだね」

「本人が幸せかどうか判断する。それは確かにそうかもしれないけれど、貴方の様な間違いを犯さないためにもそれを伝えてくれる友人は必要よ」

「だったらしおりにはそれこそ心配がない。みゆきちちゃんが居る」

「そう言えばそうだったわね。彼女は本当に周りに恵まれている気がするわ」

「ひさ子ちゃんっていう姉御分に、まさみちゃんっていう尊敬できる先輩。みゆきちちゃんっていう大親友に、俺という彼氏。まあ最後の部分は恵まれているかどうかかわらないけれどね」

「最後の部分が一番という感じはするけれど」

「だって俺メンヘラ臭しない？」

「しないと言えば嘘になるけれど、彼女を独占したいと言う気持ちは否定するべきものではないわ。愛する人の為に一途になれる人と言うのよ」

「人の見方によるって奴か。タツ君覚えたゾ」

「その覚えたものを一瞬で忘れるのが貴方だものね」

「そんな記憶力してないって。忘れたくて忘れてるの」

「余程悪いじゃない」

「忘れたいものを忘れるって言うのは必要なことだとは思うけれどね。逃げるって言うのは何時でも悪いことじゃなくて、時には必要だってことを忘れちゃいけないよ」

「そうやって諭して、一番最後まで逃げないのは貴方なんですよ？」

「殿を務めるのはいつだってダンディーな男の役目なんだぜカミュ？」

「ウザいわ」

「ごめん」

「そろそろ文字数的に終わりの時が近づいてきたわね」

「じゃあ最後に感想をどうぞ」

「正直に言うと、意外とスムーズに進んで驚いたわ。前回の貴方の彼女もそうだったけれど、実は貴方達って話す時にあまり脱線しないのね」

「脱線しないと言うか、何時もノリで話してる分こう言うところだとスムーズに進む様に調整しちゃうんだよね」

「お喋り故の特技って奴かしら？」

「そうかもしれないね。まあ俺としては本当にスムーズに進みすぎて、あれ？ 何時もの暴走は？ って思われるのがちょっと怖い」

「何だかんだでそろそろ終幕」

「幾ら二人だからって、この会話量は結構辛いところがあるな」

「そうね。では終幕のご挨拶を。コメンタリーは戦線の敵天使こと立華かなでと」
「いつも元気いっぱい！ 死んでもノリ一番こと俺！ 雨野多々でした！」

第6章 《記憶の行き先》The destination
of a memory》
043 《Ta o Dead》

朝日が立ち上るのを見ながら、俺は大きく息を吐いた。
遠い。まるで朝日が永久の彼方にあるように思える。

「ふう……」

何時ものノリの軽さを捨てて、俺は振っていた刀を鞘にしまう。

感覚は掴んだ。

新しくギルドから支給された刀の名は「紫流^{しりゅう}」。

刀身は黒く染まり、夜をイメージした美しい輝きを放っている。

何でも俺が刀を頼んで以降本格的に刀を作り始めた人が居たらしく、その人が毎日毎日一本ずつ作り続けた結果生まれたのがこの刀らしい。

きつと血の滲む様な努力があったのだろうと思いつながら、俺は刀を振るう。

刀の記憶と共に込められている、絶対に折れないで欲しいと言う思い。

それが刀を握る手を通して伝わってくる。

実は前回まで使っていた刀が没収されて折られてしまったので、俺はこの刀を受け取ったのだ。

紫流は俺の望みを叶えてくれる様な素晴らしい刀だ。

真つ直ぐに、折れない芯の強い刀。

抜刀と共に目の前の木を切り捨てる。

豆腐を切り分ける様な軽い感覚の後、ズルリとズレた木が倒れる。

切断面は鮮やかで、およそ日本刀で切ったとは思えないレベルだった。

「何をしているかと思ったら、こんなところで刀を振っていらつしやったのですね」

「……遊佐ちゃんか。やつほー」

「何時もの覇気がありませんね」

そう言う遊佐ちゃんも何時もの口調が無いなあと思いつつ、俺は刀を鞘にしまう。

「何か嫌な感じを嗅ぎ取ったのではありませんか？ 先日音無さんが何か感じたと言っ

たことを、ゆりっぺさんに報告していましたし」

そう。体を感じるザワめきがあるのだ。

普通のザワめきではなくもっと大きな、忘れてはいけな大切なモノを喪失してし

まったかの様な悪寒。

それと同時に思い浮かぶ、銀髪の女性の噂。

無関係とは言い切れないと理解しつつも、出来れば無関係であつて欲しいと願つてしまふのは、仕方が無いことだろうと思う。

「私も、感じることはありません」

「へえ。遊佐ちゃんが」

「はい。何か良くないものが動いている様な、全身を何かが蠢いている様な不気味さ」

——何が起こっている。

理解するに時間は要らなかつた。

その何かを理解しているわけではないが、嫌な予感がする程の何かだ。

ピリピリとした雰囲気になつてしまふのもしょうがない。

「多々さん」

「何かな遊佐ちゃん」

「私は男が嫌いです」

唐突な発言だつたけれど、大体は予想と云うか粗方聞いていたのでそこまでオーバーなリアクションは取らなかつた。

「そんなアツチョンブリケと言う昔ながらの反応をされても困ります」

「手塚先生ネタまで伝わるとは流石遊佐ちゃん」

こう言ったネタでケラケラと笑いながらも、遊佐ちゃんのその瞳だけは見逃さなかった。

憎悪の、悪意の瞳だ。

今まで何度も晒されてきたからわかる。

この瞳を持っている者達は、正義の味方とかで解決出来るレベルのものではない。

「ですが最近、高松さんと一緒にいると暖かくなるのです」

その瞳に映るは困惑。

憎悪の対象に好意を抱いてしまうとと言う矛盾を、彼女自身が認めていなかった。

俺にそれを指摘することは出来ないし、俺でなくとも指摘することは許されない。

何故ならそれを知った瞬間、彼女が崩壊してしまうことは目に見えていたからだ。

「この感情は何なのでしょう？ どうして私は苦しいのでしょうか？」

何も言うことは出来ない。

幾ら相談を受けてきたとしても、答えられるものと答えられないものは存在する。

今回はどうしようも無い程に、答えられないものなのだ。

自分で知るしかないのだ。

「多々さん。私は何故こんなにも、感情を捨ててしまったのでしょうか？」

憎悪と悪意を秘めた瞳と俺の瞳があった瞬間、俺は後ろへと回避した。

俺がそのままいたら突き刺さっていたらさうハサミを冷や汗と共に眺めながら、しまった。理解してしまった。何故気がつかなかったのだと。

「何故生きようとするのですか多々さん」

その瞳に、生気が一切感じられなかった。

「別に死ぬわけでもないのに」

先程切った切り株の上までジャンプして後退すると、俺は木々の影に身を隠す。

——あれはマズイ。

俺が先程言った通り、あの憎悪と好意の矛盾は自分で気づくべき問題だった。

だけどきつと彼女はそれを誰かに知らされてしまった。

聞いたんだ。俺以外の誰かにも。

俺みたいに憎悪と嫌悪の視線と同じくらい好意の視線を受けていなければ気がつか

ないほどの、ブレ。

そのブレに気が付くことが出来ないのは仕方のない事だし、何より頼られて答えるのは当然のことだ。

だからこそ、この惨劇は起こったのかもしれない。

飛んできたハサミを紫流を抜いて切り裂くと、再び木々の影を縫うようにして走り抜ける。

「何処へ逃げるのですか多々さん」

底冷えする様な声が聞こえた。

——誘導されていた。

考えればわかる話だ。彼女の担当は参謀だぞ？

「ぐ、ああ！」

体を空中で無理をしてでも捻り、そのまま木を蹴って目の前でハサミをもつて待ち構えていた遊佐ちゃんを回避する。

次の瞬間、俺はありえないものを見た。

遊佐ちゃんの体がブレた。

思い出せばわかったはずだ。いつも遊佐ちゃんはどうやって俺達の前に現れていた？

ずっと居たかの様に、いつの間にか現れていたじゃないか！

「——ッ！」

着地地点でハサミを構えている遊佐ちゃんを見て、困惑した様な悲しそうな顔を見て、俺は抵抗するのをやめた。

S I D E : しおり

あたしは急いで保健室に向かっていた。

「——ッ！ タツ君！」

保健室に入るとそこにはベッドの上で寝ているタツ君の姿と、その前で椅子に座っているゆりっぺさん。

そしてゆりっぺさんを護衛するかの様に立っている音無君と日向君の姿があった。

「まだ起きていないわ。いいえ。起きないのよ」

「起き、ない？」

タツ君が起きないって、どういうことなの？

「俺が説明する。俺が多々を見つけたのは、今日の朝だった。昨日の朝出て行ったきり帰ってこないって言うのを昨日聞いたから、要するにもう二日目ははずなんだ。なのにまだ目を覚ましていない」

音無君の言っている言葉が頭に入ってこない。

どうしてタツ君が倒れているのか。

どうしてタツ君が目を覚まさないのか。

それが一切わからなかった。

「全戦線メンバーに緊急招集をかける為に校内放送を使わせてくれたのは天使よ。今回の作戦は、天使と合同で行うことになったわ」

「何ですか？ 何が起こってるんですか!？」

「——離反よ。遊佐さんが一人で革命を起こしてくれたわ」

遊佐、さん？

でも遊佐さんは何時もタツ君と仲良しで、タツ君のことをいい人だつて言ってる様な人で——。

「彼女が一概に悪いとも言えないような状況なの。彼女が雨野君を襲ったのだろうけれど、雨野君がどこを攻撃されたのかすらわからない状況よ」

一度落ち着こう。

頭に血が上りすぎているせいで、遊佐さんが全て悪いと決めつけそうになっていた。

何時もタツ君が言っている通り、全ての物事には理由ときっかけがある。

それを知らずに否定するのは良くないことだ。

「彼が持つていたはずの日本刀紫流が行方不明。恐らく遊佐さんが持つていると考えていいでしょう」

ゆりっぺさんの話に耳を傾けながら、あたしの少ない頭を総動員させる。

何故、タツ君を襲う必要があったのか。

一人で山にいたと言うだけでも襲いやすかったからと言う理由にはなるが、それでも不確定要素が多すぎないだろうか？

遊佐さん一人がタツ君に勝てるとは思えないし、そもそも戦線で一番強い人を最初に狙うメリツトがない。

戦意を削ぐつもりなら、言い方は悪いけれどタツ君を磔にでもして見える場所に置くはずだ。

それもせず、ただ殺して刀を取って終了。

おかし。

「今回の件に関して何か情報を持ってないかしら関根さん」

「……情報ではないですけど、おかしくありませんか？」

「おかし？」

ゆりっぺさんは首を傾げた。

「タツ君を最初に狙うメリツトとして考えられるのって、あんまりないじゃないですか」

「言われてみればそうだな。あいつは確かに戦線で多分一番強いけど、それでも特出して強いわけじゃない。それに強い奴を狙ったならわかる場所に置くはずだ」

「察しがいいな日向。俺もそれは気になったんだ。何でわかりにくい場所に置いたんだろうと」

「刀を奪う為、とか考えられないかしら？」

「紫流を奪ったところで、あれはただの日本刀でしかありません」

實際触つてみたけれど、美しいとしか思わなかった。

それに日本刀を使いたいのであれば、遊佐さんが普通に頼めばタツ君も見せるなり貸すなりしていたはずだ。

「タツ君を最初に狙うメリツトって、あたしが考えられる中で一つしかないんです」

「それは？」

「——否定して欲しかった」

否定。それはきつとこの戦線で唯一タツ君だけが出来ること。

戦線の皆は気が付いていないかもしれないけれど、あたし達は他人に対して否定的な意見を言えない特徴がある。

それは自分達が同じように苦しい経験をしてきたと言うことと、仲間意識が強い故に傷つけたくないと思うからだ。

でもタツ君は仲間意識が強く自分も苦しい経験をしてきたから故に、誰かにそれをはつきりと告げる。

自分の様に迷い続けて欲しくないからと、それを告げる。

「きつと遊佐さんは何かを否定して欲しかったんです。ただ、タツ君は否定しなかった」
「それがトリガーとなつて雨野君を殺した。と言うよりは止めて欲しかったけれど止めてもらえなかったと言うところかしら？」

タツ君。きつとタツ君は遊佐さんのことを思つて否定しなかつたんだと思う。

良くも悪くも他人の幸せに意味を見出すタツ君にとって、遊佐さんのその揺らぎは自分で止めなければならなかつたものなんだろう。

それを他人任せにしてしまった。

だけれどもそれも悪いことじゃなくて、他人に意見を求めるのは当然のことだ。

当然のことをした結果が、上手く行くとは限らない。

「遊佐さんがいる場所、わかりますか？」

「——ギルドよ」

そこに、遊佐さんがいる。

少なくともスペック的にはタツ君を倒せるレベルのスペックは持っているはずだ。

ギルドの罫を考えれば、以前聞いたようにタツ君が誰かを助けると言うことも出来ない。
い。

つまり本当に、死者を出しながらでも進むしかないのだ。

「あたしも行きます」

「無理よ。貴方は陽動担当でしょ？ それに今回は尺だけけれど、天使もギルドに入れるわ。勿論ギルドを破壊しないとと言う契約をしてね」

「遊佐さんと話ができるのは多分、あたししかないから」

あたしは多分だけれど、この一連の流れの原因に気がついている。

それは遊佐さんの言っていた、高松君のことを考えると胸が苦しくなると言うこと。答えてしまったのはあたしだ。

それが恋だと伝えたのはあたしだ。

きつとそれを——否定して欲しかったんだ。

「全て満面の笑みになるハッピーエンドで終わらせてみせます」

なるとは限らない。今回のことについては本来に、誰もが悪くて誰も悪くないって言う言い方が適切だと思う。

あたしが答えたのが悪い。

遊佐さんが頼ったのが悪い。

タツ君が否定しなかったのが悪い。

高松君が遊佐さんを誘惑したのが悪い。

だけれどもそれは全て正解であって全て違う。

何故なら答えたのも、頼ったのも、否定しないのも、誘惑するのも、間違っただけからだ。間違っただけからだ。

過程で間違えなくても結果で間違えることはある。

だからこそ、今回はそれなんだ。

「……意思是固いようね。わかったわ。今回に限り貴方の作戦参加を認めます」
「おいゆりっぺいいのかよ！」

「仕方ないでしょ。今回もしかするとキーになるのは本当に関根さんかも知れない。頼りにしてるわよ」

「任せてください！」

待っててタツ君。今助けるから。

044 《UnderGround》

心地よさそうではないな。

夢を見ているであろうその男を前にして、僕は立っていた。

死んだ世界戦線と自らを呼んでいた奴らは、全員で反乱分子となった遊佐の鎮圧に向かっている。

本当に偶然だと言うのかと思うほど整備されているこの状況に、僕は目の前の男——雨野多々に対する恐怖を覚えてやまない。

全てを。予測していた。

予言や預言と言った類のものではなく、恐らくなるだろうという曖昧なものではあつたが。

それでも彼がいつかこう言う自体が起こるだろうと予測していたことに、恐怖以外の何を覚えるというのだろうか？

まるでこの男の手のひらの上で踊らされているかの様だった。

「誰も悪くなくて、普通なら当たり前で、当たり前前過ぎた故に起きたことか」
そう、僕はこれを評価している。

誰が悪かったわけでもなく、普通だったからこそ起こった事実。
そこに僕は、悪意を注入する。

「……はあ。目が覚めていることに気づかれちゃってたか」

「その通りだ。【雨野多々】」

僕——直井文人はそう答えた。

何時もとは違う気だるそうな雰囲気、濁ったような目。

恐らくこの世界で唯一僕だけが知っているその真実。

「——雨野多々に催眠術は通用しない」

雨野多々、と言うのは何時も僕のことをダークネス・ルシファーだの好き勝手に呼んでくれている方だ。

では目の前の【雨野多々】は誰なのか？

答えは単純に、NPCとしての雨野多々だ。

「その理由は彼が催眠術にかかった場合、すぐにそれを君が乗り移り人格を移してしま
うからだ。催眠術にかかっていた人格Aが一度人格Bに入れ替わることによって、その
後すぐに人格Aに戻すと人格Aは催眠をかけられていない状況になってしまう」

「それが俺がお前に教えた多重人格者に催眠術が通用しない理由だったな」

【雨野多々】。またの名を天乃夕緒^{あまのたお}。

それが憑依される以前のNPCとして存在していた彼の名前。

「わかっている。僕に催眠術を教えたのは貴様だからな」

トラウマが離れなくて陶器を見てしまうと吐いてしまう僕に、彼は催眠療法を提案した。

そして彼は催眠療法を使い、僕のトラウマに干渉し和らげた。

トラウマが和らいだことにより僕は自力でトラウマと立ち向かい、見事乗り越えることに成功した。

しかし彼は消えた。

「NPCに憑依してしまったって言い方は実は正しくない。俺が雨野多々に憑依した」

「だからこそ貴様の肉体は風化し、消滅した。僕のタダ一人の親友だった君は」

雨野多々が悪かったわけでも、天乃夕緒が悪かったわけでも、誰が悪かったわけでもない。

少し前に起こった、どうしようもない事態。

そしてそれをきっかけとして、僕は神になることを望んだ。

「雨野多々を救済する」

それだけだ。

もし僕が神だったならば、雨野多々に催眠術をかけることによつて救済できたはずな

んだ。

僕は親友を失わず、親友もまた肉体を失わずに済んだ。

生徒会長が存在しない今代理生徒会長は僕だ。

ギルド、と呼ばれる場所の入口は全て封鎖し、生徒会長として全校生徒を招集して催眠にかける。

死んだ世界戦線と呼ばれるメンバー全員も、催眠術による幸福感によつて消滅させる。

それ以外の方法だつてある。

死んだ世界戦線と共同戦線を張り天使を撲滅し、神への挑戦権を手に入れる。

この世界全てを散策し、人の塔を立ててあの壁の向こう側へ向かう。

方法なら幾らでもある。

それに抗う権利も、死んだ者達は持っている。

そうなれば戦うしかないだろう。

「この世界最強は紛れもない夕緒。貴様だ」

「そんな」と言つちやつて。全く俺も信頼されたもんだぜ」

立ち上がった夕緒に、刀を与える。

白く輝く白銀の刀身は名を【花月かげつ】と記されていた。

僕と彼で校内を探検した時に見つけた、彼曰く銘刀らしい。

NPCとは見れないその頭の構造は、僕をしても疑問は残るが仕方がない。

疑問とは解消するものだけとは限らないのだ。

そのままにしておいた方がいいものだってある。

「それじゃ俺は動き出すとすつか。取り敢えず、言うこと聞かない奴らぶつた切ればいいんだろ？」

「ああ。ただし、相手を間違えるなよ？」

「わーってるよ。口出しすんなや」

漸く元の夕緒の口調に戻ってきたことを確認しながら、その体の奥に押し込んである多々のことを考える。

あいつは何時も僕を馬鹿にしているかの様な口調だった。

それがウザイと感じたことは何度もあったが、昔の夕緒を思い出してふと楽しくなったこともある。

奴自体、気が付いていたのかもしれないな。

俺がお前に憑依しているNPCの親友だったのだと。

まあ希望的観測でしかないが、それでも考えたっていいだろう？

僕にとってある意味、夕緒も多々も変わらなかつたんだから。

「……まあ、今更言っても意味ないか」

「何か言ったか？」

「いや、何でもない」

僕は動くだけだ。

誰もが幸せになる未来を目指して、今幸せになれる者達を潰す為に。

SIDE：高松

——遊佐さん。

私の好きな人であり、暴走してしまった少女。

彼女のことを反乱を起こしたと呼びつつも、あくまで組織として敵対しているだけです。

思っていることは全員同じ。彼女を助けたいと言った一つの思い。

その中でも最も私がそれを望んでいると、自信を持っていることができます。

これも全て、多々さんから教えていただいたもの。

本人は私が気づいただけだと言っているけれども、それでも彼がそのヒントをくれたことには変わりない。

だからこそ、これは多々さんに対する贖罪だとも思っている。

私は持っている拳銃を握る力を強めながら、ギルドへの道のりを進んでいた。

何処にいるかも分からず、足を止めないといけない為トラップは作動したまま。なので幾つかの小隊に分け、先を進むことになった。

フォーマンセル。その内の一つが、私が率いているこのチームです。

一人が関根さん。

一人が音無さん。

一人が天使。

何故私がここにいるかかもしれませんが、ゆりっぺさん曰く一番出会う確率が高いのが私だから、だそうです。

交渉役としての関根さん、そして迎撃役としての天使さん、いざという時間関根さんを守る事ができる可能性が高い音無さん。

音無さんは以前のギルド降下作戦でも生き残っていたのでかなり妥当かと。

「それで高松、俺達は何処に向かっているんだ？」

「オールドギルドと呼ばれている場所です。かつて武器はそこで作られていましたからね」

何故オールドギルドかと言われてしまえば、勘としか答えられない。

ただ今回はその勘を信じてくれたゆりっぺさんと、本当に私が原因ならば私が考える

場所にいるだろうと言う可能性があります。

ならば私は私を信じてくれるその人達を信じるしかない。

「それにしても今回のこと、本当に遊佐が一人で全部起こしたのか？」

「いえ。恐らくと言うよりも、本当のところは誰が悪いわけでもありません。あくまで実行してしまつた遊佐さんを敵とみなすことによつて、組織を纏めてゐるに過ぎません」

「それつて！ 要は遊佐に全ての責任を押し付けてるようじゃねえか！」

「現に押し付けてゐるんです」

あくまで冷静を装つて、私はそう告げた。

そう。今回のことは誰も悪くない。

私は私が悪いと言いたくなつてしまふけれど、それは遊佐さんへの裏切りだ。

私が遊佐さんのことを好きにならなければ良かった。そんなことは許されない。

「わからないのですか？ 誰かが責任を取らなければならぬんです」

起こつてしまつた以上、誰かに責任を求めなければならぬ。

その最も求めやすい場所に、遊佐さんがいたというだけだ。

「それは……」

音無さんの気持ちはよくわかる。

よくわかるからこそ、理解しているからこそ、否定することしかできない。

「ダメだよ音無君。ここは抑えて」

「何でだよ」

「まだ音無君にはわからないかもしれないけれど、覚えてないだけかもしれないけれど、人を好きになるってことはね、絶対にその味方でいたいって思ってしまうくらいなの。だから一番遊佐ちゃんの方でいたいのは高松君なの」

まつすぐにそう言われてしまった音無さんは静かになった。

正直に言えば助かりました。

もしもあのまま質問され続けてしまえば、恐らく私は何処かで怒りを爆発させてしまっていたでしょうから。

味方でいたくないはずがない。

敵対したいわけがない。

「オールドギルドに、恐らく遊佐さんはいます」

「確信があるわけじゃなさそうね」

「ここに来て始めて話した天使に私は頷く。

「確信はありませんが自信はあります。彼女は賢い人ですから」

全ての行動を知ってしまいそうな人だ。

恐らく彼女が多々さんを襲ったのは、本当に否定してもらえなかったからだけでは
ない。

多々さんが私に教えたことを知っていたからだ。

そうでなければ男子が嫌いと言うだけの矛盾もしていない気持ちだけで入れたの
と言う、怒りを向けたのだ。

そして私達は、オールドギルドへと足を踏み入れた。

S I D E : ゆり

遊佐さんの今回の反乱は、ある意味自分のすべき事がわからなかったことの暴走と言
えるわね。

あたしのチーム、日向君、椎名さん、藤巻君のメンバーと共に歩きながらそう確信し
ていた。

高松君が遊佐さんに触れて、遊佐さんの心が少しでも解ければと思ったのだけれど。

それは多分失敗だった。

遊佐さんには早すぎた。

と言うよりも重すぎた。

最初から愛を求めてしまった。

そしてその矛盾に押しつぶされてしまった。

「あたしの失敗だわ」

「そんなことねーって。言ってる？ 誰も悪くない。悪いならみんな悪いって」

「そうかもしれないけれど、その一人にあたしも入ってるってことよ」

自覚してしまえば色々な思いは出てくる。

だけれどそれは理想論で、現実論じゃないわ。

あの時あだつたらって言うのは、仮定としても少ない。

その場合は、もしそのことを知っていてあだつたらって考えなければならぬ。

まあこれも多々君の言葉なんだけどね。

「それにしても何も無すぎるな」

椎名さんの言葉に、あたしは止まった。

何も無すぎる。何故？

ギルドにはトラップを解除しないように言っておいたのに、何故トラップが発動しな

い？

トラップを解除する必要がなかった？ それもギルドの独断で？

「——違うッ！」

気がついた。気がついてしまった。

もう遅いかもしれないけれど、気がついてしまった。

何故この可能性を考えなかったのか。

何故この可能性を思いつかなかったのか。

狙いがある、あたし達じゃないとしたら？

遊佐さんだけが思想で動いていないとしたら？

「ど、どうしたんだよゆりっぺ……」

あたしは急いで外にいる仲間にはトランシーバで連絡を取るが、連絡は返ってこない。

誰にかけても、誰も連絡が返ってこなかった。

「……やられた」

利用された。

遊佐さんも、あたし達の行動パターンも、天使さえも、利用されたッ！

「何があった？」

「外との連絡が取れないわ」

どこまでが遊佐さんの思考だったのか。

どこからが別の誰かの思想だったのか。

どちらにせよあたしが感じられる現実是要するに、ギルドに閉じ込められたと言う現

実だけだった。

だったら何故、トラップを解除する必要があったのか。

「おいおい！ 閉じ込められたってことかよ！ 誰にだ!？」

「それがわかったら苦労しないわよ。恐らくだけれど、別の誰かよ。天使でも戦線のメンバーでも遊佐さんでもない別の誰か」

「そんなこと言っただってだってこれは——」

「利用されてたのよ。遊佐さんのこの行動も、あたし達の行動も。そこにたまたま天使と言う敵まで閉じ込めることに成功してしまっただけの」

言い換えるならば予測されていた、かもしれないわね。

誰が一体そんなことをできると言うの？

少なくとも私達の頭じゃ絶対にできない。

「ギルド内の全員に連絡して。今すぐ脱出口を探してって——」

その時、連絡が入ってきた。

松下君、大山君、TK、野田君のチームからだわ。

それに出るけれど、ノイズしか聞こえてこなかった。

——何かがあった。

「松下君、大山君、TK、野田君、無事?」

「無事じゃねえなあ」

聞いたことがある様な声が聞こえた。

「……貴方は誰かしら？」

「俺？ 俺かあ……。そうだな。名乗るとしたら、俺の名前は――」

それは現在一番聞きたくない名前だった。

「天乃夕緒だよ」

045 《Bent》

「天乃夕緒……。あたし達が知っている多々君とはまた違った口調なのね」

「ん？ ああ、雨野多々か。そりゃそうだ。別人だからな。まあ別人の定義がどうかで変わるかもしれないけどな」

雨野多々を知っている？

そこから考えられる予測は数通りあるけれど、それが事実かはわからない。

「連絡をしてきたってことは、何かあったのかしら？」

「あああったな。松下、大山、TK、野田は全滅だ。皆死んだ」

淡々とそう告げてきた天乃夕緒に、あたしは拳を握り締める。

「俺が殺した」

わかつていた。トラップがないこの状況でそれが出来るのは、一人しかいない。

連絡をしてきているこの人物しか。

「まあ戦力としては強い方なんじゃないか？ 強いつて聞かれたら分かんねえけどな」

「貴方は誰？ 何故こんなことをするの？」

これ以上彼の言葉を聞いていれば、恐らく私は本気で怒りでどうにかなりそうだ。

「そうだなあ——」

次の瞬間トランシーバの向こう側から誰だと言う声と、銃声が聞こえてきた。

誰かが彼にあつたのかと思ひ安心した次の瞬間、聞こえてきたのは先程の誰だと言う声と同じ声の絶叫だった。

——嘘。チーム行動なのよ？ 四人いたのよ？

「何故こんなことをするかと聞かれれば、俺のダチが神様になろうとしてるからかな？」
「神様に、なる？」

何だそれは。そんな方法がこの世界にあるなんて、一切聞いたことがない。

「本当になれるかどうかは知らねえよ。ただ、この体の持ち主を自分なら救えたかもしれないって思いから動いてるらしいぜ。それだけじゃないんだけどな」

次の瞬間あたしの予測は確信へと変わった。

「貴方多々君ね!？」

「よくわかったじゃん。俺は雨野多々に宿っていたNPC、天乃夕緒だよ。よろしくネ」
人を小馬鹿にした様な態度の夕緒君に、あたしは苛立ちすら起こる。

「元々一人の人間として生きてた俺が、この雨野多々に宿らされたことをよく思わない奴がいたってことよ。例えば、俺がNPC時代に親友だった生きていた奴とかな？」

その発想は無かった。

だけれどもありえる話だ。

彼には彼の人生があつたのだから、それを破壊されれば怒る人物がいてもおかしくない。

例えそれが多々君にも夕緒にも悪気が無かつたとしても。

「つーわけで、俺達は雨野多々を俺達の方法で昇天させてやる為に行動してんだよ。ついでに、これから先こう言う奴が現れた時、救えるようにもな」

「そんな理由であたしの部下を……！」

「怒んなさんな。ドーせ生き返るんだから問題ねーよ」

チャキツと音がしたということは、恐らく使っているのは刀。

多々君が使っているものとしては紫流が挙げられるけれど、それは遊佐さんに取られている。

でもそれすら嘘だとすれば？ 情報操作だとしたら？

本当は何があつていて何が間違っているのすらわからなくなる。

「どの道、ギルドから出る為には遊佐ちゃんを助けないとならねーぜ。ま、俺の彼女が遊佐ちゃんの方に向かつてるからそこで蹴りがつくだろうよ」

「そこまで分かっているのなら、あたし達を出さない為にかかするのが普通じゃないのかしらっ？」

「何で？ 外に出りやいいじゃん。戦えよ」

彼の目的はあたし達をここに繋いでおくことじゃない？

ならば何故襲う必要があつた？

「そろそろヒントを出し過ぎか。俺はもう帰らせてもらうぜ。戦つて帰ることにならなくてよかつたな」

何処までも先を読んだことを言ってくれ。

切られたトランシーバを見て、あたしは呆然と立ち尽くすことしかできなかつた。

S I D E : 高松

彼女はそこにいた。

刀を握り、胎児の様に体を丸めてそこにいた。

「遊――」

「来るな」

何時もとは違う冷え冷えとした声に、戦慄する。

本当に彼女が遊佐さんなのかと思う程、その表情は感情的だった。

その瞳に映っているのは憎悪、憎しみ、苦しみ、悪意。

ありとあらゆる負の感情が詰め込まれた様なその瞳の色に、私は息を飲んだ。

息を飲んで、一歩踏み出した。

——変わらなければならない。

人は何時までも変わわずにいることはできない。

「遊佐さん」

次の瞬間体を起こした遊佐さんが私に向かってくる。

あまりにも速く、反応が出来なかった。

切られる。そう確信した瞬間、その刀は止められる。

間に入っていたのは天使だった。

「貴方はその心を沈めたはず。何故今になって起き上がってきたの？」

「うるさいー！」

消えた。

叫び声と同時に、遊佐さんの姿が消えた。

消えたからと言って、わからないわけではない。

私は両腕をクロスさせると、右斜め後ろに突き出した。

そこに現れていた遊佐さんの刀が、私の腕を切り裂こうとして骨で止まる。

「ッ!？」

「多々さんなら切れたかもしれませんが、毎日振るい続けているわけでもない遊佐さん

に切られる程私の筋肉はヤワではありませんよ」

まあ実際は筋肉は切られているんですけどね。

「ちっ！」

「——分かりました。天使は下がってください」

一度離れて距離を取った遊佐さんを見て、私はそう天使に告げた。

彼女が先程から狙っているのは私だ。

邪魔をしている天使とぶつかった時でさえ、遊佐さんは私から目を離さなかった。

私は上の制服を脱ぐと、血が垂れている両腕にかかっている力を抜く。

これはある意味、私と遊佐さんの戦いだ。

「わかったわ」

下がった天使を見て、私は覚悟を決めた。

止めなければならぬ。

彼女は苦しんでいる。

私のせいで苦しんでいる。

私が彼女を愛したから、彼女の苦しみを知らず彼女に愛を与えたから。

彼女が愛を与えられず、男に苦しみを与えられたと知らず。

男は愛を与える存在ではなく、彼女にとっては苦しみを与えてくる存在だったのだろ

う。

その相手が父親だったのか、寄ってくる男子全てだったのかはわからない。

苦しみを与えてくる相手を殺そうとするのは、ある意味で当然のことなのかもしれない。

彼女は男性から与えられる愛を知らないから。

「ふう……」

息を吐き出した私を見て、遊佐さんは少し不思議そうに首を傾げた。

だけど——私に遊佐さんを諦めると言う選択肢は無い。

遊佐さんを愛することをやめると言う選択肢も無い。

あるのは単純に、愛した女性を救いたいと言う願いだだけだ。

矛盾と言われるかもしれない。

横暴と言われるかもしれない。

自分の責任の癖にと、何も知らない癖にと、言われるかもしれない。

それでもいい。

彼女を知っているのは彼女しかいない。

そしてその彼女が知ることを拒んでいるのなら、私からそれを伝える。

「来てください遊佐さん。例えば貴方が何をしようとも、私は貴方を愛する気持ちを変え

ません」

はつきりと、堂々と、私はそう告げた。

それに対して遊佐さんは泣き叫ぶ様な悲鳴をあげ、刀を構えて突っ込んできた。避けることも無く刀に腹を突き刺される。

激痛に一瞬間を歪めながらも、それでも気丈に笑いかける。

そんなことがどうしたと。

この痛みが貴方の痛みの全てなのかと。

ならばとその刀を握る手を掴むと、瞬時に遊佐さんは姿を消した。

刀を持ったまま、私の頭上に移動している。

そのまま振り下ろされた刀を、私は右腕の肉を削ぎ落とす痛みには耐えながら右腕で逸らした。

ピシヤリと飛んだ血に、関根さんが顔色を悪くしてはいますがすみません。構っている余裕がないんです。

動かなくなってしまった右腕を見ながら、私はそれでも笑みを浮かべた。

「何でだ！ 何で痛がらない！ 何で笑って私を見てくる！」

「貴方を愛しているからです。苦しみなんで与えたくない。だから——私は嘘を吐かずに言っただけでしょう」

大きく息を吸い込む。

こんなことを言つたと知られたら、多々さんにそんなことだから付き合えないんだと言われてしまうかもしれないですね。

「私は貴方の黒パンストを脱がして私が被つてその状態でエッチしたいと思える程貴方のことが大好きなんですよ！」

自分でもその表現はどうなんだろうと思う程だけれども、隠していられるか。

「そんなに男が嫌いなら何でそんなに可愛いんですか！ 何でそんなに男の心をくすぐるような表情をしてくれるんですか！ 私は貴方のことが大好きなんですよ！ 大大大好きなんですよ！」

偽っていた心を、遊佐さんの為にならばと覆っていたカバーを取っていく。

「貴方が男が嫌いとか、そんなこと知つたこつちやない！ 私は貴方が好きだからここにいる！ ええ気持ち悪いですとも。自分で言つて何つてゐるんだこいつと思う程の変態発言をしましたよ。それでも貴方の黒パンストに欲情してしまつたのは事実です、貴方と一緒にいたいと思つたのは事実ですよ！」

ドン引きしている関根さんと天使と音無さんを放つておいて、私は左手で遊佐さんを指さした。

「自分の意見ばかり通ると思わないでください。貴方が男が嫌いだつて言うなら、私

が貴方が好きだって意見も通してもらいますよ。貴方の境遇に同情なんてしない。男なんだから可愛い子に手を出したいって気持ちが一番わからないわけじゃない。でも、それが人間なんですよ。それが男なんですよ！ それと向き合って他の女性だって生きています」

多々さんが言っていた関根さんへの愛を、そして同じように思っていると言うことに気がついたことを。

それも含めて全部吐き出す。

「多々さんだってそうです。あの人はもつと謙虚に言いまくっていますけれど、私はそれを言うことをしてこなかった。敢えて言います。男なんて全員変態なんです！」

「俺を巻き込むな！」

何か聞こえてきた気がしますけれど、そんなものはスルーします。

「変態なんです！ それに向き合ってるんです！ 不幸な体験をしてしまったのは事実です。遊佐さんはそう言う、無理矢理したいとか、身内でしたいとかそう言う変態に出会ってしまっただけなんです」

「け、結局変態って叫んでるだけだろうが！ そんな言葉に何の意味がある！」

遊佐さんの言葉も最もだ。

と言うよりも真っ赤になっている遊佐さん可愛い。ハスハス。

「ここに貴方に愛を与えたいって変態が居る！」

そう叫んだ瞬間、遊佐さんは驚いたように俺の方を見てきた。

「貴方に愛を与えたいと、その黒パンストを脱がしたいと、黒パンストを被りたいと、貴方とエッチをしたいと、そう思っている変態がここに居る。貴方が会ってきた変態とは違う変態が、ここにいます」

今思うと何故私は変態で話をしているんでしょう？

普通に全ての男が同じようなことを考えても、別のことをする人も居ると言うことを伝えればよかつたんじゃないかな？

まあいいです。言ってしまったことは言ってしまったこと。

「加えて言うならば、貴方に愛してほしいと言う変態でもあります。幸せにしたい変態でもあります」

ゆつくりと、私は遊佐さんへと歩いていく。

傍から見れば、変態が美少女に近寄っていく光景だ。

上半身裸で血だらけの変態。実に危ない絵と言えるだろう。

だけれども下を俯いたまま動かない遊佐さんは、下がることもしなかった。

「罵っていただけでも構いません。ただ私の思いだけは受け取っていただきます。そして、どうして苦しいのか教えてあげましょう」

私はうつむいている遊佐さんを、左手だけで引き寄せて抱きしめた。

「ようこそ変態の世界へ。その胸の痛みが、私の愛を認めてくれている何よりの証拠なんですよ」

ゆつくりとそう告げると、遊佐さんはポロポロと涙をながしていた。

きつと周りに見えない様に泣いているのだろう。

だからそつと他の人に見えないようにしながらも、私は強く、強く遊佐さんを抱きしめた。

「死んだ世界戦線にお帰りなさい。遊佐さん」

「わた、しは。戻ってもいいんですか……？　こんな、反乱を起こした私を……」

「勿論です」

愛が芽生えたわけでも無い。

私が彼女に愛されたわけでもない。

ただ私が変態発言をして暴走して、彼女が私の愛を認めただけだ。

そして——彼女が人間に戻っただけだ。

046 《Panty&Stockings With
Kneesoeks》

やつほー皆。現在空気のあたしこと関根しおりだぜい！

最初は高松君が言っていることを普通に言おうと思つてただけだね。それも全部言われちゃつたから仕方がないつか。

——でだよ？

「タツ君……じゃないよね。勿論」

「流石は多々の彼女つてことか」

いつの間にか近くに来ていたタツ君もどきにそう告げた。

音無君は驚いて銃を構えているけれど、この人結構前から居たかんね？

高松君の演説の前からいたからね？

まあ高松君の演説がカツコよかつたかつて聞かれたら、あれをカツコいいと言える人がいるかはわからないんだけれどね。

動く気配の無いタツ君もどきに、あたしは視線を移す。

まんまタツ君。ううん。多分タツ君なんだろうね。

中身が違うだけで。

「それでタツ君が憑依していたNPCさん。君は何故あたしの彼氏を乗っ取ってくれてるのかな？」

「うわ怖。メンヘラっぽい」

「うっさい！ 意外とこれでも気にしてるんだから！」

前にみゆきちにメンヘラみたいだねとか言われて、結構ショックだったんだからね！
あたしだって初めての恋人だからどこら辺までいいのかよくわからないの。

恋人マニユアルとか無いかな？

「まあまあ落ち着けて。俺は天乃夕緒。漢字なんて言ったってどうせわかんねえから別にいいけどな」

「あたしを馬鹿にするな！」

「その馬鹿の漢字は？」

「牛と鹿！」

何とも言えない雰囲気になってしまった。あれ？ あたし間違えた？

「……関根。馬と鹿な？」

「良くもあたしを騙してくれたな！」

「無かったことにすんのかよ……」

タツ君のことにあたしのことをわかってないなんてダメなんだぞ！

あたしのことを一番わかってるのはあたしじゃなくてタツ君なんだからね！

「それにしても、すげー演説だったわ。感動したね」

「ヘラヘラ笑ってる奴に言われても説得力無いだろうな」

漸く調子を取り戻した音無君が挑発する。

それを一瞬だけ見たタツ君もどきは、腰にある刀に手をかける。

刹那——音無君の銃を持っていた右腕が肘から切り飛ばされた。

「ぐ、あああああああ!!」

その叫び声で気がついた高松君と遊佐ちゃんがこつちを見てくるけれど、どう考えてもタツ君もどきはタツ君の体だから強いんだよね。

勝てるビジョンが見えない。まあ戦えないんだけど。

「貴方は、多々さん……?」

「違います高松さん。彼は多々さんではありません」

目元の涙を拭いても涙声は隠せていないんだよ遊佐ちゃん。

まったくもう可愛いなあ。

「改めて皆さん。NPCこと天乃夕緒だ。驚いたか?」

人を小馬鹿にしたような態度に、流石のあたしもカチンと来た。

「天乃夕緒ねえ……。じゃあタツ君みたいに好きなのはニーソ系でコスプレエッチが大好きなのかな？」

「ぶっ！」

タツ君もどきが吹き出したのを見て、あたしはいい笑顔をさせてもらった。

「あいつと俺はちげえ！」

「スラリと伸びた脚」

「に纏ってる美しい白いニーソが素晴らしく輝き、その素晴らしさと言えばまるで海に輝く朝日の様……はっ!」

「やっぱりタツ君と同じ美的センスを持っているようだね」

因みにタツ君は黒ニーソが好きと言っているようだけれど、黒ニーソの方が興奮するだけで白ニーソの方が美しいと思っているらしい。

「黒ニーソと白ニーソを比べているなんて烏滸がましい。やはり時代は黒パンストでしよう！」

「てめえは何もわかってねえな。ニーソ知ってるのか？ ニーソってのは、脚全てを覆ってしまうのではなく、最も味わい深さを出してくれる太ももを残してくれるんだ。そことスカートの間に感じるその絶対領域の素晴らしさが何で分かんねえんだ？」

「貴方こそ何もわかっていませんね。黒パンストの出すあの光沢感。まるで黒真珠の様

な美しさを持つそのパンストの素晴らしさを！　そして何よりも、パンストはパンツの色すら変えてみせる！」

こいつらは何を熱く語り出しているんだ？

「確かにそれを否定することは俺には難しい。だが光沢感があつて何になる？　あの肌の色とニーソの色を比較できる所がニーソのいいところだ！　パンストは肌を全て隠してしまふが故に、肌のきめ細かさや美しさについては知ることができないだろう！」

「くつ。そこをついてくるとは流石多々さんもとい夕緒さんと言えるでしょう。だがしかし！　貴方は脱いだ時のことを考えていますか？　上着を脱ぎスカートを脱ぎ、そして——パンストだけが残ったあの瞬間。ニーソではパンツがそのまま出てきてしまいませんが、パンストではパンツはそのままではないのです。つまり、脱がす楽しみがまた一つ増える！」

「しかーし！　ニーソにはまだいいところがあるぜ。それは太ももだ。ニーソが締め付ける故に、太ももの部分には少しばかり押し上げられた肉が付く。そこそがニーソの境地つてもんだらう？　多々は膝枕をしていた時に感じたらしいが、その柔らかかさと言えばまるで胸に包まれているようなんだぜ？」

本気でこいつらの頭が心配になってきた。

そしてあたしが止めようとした時、無言で音無君が右腕から血を流しながらタツ君も

どきに近づき、胸倉を掴んだ。

「んだよ。てめえ」

「お前なあ……。生足の良さを知らねえのか？」

あ、こいつもダメだった。

「お前らはさつきから聞いてればどうやって脚を美しく見せるかばかり話してやがって。ふざけるのも大概にしろよ」

「まさか音無さん貴方はあの——生足派ですか!？」

それに静かに頷いて笑みを浮かべる音無君。いや、笑み浮かべてんじやねえよ。

「生足。それは人の生まれ持った一部を隠さずに見せているってことだ。要は自ら自分の体を晒しているんだ。パンストやニーソと言ったもので隠さず、あるがままの姿を見せてるんだぜ？　ここに興奮せずに何処で興奮するってんだよ」

「胸」

「やはりお尻ですかね」

「そこもいいと思う。否定はしない。と言うよりも俺レベルになってくれればどの部分でも興奮することはできるだろう。爪先から項まで全てだ」

それは誇ることではないと思う。

キモイ、キモイよ音無君。

貴方はそんな人だったの？

「いいか？　それでも考えるんだ。顔は出さなければ見えないうし食べれないし聞けない。手は出さないと作業することが出来ない。でも——脚は出さなくてもいいんだぜ？」

衝撃が走ったかのように二人が動きを止めていた。

「脚。即ち出さなくていい部分を出すというのは、露出と言う一つの概念に触れていくってことだ。例えばスカートを捲り上げた瞬間、興奮するだろう？　その時に感じる興奮は、普段見えない部分が見えたからこそその良さだ。普段ズボンで隠れているはずの生足を、パンストやニーソで隠してしまつては結局見えないことと大差ない。確かにパストから薄く見える肌色や、ニーソによつて絶対領域となつた太ももが素晴らしいのもわかる。だがそれは全て、生足があるからなんだ」

「確かに……。俺達は脚をどれだけ美しく見せるかを考えすぎていて、素材そのものの良さについて語っていかなかったな。素材があるからこそ、引き立つんだ。その素材を蔑ろにするなんて俺らしくもない」

「私も間違っていました。至高がパンストと言う私の気持ちは揺らぎませんが、それでも生足を蔑ろにしていたことは恥ずべきことです」

いや今のお前達の存在が恥ずべきことだよと告げたいけれど、天使ちゃんがあたしの

肩に手を置いて首を振っていた。

彼らはもう手遅れらしい。

「だがニーソもパンストも同時に素晴らしいものなんだ。ニーソにはニーソの、パンストにはパンストの良さがある。野球とサッカーを比べても意味がないように、ニーソとパンストを比べるなんて意味がない。それぞれに良さがあるんだ」

「それぞれの、良さ……」

「例えばニーソの良さと言えば、その長さにあるだろう。あの太ももまでの長さであれば、それは要するに靴下の延長線上としてみることができ。それでいてあの滑らかな生地、そしてその生地の色。その上に存在する肌色と、少し盛り上がった太ももの柔らかさは素晴らしいと言う他ない。絶対領域と言う名前があるように、そのスカートとニーソの間には未知の快感を感じることができよう」

しかし何故だろう？ あたしとしても納得できるものがある。

ニーソって結局靴下の延長線上みたいな感覚だ。

「そしてパンスト。これはどちらかと言えばズボン等の延長線上とも言える。その最たる部分は、繋がっていることだ。ニーソの様に二つ別々ではなく、二つが繋がって一つになっている。それでいてニーソの様になめらかだがそれでいて薄い生地。それによつて肌色が透けて見えると言う、透けることに対する欲情を煽っている。更に下着の

色が、パンツの色が変わる。これは要するに、普段とは違う姿を見ることができたと言う満足感にも繋がっているんだ」

まあパンストもズボンの延長線上ってところには少し共感出来るかも知れない。

「だがここで、お前達に聞きたいんだ。お前達は履いているのが好きなのか？ 脱ぐのが好きなのか？」

「確かに。俺は履いていることで考えていたけど、脱いでいることも想像して考えられるな」

「私はむしろ脱ぐところに本命を置いていましたけれど」

「そう。そこでも別れる。履いているニーソ、履いているパンスト、脱いでいるニーソ、脱いでいるパンストだ。履いているについてはさつき説明したけれど、脱いでいるとなるとまた別の見方ができる」

いつの間にか遊佐ちゃんもあたしの隣に来ていた。

「脱いでいるニーソの良さと言えば、それは勿論少し先に伸びてしまった部分と言えるだろう。脱ぎ方にもよるが、先つぽから引つ張って脱ぐ人の場合それが見られる。太ももから脱ぐ人の場合は、指をかけた瞬間に圧迫されより密度を増す太ももだ。そしてここが一番のポイント。それは、片方だけ脱ぐことができると言う点にある」

「片方だけ……脱ぐ!？」

「そう。片方だけ脱ぎ、もう片方だけ履いている。こう言った状況も作り出すというのが、ニーソの素晴らしいところでもある。要するに、一目で二回分お得なんだ！ 更に半分だけと言うのにもそそられるものがある。これは下乳や上乳文化にも通じるものがあるんだけどな」

そんな文化はすぐにも滅びろ。

べ、別にあたしが出来ないからじゃないし。

天使ちゃんも自分の胸をpushさえちゃったし。

「そして脱いでいるパンスト。これは人によるかもしれないけれど、靴を脱いだ瞬間から始まっている。パンストの場合は顕著なだけで、蒸れだ。この蒸れた時の臭いに非常に興奮する。舐めたい。ペロペロしたい。そうやってしまうのも当然と言える」

当然じゃねえよ。あたしもうパンスト履きたくなくなっちゃったよ。

「そして脱ぐ時。ここがポイント。パンストの場合は、パンツの所までかかっていると言うことだ。つまりそこから下ろすと言うことは、スカートが捲れ上がるという非常に見所あるポイントがあるということにほかならない。見えそうで見えないそこに萌える。そしてそこから現れるのは、汗により少し瑞々しさを増した脚だ。それはもう煌き、まるで美しい海面を見ているかのように思えるだろう」

正直もうこの人に関わりたくなかった。

ってか三人が少ししんみりし始めてる。なにこれ。なんの状況？

あたしはどうすればいいんだあああああああ!?

そんな瞬間、あたし達の救いの天使が舞い降りた。

「貴方達無事!？」

急いで入ってきたゆりっぺさん、日向君、椎名さん、藤巻君に、あたしは心から感謝した。

047 《Remember》

一息吐いてから、声音を変えた。

「よお。生き返ったのかい？ 奴らは」

タツ君もどきのその言葉から察するに恐らく——既にあたし達戦線に対して壊滅的な被害を出しているのだろう。

あの一連の変態性の高い会話から察するに、タツ君もどきも結局の所根本的な所でタツ君なんだろう。

だから言える。地上は既に全滅している。

タツ君はやると決めたら徹底的にやるタイプだし、その目的に至るまで妥協をしない人だ。

地上だけじゃない。多分ギルド内部の人達も大勢やられているんだろう。

「関根さん。彼は多々君に憑依しているNPCで、その多々君とは別人と捉えていいのかしら？」

「別人じゃないと思います。彼も多々君で、そして多々君も多々君なんです」

あたしがそう言うのとタツ君もどきは驚いたような顔をしてから、にへらと笑みを浮か

べた。

「へえ。流石は多々の彼女つてところか。オツムが悪くても精神的にも感覺的にもそこに気が付けるつてのは凄いねえ」

「あたしの彼氏はサイキョーだからね」

そう言うときと大声で笑いだしたタツ君もどきを見て、天使が走り出した。

流石は天使と言いたいけれど、それに対してタツ君は刀一本でそれを防ぐ。

そして現在のタツ君は、二刀流なのだ。

「あめえ」

あまりにもあつさりと、そして簡単に断ち切られ舞う天使の右腕にあたし達は目を疑う。

何をしたのかと。

一体何が起こったのかと。

「——剣道部主将【天乃夕緒】、推して参る」

次の瞬間天使に二本の切り傷が入る。

それを見ていた音無君が激高してタツ君もどきに殴りかかるけれど、上半身と下半身が泣き分かれる形となつてしまった。

あまりの出来事に再度あたし達は目を疑つた。

雨野多々は完璧超人候補である。

それがあたし達の理解できる見解。

だけれども、これはなんだというのだろうか？

少なくとも精神が、肉体が、それを覚えていたとしてもここまでの実力を発揮できるのだろうか？

他人の体をまるで自分の体の様に操ることがこんなにも簡単に可能なのだろうか？

「そっか。他人の体じゃなかったね」

タツ君もどきもまたタツ君。

タツ君がこの世界に二人いると考えた方がいいんだ。

高い戦闘能力を発揮する肉体に、高い戦闘能力を有する精神が宿ればそれは最強を欲しいままにする。

それが雨野多々と言う存在なのだから。

そして銃撃戦が始まる。

何発もの銃弾が放たれ、遊佐ちゃんが背後から強襲をするも誰一人としてタツ君もどきの殺陣に入れない。

入った瞬間切り裂かれるとわかっている以上、一定の距離を保つしかなかった。

次の瞬間、椎名さんがタツ君もどきの右腕を切り裂ける位置に潜り込む。

取った。そう確信したのも束の間、タツ君もどきはその椎名さんの小太刀を持つ腕を掴むとそのまま反対の腕で椎名さんの胸を揉む。

唐突の出来事に驚き一瞬の思考を停止した瞬間、タツ君もどきは椎名さんの左脚を刺突して貫いた。

羞恥と苦痛に歪む顔を他所に椎名さんの右脚を掴むとそのままゆりっぺさん達の方へと投げ飛ばす。

唯一の突破口とも思われていた椎名さんがあまりにも簡単に敗北してしまったことに、ゆりっぺさんですら戸惑いを隠すことができなかつた。

「と言うよりもあたしの彼氏の体使って他の女の子の胸揉むとかいい度胸だね」
「俺にも余裕がねえんだよ！」

と言いつつも刀を握るその腕がわきわきしているので、故意なのだろう。
「あー、もう洒落せえ！」

そう叫んだタツ君もどきの雰囲気に変化する。

剣道部主将と言った時とは別の雰囲気に、漸くその鱗片を理解した気がした。

「剣舞部主将【天乃夕緒】、推して参る！」

彼はこの世界で何度も何度も生きている。

「ストーツプ！」

あたしの大声と同時に戦闘が止み、視線が注目される。

うん。これでいいんだ。タツ君もどきには絶対に勝てない。

「タツ君もどき。ううん。夕緒。目的は何？ 少なくともここで足止めや殺害をするところが目的じゃないよね？」

「これも気づかれちゃうのか。勘良すぎやしませんかねえ？」

「乙女パワーを侮るな」

あたしはそう言くと、ゆりっぺさん達の前に立った。

これでゆりっぺさん達は夕緒に攻撃することが出来ない。

「はいはい。確かに俺の目的はこの戦闘に一切関係ねえ。ただの趣味だ」

「それで本当の目的は？」

本当の目的。聞く前からわかっていたこの真の目的に、あたしは理解しゆりっぺさん達の前に立った。

「全部言つてやるよ。遊佐及び高松の問題を集結させること。そして——関根しおりを拉致もしくは誘拐することだ」

わかつていたよ。

タツ君は本当に……。いや、夕緒は本当に凄いなあつてつくづく思う。

「なら行くよ。だからこれ以上の戦闘をしないで」

「なんだかなあ……。本当はここで戦闘をしてこれ以上仲間を傷つけて欲しくなければ付いてこいつて言うつもりだったんだけどなあ……」

その言葉にゆりつぺさんが飛び出そうとするけれど、あたしはそれを手で静止を促した。

勝てないのは理解している。

努力すればとか、数の暴力とか、そんなことは一切関係ない。

勝てない。何故なら全てが夕緒の考えたシナリオをなぞっているだけなのだから。

いや、予言した通りと言うべきなのかもしれない。

「大体最初からおかしかったんだよね。遊佐ちゃんのことも夕緒のことも。筋が通っていそうに通っていない。まるで何か別のものに弄ばれているみたいだった」

運命とはそう言ったものなのだから。

「誰も悪くない。ただ何時か起こるであろうことを予言してただけ。遊佐ちゃんのお話を聞いた時に、タツ君も夕緒もそれを理解してしまった。高松君のお話を聞いた時に理解してしまった」

高松君に最初に相談された時に断ったのは、一概に高松君の意見が悪かったからと言うだけじゃない。

何故ならばそれは自分で変えられるものだし、途中から気が付くべきものなのだ。

だけれども結果的に起こってしまったことを察したのだ。

「そして避けられないことも理解したタツ君と夕緒は、一番被害が少ない道を選ぶことにした。それがこの遊佐ちゃんの暴走。結果的に誰もが現状の【停滞】と言う難しさを再認識させられ、悪いことをしなくても何か起こると言うことを理解させるだけでなく、仲直りが出来るレベルの傷の浅さを保った」

これが一番あたしが理解できた点だった。

要するに傷つけられな過ぎていると思った。

高松君はフラれると思いきや、答えないと言うことにより仲の良さは一定となる。

遊佐ちゃんも暴走したものの、愛されると言うことを理解した。

天使と合同になったことにより、今まで少しずつ改善されていた天使と戦線の仲も一定以上上昇した。

そして傷ついたのは結局、最初に攻撃されたタツ君だけだった。

いや、タツ君が最初に攻撃されたと思ひ込んでしまっていた。

「タツ君は傷なんて負っていないかった。すぐに目覚め、そしてそこで何かが起こった。それこそ肉体的には無く精神的に追い詰められる何かが」

この世界では肉体的な損傷は回復するが、精神的な損傷はそこまで回復しない。

そこで起きた現実を認めたくないと言う思いが反映され、タツ君は眠ったままと言う

状況に陥ってしまった。

「遊佐ちゃんは攻撃した後、自分が攻撃されることを恐れて刀を奪った。多分タツ君は転がり落ちたりしたんじゃないかな？　そして、見つからない様な所に落ちた。途中であつた刀を拾ったつて言うのが多分遊佐ちゃんの本当のところなんじゃないかな？」

遊佐ちゃんの方を振り向くと、頷いていたのでやっぱりと思つた。

「ここまでがあたしの多分でわかつたこと。あつてる？」

夕緒の方を見ると、驚いたようにあたしの方を見ながらそして笑みを零した。

「すげえ。すげーよ。正解正解大正解。むしろよく正解したなと思うくらい完璧な正答だね。だったら、俺が言うことも分かつてんだろ？」

拉致誘拐すると言うことは、それがこの事件に関わりがあると言うことにほかならないということだろう。

当然だ。そうだと思つていた。

「ゆりっぺさん。あたしはちよつと戦いに行つてきます。それにゆりっぺさん達も戦うことになると思いますけれど、安心してください。きつと全部ハッピーエンドになりますから」

ハッピーエンドになる。そうあたしは自分の心に刻み付ける。

バッドエンドになんてしてなるものか。

S I D E : ?

暗い、暗い、海の底。

そう表現するのが妥当かも知れない。

愛した女性の声は聞こえず、ただただ暗い中にただ一人。

永遠にも感じられる時の流れに身を任せ、ただ漂うことしかできない。

一体自分が誰だったのかも忘れそうになるけれど、愛した女性のことだけは忘れられない。

「もう。たー君は相変わらずだなあ」

クスクスと言う笑い声が聞こえて、俺はそちらを見た。

たー君。そう呼ぶ人物は一人しかない。

「――蓮花」

そう、その名を告げた。

俺が愛した女性の一人であり、元カノとも言うべき存在。

彼女からどれだけの罵詈雑言を言われようとも、謝る覚悟は既に出来ていた。

「忘れてなかったんだね。良かった」

そんな、かつて俺に向けていた笑顔を向けてそう言ってくれた蓮花に対し、俺は口を

開く。

言わなければと。好きな人がいるんだと。

例え周りから彼女を捨てた男と言われようとも、すぐに女を乗り換える最低な男と蔑まれようとも。

伝えなければならぬ。

伝えないことこそが、死んでいいるからと伝えないことが最も彼女の気持ちを踏みにじっているのだから。

「知ってるよたー君。たー君に好きな人がいることくらい」

普通に、まるで当たり前のように蓮花はそう告げた。

「たー君は何時も一人で抱え込んでいたよね。それに、あたしも一度この世界に来たんだ」

男に陵辱されて殺された。そんな壮絶な死を迎えたというのに、蓮花は笑っている。

かつての俺の様な偽物の笑みじゃなくて、本物の笑みを浮かべている。

それが堪らなく——嬉しかった。

「たー君も途中で気がついていたんじゃないかな？ 私が本当の意味でたー君のことが好きだったのかどうかって言うことを」

蓮花の言葉に俺は大きく息を吸ってから、頷いた。

気が付いていたさ。蓮花の笑みが偽物だったことも。

「私の家も結構酷くてね。DVって言うの？　それが日常茶飯事で、実はお金を盗んでたのは結構前からだったんだ。要するに私はお金を盗む理由として、自分に理由が欲しくてたー君に近づいた」

それは謝罪だった。

「最初はアルバイトの面接にも通りやすいとか、カッコいい彼氏が居るとか、母親と父親からお小遣いを貰える理由になるとかそう言う思いだった。だけど、私がり窃盗犯として捕まった時のたー君を見て思ったの。「ああ、実は本当にたー君のことが好きになつてたんだな」って」

その時からだったらしい。本当の意味で俺と姉さんの為に働いたりしだしたのは。

「たー君だけじゃなくて、悠さんはるかもそう。私は二人共大好きになつてたの。だから、探しに出かけちゃった」

そして死んだ。

数々の陵辱の跡がその壮絶さを語っていた。

あんな思いをしていたなんて思い返すだけで、悔やまれる。

「たー君。私はたー君の選択が間違つていないと思う」

ゆつくりと、諭すような台詞に俺は息を呑む。

「たー君は少し考えすぎちゃうんだよ。癖かな？」

心が溶けていく感覚に、身を委ねる。

「人は前に進まないといけないの」

まるで羊水に包まれている胎児の様に。

「だからたー君も、何時までも私に構ってないで前に進んで」

この優しさに包まれたいと、心から思う。

「最初にたー君って呼んでねって言った時、嬉しかったつよ」

名前の呼び方にこだわってたもんな。

「ねえたー君、何時かきつとまた会おうね」

会いたいな。そしたらきちつと、しおりを紹介するよ。

「たー君、愛してたよ。ありがとう」

「俺も愛してたよ、蓮花」

048 《Ready》

風が靡く学校の屋上の上で、俺は一人座り込んでいた。
全てが終わる。

俺の求めていた全てがこれで終了する。

本当にこれで良かったのかとか、これが本当に俺が望んでいたものなのかとか、そう言う展開は望んでいない。

ただ俺は俺の、天乃夕緒と言う人物の痕跡を残したいと言う一心だけで動いていた。
「これも、動かされているのかねえ」

全てを知っている者。

俺は彼女にそう問いかけることにした。

「私は見えないからわからないの。ごめんなさい」

「丁寧な言葉遣いだこと。俺には普通に話してくれていいんだぜ」

銀色の髪が風に吹かれて持ち上がり、その美しい姿を頭にする。

——雨野悠。

今回の狂言の現況であり、本性であり、全能であり、義理の姉である彼女。

彼女こそが俺の計画を狂わした——いや、元の方向へ戻した真の人物。

「そう？　じゃあ久しぶり天乃夕緒君」

久しぶりと言われ久しぶりと返すかどうか迷う。

事実を述べると、俺はこの雨野悠と言う人物に初めて会う。

知っているか知っていないかと言われれば知っているし、会っているか会っていないかと言われれば会っているのだが会っていない。

なんと説明すればいいのか悩むのだが、結論から言えば雨野多々は会っているが天乃夕緒は会っていないと答えるのが正しいのだろう。

「貴方は十分に役目を果たしてくれた。この世界に置いて最も重要な役割と言ってもいい重要な役割を」

俺の存在。それは即ち雨野多々を救済する為の媒体だ。

こんなクソツタレた世界の媒体であり、存在意義でもある。

「でも君は私の思い通りに動いたというわけじゃなかった。残念だけれど、予想外ってわけじゃないんだけれどね」

わかってている。この女が想定外と認める様な存在が居るのなら、それは本当の化物だ。

恐らくそれができる可能性があるのは、この世界に雨野多々か関根しおりしかない

だろう。

言いは古臭いかもしれないが、愛の力と言う奴だ。

「それでも君がしようとしているその行為は無駄じゃない。未来を照らす光になるだろうし、たった一つのきつかけが全てを崩壊させることだってある」

だからこそ、彼女は俺の前に現れた。

最終宣告をする様に。

これから先に起こる可能性については自分で責任を持てと。

「それでも君はそれを目指すの？」

その問いに対して、大きく息を吸った。

これは別にまだ決めていなかったとか、そんな話じゃない。

きつとそれを彼女もわかっているし、だからこそ俺に答えると言う覚悟の表示をする機会をくれた。

だからこそ俺はこの問いに、正直な気持ちをぶつけなければならぬ。息を吐き、真摯な目で彼女を見つめてそして――。

「バーカ」

答えた。

自分でも驚く答えが。

「ば、ばーか?」

「そうだよバーカ。誰がお前に意思表示なんてしてやるもんか」

いや確かに思ったけれども!

「自分が言ったら何でもしてくれりゃ何でも思ったのかよ。その大前提からして間違ってることに気がつかねえのか?」

スラスラスラスラ。まあ考えていたことがよく出ることって。

「俺は俺が思う道を進むし、俺は俺が思った最善を取る。その結果に何があるかなんてわかんねーから決められるわけがねえだろ」

先に失敗することを考えて覚悟を決めるのは馬鹿だ。

だから俺は成功するから覚悟なんて要らない精神を使わせてもらう。

「俺は俺だ。あんたがどれだけ俺を雨野多々の為に作ろうとも、媒体にしようとも、俺は俺だ」

ニヤリと笑みを浮かべると、未だに驚いている雨野悠の前に移動し見下した。

「見てろ。神でも出来ない位完璧に、全員を救ってやるよ」

最初に意思表示しないとか言いつつ全力で意思表示をした自分を心の中で笑いながらそう言った。

その全貌を見た雨野悠は驚いて止まってから、だんだんと込み上げる様に笑いだし

た。

「さ、流星は天乃夕緒！　自分が思ってたことと考えたことが全然違った結果、思ったことでも口出しちやつたんじゃないの？」

何度でも何度でも。

大笑いをする雨野悠を見て俺は驚きと共に少し気持ちが安らいだ。

普通に笑えるんじゃないかと。

「あんたが何をしようと構わない。そうやって、笑っていてくれたらいいもんだ」

「ふふっ。それじゃあ口説き文句みたいだよ天乃夕緒。多々の体で私を口説こうだなんて、本気で落としにかかっているのかな？」

「お前が弟の体を使うと何故本気扱いするのかはともかく、要するに俺は全員救いてえんだよ。この世界に居る奴らも、あんたも」

苦しそうな顔をしている奴らを見続けるのはもう懲り懲りなんだよ。

泣いたりとか、怒ったりとか、悔やんだりとかしているよりも、笑っていた方がいいに決まっているじゃないか。

例え道化に成り果てようとも。

「楽しみにしてるよ」

「ああ。待っておけよ」

俺はそうやって視線を逸らす。

するといつの間にか、悠の姿は消えていた。

「……救ってみせるさ。必ず」

俺はヒーローに憧れてるんだから。

SIDE：しおり

ぼーっとしてる。

あたしは何も考えずに、ぼーっとしながら空を眺めている。

「ここにいたのか」

声をかけてきた人の方向を振り向くと、そこには直井と言う男がいた。

翌々聞いてみると、いつもタツ君に弄られていた人だと言うことに気がいたのは昔の

こと。

「やーはー。何か用かい？ 妖怪君」

「その時代のわかる様なギャグは置いておいて、今回は貴様に聞くことがあつてきた」

真っ直ぐとした瞳は一瞬タツ君を彷彿とさせたけれども、すぐにその違いに気が付

く。

澄んでいる。真っ直ぐと、その目標に到達すれば本当に全員が救われると信じて疑わ

ない。

きつと彼は確かに酷い人生を送ってきたのかもしれないけれど、他人の為に行動することが出来る様な人生を送ってきたのだろう。

誰かの為に、誰かの為に。

勿論その点ではタツ君も同じだけれども、タツ君は既にそれは絶対に叶わないと知ってしまっている。

その点で言えば天乃夕緒も。

「夕緒は何故僕を止めない？」

だがそのことについて、真つ直ぐで澄んでいるこの副会長が気がつかないわけがなかったんだ。

誰よりも他人を見ていたからこそ、他人の為を思っていたからこそ、彼はきつと雨野多々と天乃夕緒が全てを救おうとして失敗していることを知っている。

言いは悪いかもしれないけれど、二番煎じだ。

かつて全てを救おうとした者達の前で、全てを救おうとしている人がいる。

自分が失敗したからやめろ。とタツ君の性格で言えるかどうか。

あれでいて難儀な性格をしているタツ君はきつと、自分が失敗した程度でそれを諦めたりしない。

自分が失敗したならば、他の人ならば成功出来るかもしれないと考えてしまう。

恐らくその部分は天乃夕緒も同じ様な考えなんだろうと思う。

「誰かを救いてくて。でも救えなくて。それでも抗いたくて。タツ君はそう言う人だからね。同じ夕緒だったらそう言う思いがあるんじゃないかな？　自分が失敗したことを、他人が成功させてくれるかもしれない。普通の人なら嫉妬しちゃうところを、雨野多々と言う存在は喜々として受け入れる」

何故ならば、それが雨野多々だからだ。

愚直で、真つ直ぐで、変態で、尚且つ実は心が弱い。

本当に色々な糸が絡み合つて、タツ君の今が作られたんだと思う。

「なら夕緒が僕を止めないのは、僕が成功させてくれるかも知れないと言う希望か」

「そうだね。でも一つだけ言つておかなきゃいけないのは、そこに可能性に対する希望はあつても、君ならきつと成功できると言う感情は持つていないってことかな」

その言葉に副会長は眉を顰める。

「それはどういふことだ」

「言葉の通り。彼は君を信頼してる。でも、成功の信頼はしてない。成功しないと理解してまつてる。何故つてそれは、天乃夕緒がタツ君だからだよ」

根本的にはそい。

あたしにとって紛れもない事実であり、真実だ。

天乃夕緒が雨野多々である限り、絶対に成功に対する信頼はしない。

失敗したときの恐怖があるからだ。

最近はそのが特に強くなっている気がするけれど、きつとそれは大切な人が……照れ臭いけれどあたしと言う存在があるからだと思う。

「多分ね、副会長君の計画は失敗する。それはわかっている」

「辛辣だな。だが間違っていると言うわけじゃない。俺も心のどこかでワザと穴を開けていた節がある。結局、人間の心を捨てなければ神なんて存在にはなれないと言うわけだ」

「でも人間の心を捨てちゃえば、きつと人間を救いたいなんていう気持ちも無くなるんだらうね」

簡単な話、副会長君はここまで大掛かりなことをする必要は無かった。

ただ催眠術を使って相手の深層心理に入り込み、それを叶え続ける行為を永遠と繰り返し返していればいいだけ。

騙してでも、何をしてでも、その人が求める幸福を感じさせてあげればいいだけだった。

でも彼はそれをしなかった。できなかった。

たった一人、雨野多々というあたしの彼氏の存在が、それを許すことができなくなつた原因だ。

幸福だとしても、それが本当の幸福かどうかはわからない。

本当の幸福を知らないかもしれない。

言い方を変えてしまえば、価値観の押し付け。

それは幸福じゃないというあたし達の勝手な価値観を、タツ君に押し付けているだけかもしれない。

「それでもいい」

「いきなりどうした？」

副会長くんが不思議がつているけれど、不思議なのは副会長君の頭の中だから大して気にしない。

話は逸れたけれど要するに、人間なんていうのは互いに価値観を押し付け合つて生きているんだから。

一般的なんて言葉を使って、他人に何かを押し付ける。

例えば殺人を犯したとして、それは許されないことだと思う。

でもそれは世間一般的に見ての話で、その殺人をした人にとっては喜ばしいことだったかもしれないし悲しいことだったかもしれない。

あたし達から見れば間違っている。だからそれは間違いだ。

例が悪かったかもしれないけれど、人生なんていうのはそんなもの。

だから――。

「あたしはタツ君がどんなに嫌がっても、あたしはあたしの価値観を押し付ける。副会長君がどんな方法でここにいる人間を救おうとしても、あたしはあたしの価値観でタツ君を助ける」

「……ワガママだな」

「それでもいい。あたしはそれでも、タツ君を助けたいんだから」

思いは決まった。

後は行動するだけ。

049 《Na o i S h o u t》

ドン——その大きな音が開戦の合図だった。

片や死んだ世界戦線。

片やある種もう一つの死んだ世界戦線。

神を恨み、殺そうとするもの。

神となり、救おうとするもの。

結論的に言えば救われたいと言う願いのはずなのに、二つは互いに傷つけあう道を選んだのだ。

「これが人の摂理って奴かもしねえな」

それを眺めながら俺は関根しおりに呟いた。

「大人は結果だけを求める癖に、仮定の違いで争う。結果が全てだったら、仮定の違いなんて関係無いだろうに」

関係無い所で争い始めてしまうと言うこのジレンマを、きつと誰かは無くしたいと思っっているのだろう。

しかしそれは不可能なのだ。

全員が無くしたいけれど、言葉と暴力と言う二つに分かれてしまった世界では。

「言葉で傷つけられれば暴力で返したくなる。当然だ。暴力が実際の所一番強いんだから」

本当に聖人の様な人物の言葉で暴力を捨てたものなんて、恐らく最初の一人だけだろう。

もしかするとその一人すら違うかも知れない。

可能性。

暴力を一度捨ててみれば、見える世界は変わるのではないかと言う期待。

それを見た者達が、そうした方がいいと考えて広まっていく。

周りに合わせる方へと広がっていく。

「例えば革命を起こした奴がいて、そいつが勝利すればその態勢は間違っていたんだと民衆は流れていく。ただし敗北すれば、そいつが間違っていたんだと批判される。これってどうなんだろうな」

結局は革命も戦争も、暴力を持って言葉を作っている。

だとすれば、その程度の間人が神になるなんてことはサラサラ無理なのだろう。

そこで出てくるのが、可能性。

「例え1%でも可能性があるならば、それを主張し続ければいいのにな」

「それは無理だよ」

ここに来て初めて、関根しおりが声を発した。

「可能性も結局の所、人間が考えたものだから。希望的観測って奴だと思う。何も無いのに、あるように感じるってことが」

バカは死んでも治らない。

結局の所本当に世界を平和にしたいならば、自分以外の全ての生物を殺戮すれば平和になる。

何かに頼るってことは、本当はいいことのはずなのに。

「他人と関係を持った時点で、平和なんて訪れない。それでも平和を求める人って言うのは、根本的から違ってるんだよ」

そう言ったところで、関根しおりはワルサーP99を取り出した。

やっぱり持っていたのかと言う思いと、気がつかないフリをしていた自分の甘さに苦笑いをする。

「本当に求めるのは平和じゃなくて、戦いなんだよ」

そこで俺の意識は無くなった。

SIDE：直井

僕は目の前の光景に、やはりと言う納得感を得ていた。

死んだ世界戦線。かつての僕に神になると言う道を示してくれた者達。

例えこの身を削つてでも、倒す覚悟で望んでいた。

だというのに死んだ世界戦線と来たら、ここに来てまでルールを守っているのだ。

NPCを傷つけないと言うルールを守り撃たれる者達に、僕は尊敬の念を抱く。

ルールを守る。それはつまり自らを貫いていると言うことにほかならないのだから。

「全員、攻撃を止めろ」

僕の一言で銃撃が止まる。

唐突の終わりに驚きを隠せない死んだ世界戦線に対して、僕は拍手を送った。

「流石は死んだ世界戦線の実働部隊の皆さんだ。僕程度では相手にならなかつたようです
すね」

「なら降伏しなさい。直井文人」

副会長とまで呼ばれなくなつてしまつたかと思いつつも、僕はその言葉を噛み締めてから銃を抜いた。

「ここで諦めるなら、僕は神になりたいなんて思わない」

それは憎悪であり、嫌悪であり、勇気だった。

一歩踏み出した瞬間、こちらに銃弾が向かつてきた。

発泡したのは仲村ゆり。流石はこの戦線のリーダーと言ったところか。

冷静に判断できているのが奇跡に近い僕の状況だけれども、それでも僕は余裕を醸し出す。

「僕達にまず必要なのは、例え催眠術であろうとも、その時幸せだなあと思えることがいけないのかと言う論点だ」

「いきなり論点と言われてもね」

「だが事実だ。そもそも貴様達のあり方は矛盾している。幸せになる為にここにきて、必死に幸せを求めないようにしている。手が届くところに欲しいモノがあるのに、それに手を出さずにいる」

仲村ゆりの言葉を無視して、僕はそう告げた。

僕は既に敗北しているが、諦めたわけではない。

敗北とは決して諦めには繋がらないのだから。

「それは何故か。簡単なことだ。幸せが何かわからないからだ」

だからこそ僕は、事実を全て突きつけることにした。

呆気ない敗北とでも、往生際が悪いとでも何とでも言うといい。

実際問題、呆気なく敗北する奴はいるし、往生際が悪い奴だっている。

それが個性と言うものなのだから。

「何も雨野多々に限った話ではない。元々人間と言う生き物は幸せが何なのかわからない生物だ。いや、元々は分かっていたのだろう。それをわからなくしたのが、社会であり文明だ」

「社会であり、文明……」

「そう。社会の構図として一つのものが上げられる。例えば成績の良い者。頭が非常に優秀な人物を見て、ああ恵まれているな、頭がいいなんて幸せそうだなと思う者も居るだろう。だが本当に成績の良い者が幸せなのか」

他人の食べている料理が美味しそうに見える様に、例え本当がどうか知らなくてもそれに對して一定の評価が先にされてしまう現象。

「成績の良い者にも苦労はあるし、幸せかどうかわからないだろう。もしかすると成績が良い故に、周りからのプレッシャーから戦っているかもしれない。毎日必死に努力して、それこそ幸せなんて感じられない程に努力しているかもしれない」

それが他人の力を見て幸せを感じる人間だ。

だからこそ本当の幸せなんて、無いかもしれない。

「成績優秀容姿端麗スポーツ万能お金持ち。そんな人物が実在するとして、本当にそいつは幸せを感じているのか」

「詭弁ね。結局のところ、幸せと言うのは自分で見つけなければならぬものなのよ」

「そう。つまりお前達の行動すらそれは、幸せに繋がっているのかもしれない」
指が反応した。

銃を撃つためにかけている指が、少しだけ震えていた。

「もしかするとお前達は既に、幸せというものを感じているかも——」

「——黙れ」

静かに、ゆつくりと吐き出した仲村ゆりの言葉に、僕は言葉を止めた。

「アンタに言われなくなつて、理解している。理解している上で戦つてるのよ。貴方のその先に行く言葉はあたし達に対する冒瀆よ」

僕はその言葉を聞くことにした。

「幸せは確かに誰かから見たらわからなくて、自分で見つけなきゃならないものよ。それは神に言われるべきものでもなければ、アンタに言われることでもない。自分で気がつかなきゃならないものなのよ」

「気がついた上で、それを無視すると」

「生憎、あたし達は桁違いに重い過去を背負っているの。高々神如きに、あたし達の幸せを決めさせてたまるか」

それは、悪意なのかもしれない。

善意なのかもしれないし、嘘なのかもしれない。

それでも僕は死んだ世界戦線と言う大きな組織のリーダーとして、この死んだ世界の生徒会副会長と言う組織の副リーダーとして、そのリーダーの器に敬意を払えた。

だが諦めない。

「僕の幸せは神になることじゃない。でも僕は、誰かの為に神になれる」

一歩ずつ、戦線に向けて踏み出していく。

その足に迷いはない。迷う必要などない。

「親友が奪われたあの日、僕は激しく憎悪した。何故、どうして！ あいつは別になにかした訳でもない！ 僕と一緒にただ日常を謳歌してただけのはずなのに！」

たった一人、この世界にきて良かったと思える人物に出会えたのに。

「神はそれを奪った。この世界に来てからも奪われた！」

それが許せなかった。

この世界は神が作った、日常を失っていた者達が、幸せを失っていた者達が満足するべき場所だったと言うのに。

満足するどころか奪われてしまったと言うことが、絶望的なまでに僕の心を変えた。

「だから僕は復讐すると決めたんだ。仲間是要らない。僕だけが神になるという道を！」

それはある意味で恐怖だった。

仲間を作れば奪われてしまうかもしれないと言う恐怖。

本来奪われるはずのなかった世界ですら、僕は天乃夕緒と言う親友を奪われた。だから他人を頼れなかった。

唯一頼れたのは夕緒のみだった。

だから僕は――。

「神になる。このクソツタレた世界を破壊し、新たな本当に奪われない世界を作り出す」

次の瞬間、仲村ゆりは銃を下ろしていた。

戦線メンバーは啞然とした顔でそれを見ていたが、仲村ゆりは構え直さない。

「そう。ならそれは彼と戦ってからにしなさい」

彼。そう呼ばれる人物に、一人だけ僕は該当者がいた。

「……そうだな。それもまた、必要なことだろう」

僕の後ろ、つまり校舎棟の玄関から現れたのは――雨野多々だった。

「やつほー。元気ー？ 俺は今起きたところかな」

「気分は最悪よ。それで、出てきた以上やることは分かっているんでしょね？」

勿論サーと答えた雨野多々を見て、自然と笑みが溢れてきた。

流れが自然だ。

そして勿論雨野多々が来た以上、天乃夕緒は居なくなつたと言う事になる。

結局最後まで一緒に話せなかったなと惜しみつつも、僕は拳銃を捨てた。もう要らない。奴との対決に必要なのは、近距離のみ。

ナイフを取り出すと、僕は死んだ世界戦線に堂々と後ろを向けて構えた。後ろから撃たれるかも知れないと、考慮しなかったわけではない。

ただ純粹に、殺すと一点に集中していたが故に、その思考を排除しただけだ。

「ふう……。元気がいいねえ厨二会長。何かいいことでもあったのかい？」
「ああ。最高にいいことがあった。それと——」

踏み込む。

多々の様な身体能力は無くても、この距離ならば速度はあまり関係ない。

たった5mの距離。

だから——。

「僕は直井文人だ！」

二つの影が交差した。

SIDE：多々

後語り。結論から言えば俺が勝った。

「つつー」

腹に突き刺さったナイフを抜いてから、地面に倒れ伏せている直井にナイフを投げ
る。

勿論キャッチすることなんて出来ずに、モロに体に突き刺さっていた。

「死に体に、ナイフを刺すなんて、DOSだな」

「それはもうしわけございません。ま、しおりを誘拐しようとした罰つてことで」

ケラケラと笑いながらそう言うのと、フツと直井が笑った。

「僕は馬鹿な男だ。こんなこと、成功しないって、わかってたのに」

「馬鹿じゃねえよ。勇者だ。知ってるか？ 革命に失敗した者達は大凡批判を浴びる
だけど、革命に失敗しても褒められる奴らつて居るんだぜ」

それは誰なのか、今は言わなくてもいいだろう。

今回のこともある意味で言えば、現状の死んだ世界戦線対する革命だ。

「好きに言え。どうせ僕は敗者だ」

「厨二、ダークエンペラー、黒龍の支配者、炎天の理に導かれし者」

「待て。好きに言えとは言ったがそっちの方向じゃない」

そして二人して笑つてから、ゆりつぺちゃん達がこちらに向かつてくるのを見てもう
これまでかと悟つた。

きつと直井はゆりつぺちゃんにそれはそれは酷いことをされてしまうのだろう。エ

口同人みたいに！

ま、そんなわけないだろうけど。

「まあ、相棒。また今度な」

その言葉に一瞬天乃夕緒を感じたのか、直井は驚きながらも俺を見て少し涙を流しながら笑みを浮かべた。

「じゃあまたな、相棒」

直井はそう言つて、ゆりっぺちゃん達に連れて行かれた。

「おいおい大丈夫だったのか？」

すぐさま駆けつけてきた日向君を見て、切り替える。

「勿論大丈夫だったよー」

「お前さつきはかつこよかつたのに、軽いなー」

「まあさつきのは直井君特別版みたいなものだよ。知つてるかい？ 全員に優しくする人なんて世の中にはいないんだよ」

「俺それ知つてるぜ。全員に同じ様に接する奴なんていないって奴だろ？」

「だいせいかい。日向君にしてはやるね」

俺にしてはつて何だよと叫んでいる日向君はレッツスルー。

久々のシャバの空気を楽しんでいると、降りてきたしおりがふと疑問を投げかけた。

「天乃夕緒の時の記憶ってタツ君には無かったんじゃないの？」

「一応あるよ。今回だけだからかもしれないけれど、ある意味で俺だしね」

二重人格だけど脳は一つデースとか言ったら笑われた。解せぬ。

「まあ何しろ元に戻って良かったぜ」

背中をバンバンと叩かれ、俺は少し日向君にイラつとしながらも笑みを浮かべた。

ああ日常に戻ってこれたんだなあと、再認識する。

「おかえりタツ君」

そんな俺を理解しているかのように、しおりが声をかけてきた。

俺が返す言葉なんて一つしかない。

「ただいましおり」

漸く俺は、暖かい場所に触れられたんだから。

050 《Commentary Third》

「と言うことで。改めましてこんにちは。今回の章で大活躍もとい、大睡眠をしていた
雨野多々です」

「皆の者共跪け。僕こそが新世界の神、直井文人だ」

「うわー」

「引くな。決して引くな。断じて引くな。僕は引かれる様なことは言っていない」

「いやいや言ってるでしょ。滅茶苦茶言ってるでしょ。嘘吐いちやダメだよ直井」

「くっ……。どうも。天上学園生徒会副会長の直井文人だ」

「はい。よく出来ました。ご褒美にアメちゃんをやろう」

「わーいつて喜ぶか！ 僕は子供じゃない！」

「学生は子供の内だよ」

「実年齢が学生とは限らないだろう」

「そうだった」

「まあこの第6章《The destination of a memory》を終え

て、どうだった?」

「全体的に非常に重く暗い話が多かったな」

「それは——ま、そっか。実際俺と言う存在の根源に関わる話が結構多かったからね」

「お前は簡単そうに言うが、実際凄い壮絶だからな。お前の人生」

「まあそうだろうねー。他の人から同じ様な話聞いたことないもん。最近なんて一番辛いことみたいな話があつて、戦線メンバーの一人の一番重い話してもらったことがあつただけどきー」

「何だその非常に入りづらい話」

「その一番重い話つてのが俺が体験してたことでさー」

「何なんだ!? お前の人生に一体どれだけの不幸が起こつてると言うんだ!」

「取り敢えず他人の不幸が幸せに感じる程度かな?」

「そうだったな」

「要するに、平均点が60点のテストでも、いつも0点の人が10点取れたら今回取れたなどと思うのと同じだよな」

「中々理解しやすかった気がするが、結局理解できなかったからどうでもいいか」

「ま、俺の場合平均手90点のテストで0点取つてた人みたいなもんだけどねー」

「だからお前の過去は重すぎるんだ!」

「確かに。過去の俺はもう少し体重があつた」

「体重の話をしてるんじゃない！ 過去にあつた出来事の話をしているんだ！」

「まあそうだよね。結構重いよね俺の過去。それを明るく慰めてくれたのが、俺の彼女のしおりです」

「惚気るな。唐突に惚気るな」

「そんな大切な人、直井にはいないでしょ？」

「いないな」

「彼女いいよ彼女。すごく世界が幸せに見える。まあその幸せぶち壊す位沢山この世界に残り続ける理由があるんだけどね」

「そう言えば、お前は僕だけ苗字で呼び捨てだな」

「そうだね」

「それはあれか？ 少し夕緒の成分が混ざっているってことなのか？」

「んー、どうなんだろう。実際俺はいつも苗字で君だけど、夕緒は名前ですよ？ その中間だからじゃない？ ほら一応元々夕緒に關係あつたのは直井だけだし、今回夕緒が表面に出てきたことでブレが生じたんだよ」

「よくわからないが、要するにお前の呼び方と夕緒の呼び方の中間と言うことか」

「そうなるね」

「なるほどな」

「実は今回あまり話すことがない」

「それは……まあ確かにそうか。実はこの第6章、色々と明かされていない部分が多いまま終わっているように見えて、結構完結しているからな」

「それに明かされていない部分のほぼ全てが次の第7章、及びその後が続く話の伏線になってるからね。話しにくさが凄い」

「確かにな。そして掘り下げると言っても元々暗い話が更に暗くなってしまうだけだ」と

「そうなんだよねー。まあ事実暗い話の後にここまで明るく話そうとしている俺達が間違っているんだけど」

「あそこまでドシリアスにしておいて、何で巻末だけこんなにのんびりしてるんだと言うことだな」

「あ、そう言えば以前質問が来たことがあったんだよ」

「質問？」

「そう。俺のこと」

「お前のことで質問はかなり気そうだが、一体どんな質問が来たんだ？」

「俺の基本的な情報が無いことについて」

「……あー。確かにお前はいつも誰かとヘラヘラのんびり笑っているくせに、実は今思うとわかっていることって少ないからな」

「わかりやすく纏めれば、

1. ・ 壮絶な過去を持っている。
2. ・ 名前が雨野多々。
3. ・ しおりが生きていた年代よりも少し前の人物。
4. ・ 色々な部活をしていた。

「ってことぐらいかな？」

「思った以上に少ないな」

「まあ基本的にこれさえあればいいと思うけれど、きつとそれじゃあ満足出来ないってフアンの方がいてくれるんでしよう。ありがとー！」

「なら質問に答えるのか」

「そうだね。答えるとしよう。俺の名前は雨野多々。身長170cm程度で、体重60kg前後。誕生日はクリスマスで、両親は蒸発。奇しくもこの日はクリスマスだったけれど、それはいつか。姉が一人いて、彼女も一人いた。両方共死に別れ。で、死んだ後に別の彼女を作り、現在に至ると」

「重いわ」

「だろうね」

「特にクリスマスに蒸発つてのが酷いな」

「クリスマスプレゼントは暗くなつた家と寝ている姉でしたつてね。アハハハハ」

「笑えない……」

「まあ笑つてないとやつていけないような状態だったから。精神的にも参つてたし」

「そう思うと、お前はかなり強い精神力を持つてるな」

「違うんだよねこれが。実際は両親が蒸発するのも親離れてものだったと思つてたし、それを指摘してくれる友人なんていなかったし、彼女は彼女で両親のことを話せる立場に無かつたし、まあ要するにそれが当たり前だと認識しちゃつてたんだよね」

「何でコメンタリーの後語りでこんなに重い話にしなればならないのか、小一時間間い詰めたい」

「そう言えば結局直井はどうなつたの？」

「どうなつた、と言うのは？」

「最後連れて行かれたじゃん」

「まあ連れて行かれたには行かれたが、実際僕がしたことといえれば洗脳していた者達に

謝ったくらいだ。殺したりしていたのは夕緒のわけだし、単独行動を許していたわけでもないし」

「勝手に行動した責任は取らないと」

「責任を取る取らないは上司部下の関係だ。僕と夕緒は親友同士であつて、対等な関係だからな。それについては互いに互いがした責任があると思つてゐる」

「まあ夕緒は責任から逃げる為に俺に変わったんだけどね」

「そう言えば、お前は どうして雨野多々に戻れたんだ？」

「撃たれた」

「は？」

「いやだから、撃たれたの。しおりに」

「待て待て待て待て。彼女はそんなにアグレッシブな人物だったか？」

「それがそうだったらしいんだよ。隠し持っていた銃で額をバン」

「しかも狙うところが的確だ」

「ちようど眉間の中心を撃たれて即お陀仏」

「命中率もいい」

「起きた時には、俺だったと。目の前で銃を構えているしおりを見た時は焦った焦った」

「だが死んだ程度で入れ替わるのか？」

「入れ替わんない」

「ならどうして——」

「誰が一回なんて言つたかなあ？」

「……まさか」

「そのままかさ！ 俺が多々になるまで何度も何度も俺を殺し続けてたんだよ！ こええよー！」

「恋人と同じ姿だというのに、そこまでやるのかあの女」

「そして14回目にして夕緒が逃走し、俺が出てきたと。強制的に起こされたね」

「ならもしかして記憶が残っていたのは……」

「夕緒が俺にしおりを説得する様にする為だな」

「あんな感動的な最後の裏にそんなことが起きていたとは」

「因みに日向君はその血の量を見て、俺に真剣な表情で彼女変えた方がいいぞつて言ってきたね」

「それは言うだろ」

「股間撃ち抜いたけど」

「不憫だ」

「俺の彼女は今にも未来にもしおりしかいない。しおりだからこそ、俺はまた好きにな

れたんだ」

「まあそこを否定するつもりはない。本来ならばきつとお前が恋人を作らなかつただろうと言うのは予測できるからな」

「それは良かった」

「だがだからといって、お前が股間を撃ち抜いたことは許されないな」

「それは違うよ」

「違わないからな」

「今回は短めですが、ここで終わりたいと思います」

「まあ仕方ないことだろう。あれだけ詰め込んだ内容で、しかも伏線多数のこの第6章のコメントが少なくなってしまうのは」

「そして恥ずかしながらパソコンの破損。未だに修復されておらず、度々クラッシュする状況になってるので定期更新出来るのか危うい状況です」

「パソコンのスペックの問題ではなく、恐らくあまり知識のなかつた部分にまで手を付けようとしてしまったのが原因だろう」

「ノートパソコンなのに大量のmodを入れてマインクラフトをしてたりねー」

「馬鹿だな」

「こんなところでどうでしょう。お相手は死んだ世界最強の名を持つけれどヘタレな雨野多々と！」

「死んだら新世界の神となった僕、直井文人でした」

「アスタラビスタ！」

第7章 《守りたい人》The person who

would like to protect》

051 《I Love Yui》

直井文人による天上学園の反乱は幕を閉じた。

——が、全てが元通りと言うわけにはいかなかった。

「……」

静かな雰囲気死んだ世界戦線の本拠地である校長室に流れる。

直井が言ったこと、そして今回気づかされてしまったこと。

「永遠なんてあり得ない。停滞なんて存在しない」

俺がそう呟くと、ピクリと反応してゆりっぺちゃんが俺の方を向いてくる。

「その通りね。あたし達は逃げていた」

「でもゆりっぺ、それは仕方ないことだぜ？ 俺達には目標があつて、その為に行動して

たんだからよ」

「それでもよ。今回のことであたし達は学ばなければならぬ。この世界で神を倒す

ということを目的に戦っていたとしても、停滞や永遠なんて存在しないのよ……」
神を倒すという思いを忘れたわけではない。

ただ理解してしまったのは、今までのオペレーションが楽しかったという事実のみ。
楽しかったと認めてしまえば、現在の戦線の状況がただこのメンバーでもっと遊びたいという停滞にしか思えないだろう。

「いつか停滞も永遠も終わってしまう。その時あたし達は何をすべきなのか、学ばなければならぬわ。直井君が反乱を起こしたように」

直井は夕緒という人物との日常を楽ししみ、停滞を求めている。

永遠を求めているんだ。

だけれどもそれは、夕緒の消失という突然の出来事によって崩れ去る。

崩れ去った停滞に納得が出来なかった直井は神になり世界を救うという言葉と共に、反乱を引き起こした。

これは未来の戦線でもありえる状況だ。

それこそNPCを殺してでもそれを成し遂げようとするだろう。

「まあ深く考えてもしようがないでしょ。俺達がすべき事は他にもあるでしょ？」

俺の言葉にそれもそうねと答えたゆりちゃんはゆつくりと息を吐くと、ベレー帽を被り直した。

「——オペレーションは一時中断。休暇にするわ
『は？』」

そう答えてしまったものの、確かに俺達に今必要なのは休暇かもしれない。

それぞれ思うところがあつて、きつとそれを考える時間が必要だと考えたんだと思う。

「考えることは自分で考えなさい。そして——各々で行動をなさい」

ゆりっぺちゃんが去つてしまった校長室で、気怠そうに天井を眺めていた藤巻君は決心したかの様に立ち上がった。

「俺は部屋に戻らせてもらうぜ。なんつーか、今はここに居たいって気分じゃねえ」

誰も止めはしない。止める権利なんて無いし、止めることが出来るはずがない。

元々干渉を貫いてきていた死んだ世界戦線に、干渉するなんてことが出来るわけがないのだから。

いつの間にか椎名ちゃんも居なくなつてゐるなど思いながら、俺はゆつくり腰につけている二本の刀を撫でると部屋から出ていくことにした。

「じゃあ俺はしおり達のところに行つてくるね」

「待つてくれ多々」

日向君が唐突に声をかけてきたことに驚いて振り返ると、何だか気まずそうに俺の方

を見てから床へと顔を逸らした。

何か聞きたいことがあるのかと思っただけで、どうもその類いの話じゃなさそうだ。

「……日向君、ちよつと自動販売機までコーヒーを買いに行こうか」

真面目な話をここで話させるのは酷だと思い、俺は日向君にそう告げると二人で自動販売機まで歩き出した。

「聞いてこないんだな」

「俺は日向君を弄るのは好きだけど、虐めるのは好きじゃないんだよね」

二々虐める側じゃなくて、虐められる側だったし。

「まあ日向君が虐められたいって言うなら虐めて上げるけどね」

「俺はDMじゃねえよ！」

いつも通りのツツコミに戻ったことを確認してから、俺は大きく息を吐いた。

「ゆいじゃんかな？」

一瞬息が詰まったような顔をした日向君だったけれど、苦笑する。

「やつぱりわかっちゃうか？」

「ああやつぱりゆいじゃんのことだったんだ」

「カマかけただけかよ！」

だって実際日向君が関わっていて俺に聞いてくる様な人ってゆいじゃんしかいない

し。

「ああそうだよ。ゆいのが好きなんだよ」

「えっ……」

それは気がつかんかった。

え、これ俺どうすればいいの？

「まさか本当に気が付いてなかったのか？」

「勿論」

うがあと叫びながら倒れ込んでしまった日向君に流石に悪いことした気分になったけれど、別に日向君だからいいやとしれっと諦めた。

「取り敢えず、現状日向君がゆいにやんのことが大好きだってことはわかったけれど、それで俺にどうしろって言うのさ」

大好きじゃねえよと呟きながらも、日向君は辛気臭そうに顔を逸らした。

「その……さ。今回のことでわかったんだ。永遠の停滞なんてありえねえって」
それはある意味で、日向君以外の全員にも言えることだった。

永遠の刹那を求めた皆だけれど、その存在の矛盾に気がついてしまった。

気が付いていないからこそ成り立っていたものが、気がついたことにより炙り出されてしまった。

「だからちよつと前に進んでみることにしたんだ。だけど俺達がその一步を踏み出せると思うか？」

事実高松君は遊佐ちゃんに対して一步踏み出したけれど、全員が全員高松君と言うわけじゃない。

むしろ高松君は例外的な側面が強いし、その一步が踏み出せないからこそ死んだ世界戦線は続いてきた。

「出せねえんだよ。出したいとか、出さないとかそういう問題じゃねえんだ。特に俺やゆりっぺは最古参のメンバーだからな。絶対に足を出せない様な奴らだ」

最古参のメンバーと言うことはそれだけ長いこと一步踏み出さず、そして踏み出すことを拒み続けてきた。

そんな日向君達が考えが変わったからと言う程度の問題で、足を踏み出せるはずがない。

「それで、俺に頼んだんだ」

「ああ。一步踏み出す勇気が欲しい」

いつもなら茶化してしまうその言葉だけれど、今の俺にはそれを茶化することができなかつた。

真摯な瞳だ。

同時に俺が一番驚いたこともある。

「正直、驚いたよ。俺は一步踏み出そうとしている人が出てくるとは思ってたけれど、それが日向君なんて夢にも思わなかった。だって日向君だよ?」

日向君が一番、他人と関わることを拒み続けてきたと言うのに。

確かに音無君や俺とすぐに仲良くなつたから他人と関わることを拒んでいないと思うかもしれないけれど、日向君は実のところ他人の過去に一切触れようとしない。

聞いたりすることはあつても、それに関わる話題を殆ど出してこない。

むしろ俺に関わってきたことによつて関わらされてきたと言えるかもしれない。

そんな日向君がいの一番に、踏み出そうとしたのだから。

「そうかもな。お前には気づかれちまつてるよな」

「そりや勿論。だけど日向君、厳しい様だけど一つ言うことがあるよ」

真つ直ぐに日向君を見ると、俺は口を開いた。

「俺に頼む時間があるなら、自分でゆいにやんのところに行きな」

「……まあ、言われると思つたぜ」

むしろ日向君が一番言われたかつたであろうそのセリフを告げると、日向君は頭を掻きながら笑つた。

もう日向君はDMなんだから。

「じゃあ行ってくるわ」

日向君はそう言うのとコーヒーを買って俺に投げてきた。

サンキューなどと言う言葉を残しながら去っていく日向君を眺めながら、俺はコーヒーを開けて啜る。

久しぶりにコーヒーを飲んだなと思いつつも、ふと思考をズラす。

あの時見た姿。

「まあ、居るとはわかっていたけどさあ……」

雨野悠^{はるか}

俺の実際の姉であり、前回の俺の意識が飛んだ原因とも言える人物。

この世界にいることはまあなんとなく察していたけれど、あの質問とかも全て姉さんがしていたとすれば納得がいく。

要するに俺は姉さんに弄ばれていたわけだ。

生きていた頃と同じく、気づかない間に弄ばれて、驚いていたわけだ。

「あーもう！ 考えてたって仕方ないか！」

コーヒーを一気に飲み干すと、その空き缶を投げる。

カンと言う音と共にゴミ箱に弾かれ、コロコロと俺の足元に転がってくる。

「……」

それを見た俺は空き缶をしつかりと手で持ってゴミ箱に捨てる、日向君も向かってであろうガルデモの練習室に向かった。

「そうだったかー」

ガルデモの練習室に着いた俺は、空笑いかつ苦笑いをするしかなかった。

日向君の精一杯を振り絞ったことは、ゆいにやんに突撃告白だったらしい。

「いきなりゆい、付き合ってくれて言ってくれたけどゆい、やんが普通に嫌だって言っちゃってねー」

「あー」

忘れていた。失念していた。

例えば日向君が進もうとしても、ゆい、やんが停滞を望んでいけばそれは叶わないのだ。

ゆい、やんにとってはいつもの様に日向君が絡んできて、いつもの様に返してしまっただけなのだ。

いつも通りの笑い話だ。

あまりにも——いつも通り過ぎる。

「それで日向君は去っていったと」

「うん。そっかーって言いながらね。多分心のどつかで気が付いてたんだと思うよ」

正直に言つて、今回のことに関して俺は干渉する気は全くしなかった。

日向君が自分で踏み出すには必要なことだと思つたし、ゆいにもそれでもなればと思つた。

でもダメだ。

絶対にこの恋は成就しない。

進行と停滞は同じ場所へは居られない。

「じゃあ仕方ない。手伝おうか」

重い腰を上げないと思いつながら、その言葉に一部始終を話してくれたしおりも頷いた。

「ここに居るのはしおりと俺とみゆきちちゃんだけだ。」

「みゆきちちゃん、手伝つてくれるかい?」

「勿論だよ。戦線の問題は私達の問題でもあるんだから」

そう。これはある意味で戦線の第一歩なんだ。

失敗は許されない。

「コホン。じゃあ、オペレーション・ラブハリケーン——スタート!」

「そのオペレーション名はダサイわー」

「し、しおりん言い過ぎだよ。いくらダサくたって、そこまで言っちゃダメだよ」
心突き刺さる無数の刃。

俺だって、俺だって自分にネーミングセンスが無い事ぐらいわかってるよ。
多分これは遺伝だな。

俺の両親だって、人の名前に多々なんて付ける程ネーミングセンスが無いんだから。

「じゃああたしが言っつてしんぜよう。オペレーションは被るから、チームTSM作戦行動開始!」

「G I G !」

「じ、じーあいじー?」

ノリが悪いなあみゆきちちゃんは。

俺が不貞腐れてみゆきちちゃんを見ようとすると、しおりからの目潰しが俺の両目を直撃した。

「めがあ! めがあ!?!」

「みゆきちに変な視線を送るな!」

「え? 私今変な視線向けられそうになつてたの?」

なんか話が変わる方向に急激に脱線し始めたのを感じながらも、俺はきちんという事にした。

「日向君成就作戦開始！」

「まあそれでいつか」

「妥協点だね」

協力者が俺に対して厳しすぎる気がするのは気のせいだろうか？

052 《Fear》

「やっぱね、ゆいにゃんはおっぱいをもっと大きくするべきだよね」

「ふんっ！」

久しぶりのしおりの肝臓レバー打ちが直撃したところから、俺達の会議は始まった。

ここに集まっているのは、しおり、みゆきちちゃん、俺、まさみちゃんの四人だ。

ひさ子ちゃんが居れば俺のハーレムカッコ仮なのになあ。

「また変なこと考えてるでしょタツ君」

ギクリとする俺に対し、ため息を吐くだけで許してくれるしおり。

流星のしおりも、俺が常にそっち方向に頭が向かってしまうことを理解しているんだろ。

「後でハートブレイクしないとダメかなあ……」

「申し訳ございませんでした。謹んで謝罪させていただきます」

あの痛みを知っている者ならば、二度と受けたくないと思う一撃を。

彼女の一撃は既に進化した！

「それはメガ進化ですか？」

「ひさ子さんとのジヨグレス進化」

「交わるんですねわかります」

ゆつりゆりだね！ と親指を上に入れてグッドを表すと、ハートブレイクパンチが飛んできました。

その場で苦しむ俺に、誰も反応してくれない。

まるでいなかったように扱いやがって！

「兎は寂しいと死んじやうんだよ！」

「タツ君は兎と言うよりも狼だから大丈夫」

「ぼつちと申すか」

「私がいるでしょ？」

「エヘヘヘヘ」

ガタンと言う音と共に立ち上がったまさみちゃんのみゆきちちゃんに土下座して謝り、本題であるゆいにやんと日向君の話に戻る。

「取り敢えず戦犯は日向君だとして、次点でゆいにやんかな」

「ゆいにやんも悪くはないとは言えないからね」

「あの雰囲気を出していた日向君も悪くないとは言えないしね」

どつちもどつちだけど、正直俺達には自分以外の恋愛なんて殆どないわけで。

そんな恋愛処女の俺達が——俺の場合は恋愛童貞？

「ねえ、恋愛処女ってよく聞くけど、男子の場合は恋愛童貞？」

「タツ君はただの童貞でしょ？」

「うるさい処女ビッチ」

「なんだと経験豊富系チエリー」

「なんだかんだ言つて、お前達つてすごい仲いいよな」

わかってくれるかまさみちゃんと思ひ感動の視線を送っていると、しおりに横つ腹を
抓られた。

ハハハ。嫉妬は止したまえ。

いや、ほんと、その拳を下ろしてください。

「しおりん、そろそろ話進めない」と

「おっとそうだったぜみゆきち。私達はゆいにちゃんと日向君の恋愛を成就させる通称

【日向君成就作戦】をさっさと進めないといけない」

「その名前長いから、日向作戦でいいよもう」

「オツケー」

日向作戦の概要を考えようとするも、やはりここに恋愛経験の差が出てくる。

方や付きやっていたとはいえチエリー。

方や最近付き合いましたとはいえ処女。

方や人見知りの可愛い子。

方や音楽キチ。

どう考えても恋愛のことを語れるメンバーなんてほとんどいない。

「俺としおりと同じ様にするのもありだとおもったけど、まああんなのは稀有な例だからね」

「——ゆいと日向は稀有な例じゃないのか?」

予想外の、まさみちゃんからの言葉に俺はきよとんとする。

稀有な例じゃないかと聞かれれば、稀有な例だ。

ただ高松君と遊佐ちゃんみたいな、友達からの普通の恋愛つてわけでもない。

「なんていうか、仲の良かった男子がいきなり告白してきたみたいな感じだよね」

「ビックリして断っちゃったけど、実は気になる的な?」

「少女漫画みたい……」

「みゆきちは少女だから少女漫画を読んでたんだね!」

ちなみにサブカルチャーの深さから、しおりが何を読んでいたかはお察し。

勿論俺もお察し。

「ふむ。両方共互いに相手のことを好きだけれど、この現状の関係を壊すのが怖すぎ

て何も出来ないし、なにかされてもそれを流してしまおうって状況ってことか。ややこしいね」

全員が神妙に頷いたのを見て、俺も頷く。

これが一番手つ取り早いのは、他にも多くのカップルを作ってしまうことだ。

周りがカップルになれば、ゆいには恐らくそれに流されて日向君の告白を受け入れるだろう。

でも――。

「ゆいにはやんの周りで、カップルにさせれる人達がなあ」

多分、俺達を含めて二組しか出来ないでしょ。

俺としおり、高松君と遊佐ちゃん。

もしかすると音無君と誰か。

他のメンバーは基本的に、女子は付き合うものじゃなくてつるむものって感覚が今までの戦線生活でかなり溶け込んでいると思うから、かなり難しいと思う。

それこそ高松君みたいに元から好意を持っていたとか、俺や音無君みたいに新しく入ったメンバーしかないだろう。

だったらなんで、日向君はゆいにはやんのことが好きなんだろう？

ずっと前から好きだったなら、その鱗片くらい見てもいいはずだ。

そんなことにも気が付けないほど、日向君の演技つてうまかったけっけ？

出されたお茶を口に含みながらそれについて考えていると、コトンと湯呑を落としてしまった。

もう飲み干していたからいいものの、あまりに自然に落ちた湯呑を見て一瞬惚けてしまおう。

「どうかしたのタツ君？」

「いや、湯呑落としちゃったからさ。ちよつとびつくりしただけ」

「そっか」

今の一瞬で見抜かれたであろうしおりを気にしないふりをして、俺は話に戻った。

「取り敢えずやっぱりゆいにはメリハリが足りないと思うんだよね。最近話題のロリ巨乳って言うのがいいかもしれないよ」

「どの界限で話題なの？」

「戦線男子」

「そう」

しおりからの肝臓打ち、まさみちゃんからのストレート、みゆきちちゃんからのチョップを受けて俺はその場に撃沈した。

ああここににいる人、最高でも普通くらいしか無かったんだった。

「女性の前で胸の話をするのはどうかと思うよタツ君」

「ははっ。それもそうだったね」

しおりのジト目にヘラヘラと笑い、チラリと他の女子のメンツを見る。

B、B、C。

「しおりがやつぱり一番だよ」

今度はまさみちゃんからの顔面パンチ、みゆきちちゃんからの肘打ちで口から酸っぱいものが出そうになった。

段々と威力が上がっていく気がするのは気のせいだろうか？

「で、結局のところどうする？ ゆいじゃん！にメリハリをつけるのがダメだと俺の意見はもう底をついちゃうんだけど」

「そんなことで底を付くタツ君の意見の少なさに絶望したよ」

ズバズバと心を抉られた俺は体育座りででしくしくと泣き真似をする。

しかし普通に無視して話が進められ始めたので、仕方なく会話に参加することにした。

べ、別に寂しくなんてないんだからね！

「それで実際のところどうなの？ ゆいじゃん！と日向君の仲を取り持つなんていうことが、俺達にできるとは思ってないんだけど」

「うわあ。根本的な問題にたどり着いたね」

さつきからちよつと上から目線でどうかするかを考えていたけれど、そんなことが本当に出来るとは限らないのだ。

「恋愛経験が一番多いのが俺の時点で、ぶつちやけお察しっていうか……ね」

「まあそうだよな。私達って他人の恋愛に手を出してるくらいなら、自分達の恋愛してろよって言われるレベルだよな」

「そんな私達が恋愛指導……」

まさみちちゃんは少し考えてから、無いなど告げた。

「でも、手伝えることはあるはずだよ」

まっすぐと明確な意思を持って告げたみゆきちちゃんに、俺は頷く。

恋愛は殆ど知らなくてもいい。

それでも助けられる人がいるのなら。

「頑張ろうよ」

みゆきちちゃんのその言葉に俺達は笑顔で答える。

「「うん」」

俺達は歩み始めることができるはずだ。

パタンと言う音と共にまさみちちゃんが帰り、僕はふうと大きく息を吐く。

ここに残っているのはみゆきちちゃんとしおりと俺だけで、俺は今日は部屋に戻らないつもりだ。

別に戻ったところで、待っているのは何の反応も無いNPCなのだから。

「ねえタツ君。教えてくれるかな?」

だけど今は帰ることにした方が良かったかなと思ってる。

どの道しおりは逃がしてくれなかったと思うけれど、それでも今ほど厳しい視線は受けずに済んだはずだ。

「いつから?」

「今日からかな。最初の違和感は、空き缶が投げて入らなかったところ」

隠しても仕方がないので素直にそう言うと、しおりは唇を少し噛みながら俺に近づき、パンといい音を立てて頬を叩いた。

「ただの間違いだと思ってたんだけどね。さっきの湯呑で本格的に気がついた」

「前兆を見逃すタツ君じゃないよね」

「うん。まあそうだけど」

前兆はあった。

その前兆を、こういうことの前兆だとしっかりと理解していた。

「ただど——そうじゃないと心の何処かで決めつけてしまっていた。」

「しおりん、どうしたの?」

「タツ君は今、文字通り消えかけてるの」

消えかけていると言う言葉で成仏と言う言葉を察したみゆきちちゃんは、首を傾げる。

今まで消えれないと苦しんでいた俺が消えかけているとすれば、それは勿論喜ばしいことでもあるのだろう。

しかしそうじゃない。

「成仏じゃない。俺の消えかけてるって言うのは、存在そのものだよ。肉体と精神が違う人物だから、いつかは起こるかもしれないとは思っていたんだ」

「ご存知の通り、僕の体は僕のものじゃない。」

天野夕緒と言うもう一人の雨野多々の体を借りている状態だ。

だからこそ、摩耗が発生する。

動いたときに、生きるたびに精神は肉体と衝突し、体に負担をかける。

本来動かせないはずのものを、無理矢理動かしている状態に近いんだ。

それも、NPCと言うかなりの情報媒体を持っている体を。

「魂の摩耗。しおりと漫画の話をしている時に可能性で話してはいたけれど、まさか現

実になるなんてね」

はははと空笑いするけれど、今が全く笑えない雰囲気だつてことぐらいわかつてる。俺だつて怖い。

自分の知らないところで、自分が死にかけてたなんて思いたくない。

だつて漸く天野夕緒とも分かり会えたんだ。

漸く話すことができたんだ。

漸く本当に大切にしてあげられるかもしれない人が見つかつて、やっと愛してると言つても消えない人が出来たんだ。

やっと人としての幸せを知れそうになつたんだ。

そんなの——認めたくないに決まつてるじゃないか。

俺は完璧超人なんかじゃない。

ただ生きる為に精一杯生きている人間で、だからこそ怖いんだ。

「体に支障が出たつて言つても、生死に関わるレベルじゃないし一日に一度や二度レベルだから大丈夫。でももし俺に何かあるレベルになったら、皆に言つて欲しい」

「それまでは隠すつてこと？　今まではそんなこときにしてなかつたのに——」

「怖いんだ。生まれて初めて、怖いんだ。この気持ちを失うのが、もし俺のことを誰かに言つて避けられたりしたらつて考えると、怖いんだ。勿論皆がそんな人じゃないことは

わかつてる。わかつてるけど……!」

その怖さを乗り越えることができない。

当然だ。今まで僕は大切なものは失うものだと思つてた。

だけど失わずに済むそれを見つけてしまったから。

失わないでいられるそれを見つけてしまったから。

自分のせいじゃない何処かで、唐突に無くなつてしまわない普通の幸せを知つてしまつたから。

俺は——怖くなる。

「……わかつた。タツ君がそう言うなら私は言わない」

「しおりん?」

目を閉じてしおりんはそう言った。

「みゆきちはどうする?」

「しおりんがそう決めたならそれでいいよ。でも多々君、一つだけ約束して」

みゆきちちゃんの言葉に、俺はみゆきちちゃんの方を向く。

「絶対にしおりんを悲しませないで」

そこにあるのはいつもの辿たどしい少女の姿じゃなくて——覚悟を決めた女性の姿だつた。

「うん」

即答しなかったのは、彼女のその思いに押されたからだ。

俺が本当に答えるべき言葉は、そうではなかったはずなのに。
「俺は絶対にしおりを悲しませないよ」

結局俺は、嘘吐きだった。

053 《Sunset》

起きた俺は、目をこすりながらもゆつくりと体を起こす。

今の俺は雨野多々なのか、それとも天野夕緒なのか。

そんなことを思いながら目覚めたせいとか、いつもよりも寝起きがあまり良くなかった。

だけどそんなこと、時間は待ってくれないだろう。

恋を自覚させなければならぬ。

愛を自覚させなければならぬ。

日向君とゆいにやんの恋を成就させなければならぬ。

だから――。

「まずはゆいにやんの胸を大きくするところから始めないと」

どこからか大きめの石が飛来した。

「いやー、まさかタツ君を起こそうと石を投げたら、窓があいててぶつかるとは思わなかったよ」

「故意だろ絶対」

あのタイミングで飛来する石が偶然だなんて信じない。

そうなったら絶対に俺は、ネタの神様に愛されてるぜ……。

「にしても綺麗に当たったな。気持ちのいいたんこぶが出てきるぞ」

「うるさいひさ子ちゃん。おっぱい揉むぞ」

暴力はダメだと思うの。

お願いやめて！

「問答無用」

「うぐっ」

潰れたカエルみたいな声が出るほど良い拳が、俺の腹へと突き刺さる。

一体彼女はどこを目指しているのだろうか？

魔王か、魔王なんだな。

きつと拳だけで戦う魔王とか名乗り始めるつもりなんだな！

「次はどこを殴られたい？」

「お願いです許してください」

マツハで土下座した。

プライドとか生きてるときに投げ捨ててきたし。

「そうか。踏み潰されたいか」

許してもらえなかった。

思い切り踏みつけられた。

「まあ落ち着けよひさ子。いつものことだろ」

「それがいつもだったら許されることじゃないだろ!？」 岩沢はこいつに甘すぎるんだよ」

「いや、それはないと思う」

しおりが真顔で否定するくらいにはいつも拳決めてるからね。

一体どこにそんな力があるんだよってくらいに威力決めてるからね。

「まあいいか。んで、ユイはどうした」

「まだ来てないから遅刻かな」

みゆきちちゃんによる癒しボイスを堪能したところで、俺は立ち上がると頭を抑えながらふと廊下を見る。

そこにはタツチーと話している音無君の姿があった。

「んー、何かあったかな?」

「つぼいね。タツチー行ってきたら?」

「あいあいさー」

しおりの許可も頂いて、俺は音無君の方へと歩き出す。

「音無君どーしたの？」

「いや、日向をどうしようか昨日松下五段達と話してたんだけどさ」

「なんと」

男子グループの話し合いで俺だけのけ者とは酷い。

「お前も誘おうと思ったんだけど、昨日お前いなかっただろ？ なら女子寮だろうなって思ってたやめた」

「なんだかんだ言ってる俺がいないと女子寮に行ってるって考えるの、結構すごいことだよね」

「そりやお前だからな」

会話が成り立っていないようで成り立ってる。

全く、これだから俺は……。

「罪深い男だぜ……」

「この場で捕まえてもいいのよ」

タッチーのジト目が辛い！

でも感じちゃう！ ビクンビクンみたなことはない。

そんなのはきつと夕緒だけだ。

そんなことがある訳無いだろうと言う天のツツコミが聞こえてきた気がしたけれど、ここが天だからきつと空耳だろう。

空の上なのに空耳とはこれ如何に。

「天使ちゃん天使ちゃん」

「マジカル可愛い天使ちゃん参☆上」

「うわあイタイ」

ステイ。その腕に取り付けた凶器を消滅させるんだ。

「でもひさ子ちゃんは胸に凶器が付いてるけど、他でついてる人いたっけ？」

全方向から何かモノが飛んできた。

ああきつと死ぬなと思ひながら、俺の意識はそこで途絶えた。

「つてことがあつてさ」

「バカじゃないですか先輩」

取り敢えず起きたらさつさとゆいにやんを呼んで来いとのことで、タツチーの許可を貰つて女子寮に侵入。

タツチーの許可をもらったのは実はこれが初めてだったりする。

「いやー、許可貰うつてなんか新鮮だった」

「許可貰うことが新鮮とか本当に今日はトチ狂ってますね先輩」

ゆいじゃんからの毒舌が辛い。

本当に機嫌が悪そうだなと思いつつも、そんなことは俺達に関係無いと言わんばかりの会話をする。

「どつたの？ 生理？」

「女子にそれ聞くて最低ですね」

「それしおりにも言われた」

右ストレート付きだったから、今後二度としおりに同じネタをふらないように決心した。

俺はまだ死にたくないし。

「今日はちよつと気分がのらないので休ませてくださいとひさ子さんに言っておいてください」

「ゆいじゃんゆいじゃん」

「なんですか」

「俺の後ろに修羅がいる」

立っていたのはひさ子ちゃんでした。

全てを破壊する修羅となったひさ子ちゃんに強制連行されていくゆいじゃんをハン

カチ片手に見送ると、連れて行かれたゆいにと反対方向に行こうとしてタッチーに捕まった。

「どこに行こうとしていたのかしら？」

「いやだつてさ、許可もらつたなら堂々と歩きたくなるじゃん？」

「じゃんじゃないわよ。仕事は終わったんだから戻りなさい」

「えー。いいじゃんよー。俺だつてたまには堂々と女子寮歩きたいよー」

「堂々と女子寮を歩く意味がわからないわ」

タッチーにゆいにと同じく強制連行されていく。

全く。何故女子は片手で人を引きずれる程の力を持つているのか。

恐らく男を強制連行する為なのだろう。

あ、ゆいにとやん女の子だった。

「それで、貴方はどうするつもりなの？」

「どうするかねー。まだ決まってるから困ってるのよ」

タッチーもなんだかんだ音無君の味方なので、俺の味方とも言える。

いざとなつたら直井に言つて日向君をカフェインハイテンションにすることも辞さない。

あいつ難民だし。

「タッチーはどうするつもり?」

「私達は元々、願いを叶える為に動いてるの。彼女の願いを叶えられるなら、それでいいと思ってるわ」

それは残酷なことだ。

だけれども最もタッチーがしていて、的確と言えることかもしれない。

戦線と敵対しているだけでは、何も始まらないから。

「色々大変だね」

「直井君のことで思い出したのだけれど、音無君に記憶を取り戻してもらうのはどうかしら?」

「うん。それは俺も思ったんだけどね。でも記憶って言うのは無理矢理蘇らせるものでもないし、失っているのなら失っている理由があるはずだからね。それに——」

言葉を区切ると、俺は一拍置いて告げた。

「タッチーはそれでいいの?」

足が止まった。

まあなんとなく、そういうことだろうとは思っていた。

タッチーと音無君は生前何かしらの関係があったのだろう。

だからこそあそこまで対立していたはずのタッチーが、音無君と言う新入りと共に何

か行動をし始めたんだ。

「記憶を思い出したところで、彼は私を知らないもの」

「でもその記憶は大切なものなんですよ？ タッチーにとつて」

ええと軽く答えてから、タッチーは再び歩き始めた。

直井に頼んで、結局音無君の記憶は思い出させることになった。

「邪気眼（笑）」

「お前本当に殺す。マジで殺す」

殴りかかろうとしているけれど、ゆりちゃんに押さえつけられてる。

女子に負けるとかざまあと笑っていると、後ろからしおりに飛び蹴りをくらった。

それを見て直井が笑っていたので、顔面に蹴りを入れておく。

「貴方達仲がいいのはわかったから、さっさと音無君の治療に取り掛かりなさい」

「だってよルシファー様。早くこの病人を治してやってくださいよ。まあお前も病人だけどな」

「本当にこれ終わったら覚悟しとけよお前」

直井の瞳が赤く染まる。

写輪眼とか言つて煽つてしていると、静かにしなさいとゆりちゃんに首絞められた。

死ぬ。死ぬから勘弁。

音無君は真つ直ぐに直井の瞳を見つめていたけれど、次第に俯き、涙を流し始めた。

まあ過去を思い出せばこうなることは大体察しが付いてたし、こうなった以上もう後戻りが出来ないこともわかっていた。

「初音……」

ミク？　と言う言葉を出さなかったのは、きつと本気で音無君が悲しんでいたからだろう。

勿論直井も反応していたけれど、空気を読んで黙っていた。

「全員外で待ってるわ」

ゆりちゃんはそう告げると、俺達も強制的に外に出された。

そして廊下に出ると、ため息を吐く。

「ああなつたわね」

「まあ察してた」

「初音……ミク……？」

「しばらくは音無君を一人にしてあげよう」

一人だけ違うことを考えていたバカを殴ると、鬼ごっこが始まった。

捕まれば確実に殺りに来ることは目に見えていたので、こっそり途中で柱の影に隠れ

て、通り過ぎた直井の背後から忍び寄って首を折つといた。

忍びごつこたのしー。

物置の中に直井を押し込んで、再び戻るとしおりだけが残っていた。

「あれ？ ゆりちゃんは？」

「落ち着いた音無君と一緒に屋上」

なら仕方ないかーと言いつつ、しおりと一緒に夕暮れの廊下を歩き始める。

「ここに来て結構経つけど、やっぱりこの夕日は綺麗だね」

「だね」

廊下から夕日を少し見る。

作られたものだど理解しながらも、美しいと感じるのはきつとまだ俺達が人間だからだ。

無限の生に慣れてこの景色を美しいと思えなくなった時、きつと俺達は人間じゃなくなる。

なんとなくそんな気がしていた。

「願わくば、何時までもこの夕日を美しいものだと思いたい」

「そう、だね」

そんな当たり前の、当たり前であってほしいことを話す。

たわいのない会話だ。

だからこそ、俺にとつてとても優しい会話だった気がする。

「タツ君は、もしこの世界から出ることができたら何をしたい？」

「うーん。当たり前前の生活、かな。学校でみんなと楽しくお喋りして、笑って、泣いて、感情を共感しあえる親友を作りたい」

今でも戦線にそんな人達がいるけどねと言いつつも、きつと全員と出会うことができないことは理解していた。

例えば生き返れたとしても、そこに記憶があるかなんてわからないんだから。

「私はね、タツ君に会いたい」

その返しに、俺は少し返答に詰まる。

「別にタツ君がそれを言ってくれなかったからとか、そう言う意味じゃないの。ただここじや私達は何時までたつても結ばれない。だってここは死後の世界で、停滞した世界だから」

俺達は進めない。

勿論処女ビッチやヘタレ童貞を卒業することはできるだろうけれど、それまでだ。

恥ずかしいけど、言ってしまうえば子供はできない。

子供は生まれない。

「ここは死んだ世界だから。」

「だからタツ君と会いたい」

そのしおりの言葉に、俺は微笑んだ。

「例えばしおりが小学校に入って、中学校に入って、高校に入って、大学に行ったり就職したり、大人になったとしても、俺はしおりのことを待つよ。ずっと待つ。しおりが来てくれるまで、俺はずっと待ってるから」

「待ってるだけ？」

「勿論探す。待ってるだけなんて俺らしくないからね」

しおりは俺が愛した人だ。

それだけはどれだけ世界が変わろうとも、どれだけ世界が滅びようとも変わらない。たった一つの事実。

だからこそ、それだけは諦めきれないのだ。

「春はどこに行こうか。夏はどこに行こうか。秋はどこに行こうか。冬はどこに行こうか」

「花見に行きたい。海に行きたい。紅葉狩りに行きたい。雪を見に行きたい」

そう。俺達の思いはきつと変わらないはずだから。

「夕日を見よう」

それが俺達二人の、永遠の約束。

054 《Faust》

「記憶が戻った」

「目の前で見てたのにわからないとでも思ったの？」

音無君のボディブローが入った。

最近みんな俺に容赦なさすぎない？

処す？ 処す？

「まあお前の記憶よりはマシだったけど、それでも胸糞悪いもんだった」

「仕方ないよね。だからここに来てるんだし」

音無君に珍しく俺がコーヒーを奢ってあげると、それを放り投げる。

とつた音無君がプシューと言う音を立てて開いた缶を見て、ギョツとしたような顔で俺を見る。

炭酸コーヒーと言う素晴らしい商品を見つけてしまったのが悪い。

「お前が飲めよ」

「人が奢ってあげたんだからキチンと飲みなさい」

何その理不尽と眩きながらも、音無君はそれに口を付ける。

なるほど。チャレンジャーだな。

「意外と行ける」

「音無君は新しい扉を開いちやつたんだね」

音無君が投球フォームに入ったので、ステイと言って止まってもらう。

流石にそれは死ぬ。

「やめてくれ音無君。その技は俺に効く」

「ならやる」

ちよつとそこは考えてよーと思ひながら、ひよいつと音無君が投げつけてきた炭酸コーヒーを避けると、炭酸コーヒーは床にぶちまけられる。

ここは教師の通り道なので、後で音無君は怒られることになるだろう。

なんだかんだ雑巾を持ってきて拭く音無君はいい子である。

何故やったし。

「働くがいい！」

「お前次は当てるからな」

「いめん」

最近調子乗りすぎた気がしてきた。

ただそれでも何が嬉しいかといえば、音無君が記憶を取り戻したことにより、周りへ

の信頼感を覚えたことだと思う。

なんだかんだ言つて、自分だけ周りの思いが理解できないって感じだったし、こうなれば戦線の思いに納得してくれる部分も出てくるはずだ。

最近タッチーと一緒に色々、周りに幸せを知つてほしいと言う考えを持つている音無君が、記憶を取り戻し苦しみを知つたことでどうするかは疑問に思うところでもある。

少なくとも、タッチーを裏切るようなことはして欲しくない。

「というわけで多々。俺はどっちに行くべきなんだろうな。痛みを知つた。だからお前達が神に抗いたいつて気持ちも、わからなくないんだ」

「だけどタッチーの様な、だからこそ幸せを知つてほしいって願いもわからなくないんでしょ?」

難しいよねと返しながら、今回は考えることが多いなあと思う。

考えることが多いつてことはつまり、自分達がどうにかしなきゃいけないことが多いつてことで。

停滞をやめたことによる弊害つちや弊害だった。

でも俺はこれを悪いことだと思わないし、いつか来るはずだったものが先に来た程度にししか思つてない。

そうしないと、やっていけないと思うし。

「そうだな。正直迷ってる」

「難しいところだよね。それは音無君が決めることであつて俺が決めることではないのだけれども、友人として一つアドバイスをするならば、君がそれをやってどう思うかを考えるべきだ。例えばタッチーと協力して俺達の思いを知つて、君がどうしたいかだ」

「俺が、どうしたいか……」

俺達を救いたいと思うもよし。

俺達と一緒に戦いたいと思うもよし。

どちらを願うにしても、俺達はそれを歓迎するだろう。

「ただ気をつけてね。この世界は確かに永遠にある。一度間違えても、何度でもやり直せる世界だ。だけど——人間関係だけは間違えれば永遠だ」

もしも彼が説得に失敗すれば、一生彼は苦しみ続けるだろう。

何故なら思いは永遠に続くのだから。

「俺は、間違えられないところに来てるんだな」

「そうだよ」

一歩間違えれば永遠に戻れない。

そんな分岐点に彼はいるのだ。

だからこそ、音無君には間違えて欲しくない。

「すぐに決めなくてもいい。ゆっくり考えればいいよ。自分が何をしたいかを」
そう告げると音無君はありがとんと返して、去っていった。

……そうだ。人間関係だけはこの世界で絶対に間違えることができない、究極の選択だ。

「だから間違えられないんだよ、日向君」

ゆっくりと物陰から出てきた日向君が、バレてたかと声をかけてきた。

わざとわかるようにしていたようにも思えたけれど、そんなことは気が付いていないだろう。

「俺は間違えたくない。だからこそ、停滞を望んでいた。でもそれじゃいけないって気がついた。……はずだったのに」

停滞を望んでしまった。

このまま時間が止まってしまえばいいと。

そんなこと、望んではいけないとわかっていたはずなのに。

「俺は、進みたいんだ」

永遠の世界ですら、全てのことが永遠に続くとは限らない。

いつゆいによんの願いが叶うかわからないし、それが実は直ぐかも知れない。

いつ終わつても不思議じゃないんだ。

そうすればゆいちゃんがここに帰ってくる確率は、それこそほぼありえない。

「俺の気持ちはどうであれ、この世界には去る時があつて、全てが過去になつていく。終わった記憶は、もう戻らない」

日向君が拳に籠める力が膨れ上がる。

それは自分に対する、怒りだ。

進みたいと願っているはずなのに、停滞を選んでしまう自分への怒り。

「どれだけ楽しい時間でも、終わらないものなんて無いんだから」

俺は日向君の独白を聞き終えた。

これを思えるだけでも、日向君にとっては成長なのだろう。

理解なのだろう。

事実すごいと思つたし、流石は日向君そこまでたどり着くなんてと思つた。

だからこそ、その全てが悲しく思えた。

「時よ止まれ、汝は美しい。かつてファウストと言う男が、メフィストに魂を与える時の言葉だよ。実際はメフィストは魂を奪わなかったんだけど、若返つた彼がその言葉を言つたのは、人々の為に仕事をする喜びを感じたからだ。日向君はこれによく似ているよね」

永遠の命を与えられ、自分の夢を叶えれば命が終わる。

つまり魂を持つていかれる。

「彼の様に、今の君は喜びを感じているかい？ ああ、この世界で俺はこんなに素晴らしいことを出来たんだって、満足して逝けるかい？」

日向君は首を横に振った。

素晴らしい仲間に出会えた。

それだけでも素晴らしいことだ。

でも自分が何をできたかと問われれば、停滞してただけだと答える他ない。

いや実際はそうではないのかもしれないけれど、思考の狭まっている日向君はきつと停滞にしか気がつかない。

「甘えるなよ。君はまだやるべきことがある。ここで諦めていいはずがない」

きつと、なすべきことは俺にもある。

まだ俺も何も出来ていない。

だから俺にそれを相談するのは、お門違いだ。

相談に乗ってあげたいし、背中を押してあげたい。

でも、背中を押すだけが友達じゃないはずだ。

「俺はやるよ多々。絶対に、停滞だけじゃ終わらない」

停滞が愛おしかったことは認めるけどなど言いながら、日向君は去っていった。去っていった日向君を見ながら、俺はため息を吐いてから若干の笑みを浮かべる。

「それなんて藤井蓮？」

しおりと合流した俺は、ガルデモの曲を聞きながら思う。

久しぶりに、曲のテンポが取れてないなって。

「はいストップ。ちよつと休憩いれようか」

ひさ子ちゃんが無理矢理連れてきたのは悪いと思うけれど、これはひどいなと改めて実感する。

完全にテンポに乗れていないゆいちゃんが、ガルデモ全体の足を引っ張っていた。

これには連れてきたひさ子ちゃんもバツが悪そうだし、わざわざ見に来てくれたまきみちゃんも悩ましげだ。

「すみません。やつぱり帰つてもいいですか？」

「ダメ」

だけど帰ろうとするゆいにゃんは、しおりに止められる。

しおり超スパルタと思いがながらも、その本質にゆいにゃんに対する熱い思いがあることを理解しているから何も言わない。

これはしおりなりのゆいじゃんに対する愛のムチなのだ。

「でもこんなんじや練習にならないじやないですか!」

「練習にならないのはゆいにゃんが集中しないからだよ。キチンと集中して」

バチバチと火花が散りそうな程ぶつかり合うしおりとゆいにゃん。

流石の俺も大丈夫かなと不安に思うレベルで、チラチラとひさ子ちゃんが助け舟を俺に求めているレベルだ。

いつも殴られてるから無視するけど。

「だって……!」

「だってじゃないの。いい? 今ここに居るのはガルデモのメンバー。ガルデモは戦線の補給の要なんだよ? ゆいにゃんは望んでこのガルデモに入ったの。なら練習。それが第一」

実際しおりは俺と付き合い始めても、ガルデモの練習をサボったことなんてない。

絶対に練習には参加していたし、練習を減らそうと言う意見すら出したことがない。

「私はちよつとしかベースが出来ないのでこのガルデモに入ったせいで、すごい苦労した。みゆきちもそう。このガルデモは私達の努力の結晶なの。ひさ子さんも岩沢さんも、ずっと練習してきたんだよ? ゆいはそこに少ない練習時間でも、追いつかなきゃいけないの」

それがガルデモだから。

そう言う言葉に、ゆいにゃんは若干涙を浮かべながらも唇を噛み締める。

「なら——！」

「なら辞めるとか、別の人にすればいいじゃないですかとか言ったら、本気で殴るから」
しおりはその先を言わせなかった。

どちらを言おうとしていたのかはわからないけれど、しおりの気持ちもわからなくな
いから黙る。

「ゆいが気がついていないかわからないけれど、ゆいはガルデモに入ることを選んだの。
推薦もあったかもしれないけれど、入ると決めたのはゆいでしょ？ それは一步踏み出
すことなの。停滞から一步出る行為なの。もう二度と戻れないの」

選択した。

それは今日向君と音無君が悩んでいることであり、出来ていないことである。

その選択を無意識とは言え、ゆいにゃんはしたのだ。

夢に向けて一步踏み出したのだ。

だから、あとは前を見るしかない。

「やめて満足？ ほかの人がそこについて満足？ ガルデモはそんなに甘くない。頑張つ
て頑張つて頑張つて、漸くここにたどり着いた人達が何人いると思う？ ガルデモを侮

辱しないで」

楽なだけとか、楽しいだけとか、そう言うのもいいかもしれない。

でもガルデモはただのバンドじゃなくて、人を惹きつけなきゃいけないバンドだ。

NPC達の心を掴まなきゃいけないバンドだ。

だから、ガルデモの問題はガルデモだけでは済まない。

「ッ——！」

飛び出したゆいちゃんを、ひさ子ちゃんとまさみちちゃんが追いかける。

俺は追いかけて、立っているしおりを見ていた。

「しおりん……」

「ごめんねみゆきち。らしくなかったよね」

「ううん。私も、同じ気持ちだったから」

まさみちちゃんとひさ子ちゃんは、所謂天才タイプだ。

最初から上手かったとは言わないけれど、努力が確実に実っていくタイプだ。

一方でみゆきちちゃんやしおりは、努力が確実に実るタイプじゃない。

何年もかけて必死に努力して、それで漸く二人に認められる程になって、ガルデモと

言うグループを立ち上げたんだ。

きつとみゆきちちゃんやしおりには、ガルデモに対する生半可じゃない思いがある。

だからこそ、ガルデモが結成する前じゃなく後に入ったゆいによんのことを一番氣遣つていた。

だからこそ、ゆいによんがどれほど難しい道を歩まなきゃいけないのかわかつていた。

「難しいよね。氣持ちつて」

素直にそう言うしかない。

「うん。難しいね。タツ君、私はあれであつてたのかな？」

「あつてたかどうかはわからない。それを判断するのはゆいによんと、しおりが決めることだから」

ガルデモと言う停滞していた別の一部も、動き始めた。

055 《Breast》

その日の夜、俺の部屋に音無君と日向君は来ていた。

「なんだよ。用事って」

「まあこのメンバーなんだ。察しはつくさ」

日向君はケラケラと笑いながらも、真面目な顔をしていた。

それを見て察したのか、音無君も真面目な表情をする。

俺も真面目な表情で、口を開いた。

「おっぱいって、良いよね」

「待て！」

日向君が唐突に驚いたような顔をして俺を見てきた。

そんな日向君を俺と音無君がぼかんと見つめる。

「このメンバーだぞ?! 前回まであんなにシリアスな雰囲気醸し出していた俺達だぞ

!?! なんていきなりおっぱいの話を始めたんだよ！」

「自重できなくなったからだろ」

「そうだよー」

「クソツッ！ シリアスの扱いが軽すぎる！」

シリアスはどこかに飛んでった。

基本的に音無君は面白い方向に流されていく傾向があるので、まあこういう話題を振ればすぐに反応することはわかっていた。

「話は聞かせてもらいましたよ」

「どっから現れた高松！」

実は最初からベッドの下に隠れていた高松君の登場に、日向君の表情が荒れる荒れる。

まさにバカの顔をしている日向君を音無君と一緒に笑いながら、本題に入ることにした。

「最近おっぱい要素が少ないじゃん？」

「なあ、胸の話をして最近殺されたやつがいた気がするんだけど」

「乙π」

「あ、ダメだこれ聞いてねえ」

日向君が音無君の説得を諦めて、仕方なくだけど議題に入ってきた。

と言うわけでおっぱい会議を今ここに始めようと思う。

因みに同室の彼はいなくなっていました。

「取り敢えず最初の議題だけど、最も重要な議題。おっぱいの大きさについて話し合おうと思う」

「戦争だな」

音無君が身を乗り出していった。

なんでこの子今日こんなノリがいいんだろう……。

少なくとも音無君は記憶が戻ってからはちやけている気がする。

「まあ最初は一人一人の意見を言おう。じゃあ音無君から」

「俺が押すのは勿論ちっばいだ。これには勿論理由がある。俺は昔病弱な妹がいて、その妹に色々な漫画を渡してたんだ。雑誌なんだが、その雑誌を渡している間に、この雑誌に写っている子達はなんて元気なんだろうと思った。

そう、貧乳だったんだ」

ごめん。既に意味がわからない。

「全ての雑誌が、その小さな胸を精一杯に主張しながら笑顔を見せていた。妹もそうだ。その小さな胸を張って、生きていたんだ。だから俺はちっばいを押す。何故ならちっばいには、人を笑顔にする力があるからだ」

なんだろう……。

辛い過去を打ち明けられた様でいて、ただ自分がロリコンだったことを証明している

だけな気がする。

ああ、だからタツチーと一緒にいるのかコイツ。

「じゃあ次は日向君」

「俺？俺はまあ普通に大きすぎず小さすぎないのが好きだぜ？勿論ひさ子みたいな大きいには夢を感じるし、顔を埋めてみたいとも思うけど、どの大きさが好きかって話ならまあ普通の大きさが好きだ」

意外だった。

音無君、日向君は対象相手がB以下なので音無君みたいにちっぱいを押ししてくると思ったけど。

あ、そうか。日向君はゆりちゃんと一緒にいたのか。

「特別好きな大きさは無いの？」

「うーん、難しい質問だけど、Cくらいが好きかな。Dまでは許容範囲。Bより下は小さすぎる気がするし、Eまで行くとそれ牛じゃねって思う」

なんというか、健全な男子の普通の思考だった。

つまんね。

「じゃあ高松君」

「巨乳ですね。まあその大きさはじゃなきやダメですとか、これ以下は人間じゃないとか

言うつもりもありません。ただ夢がある。それだけです」

音無君の視線が鋭くなった気がするけど、あえて無視させていただいた。

まだ意見を言っている途中だ。

意見することは許されない。

それを理解しているからこそ、音無君はまだ何も言わないんだ。

「私も勿論巨乳だけが好きと言うわけではありません。ただ巨乳に夢を感じました。それだけで、十分でしょう?」

何かを悟ったように言った高松君。

ああきつと彼は、世界の真理を見たのだろう。

だけど、だけどだ。

「じゃあ多々はどうなんだ?」

「俺は勿論しおりだよ!」 と言いたいんだけど、ひさ子ちゃんみたいなFカップも好きだよ。だって夢があるし」

おおと高松君が声を出す一方で、音無君はなんとどうかこう……形容しがたい雰囲気を出している。

人を殺せそうな殺気だ。

「でも俺は貧乳も好き。と言うかガルデモのメンバー基本的にCかBだからね。一人F

カップがいるけど」

「そういえばそうだったな。最近Aも入ったし」

ゆいによんのことかー！ とツツコミを入れつつ、幾分かマシになった音無君を見る。

「取り敢えず巨乳好きは死ねばいいんじゃないか？」

「音無……！ 何がお前をそこまで変えちまったんだ……！」

記憶じゃないかなと言う当たり障りのない答えを飲み込みつつ、ベレッタを出して口笛を吹き始めた音無君に流石に恐怖を感じる。

一体何がそこまで彼を駆り立てると言うんだ。

あれか、シスコンかつロリコンの末路なのか？

「あんなものは脂肪の塊だとまでは言わない。何故ならそれに憧れる貧乳こそが、俺の追い求める貧乳だからだ」

そう。それも理解できる。

理解できるからこそ、高松君はそれを認められないのだろう。

「巨乳あつてこそその貧乳でしょう？ その憧れは、巨乳なくして始まらない。だからこそ、巨乳は必要なのです」

ぶつかり合う二人。

それを真面目な表情で見る俺と、面倒臭そうに見ている日向君。

取り敢えず日向君に消しゴムをぶつけておいて、俺は二人を宥めた。

「諸君、私はおっぱいが好きだ」

静まり返る部屋の中で、俺の声だけが響く。

喧嘩に勃発しそうになっていた二人も、黙っていた。

日向君はえ、俺も黙らなきやいけないのみたいな雰囲気を出していたけれど、二人にねじ伏せられた。

「諸君、私は胸が好きだ」

その言葉に、音無君も高松君も頷く。

日向君もそりやまあと言いながら頷いた。

「諸君、私はおっぱいが大好きだ」

然りと、二人は声を出す。

そう言う流れなのかと言いながら、やる気なく然りと告げた。

「胸部装甲が好きだ」

ブラジャーが好きだ。

水着が好きだ。

手ブラが好きだ。

大きいのが好きだ。

小さいのが好きだ。

中くらいのが好きだ。

牛の様なのが好きだ。

壁の様なのが好きだ」

頭の中で反芻する胸。

躍動するその心は、いつも俺達の心を掴んで離さない。

「学校で 一室で

浜辺で 海中で

運動で 暗闇で

街中で 公園で」

思い出されるのはシチュエーション。

こんなところでもしおりと一緒にいられたらいいなという、場所。

まあしおりの中でもおっぱいを集中してみているのだけけれど。

「この世界で見るこゝとができる、ありとあらゆるおっぱいが大好きだ」

しおりだけ、とは限らない。

ひさ子ちゃんであれば躍動するモノを見られるだろう。

まさみちゃんであれば汗が流れるモノを見られるだろう。

みゆきちちゃんであれば赤面を見られるだろう。

まあしおりだったら全部見られるんだけど。

「胸が小さいもの達が、大きい者達を見ている時が好きだ。それに憧れを抱きそうなることを夢見ている少女など、心が躍る。

胸の大きいもの達が胸の小さいもの達にあまりいいものではないと説明していると、小さなもの達の恨めしそうな顔なんて胸がすくような微笑ましい気持ちだ。

身長順に並んでいるはずなのに、胸の大きさが順番になっていないのが好きだ。周りを見ながら少しでも大きくしようと思を張っている姿には感動すら覚える。

運動をしているときに大きな胸が揺れる瞬間などはもうたまらない。二人三脚で一緒に走ったときに、横で上下に動く胸など最高だ。

しおりのベッドに隠れさせられたとき、髪の毛が当たりしおりの出した艶やかな声には危うく絶頂するところだった」

その言葉に日向君が俺を殴りに来ようとしたが、音無君のボディブローと高松君のラリアットに撃沈した。

優秀な部下を持ったものである。

「気にしていないようでありながら、ひさ子ちゃんを見ながら胸に触れたため息を吐く

まさみちゃんが好きだ。もう成長しないこの世界で、ひさ子ちゃんの胸に多くの女子達が蹂躪されていく姿はととても悲しいものだ。

大きな胸の圧倒的な物量を押し付けられるのが好きだ。その後にしおりに追い掛け回されるせいで感触をずっと確かめられないのは屈辱の極みだ」

と言うか結局ひさ子ちゃんなんだよね。

全く気にしていないのはそれこそ……NPCくらい？

最近椎名ちゃんも自分の胸の大きさを見てたし。

なんか潜入には便利だとか言いながら震えてたし。可愛い。

「諸君、私はおっぱいを、全ての種類のおっぱいを望んでいる」

大きすぎたっていいじゃない。

小さすぎたっていいじゃない。

人間だもの。たを。

「諸君、私と共におっぱいを追い求める戦友諸君。君達は一体何を望んでいる？」

おっぱいを、俺達男子が最初にエロに目覚めたおっぱいを。

「更なる戦争を望むか？」

情け容赦の無い貧乳巨乳戦争を望むか？

全てのおっぱいを理解し、三千世界の胸を好く、嵐のような思いを秘めるか？」

「おっばい！ おっばい！ おっばい！」

「お、おっばい」

「よろしい。ならばおっばいだ」

日向君は波に乗れていなかったけれど、そんなことは気にしない。

乗るしかない。このビッグウェーブに！

「我々は満身の力を込めて今まさに胸を求めて走り出さんとする精鋭だ。

だがこの世界に来て様々なおっばいに魅せられてきた我々は、一人のおっばいでは最早足りない!!

おっばいを！ 戦線女子のおっばいを!!

我らはわずかに四人。数十数百といる女子にとつては路上のゴミに過ぎない。

だが諸君は、一騎当千の強者だと俺は信仰している。

ならば我らは、諸君と私で総兵力4000の軍集団となる。

この世界に来て安息の日々を過ごし、おっばいの魅力を忘れた男共を叩き起こそう。

髪の毛を引っ張つてでも連れてきてやる。

連中におっばいの素晴らしさを思い出させてやる。

連中におっばいを押しつけた時のスイッチ音を聞かせてやる。

天に来てでも、忘れられない感触を思い出させてやる。

世界におっぱいの素晴らしさを」

俺はそう言うのと、三人を見る。

「若干一人引き気味になつてゐるけれど、きつと音無君当たりに拉致されるだろう。

「おっぱい戦線隊長より、全隊員へ。第一次おっぱい作戦開始せよ」

敬礼をした音無君と高松君。

「征くぞ諸君」

「でもお前それやると、お前の彼女も標的にされるんじゃないかねえの?」

日向君の言葉を聞いた俺は、うんと頷いた。

「だって俺、しおりの味方だし」

「せんせー。ここに裏切り者がいまーす」

音無君と高松君が走り出したのを見て、俺は一人頷く。

残つた日向君はいいのかよこれだと言つていたが、俺は別に構わないよと告げた。

「だつておっぱいの感触自体知つてゐる人がこの戦線にあんまりいないことぐらい知つてゐるし」

後におっぱいの乱と呼ばれることになるこのおっぱい戦争は、最終合計30人にも達し、女子寮への突撃を試みたものの天使に迎撃されて女子達は事なきを得た。

またこの戦いには裏切り者がいるとされているが、あまり詳しい詳細は分かっていない。

一人だけ侵入に成功したと言う噂も立っていたが、この戦争中に女子寮に入ったのは銀髪の少女一人だけである。

まあつまり。

誰も気にしていないのだった。

056 《Encounter》

おっぱいの乱の翌日、無駄に男子の好感度を下げるだけに終わったこの反乱は、結果的に男子の結束力を強めると言う結末を迎えた。

まあいつもよりもはっちゃけたおかげで、色々考えるのは楽になったと思う。俺も楽しかったし。

「とかいいつつ自分だけ離脱して私達の部屋でお喋りしてたよね」「そりゃ負ける方に付いていたくないし」

最後にはゆりちゃんもタッチーの共同戦線が見れました。

これは少年漫画的展開で胸熱でした。熱盛！

「結果的に女子の中には男子キモイと言う風潮が生まれたわけで」

「それはちよつとやりすぎた感あるよね。反省反省」

絶対に反省してないでしょ、としおりに言われて照れ笑い。

やりすぎたことに関する自重すべきだったかなと言う考えはあります。

あるだけ。

「まあ一過性のものだろうし、元々持っていたものだろうからね。高松君と遊佐ちゃん

みたいに、あからさまに怒られるのも珍しいだろうけど」

近寄らないでください。貴方のことが嫌いですとは、また酷なことを。

本気の蔑みの視線をしていた遊佐ちゃんは、マジで怖かったです。

「と言うか日向君をゆいとくつつけるつもりじゃなかったっけ？　なんか仲悪くなつてそう」

「それが日向君が俺は小さくたつて構わねえつて叫んだのが、ちよつとキュンと来たらしいですよ」

「ゆいちよろい」

まあ実際ゆいにやんつてちよろいよね。

なんか優しくされたらホイホイついていきそうな気がする。

「でもなんだかんだ言つて、男子みんな楽しそうだったもんね」

「最低限のマナーは守つてたし。正面玄関にしか向かつてかなかつたしね」

やろうと思えば裏からも入れたのに、それをしなかつたのは意味が無いと本気で思つていたからだろう。

真正面から向かつていかなければ意味がないと。

「悪い意味で一步進んだんだし、これで戦線の仲が色々と変わると面白いんだけど」

意識している人達がいらないわけでもないけど、ぶっちゃけこれ以上の進行は無いん

じゃないかな。

高松君と遊佐ちゃん、日向君とゆいにゃん、音無君とタッチー、俺としおりくらいだし。

野田君とゆりちゃんは無理だろうし、藤巻君とひさ子ちゃんもありえないだろうし。

「結局、あんま変わってないかも」

「高松君と遊佐ちゃん辺りが怪しくない？」

「正直戦線の仲を引つ掻き回しすぎた気がする」

体を求めちゃいけないよとか言いながらこの扱いである。ウケる。

まあ既に高松君はスタートラインに立ってるし、いいんじゃないかな。

「ねえしおり。この世界には学校しか無いんだよね？」

「そうだよ。なんか行けるところがあつたらいいのにな」

折角付き合っているんだからデートくらい行きたいものである。

実際イチヤイチャしているからそんなものはいらんだらうけれど、それでも欲しいものはちよつとある。

みんなでゲームとかしたいし、なんというか娯楽が少ないのだからこの世界は。

ガルデモみたいに興味がある人はいい。音楽が好きでやってるとか。

でもそれ以外の、趣味が無い人にとっては実はこの世界は苦痛なのではないだろうか

?

「じゃあパソコン室でも行く？ パソコンで時間潰すのとか面白そう」

「だね」

パソコン室に行ってみよう！ という訳で歩き出すのはいいものの、パソコン室なんて初めて聞いた。

と言うかそもそも、パソコンってどういう扱いなんだろう？

外部と情報が取れるコミュニケーションじゃないのだろうか？

それとも完全に遮断された、内部のみのツールなのだろうか？

「パソコンって不思議かも」

「実は世界の秘密に関わってたりして」

それもあるかもねと言いながら、俺達は歩き続ける。

手を取り合って、互いの体温を感じて歩き続ける。

なんだか今日は、いつもより汗が出る気がした。

パソコンを使える様になった時、みんなは何をしただろうか？

エロ画像を調べたり、エロ動画を調べたりしたんじゃないだろうか？

ああ別に今調べたりはしないよ？ しおりの目の前でそんなの調べたら殺されるし。

でも最近オナ禁気味なんだよなあ。

「タツ君、パソコン室のパソコンってき有線で繋がってるんだよね」

「そうだよ」

「ないよ、(ハハ)」

有線が無い。

なら無線じゃないかと思つたけれど、無線の機械も無い。

おかしい。

何かがおかしい。

いや、ここに入ってから何かが崩れだした気がする。

俺は、ここを知っている？

「ツア——」

突如走つた頭痛に、頭を押さえる。

今までに感じたことが無い激痛だ。

まるで体の内側からヤスリで擦られているような、そんな尋常ではない痛み。

俺の異変に気がついたのか、座っていたしおりが立ち上がる。

「タツ君!」

記憶の片隅。

決して語られることがない、記憶の一つ。

『パソコン室に行かない方がいい。そこはパソコン室じゃない』

「第一、情報統一室……?」

その記憶が出た瞬間、尋常じやない悪寒に襲われた。

まるで自分が自分じゃなくなってしまうかのような恐怖。

あまりにも理解ができない程の、恐怖。

心と体の摩擦が、恐ろしい速さで進んでいくのが分かる。

「は、早く……から……!」

「その必要はない」

不意に、声がかげられた。

俺の視界にはノイズがかかっている。

でもそれが誰なのかは、言わなくてもわかっていた。

「多々を置いて立ち去りなさい。貴方には何も出来ないわ」

悠姉さん。

「貴方は誰?」

「私? 私はね、神様なの。でもそうね、貴方はいい子だから教えてあげましょう」

きつといつもの、にっこりとした笑みを浮かべているであろう姉さんを、俺も見た

かったなあ……。

「私の名前は雨野悠。親しみと敬愛を込めて悠おねーさんと呼びなさい」
俺の意識はここで途絶えた。

S I D E : しおり

あまりにもあつさりと出てきたこの世界の黒幕に、私は絶句した。
ニツコリとした笑みを浮かべ、そこに敵意も何もないこともわかっている。

だけどこのタイミングで、タツ君のお姉さんが出てくる理由がわからなかった。

「あちら。全く多々は無茶するなあ。私が生きていた頃からそうだよ」

「え、えつと……」

「もう大丈夫だよ。多々はここで何とかすることに決めた。全くお姉さんの忠告を聞かないなんて、困った弟だ。でもまあその記憶消しちやっってたんだけどね」

やつちやつたぜと笑う悠おねーさんに、タツ君の面影を感じる。

と言うよりもやつぱり彼女は、タツ君のお姉さんなのだ。

「色々聞きたいことはあるんですけど、取り敢えずタツ君をください」

「ええ……。いきなりそれを突っ込んでくるところにお姉さん脱帽だよ。あげるかあげないかは私が決めることじゃなくて多々が決めることだし、君を選んだとしても私も蓮

花ちゃんも何も恨まない。むしろ君を喜んで歓迎するよ。多々を人にしてくれてあげようって」

やっぱりタツ君のお姉さんはずるい人だった。

そんなこと言われたら、私だって困る。

「まあ君が聞きたいことは大方検討がついているよ。何故この世界を作ったのか、どうやってこの世界を作ったのかだね」

ネタバレの権化とも言えるこの悠おねーさんを前にして、私は息を呑む。

彼女の匙加減一つで、私は消されてしまうかもしれない。

「世界を作った理由は秘密。それはこれから先の物語のお楽しみだからね。ラスボスが最初から理由を言うゲームが面白いかい？」

悠おねーさんが話のわかる人でよかったですと思いつつ、真剣におねーさんの言葉を聞く。

「世界の作り方なんて簡単さ。思いがあればそれでいい。思いが多ければ多いほどいい。この世界はね、私と蓮花ちゃんを中心に作られているのさ。多々を救いたいと言う願いで創られたこの世界は、悲しい思いをした人達を救いたいと言う願いで更に強固にされた。巨大な水の塊を落とすと、周りにも雫が落ちるだろ？ それと同じさ」

つまるところ、土から思いでものが作れるこの世界と同じように世界を思いで作り上

げた。

なんてデタラメな。

「私は周りを利用する。私と蓮花ちゃんの多々を救いたいと言う願いを基準としたこの世界は、それを軸に回っているからね」

「あれ？ それって世界を作った理由じゃないんですか？」

「違うの。ならどれが理由なの？ 何が理由なのって思うでしょ？ それが楽しいんじゃないか」

ああわかった。この人ユリツベさんと同じタイプの人間だ。

引つ掻き回すだけ引つ掻き回して、自分で回収しないタイプの人間。

だけどそれでいて頼りになったり説得力があったりするから、タチが悪い。

「まあでも君にだけ答えを教えろと言うのもツマラナイ。自力でたどり着いてくれた方が、主催者としても楽しいしね」

一人いなくなつちやつたけどねと、寂しそうに呟いたのを、私は聞き逃さなかった。きつともう一人の主催者は、夢を叶えたのだろう。

タツ君に託した夢を、叶えたのだろう。

「じゃあそろそろ行くね。私はまだ出てくるべきではない立場の人間だ。今回は多々と言うイレギュラーがあつたけれども、無ければ出て行く。それが私なのさ」

「会わなくていいんですか？ 話さなくていいんですか？」

私の言葉に、悠おねーさんは笑う。

さつきと同じニツコリとした笑みなのに、その微笑みは何処か儚くて寂しそうだつた。

「色々あるのさ。色々ね」

そう言つて悠おねーさんは音もなく消えた。

残つたのは安心しきつた表情で寝ているタツ君と、何が起きたのか未だに理解できない私だけ。

タツ君の問題は全て消えたと思つていた。

でもそんなはずはなかった。

「ねえタツ君。どうしてそんなにタツ君は、試練を与えられなきやいけないの？」

私の呟きは、誰にも聞かれることなくパソコン室に消えた。

SIDE：多々

「そつか……。姉さんがいたんだ」

俺はしおりから何があつたのか全て聞いた。

きつと姉さんがしたのは、俺の心と体の摩擦の緩和だ。

その全てを無くすなんてことをする性格じゃないし。

「姉さんのこと、見れなかったな」

見えなかった。

正確には視界を奪われていた。

姉さんが現れた時に発生したあれはやっぱり、姉さんが受けているペナルティなのだろう。

世界の作られ方も聞いた。

若干だけど理由も聞いた。

蓮花がそれほどまでに俺のことを思っていてくれたことには驚いたし、その優しさに心が温かくなったのも事実だ。

だけれども、蓮花と違い姉さんだけは見る事ができなかった。

それはつまり、そう言うことなのだろう。

「タツ君は、いいの?」

「何が?」

しおりは歯切れが悪そうに、俺に言う。

「お姉さんに、会えないの」

「会えなくてもいい。なんて言うつもりはないよ。会いたいし、会って話したい。でも

それ以上に、居てくれたことに感謝しているんだ」

会えなくてもそこにいる。

いつだって俺のことを考えてくれていた姉さんが、今もまた俺のことを見ている。

シスコンって言われるかもしれないけれど、それが俺にとつては一番嬉しいことだった。

「本来会えなかった人が居たんだ。夢も希望もあるんだよ、この世界には」

嬉しそうに笑ったつもりだけど、何処か寂しさが漏れてしまう。

こういうところでやっぱ俺は昔から変わっていない。

大切な人には表情を隠せない。

でも、それでも。

俺の気持ちに偽りは無かった。

「いつかきつと会えるまで、俺は待つよ。しおりを紹介しなきゃ。俺の口から大切な人ですって。」

057 《Reversible》

「文化祭が近づいてきたわ」

ゆりちゃんが久しぶりに戦線メンバーを集めたと思ったたら、言ったことはそれだった。

しかしだ。

「何故天使がここにいる！」

野田君が案の定ハルバートを構えているが、それをゆりちゃんが宥めた。

「今回は生徒会と合同よ。なんでも、いつもはしやいでる私たちの力を借りたいんですって」

「今年の文化祭のテーマが、はしやげ・騒げなのよ。だからいつもはしでいる貴方達の力を借りようと思って」

まさか生徒会から協力を頼まれるとは思わなかった。

というか生徒会と戦線って争ってるんじゃないやなかったっけ？

「ふん。俺達の力を借りなければならぬとは無様な」

「お前は文化祭を何だと思ってるんだ……」

野田君がアホなのはいつものことだからいいとして、それにしても酷いな。

「なら基本方針は私達が決めていいのよね？」

頷くタッチーに対して、ゆりちゃんがにやりと笑みを深める。

ああ、これは何か企んでいるな。

「なら今回の文化祭は仮装パーティーで3日間やるわ！」

「長いわね。でもコンセプトはいいと思うわ」

なんか妙に生徒会が協力的だ。

気になったので音無君を見ると、きつと視線を逸らされた。

誰にも気づかれぬように視線を逸らすあたり、きつと本当にばれたくないのだろう。

なら仕方ない。言わないでおこう。

ただし後で食券を貰ってやる。

「しかしあれね。生徒会からの協力がここまで得られると、逆に気持ち悪いわ。何を企んでいるのかしら音無君」

「ええ!?! 俺!?!」

いや君だろうに。

どう考えても生徒会へとアプローチをかけることができ、尚且つ戦線の願いを叶え

ることの難しさを知っている人物は君しかないだろう。

「彼は関係ありませんよ」

そこでまさかの助け舟を出したのは、直井だった。

お前が助けに入るのかーという驚きを覚えながらも、まあ隠蔽仕事をさせるならこいつが一番かなと思う。

何せ催眠術があるのだから。

「確かに彼は会長と仲良くしています、あくまでもそれは会長個人とのこと。我々生徒会は彼の意見を通すつもりなどありませんので」

突っ込みにくい最低限のことだけを告げ、直井は一步下がる。

流石のゆりちゃんでもこれが、生徒会と戦線の問題であつて、タッチーと音無君の問題ではないと察したようだ。

まあ実際は癒着してるんですけどね。

「仕方ない。信じるわ。仮装パーティーと言っても、別に全員が全員仮装しなければならぬわけじゃない。そちらは好きにどうぞ」

「過度な露出は禁ずるわ。不純異性交遊に発展する可能性があるから。特にそこ」
タッチーの指が俺を指していたので、すつと体を退ける。

するとなんということでしょう。そこにはみゆきちちゃんの姿が！

「し、しないよう!」

「本当にそうかしら? 実は露出魔だったり……」

「しません!」

本当にと再確認するタッチー。何故みゆきちちゃんを露出狂にしたがるのか。まあ露出はさせられることになるんでしようけど。

主にしおりのせいで。

「そういえば。Girls Dead Monster だったかしら?」

ふと俺の方を向いてきたので頷くと、タッチーは驚くべきことを告げた。

「貴方達に生徒会から正式にライブを申し込むわ」

空気が静まり返る。

それは生徒会として絶対にあり得ないことであり、同時にしてはいけないことであつた。

公認ではない器具を勝手に使っている者達へ、使用を認める様な宣言。

しかも時間帯的にやってはいけない時間にライブをしているのだ。

「……本当にどういうつもり?」

「どういうつもりも無いわ。努力している者はいつか実る。それだけよ」

タッチーはそう言うのと、校長室を後にした。

まず校長室に来た以上、ここを戦線が使用していることを認めている様なものなのだが。

「厄介なことになったわね。そういうやり方もあったのね……」

やられたと理解しているのは、きつと俺とゆりちゃんだけだろう。

他はいきなりどうしたんだと言う顔をしている。

「ゆりっぺ、そりやどういふことだ？」

「彼女達は方針を変えてきたのよ。問題を起こさせない様にするんじゃないかと、予め問題を組み込んで来たの。やられたわ。これじゃあ例えガルデモがゲリラライブをしたとしても、文化祭の一部として片づけられてしまう。それに私達主催な以上、私達の行動全てが文化祭の進行通りってことね」

流石の音無君も驚いている以上、彼がかかわっていたのは最初だけなのだろう。

後で音無君から少し話を聞くとして、こうなった以上やらなければならぬ。

ライブをしない、という選択肢はない。

「やってやろうじゃないの」

ゆりちゃんはそう告げた。

「私達がやるのが全部計画通り？ そんなもの超えて見せる。私達が企画するんだもの。地獄の様な文化祭にしてやるわ！」

おっほっほと言いながら去っていくゆりちゃんを眺めながら、リーダーって大変だなと改めて感じた。

「で、音無君はどこまで知ってたの？」

「最初だけ。俺が言ったのは、文化祭をみんなで楽しむ為に、戦線主体でやったらどうかなってところまでだ。それ以上のところは正直知らなかった」

いつものコーヒーを飲むコーヒージャンキーに対して、サイダーを飲みながら話す俺。

実にいつも通りの風景だった。

「つまり隠されていたと」

「という感じじゃなかったのはお前もわかっているんだろ？」

あ、ばれてるのねという感覚で音無君を見る。

最近俺の考えを読む人が多くて困る。

プライバシーなんてなかったんや。

「誰かが意見を出したみたいない感じだよ。勿論直井じゃなさそうだったけど」

あいつもあいつで、誰かから教えてもらったみたいない感じだったし。

となるとまあこんな愉快痛快なことをしてくる人は一人しか知らないわけで。

「姉さんかなー」

「お前の姉さんって、この世界にいたのか？」

「いるらしいよ。しおりが会ったって。まあ最後には会うことになると思うよ」

「どういふことだよと言う音無君を軽く流して、よくもまあはっちゃけたなあとしみじみ思う。」

ベッドの上で出来なかったことを、楽しんでいるならそれでいいんだけど。

「ならお前の姉さんが入れ知恵したってことか？」

「そうだろうね。ってことは直接的に生徒会に意見を言える立場に入ったのかな？ 生徒会顧問とかやってそうだけど」

まあおおよそ当たっているだろうなと思いつつ、姉さんの最近の露出の多さに少し驚く。

服的な意味じゃなくて出番的な意味で。

時間がないって、ことなのかな？

「ねえ音無君。音無君はさ、この世界で苦しい過去を持つてる人達を救いたいと思ってる。」

「最近な。そう感じてるようになった。俺自身救われてないから何とも言えないけど」

それは救われてたら、すぐさま行動に移すくらいの覚悟があるってことなんだろう

な。

そして多分、音無君は救われているんだろう。

タッチーが音無君に救われているみたいに。

「そっか。ならいいかな」

きっと世界はまだなくならない。

時間がないってことはつまり、そういうことなんだろう。

救いたい人達を救うことができない時間がくる。

つまり、世界の崩壊は始まっているってことだ。

「取り敢えずジューズごち」

「ああ。言わないでくれよ」

「音無君自体被害者みたいなものだしね。本当の加害者は一人だけだろうし」

音無君が疑問の目を俺に向けてくる。

「というか本当にお前のお姉さんなのか？ 別人って可能性はないのか？」

姉さんじゃない人が、この世界を動かしている？

バカバカしい。そんな考え、あるはずないじゃないか。

「俺は姉さんがやってるって信じてるよ」

この信頼関係だけは、絶対に崩れないんだから。

SIDE：直井

「やあやあ生徒会諸君こんにちは。世界一の美少女こと雨野悠さんだよ」

あまりにもあつさりと登場した黒幕。

彼女のことを黒幕と気が付くことができたのは、僕だけだった。

「雨野多々の姉、雨野悠だと……!?!」

「おやおや驚いているね直井君。私は君に感謝と尊敬を持っているのだから、もつと親しく悠おねーさんと呼んでもらっても構わないよ」

お姉さんというにはあまりにも貧相な胸をしているものの、まあ僕にとってはいい感じの大きさなので気にしない。

「おつと内心でデイスられた気がする。処す? 処す?」

「テンションが高いな。本当に雨野悠なのか?」

「私が雨野悠であることは決定事項であるし、そもそもそんな質問に意味はないよ直井君。自分が自分であることを証明できるのは自分のみであり、相手がどう思っているかなんて然程重要なことじゃないんだから」

訂正しよう。

確かにこの女性は雨野多々の姉だ。

「何故ここにいるのかしら?」

会長の言葉に、悠さんはにやりと笑みを浮かべた。

「今日から生徒会顧問になつてね。君達に色々とアドバイスをしてあげるためにここに来たのさ」

顧問というと、やはりこの世界のイレギュラーもしくは神は悠さんだったのか。

子供しか来れないはずの世界で大人になつていてる時点で、彼女は異常過ぎる。

「あり得ないわ。大人はこの世界に来ることができない」

「ふむ。中々重要な意見をありがとう。では聞こう。いつからこの世界が子供しか来れないと錯覚していた?」

「なん、だと……」

素で驚いてしまったが、仕方がないだろう。

子供しか来れないわけではない?

つまりこの世界には父もいる可能性が――。

「まあ来れないだろうね。君の仮説は概ね正しい。正確には来ても意味が無いから来ないと言う方が正しいか。例えば直井君。君は辛い過去を持つているから、この世界に来ることができた。だけど未練があるとして、童貞コミュ障ヒキニートがこの世界に来れると思うかい?」

来れない、のか？

いやだが虐められていたと仮定すれば、来れるはずだ。

「結論は来れない。いやこれは童貞コミュ障ヒキニートを批判しているわけじゃなくて、要するにどうにかなることとどうにもならないことの違いなんだよ」

虐められていたからこの世界に来た。

そんな人間が来れるならば、この世界はそれこそ溢れかえってしまうだろう。

だがそうじゃない。

度合によるということだ。

「虐められていて何もアクションを起こさずに引きこもり、親の脛を齧って生きてきたとしよう。そんな人生認められないと思うとしよう。そんな奴をこの世界は認めない。アルバイトをすればよかった。誰かに打ち明ければよかった。転校すればよかった。それでどうにかなるような奴は、この世界に来れない。この世界に来るのは、大人まで生きられないほど酷い世界を体験している者達だけなのだから」

大人はこれないわけではない。

大人まで生きることが出来ていることが、どうにかなくなってしまったことの証明だとされているのだ。

勿論大人まで生かされてしまった者もいるだろう。

そういう者達だけがこの世界に来れるのなら、大人は自然とこの世界には来れない何かを見つけている。

「ちよつと難しかったね。要するに、大人はこの世界に来ることはできる。ただし、大人まで生きれた時点で、この世界にいる子供達程苦しい目にはほぼ合っていないってことさ。何せ大人というチャンスすら与えられずに死んでいくんだからね」

なら。なら目の前にいる彼女はどれほどの過去を持っているというのだ。

大人なのにここに來てしまうなら、どれほど辛い世界を見てきたというのだ。

「さてと、無駄話はここまでにしようか」

パンという一拍子によつて、僕の思考は止められた。

会長も何か考えていたのだろうが、それもストップをかけられた。

視線が集まる中で、悠さんは笑顔で告げた。

「戦線と生徒会の一大戦争をしようじゃないか」

058 《On Air Fourth》

「復刻！ 第四回死んだ世界戦線ラジオ始めちゃいますかー！」

「テンションが高いなあ……」

キラツと某アイドルの様に決めたゆいにやんを眺めつつ、俺はため息を吐いた。

「今日のゲストはゆいにやん！ いつもうるさいけど今日はめちやくちやうるさい！」

「だって私今回いい出番ないじゃないですかー！ ひなっち先輩振って、しおり先輩に

怒られただけですよ!? やってられっかー！」

「じゃあやらなくていいよ」

「構ってよー。最近ひなっち先輩も構ってくれないんですよー」

そりゃ構ってくれないだろう。

誰が好き好んで振られた相手に構っていくのだろう。

「ついでに今黙ってるけどゲストに音無君もいるから！」

「俺は関係ない」

黙秘を続けている被疑者に話を聞きに行くと、マイクを放り投げられた。

おこだなー。

「何？ タッチーに仲間外れにされたこと怒ってるの？ プクスクス！ どう思いますかゆいじゃん！」

「豆腐メンタルですね！」

思いきり絞め技をかけに行つた音無君をスルーしつつ、俺は淡々と仕事をする。

雨野多々はクールに去るぜ。

「最初は質問のコーナー！ 最初の質問はこれ！ 『悠さんが暴れて困ります。どうかしてください。』というかしろ！ お前の姉だろうが！』とのことです」

「どう考えてもそれお前宛の懇願だろ」

「ギブ！ ギブ！」

絞められているゆいじゃんをスルーしつつ、悠姉さんが暴れてるのかーと想像して関わりたくないなーと思つた。

だってベッドの上で動けない状態なのに俺は振り回されていたわけだして。

自由の身となった悠姉さんの相手を出来る気がしないわけだして。

「つまり諦めろ！ 俺は犠牲になりたくない！」

「お前姉を何だと思ってるんだよ……」

「というかもう自然災害だよ。台風とかそういうレベルだよ、アレ。周りを巻き込んで被害を大きくしていくタイプ。しかも自分自身も超巨大」

「人類滅亡クラスじゃねえか」

ぼつくりと逝って戻ってきたゆいにやんが首を撫でながら立ち上がる。

そんなにガチで絞めてたのか。

「まあ姉さんも生前はあんまり動けなかったからさ。好きにさせてあげてよ」

「多々……。そんなしんみりするセリフ言いながら、絶対お前内心台風の進路をこつちに向けなくてくれって思ってるんだろ？」

「言わせんなよ恥ずかしい」

だろうなと言う音無君のツツコミは無視します。

無視しますつたら無視します。

「次の質問！ 『普通のコーヒーが売り切れています。何故かわかりますか？』 そんなのここに犯人がいるじゃん。な、コーヒージャンキー」

「俺は別にコーヒージャンキーってわけじゃないんだが……」

不満そうな顔をする音無君。

その顔に俺が不満です。

「取り敢えず昨日何本飲んだ？」

「最近は減らしてるからな。10本だ」

「……その前の日は？」

「11本だな」

「その前の日は？」

「12本だな」

なんだろう……嫌な予感がする。

「一週間前は？」

「お前の様な勘のいいガキは嫌いだよ」

「俺多分音無君より年上だよ」

音無君に鋭い右ストレートをぶっぱなしながらそう言うと、仕方なくゆいにやんの相手をすることにした。

コーヒージャンキーは消え去ったのだ。

「次の質問。『最近熱くなってきましたが、水着でプールで泳ぎませんか？ 川でも可』

ほほう……水着ですか」

「あ、これ変なスイッチ入ったパターンだ」

「水着は本来下着と同じような形をしているにも関わらず、水着だからと見せることに抵抗の無い者達が多い。つまり合法的に下着を見れると言うこと……！」

「しおり先輩に通報しておきました」

「やめてよー。しおりに言われたら俺死んじやうよー」

「多々先輩めんどい」

「何、いつもと反対だど!?!」

不毛な争いだからやめました。

というかゆいじゃんにめんどいって言われると結構傷つく。

こう……馬鹿に馬鹿って言われるみたいな。

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん! あたしも混ぜろー!」

唐突に現れたしおり。

一歩下がって全力ダツシユで逃げようとする俺に対し、しおりは右手を掴むとそのまま俺の手を引いて抱きしめた。

俗にいう、首をキメてきている状態である。

「はっはっはっ。合法的に下着が見れることが嬉しかったかい?」

「ちよ、ちよつと待つてしおり。締まってる。締まってる……!」

「絞めてるんだよ。言わせないで恥ずかしい」

「恥ずかしがる要素どこにもないですよねえ……!?!」

完全に殺しに来ていることを理解した俺は、必死にもがく。

もがく度に、こう首に幸せな感触がくるわけで。

まあ必然的にそれを理解しているしおりも恥ずかしがるわけで。

「なんで絞める力を弱め、ない、の」

「だって早く逝かせれば、恥ずかしいのは少しで済むじゃん？」

可愛い顔で絞められた俺は逝った。

「とういうわけでここからは超絶美少女しおりんが司会をするぜ！」

「しおり先輩ちつすちーつす」

「おやおや、やる気がないゆいじゃんやないか。おいでおいで。遊んであげるよ」

「いや、ホントマジですみませんでしたから、そのにこやかな笑顔をやめていただいてよろしいでしょうか？ 死ねる」

冗談が通じないなーと言いながら、少しゆいにやんを絞められなかったのが残念だ。

なんで今回はこんなに絞め技が多いのかって？

絞めだからだよ。言わせんなよ恥ずかしい……。

「にしてもよく彼氏を失神させるよな。本当に付き合ってるのかお前達」

「おっ。煽られてる？ もしかして私煽られてる？」

「煽りよる（笑）」

「よろしいならば戦争だ」

コーヒージャンキーを殺しに行こうとすると、まあまあ落ち着いてと復活したタツ君

に言われてしまった。

「まったく仕方ない。早めに蘇ったタツ君に免じて許してやろう」

「ですってジャンキー」

「ただしゆい。てめーはだめだ」

てめーは私を怒らせた。

何もしていないのに理不尽だと騒ぎ始めたバカはおいておいて、とりあえず司会進行を進めるとしよう。

私は司会なのだから。

「取りあえず実はタツ君を失神させたかったのには理由があるのよ。以前の放送で戦線ランキングっていうのを発表したでしょ？　その続き」

「あー。そういえばそんなこともあったねー」

「そうそう。それについて投票があったから、さっそく発表してくね。題して『戦線の中で彼氏にしたい人ランキング!』」

彼氏にしたい。

それはモテそうとか、結婚したいランキングとは全く違う未知のランキング。

何故なら自分が付き合ってもいいと思える人というのは、かつこいいとかというのはまた別の感情や評価が入ってくるからである。

つまりタツ君達男性陣にはわかりにくいランキングなのである。

「それはまあ気になるな。男子陣にとつては結構重要なことだろうし」

「あれ？ コーヒージャンキーはあんまり気にならないタイプ？」

「いやそんなことはないけど。男子だからもちろん気になりはするさ。でも結局最後に決めるのはその二人であつて、周囲の意見なんてあんまり関係ないだろ」

「おー、イケメン」

「ただそれが貧乳好きの妹大好き人間の言葉だと考えると色々と考えさせられるよね」

回りの反対を押し切って妹に告白しそうな人だし。

「因みにこのランキングからは既に付き合っているタツ君と、付き合っていないので付き合っていないちよつぱり付き合っている高松君も除いています」

となると結構限られてくるんだよね。

「というわけで上位三位の発表！」

「結構緊張するな」

「第三位！ これはちよつと意外な、大山君！」

大山君の名前を出すすとタツ君がちよつぱり気難しい顔をするのが好き。

その時の微妙そうな顔がまたかわいいんだよね。

「理由としては、戦線の中では一番人畜無害そうとのこと。他にも、個性があまりないか

ら色々な趣味に付き合ってくれそうとかあるね。要するに自我が強い子達から好かれてる」

「まあわからなくもないな。自分に合わせてくれそうってところだとやっぱり大山が上に来るんだろう」

「なんかコーヒージャンキーが解説者になっているのが気に食わないけどまあ妥協しよう。」

「まあ反対意見もあつたんだけどね。あまりにも趣味が無さすぎるとか、ちよつと普通すぎてNPCと一緒にいる感覚になるとか」

「普通っていうのも好き嫌いが分かれるものだからな」

「俺はちよつと苦手。やっぱりNPCの感性っていうのが体の中にちよつと残ってるし」

「それはまあ仕方がないんじゃないかな？」

「基本タツ君NPC嫌いだし。」

「なんていうか引つ張られてる感あるんだよね。ああしなきゃみたいな」

「まあそれは多々にしかわからないことだから俺達はなんとも言えないけど、そう思うんならそうなんだろう。お前の中ではな」

「なんで今日こんなに喧嘩売ってくるのこのコーヒージャンキー」

まさに煽り芸である。

「第二位に行くね。第二位はまあちよつとわかるけど、ゆいは気分複雑！ 日向君！」

「本当に微妙な気分になりますね！」

「でもまあ妥当な理由ではあるよね。一緒にいて面白そうとか、何気ない気遣いをしてくれそうとか」

「ぐ、ぐぬぬ……」

ゆいがすごい顔をしているのを見て笑っていると、それ以上はやめときなよとタツ君に言われてしまった。

タツ君に言われてしまったら仕方がない。

「まあゆいが無理なら日向はホモの道に走りそうな雰囲気あるよな」

「や、やめてくださいよ！ そんなこと言われたら振りづらい」

「振る気満々なんだ。まあ仕方ないけど」

そこからへんはきつと次で明らかになるだろうし。

こんなところで本当の気持ちをきいてもしょうがないし。

「んで、一位だったのは音無君と。わかってたでしょ」

「んー、一応あの戦線ではまともな部類に入るとは思ってたけど、別に付き合いたいと思われているとは思わなかったわ」

「ああそういう考えはあるかもね。まともな人っていうのは結局一握りしかないわけだし。その一握りに俺は入っていないわけだし」

「まともな部類ではないよな」

まともな部類に入ってるのが少ないって、もうそっちがまともじゃないんじゃないのかなと思ったりする。

実際戦線ではまともなほうが頭おかしいみたいなのが扱いを受ける時あるし。

「取り合えず発表し終えたけど、どうだった？」

「ある程度予想できる順位だったからなんとも言えないよな」

「逆にそうだよ。取り敢えず時間も時間だし終わりの挨拶かな」

私がそういうと、タツ君は頷いた。

「これにて七章は終了とさせていただきます！」

「また次回！ 八章をお楽しみ！」

「お相手は、何かいいことあるのが俺雨野多々と」

「何かいいことあつたら嬉しい関根しおりと」

「何かいいこと見つけるゆいちゃん！」

「何かいいことあるといいな。音無結弦でした」

「次回をお楽しみ！」

第8章 《晴れ時々豪雨》Clear sometime

es heavy rain》

059 《I want to help you》

救いたい人がいる。

助けたい人がいる。

だから手を伸ばした。

だから愛を知りたかった。

きつと私は彼のことを愛していたのだろう。

ただど愛しているという感情を知らなかったから、死んでから漸く気が付くことが出来た。

知ることが出来た。

ああ、私は彼のことを愛していたのだと。

こんな小さな思い出でさえも、私の心の奥底にずっと止まっているのだもの。なんで気が付かなかったのだろう。

なんで気が付けないんだろう。

救いたかったのに、助けたかったのに。

私なんかの為にそんな思いをしてほしくなかったのに。

この閉じられた世界から、救い出してあげたかっただけなのに。

なんでこう、私はうまくいかないんだろう。

「悔しいな……。こんな思いをするなんて思わなかったよ」

こんなんじゃない誰も救えない。

だからこそ私はここにいるというのに、神様になつてまで無力なのか私は。

まあ、無力だから神様になったのかもしれないけれど。

「でも今度こそ、救うよ多々」

助けたかった人がいた。

救いたかった人がいた。

だから手を差し伸べた。

だから愛を教えてあげたかった。

きつと彼女は俺のことを愛してくれていたのだろう。

だけど彼女は愛しているという感情を知らなかったから、死ぬまで気が付くことが無

かったのだろう。

悲しい最期だった。

ああ、俺は何故彼女を救いたかったのだろうと。

思いは一つだったはずなのに、いつからその思いを失ってしまったのだろう。

彼女を救いたいという思いしか無くなっていた。

何故俺が彼女を救いたかったのかを、もう俺は思い出すことすらできない。

なんでこう、俺はダメなんだろう。

「辛い……な。こんな思いをするなんて思ったことも無かったや」

こんなんじゃない救いたい人も救えない。

こんな世界に来たというのに、俺はまだ人が救えないのか。

「でも、今度こそ救って見せる。姉さん」

仕組まれた学園祭。

まさかの生徒会と戦線の全面戦争となってしまうただのだけれど、俺にとってはまだありがたかったのかもしれない。

生徒会側にいる姉さんと、正々堂々勝負する時が来るなんて思ってたから。

俺にとって姉さんは、一度も戦ったことが無い相手だ。

ゲームでの対戦も殆ど無いのは、俺がゲームを好きになった時には姉さんはゲームなんて出来ない状態だったし。

「いつもよりも燃えてるわね多々君」

「まあね。相手に姉さんがいるとわかれば、それはちよつとテンションが上がるというか」

俺と姉さんの関係を大体把握しているゆりちゃんにとって、まあわからなくもないというのが事実だろう。

そもそも本来ならば決着なんてつけられる筈もない、最初で最後の対決だ。

死んだ後に決着をつけるというのも、中々な話だけれども。

「証拠はないのにいるとわかる……か。そんな関係は憧れるものね。私もそんな存在になりたかったなー」

軽く言っただけではいるけれど、ゆりちゃんもきつと重い何かを背負っているはずだ。

「なってるんじゃないかな？ 案外そういう関係って、気が付いたらそうだったりするものだよ」

そう。きつと姉さんと俺の関係は別に特別なものじゃない。

大切な人と、言葉を交わさずとも通じる。

親友や恋人とはそういうこともよくあったはずだ。

「なるほどね。なら私もそうだったのかもしれないわね」

校長室に二人きり。

エロゲのシチュエーションでありそうなこの状況に正直ドギドキシながらも、そんな雰囲気じゃないしそもそもそんなことしたらしおりに殺されてしまうし。

この世界だと蘇るから本気で殺しにきそう。

「ところで多々君。貴方はどんな仮装をするつもりかしら？」

不意の質問にちよつと言葉が詰まる。

「生徒会との勝負……とは言ったものの、正直なところ実質貴方と貴方のお姉さんとの勝負であることはわかっているわ。だから聞きたいの。貴方はなんの仮装をするの？」

シリアスなのかシリアルなのかわからない表情でゆりちゃんが聞いてくるので、俺もネタで答えるべきか迷う。

「そりや勿論女装——」

「するのね？」

「——じゃないです。すみません。俺は学生服にするよ」

どこの、とは聞かなかった。

聞かれて困ることじゃなかったし、聞かれれば答えるつもりだったけれどもそれで黙ったということは凡そ察してくれたのだろう。

学生服。その中でも白いブレザーは、俺の通っていた学校の制服だ。きつと姉さんも気が付くだろうし、俺も俺で決心がつく。

こんな世界で、死んだ世界で姉さんと会えるなんて思ってたし、今でもどんな顔をして会えばいいのかわからない。

でも会う。その決意の制服だ。

「貴方はまた一歩進もうとするのね」

「進まなきゃ、俺を信じてくれてる人たちに示しが付かないからね」

SIDE：しおり

わかってはいた。

「やあやあ久しぶりだね我が妹よ」

「平然と私のことを妹扱いしてくるその心の広さには驚きますけど、唐突の登場はやめてくれませんか？」

唐突に現れた人物の名前は、雨野悠。

タツ君のお姉さんにして、この世界を作り上げた張本人。

「まあどうせ妹になったところで子供の姿は見れないんだけどネ。君の様に可愛い妹が出来るなら大歓迎さ」

「え、えつと……」

現在いるのは私の部屋。

つまりみゆきちもいるんだけど、みゆきちはあつさりと登場したラスボスにおろおろとするばかりである。

私も最初そうだったし。

「おや君も可愛いね。私は可愛い子は好きだよ。ベッドに連れ込んでいい?」

「ダメです」

「二股かな? この子にも実は気があるとか?」

「みゆきちは私のものです」

この愛玩動物を誰が他の人に渡すかー!

それよりもこの人がここに来た理由が一番気になるんだけど、きつとこの人に馬鹿正直に聞いたところで教えてくれないのは目に見えている。

いやー、本当にこの人はラノベとかで出てくる胡散臭い敵役がすごい似合うなあ!

「タツ君とは会えないんじゃないかな?」

「会えないとも。きつと多々は会うつもりだろう? まあ商品としてそれを用意してもよかつただけだけど、生憎私個人の力では何とも出来ないんだ」

それではいくら何でもタツ君がかわいそうだ、とは言わなかった。

この人も会いたくて会えないんだろうし。

「これ以上わからない話をして、もその可愛い女の子が困惑するだけだし、別の話をしよう」

はぐらかされた。

「みゆきちちゃんと言ったね。黒幕のおねーさんに言いたいことはあるかい？ 質問でもないよ。今のお姉さんは気分がいいからね」

みゆきちはそんなこと言われてもすぐに質問なんてできない。

だからこそ私が他愛のない話で質問をするまでの時間を作るとしよう。

「悠さんは今何の役職してるんですか？」

「ん？ ああ生徒会顧問だよ。君達の敵って言ったほうが早いかもしれないけれどね」
なんでこう毎回爆弾を突っ込んでくるんだろう。

というかこの人まだ出てくるつもりなかったとか言っただけ？

そんなことはもう関係ないとも言いたいような状態だ。

「な、なんでこの部屋に？」

「それを考察させるのが私の仕事なんだけどね。君は初めて会ったから今回は優しく教えてあげよう」

嘘つけ私の時は最初から考察させられたゾ。

「部屋に入るのに幾つ理由があるか。それは用事があったか、無いけどそこにいたかのどちらかに主に分けられる。今回の場合は前者だね」

「え、う？」

「うむうむ。そのいきなり言われてわからないみたいなお表情好きだよ。私は基本こんな話し方だからね。さてさて用事があるとしてそれはどんな用事なのか。それは四つに分けられる。即ち君に用があるか、妹に用があるか、二人に用事があるか、全員に用事があるかだ」

まさに解説者。

この悠さんという人物の話し方は、毎度毎度喋りたいことを全部一気に話す傾向があると思う。

きつと話したくても話せない状況がずっと続いてたからだと思うけれど。

「今回は、しおりんに用があったんですか？」

「その通り！ 賢い子は好きだよ。彼女への用があったからこの部屋に来た。それが紛れもない事実で、この部屋に来た理由そのものだ。だけれども君達を知りたいのはそれじゃない」

来た理由。私達が知りたいその現実、私への用が何だったのか。

「この世界は私が作った。それは変えようのない事実だ。だけれどもこの世界を終わら

せることが出来るのは、私でも多々でもない。終わらせられるのは君達だけだ」
そしてこの場所に來た理由は、告げられる。

「この世界を終わらせて欲しい。勿論、今すぐではないけれどね」

あまりにも簡単に届いた願いは、私達の思い描いていたよりも酷く難しいものだった。

「え？」

「私、達が？」

「その通り。この世界には明確なクリア条件が存在している。だからそのクリア条件を探し出し、クリアするんだ。それが君達に頼める、最後の願いだ」

ああ、きつとこの人は本当にタツ君のお姉さんなんだと再度認識させられた。

この人は自分なんてどうなったっていいんだ。

「本当、そつくりだなあ……」

思わず心の声漏れてしまったのは、悪くなかったはずだ。

この二人は本当に、自分が犠牲になる方法しか選べないんだろうか？

「んじやそういうことだからよろしくね——」

あつざりと帰っていった悠さんを見送り、残された私とみゆきちはなんとも言えない表情になる。

「あれが、多々君のお姉さんなんだね」

「そうなんだけどね……。本当に不器用なところとか、すごいそっくりでしょ？」
「うん」

私達の思いは変わらない。

ガルデモはタツ君が救われるまで誰一人として欠けるつもりはない。

ただちよつと追加されるだけだ。

「みゆきち。私は悠さんも救いたい」

「奇遇だねしおりん。私もそう思う」

みゆきちを見て微笑む。

こつういうところが大好きだ。

「確かに私達は世界なんてよくわからないし、タツ君が抱えているものも、悠さんが抱えているものも何も肩代わりすることは出来ないし、その抱えているものの大きさもわからない」

「だけどしおりん、私達にしか出来ないこともあるはずだよ。当事者だけじゃどうにもならない問題があることも、私達は知ってるしね」

悲しそうに言うみゆきち。

私達は当事者だったからこそ、外部の人達からの思いを意味が無いものだと決めつけ

ていた。

「だけど違う。外部だからこそわかることがある。見えるものがある。」

「それを気が付かせてくれたのは、他でもないみゆきちだ。」

「今思えばなんで周りを頼らなかつたんだろうと思うし、なんでこうも強く生きようとしてたんだろうと思う。」

「強くなかつたって良かったのに。」

「やろうみゆきち」

「うん」

「救える範囲に手が届くかもしれないなら救って見せる。」

「それが私を救ってくれたタツ君への、そのタツ君を救おうとしてくれた悠さんに出来る最高のことだから。」

「でもどうするのしおりん。クリア方法なんてわかるの?」

「わかるよ。でもどうすればクリアできるかはわからない」

「それが一番の問題だった。」

「私はクリア方法というかクリア条件を知っている。」

「でも条件が意味わからない。」

「タツ君を救う。それがこの世界のクリア条件」

「——なら簡単なんじゃないかなあ？」

みゆきちの言葉に絶句する。

「多々君を救う為には、まず悠さんを救わないといけないからね」

思ってみれば簡単なことだ。

タツ君が悠さんをこの世界に残したままにするわけがない。

自分を犠牲にしても悠さんを救おうとするに違いない。

「悠さんとタツ君を救うことがこの世界のクリア条件なら、頑張るしかない！」

「でも悠さんを救う方法って、多々君を救うことなんだよね……」

すごく……めんどくさいです。

060 《Start Line》

どうすれば姉さんに勝つことが出来るのか、それが最も重要なところだ。

俺は授業中と言うこともあり誰もいない廊下を歩きながら、思考する。

勿論授業中なのだから文句を言ってくる教師も一定はいるものの、俺達の様な奴らに声を掛けられる先生も相当限ってくる。

そしてそれをわかつているからこそ、俺はあまり警戒せずに歩いていった。

「だからこそ僕を避けることが出来なかったというわけだな」

目の前に現れた直井に、苦笑する。

お前も授業中だろうにと言う言葉呑みこみ、共に生徒指導室へと向かう。

「授業中に度々廊下に出没しているお前を捕まえる為に、わざわざこの僕が授業時間を割いてやったんだ。感謝するがいい」

「ただ授業追い出されただけで草」

「お前本当に許さないからな」

直井は俺にかなり不躰な態度を取ってくるので、処したくなってきた。

だがしかしここで処すのは流石に大人気なすぎるので、今度小説を本にして配るだけ

にしてやろう。

「それで、どうせお前のことだ。気が付いているのだろう？」

「あ、一応確認しに来てくれたのね」

「煩い。僕としてはあのラスボスをどう扱うべきか迷っているところだ」

ああやつぱりラスボスっぽいよね、姉さん。

と言うかあそこまでラスボスの雰囲気たつぷりな人は中々稀有だと思うんだけど。

「現れたら堂々と生徒会を乗っ取り、しかも戦線とすぐに勝負させるなんてふざけてるとしか思えないんだが」

「それに関しては俺からも謝るよ。姉さんがゴメンネ」

でも俺にどうにかできるなら困らないレベルなんだけどね。

天災と呼べるほど唐突に現れて引つ掻き回す、まさに理不尽の権化みたいな存在である姉さん。

いや会いたいけど段々会いたくなくなってきたかもしれない。

「俺、会ったらどんだけ弄られるんだろう……」

「会えない、とは考えないんだな。まあそう言うものか」

「ああ、姉さんが俺に会えないっていうのは知ってるよ。見かけることは出来るみたいだけどね」

だからこそ、俺は一度夕緒に全てを明け渡すことになったのだから。

「貴様が知らないと思ってるわけがないだろう。それで、どうするつもりなんだ」

「いや、別に何かするつもりは無いよ」

負けるつもりは無いけどと言う言葉は置いておいて、俺は笑みを浮かべる。

最初で最後のこの戦いに、燃えない男はいないだろう。

「それならいい。相手の願いを叶える為に負ける、なんていうことをほざくなら僕が今ここでお前を洗脳したというのに」

「それ、効かないの覚えてる？」

催眠術なんて俺には通用しないのサ。

と言うことはさておき、あの事件以来直井が僕に催眠をしようとしたことはないのだから。

怖い、と言うのもあるかもしれない。

もしもここで俺が催眠にかかってしまえば、それは夕緒がいないことに他ならない。

「勿論覚えてるさ。ただの冗談だ」

そう告げた直井の目には、何が映っていたのだろうか。

きつと夕緒の姿なのだろう。

「言っておくぞ雨野多々。雨野悠は決してお前を裏切らない。お前の為に動き続ける。

それがたとえ自分にとって良くないことであっても、悪いことであっても、自らが悪になってもだ」

「わかっているさ。だから俺は、姉さんを助けなきゃならない」

俺はそう強く告げた。

直井が微妙な顔をしているのも気が付かずに。

「今日も今日とてコーヒーが上手い」

コーヒージャンキーとも捉えられそうな言葉だが、俺は決してコーヒージャンキーではない。

常にコーヒーを飲んでいたいだけの男子生徒だ。

「おつ、音無じゃん。今日もコーヒーか」

「ああ日向か」

現れた青い髪に珍しく当たったもう一本のコーヒーを投げると、苦笑いをしながら日向は受け取った。

これこそ以前に突然多々から渡されたコーヒーサイダーである。

受け取った日向がうへえと言いながら口を付けたが、案外イケると普通に飲み始めた。

それが少し美味しいんだが、飲んでいると段々飽きてくる味なのだ。

見た目と名前がやばくて、飲んでみると一口は飲めるけどペットボトル一本となると多いとはなんて魔的な飲み物なのだろう。

まさに多々がおススメしてくるだけある、鬼畜飲料である。

「お前よくこんなの買ったな」

「多々がたまに俺に投げつけてくる」

「ただ投げつけたかっただけかよー」

まあいいさ、日向がここにいるってことは未だに若干悩んでいるんだろう。

俺としても悩みをぶっちゃけたいところだけれど、それはこいつにするべき話じゃないだろう。

「因みに俺はお前の恋愛相談に一切興味はない」

「言う前に封じるなよ!？」

と言いつつもだよなと、頬を搔くってことはあらかた予想していたのだろう。なんだか罪悪感があるけど。

「と言うかそれだけに構ってる暇が無くてな」

「んまあわからなくもねえさ。生徒会との戦争だろ?」

立華と戦わなきゃならないことが辛いんじゃない。

と言うか、そもそもだ。

「俺は気が付くべきだったのかもしれないな」

「ああ」

その答えを――。

「不味いわね」

「はい」

私は遊佐さんと話しながら、自分のミスを悔いていた。

何故それを忘れていたのか。

何が最初の目的だったのか。

そもそも――勝負の前提条件すら揃えることが出来なかった。

プルプルと震える私の手には、一枚の紙。

そこに書いてあったことは、私達にとって死活問題。

「まず第一に、ここを不法に占拠していることを忘れていたわ」

そんな生徒を文化祭に参加させる筈がない。

合同なのに片方が居なくなつて、それをゲリラで参加するなんてことをしても勝つたとは絶対に言えない。

つまり私達は、この大きな戦争を前にして基地を放棄しなければならない。

「これを生徒会は予期していたと思う？」

「十中八九予期していなかったと考えられます。恐らくですが、生徒会の上がそれを行ったかと」

「……多々君の姉ね」

なんて厄介な相手。

今までの天使と違って、搦手を交えたことをしてくるなんて。

ぶつちやけ言うと、今までの私達は別に搦手を使用してたわけじゃない。

ただそこにある状況を強制的に味方につけてきただけだ。

「私達は神に対抗する組織。その私達が神に対抗する為に、この基地は必要不可欠よ」

「わかっていますゆりっぺさん。ですが、そのうえでこれを行ってきたと考えるべきでしょう」

手紙の最後に書かれているその言葉、神の文字。

「初めましてこんにちは。神様です」

悩んでいる私達を嘲笑うかのように、彼女はそこに現れた。

即座に銃を構えた私に対して、彼女が振るった腕によって銃は両断される。

あまりにも彼女に対して、私は無力だった。

「うんうん。その憎悪に染まりながらも、困惑と不安を宿した目は正しいよ」
遊佐さんは無力だ。

彼女に対しては絶対に遊佐さんは勝つことが出来ないのだから。

「貴方が、神……！」

「君達の理論に合わせるなら私が神だね。親しみと敬愛を込めて悠おねーさんと呼んでもいいんだよ？」

つまるところ、私達が倒すべき——殺すべき相手は多々君の姉。

「ただでさえ強いと思っていたら、怪物の様な頭をしているのね」

「そんな言い方は酷いなあ。私からしてみれば、君達が今まで頭を使うことを拒否していた様にしか思えないんだけども」

「言い返せないわね」

憎き神を前にして、私の心は冷静だった。

ああ、なんて優しい人なんだろうこの人は。

——私に合わせて悪役を演じてくれるなんて。

「私にとって君達はそのに興味が無いのだけれど、それでも多々が関わつてるとしたら無碍には出来ないからね」

そう言つて神は私へと手を伸ばした。

「君を、天使にしてあげようか？」

あまりにも突飛な、それでいて非現実的な言葉に声が止まる。

「ああ、君が天使になればこの世界を変えすることも簡単だろう。それこそこの世界を永遠に無くならない世界に変えてもいいし、君達の家族をここに招待してもいい」

きつとみんなが喜ぶ世界が出来上がるよと、そう告げた神に私は隠していた銃を神の眉間に向ける。

だけれども、神は何もしてこない。

嬉しそうに微笑むだけで、私が握っている銃が震える。

全てを見透かされている様で、恐怖すら覚える。

その手を掴めば、私は自由になれるのだろうか？

助かることが出来るのだろうか？

「ツ！ ゆりっぺさん！」

遊佐さんが動いたことで漸く正気に戻った私は引き金を引く。

だけどその銃口は一瞬にしてずらされ、瞬時に私の腹部に違和感を感じた。

流れる血を見て遊佐さんが前に立つたけれど、どう考えても勝てない。

あの人、私が撃った銃弾を掴まんで止めて投げてきた。

なんだそれって感じなんだけど。

「あまりにもレベルが違いすぎるわ」

「そりや神様だからね。それなりの実力は持つてるさ」

私がおかする前に銃は切り裂かれた。

これでもう私が持っている銃は一切存在しない。

「諦めなよゆりちゃん。君じゃ私には勝てない」

だけれども、その言葉は私に不屈の心をくれる。

「勝てないから諦めるなんて、私がするはずないじゃない！」

ナイフを片手に駆けだそうとするけれど、その前に私の目の前に刀が突き刺さった。

動けない。

動いたら即座に切られるのがわかる。

「辞めときなつて言うのは別に私にとつて、君が死んでも死ななくてもどうでもいいか

ら言っているのさ。どのみちその行動の先に答えは無い」

「ッ！ わかつて、るわよ。だけど抑えられないから、ここで私達は戦っているんでしょ

!？ 認めたくないから、私達はここにいるのよ！」

ナイフを構えて突き進む。

刀は振られなかった。

「おっと、私としたことが演説に耳を傾けてしまったよ」

ナイフが刺さっていると、あまり変わらない神の様子に私は思う。いくら神と言えど攻撃が一切通用しないなんてことがありえるのだろうか？

「素晴らしい演説だったよ仲村ゆりちゃん。確かにそうだ。認められないから、憎悪を抑えられないからここに残っているんだね君達は」

「そうよ」

「だとしたら……うん。決めた。私は君を許容しよう。君に興味がわいた。君ならきつと、導くことが出来るだろう」

私の中に何かを感じたのか、神はそう言つて満足そうに頷いた。

「きつと君は間違えない。間違えちゃいけないわけじゃない。誰かの為に生きることが出来る君は、私の中では既に神すら超越した勇者さ」

そう告げた神は、校長室をまるで何事も無かつたかのように歩く。

「だからこそ君に問う。君は世界に抗う覚悟はあるかい？」

真剣な表情で告げた彼女の言葉に、私は不敵な笑みを零した。その程度のこと、私がしない筈がない。

出来ない筈がない。

何故なら――。

「私は死んだ世界戦線のリーダー、仲村ゆりよ。世界に抗う覚悟が無ければ、リーダーな

んて務まらないじゃない！」

その宣言を聞いて満足したのか、神は楽しみにしているよと言いながら校長室を出て行った。

「えー、生徒会顧問こと雨野悠から連絡します。今回の定期テストで点数があまりにも低かった生徒に関しては、補修を行います。

この補修の後に再テストを行いそちらでも赤点だった生徒は、文化祭に参加する権利を失います。なので皆さん頑張つて勉強しましょう☆

以上、生徒会顧問からのお知らせでしたー」

地獄の勉強が始まった。

番外編001

「はい、生レバーお待ち」

出された生レバーを前にして、みゆきちちゃんが唾を呑む。

「生レバーがある食堂……」

「実際、生レバーがある食堂って相当やばいよね」

「タツ君も相当やばい奴だけどね」

俺、みゆきち、しおりの三人で食堂に来ているけれども、まさか本当に生レバーが存在しているとは思わなかった。

「んで、本当にやるんだ」

「勿論だよタツ君！」

指さしたしおりに対して、俺は何とも言えない空気になる。

いやもうこれ完全に失敗するオーラ満載じゃん。

俺はちらりとみゆきちちゃんを見て、ため息を吐いた。

絶対に失敗するってわかってるのに、俺達は協力しなければならないのか……。

「皆にはゴールデンウィークにピクニックに行つて貰うわ」

まあたゆりちゃんの思い付きなんだろうなあ。

でもまあ面白そうだし、いいかもしれない。

「ピクニックなんて、すごい学生っぽいなあ」

「何言つてるの？ 普通のピクニックなんてさせるわけないじゃない」

うわ、絶対何もしたくねえ。

「ここでみんなには悪魔になつてもらつたため、殺し合いをしてもらうわ」

「あ、俺が得意な奴だ」

一瞬で全員が俺から距離を取つたところを見ると、さては俺は信頼されていないな？

「多々君は武器禁止よ。それに誰かに物事を頼むことを禁止で、生き延びることだけに

特化してもらおうわ」

「ええ……」

当たり前でしょと言われてしまえば、まあそうとしか言いようがない。

これでも一番強い自負はある。

「ふん。貴様如きが俺に勝てるとは思わんがな」

野田君がほざくのはいつものことなので放置して、俺は少し考える。

生き延びることだけに特化するなら、まあやりようはあるか。

「今回はガルデモにも参加してもらおうわ」

「ナズエナンドウエスカ！ ゆりちゃん！」

「いきなりオンドウル語にならないでよ。仮面ライダーにでもなるつもり？」

「だってそんな……ガルデモのメンツを殺し合いに参加させるなんて……俺が全員殺すしかないじゃないかあ！」

全員がさらに俺から距離を取った。

「だから貴方は殺すの禁止よ。殺さず、死なず、貴方は彼女達を守ることが出来ないのかしら？」

「くっ……」

この時点でガルデモ+俺メンツと言う謎の状況が出来てしまったことは置いておいて、言われたからにはやって見せるのが男だろう。

「むしろ関根さんとかは嬉々としてやりそうだけどね」

下剋上だと叫ぶしおりの姿を空想し、まああり得そうだと思ってしまった。

そうなる相手はまさみちゃんとひさ子ちゃんか……。

とてもやりづらいなあ。

ちらりと見ると、気が付いたのかまさみちゃんはきよとんとした後に苦笑いしてき

た。

音楽キチではあるものの、おおよその予測は着いたのだろう。

「……なんか思ったよりもすごい対決になりそうね」

ごくりと息を呑んだゆりちゃんは、俺とまさみちちゃんを交互に見ていた。

ガルデモ初なんじゃないだろうか？

メンバー同士のガチバトル。

「ひさこさんは岩沢さん側だとして、関根さん入江さんペアに問題児多々君か。面白そうじゃない」

「最早メインがガルデモメンバーに移っていて俺は驚きを隠せません」

「いいじゃない。面白そうでしょ？ 男同士が殺しあうよりも女子がくんずほぐれつ殺しあったほうが見栄えがいいじゃない」

くんずほぐれつ殺しあうってなんだろう？

俺そんな言葉知らないよ。

「じゃあ一週間後に裏山でピクニックもとい連続殺人事件を行うわよー！」

「題名が恐ろしく怖いわ！」

裏山でピクニック殺人事件を行う為に、俺はしおりとみゆきちちゃんと一緒に食堂に出向いていた。

きつかけはしおりの下剋上発言である。

「どうせひさ子ちゃんに殺されて終わりだと思っただけだなー」

「私だつてそう思うよ。でもッ！ やらないよりはやった方がマシだ！」

「発言だけならカッコいいのに」

最早俺達の言葉が通じるしおりではない。

今のしおりはダークしおり。通称馬鹿をするときの恐怖を乗り越えた突き抜けたモードである。

尚、俺達には害しか持つてこない最悪のモードでもある。

「第一、そんなにひさ子ちゃんに恨みは無いのだけど？」

「そりや勿論あたしだつてそんなに恨みはないよ！ 精々いつも怒られたり、殴られたり、怒鳴られたりされてるだけだよ！」

絶対それが原因で言い出したらどと言う言葉は飲み込んで、何とか説得しようとするけれどやはりだめそう。

全く、間違えたことをしている彼女を止めるのも彼氏の役目だとは思っただけけれど、そこまで踏み込めないのは俺の悪い癖なのかなあ。

「ひさ子ちゃんを怒らせるのはいいけど、殺す様なことは無いようにね！」

「もちろんさタツ君！ 最高のエンドを迎えて見せるぜ！」

仕方ないけれどここは引くこととしよう。

うーん、ゆりちゃんには関根派つて言われたけれど、これについてはちよつと迷うなあ。

「じゃあ、俺はここで」

「え？ タツ君は手伝つてくれないの？」

不安気に聞いてくるしおりに対して、俺は勿論手伝うと返しそうになるけれど我慢だ。

「ここで耐えなければ男じゃない。」

「俺はあれだよ。ソレスタルビーイングするよ」

「武力介入じゃないですかやだー」

つまりどちらにも属さないということだ。

教えてくれゼロ。俺は何人殺せばいい？

あ、殺すのは禁止されてるんだった。

「タツ君も敵だというのなら、私は——撃つッ！」

「しおりいいいいいい！」

「たおおおおお！」

それなんてガンダムと言うネタはさておき、俺はしおりと敵になってしまった。

いや、なりゆきで敵対してみたいなセリフを吐いたものの、実際は味方なのだけれど。ガルデモのメンバーを全員殺させないためには、第三勢力になるのが一番手っ取り早いのだ。

男子組は崩壊させる……前に崩壊しそうな気がするから、問題となるのはひさ子ちゃんVSしおりだろう。

あの二人はやり始めたら絶対止まらないタイプだし、ひさ子ちゃんを怒らせれば悪魔として覚醒すること間違いなし。

「んじゃまあ、取り敢えず注意喚起でもしとかないと」

最初にやるべきこと、しおりとみゆきちゃんやんがまさみちゃんとひさこちゃんを狙っていることを伝えるという大事なこと。

でも実際ストレートに伝えちゃうと、開幕ひさ子ちゃんが殺しに来るよなあ。

「よーし」

こういう時に行く場所は決まっている。

「と言うわけなんだよ文人」

「なんで僕に言いに来るんだ……」

ため息を吐く文人に対して、俺はけらけらと笑った。

中二病を拗らせている文人ならば、何かいい案を持つていてのではないかと思ひ尋ねたが流石に唸るらしい。

「いや、でも僕の中に君をどうするかは考えている」

「流石文人は優秀だね」

「ふっ。褒めるな。お茶しか出さんぞ」

出すんだと思ひながらも、こういう時に頼りになるのはやっぱり文人だ。

まあちよろいからつてのものもあるけれど。

「お前は、忍者になるんだ」

「アイエエエ!! ニンジャ、ニンジャナンデえ!?!」

「違う。そうじゃない」

まあ文人つてNARUTOとか好きそうだし。

どうせ人がいない所だと万華鏡写輪眼とか言つて遊んでるんだろ。

「忍者の様に身を隠し、適度なところで参戦してお前が愛する奴を守ればいい」

思つたよりもまともな意見が出てきて驚いたけれど、確かに忍者は素晴らしい案だ。

「そして昔僕が作らせた忍者衣装がある」

「お前本当にすげえよ」

やっぱすげえよ文人は。

俺達じゃできないことを平然とやってのける。

そこに痺れる憧れるウ！

「褒めるな。茶菓子しか出ないぞ」

「どんどん出てくるなお前」

お兄さんちよろすぎて心配だよ。

そんなんじや将来騙され続けそうぞ。

「この衣装は用意してもらったはいいが、僕は一切使う予定がない。使う奴がいるならばこの服も本望だろう」

絶対にそんなことは無いと思うけれど、そんなことを行ったらその衣装を貰えなさそうだから言うのは辞める。

男たるもの、忍者の恰好をしたいかしたくないかと問われればしたいのだ。

「ならば契約成立だな。僕が渡す服を着て、数多の敵からガルデモを守るのだ！」

「ノリいいなあ」

だからこそその文人なのだ。

と言うわけで忍者の衣装を受け取ると、まあそれなりにフィットしたので軽く運動を

して着心地を確かめる。

とても動きやすそうな素材なのはこだわりなのだろう。

楽に動けるならばそれに越したことは無いし、この後ろについているうちの紋章もきつと見間違いなのだろう。

「モデルは木ノ葉の里に存在するうちは一族だ」

「だと思つたよ」

お前好きそうだもん。

そろそろ目を赤色にするためにカラコンとか入れ始めるんじゃないかと思ってるし。

「はいはい。写輪眼写輪眼」

「何だ貴様。僕とNARUTOトークをするか？ 恐らく一年みっちり出来るぞ？」

「勘弁してください」

そこまでガチ勢になった覚えはないので死んでしまいます。

「まあいい。動きやすいのならばそれで行動すればいい。お前ならば使いこなせるだろう？」

「OK」

小さな玉を下に投げると、煙が部屋を包み俺は部屋から逃げ出した。

文人の部屋にいたため、煙は感知器に反応する。

感知器が反応した為けたたましいサイレンと共に文人の部屋のスプリングカラーが作動し、先生達が文人の部屋めがけて走って行く。

「多々オオオオオ！」

「ゆるせサスケ。これで最後だ。……まあ文人はサスケじゃないから最後じゃないけど」

ぶちぎれた声が聞こえたが無視し、俺は誰にも見つからない様に廊下を走って行く。

誰かが来ればこつちを見る前に意識を奪い、戦線の誰かがいれば息の根を止めてでも目を潰す。

「ふはははは！ 体が軽い！ これが若さか！」

自分の部屋に戻ると、すぐに服を着替えてロツカーの中にしまう。

思い出してみると相当ひどい忍者がいたもんだと顔を若干赤くし、布団の中に潜り込む。

やばい、愉しみだ。

ピクニックは俺の独壇場にしてやる！

……あ、ひさ子ちゃん達に伝えるの忘れてた。